俺達の(いろんな意味で)運命の物語

桜井侑斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺達の（いろんな意味で）運命の物語

【Ｎコード】
Ｎ８９７３Ｋ

【作者名】
桜井侑斗

【あらすじ】
現実世界から、現実離れした大学生（自称一般人）がＦａｔｅの世界へ…？

これは基本巻き込まれ型の男…気が付いた時にはサーヴァントになっていた元・自称一般人（笑）が駆け抜けた物語。

（読み始める前に注意書きをお読み下さい。）

注意書き

最初に言っておく、このＳＳは・・・

《俺達の（いろんな意味で）運命の物語》

Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ　二次創作

オリ主現実来訪・原作知識無し、非最強系。
オリキャラ多数有・ＦＦ微クロス
ライダーネタ多数
ご都合主義・・・それが基本
そして原作ブレイク有りだ。
そしてなにより・・・ドン亀更新。
この時点で駄目な貴方は回れ右。だ！

某友人のブログにて連載中。

ついでに言っておく！これは作者の処女作だ！

…ｂｙ　Ｐ，Ｎ　桜井　侑斗

“プロローグ／「エンドロールでもあるな、俺にとっては…」”

――――――クロウ…！この…鈍感野郎！お前なんか知るかぁ！

――――――お兄ちゃんのバカ！バカバカバカ！もう知らない！

“プロローグ／「エンドロールでもあるな、俺にとっては…」”

＜チャラララーララララチャラララーララー＞

「・・・ハァ。」

古いアパートの一室、一人の男がゲームをやっている・・・

「サヤ、泣かせちまったな・・・怒っていたし・・・」

なにやら重い空気を身に纏い、落ち込みながらコントローラーに指示を出す。

「でも・・・なんであんなに怒ったんだ?確かに勝手に決めたのは悪かったけど・・・」

（カッ！ピシャーーーン・・・ザー・・・ザーー・・・ザーー）

外は嵐、アパート自体が軋んでいる・・・

「アカの奴とも下らない喧嘩しちまったし・・・」

＜チャッ・・・ジャジャン！ジャンジャン！ド・ド・ドン！！＞

どうやら、ゲームはクライマックスのようだ・・・

「何やってるんだろ・・・俺・・・」

（ゴロ・・・ゴロゴロ・・・）

「ああ・・・もう、ヤメヤメ！これ以上落ち込んでも無駄！」

（カッ・・・ゴゴゴゴゴゴ・・・）

「明日、しっかりと話をしに行く！！そのためにも今は・・・」

（ビュゴゥーーー）

「このモヤモヤを、この一撃に込めて・・・」

（ドザァーーーー）

「喰らいやがれ！ネオエクスデス！」

（ギシィッ！！ギシギシギシ！）

「エクス！」

（カッ！！）

「カリ！」

「パ＜ピシャァーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーン！！！！！！！！！！＞

―――

―――――

―――――――

―――――――――

＜本日午後６時、東京都〇〇市に落ちた落雷により。男性が感電死した事故で・・・＞

「ウ・・・ソ・・・お兄・・・ちゃん？」

＜・・・死亡した男性は、同市在住の定霧　久郎さん（１９）であ

ることが判明し・・・＞

「ク・・・ロウ・・・？ウソ・・・だろ・・・？」

Ｓｉｄｅ「俺」

えーっ・・・と？何が、どう、なって、いる、んだ？

「くっ・・・マスター！下がっていて下さい！新手のサーヴァント

です！」

俺は・・・確か・・・エクスカリパーをネオエクスデスに投げるところだった・・・ハズ・・・だよ・・・なぁ？

「貴様！いつからそこにいた！」

それが・・・なんで・・・

「答えないか・・・ならば！切り伏せるのみ！」

＜ビュン！＞

女の子に、いきなり・・・切りかかられて、いるん・・・だ・・・？

“第一話／「ココは何処？俺は…え？死人（サーヴァント）！？」”

――＜伏せて！＞――

“第一話／「ココは何処？俺は…え？死人（サーヴァント）！？」”

――side「俺」――

――ブォン！――

横薙ぎの斬撃が、俺の首を飛ばす前に、俺の体は地面に伏せていた。

（くっ！？今、体が勝手に避けてくれた？どういうことだ！？今の声・・・か？）

「だ・・・大丈夫ですか！？」

（この声は！？さっきの！？）

俺は、声の聞こえた方を向いた・・・そこには、赤（・・・オレンジ色？赤毛、というべきか？）の髪をした女の子がいた。

この時、俺は思った、というより感じた。この子と俺は“繋がって”いる、と。

「ありが「一体、何者なのさ！アンタは！？士郎を助けたかと思っ

たら、いきなり見ず知らずの人に切りかかる?なんて!」おーい?」

礼くらい・・・最後まで言わせてくれたって・・・

「・・・貴女が、そこのサーヴァントのマスターか?サーヴァントの間に入るとは・・・死にたいのか!?メイガス!!」

・・・あれ?この子、いきなりピンチ?

「目の前で、人が傷付けられそうなのを、放って置ける訳あるか!」

男らしいというかなんというか・・・

「聖杯戦争に参加している以上・・・手加減は不要!」

・・・って金髪の方は話聞いてない!?

「その度胸に免じて・・・せめて一太刀で!!」

・・・ちょっ!?

「ハァッ!!」

持っている獲物が何だかイマイチわからない・・・だけど!!やらせてたまるか!!

「・・・ッ「止め「ヤメロォッ!!この戯けぇっ!!!!!!＜パシィン!!＞」ろぉ!?」え!?」

・・・ギリギリ!間にあったぁ!!

何持っているか見えないから、直接その手を掴んだけど・・・

（イッテェ・・・ッ!?コイツ、良く見たら手甲なんかつけてやがる!?）

「・・・くっ、貴「止めてくれ!そいつは俺の妹だ!!」・・・なっ!?」

・・・なんか、もう一人出て来たな・・・あの子と同じ“色”をした少年が。

「マスター!?ではあのメイガスは・・・」

「だから!!俺の妹だってば!!」

・・・えーっ・・・と・・・あっちはとりあえず大丈夫っぽいな、というわけで・・・

「大丈夫?いまいちこいつが何もっているのかわからんのだけど・・・」

「えっ・・・あ!だ、大丈夫です!!えっ・・・と・・・あなたの方は・・・?」

「こっちも、問題はないさ（少し手が痺れるけど）」

こっちの方も、問題は無い（多分）ってことで・・・とりあえず手は離すか、そして・・・

いいかげん、少し状況の整理でもするか?

――まず、お約束だが俺は誰だ？これは簡単、俺は“定霧（サダギリ）　久郎（クロウ）”、親しい奴は俺を“クロ”とか“クロウ”と呼ぶな。んで、一ヶ月前に１９歳になった、薬草という名のハーブの栽培と、ゲームを趣味に持つどこにでもいる？大学生だな。

・・・んで、今日からアパート借りて一人暮らしを始めて・・・部屋で、今の今までＦＦ？やっていたはず・・・だよな・・・？んで、ここ・・・結構広い武家屋敷？に突っ立っていた、と・・・うんわけがわからん。・・・俺に、夢遊病の気はないはずだし・・・とりあえず、保留。なんか、記憶にノイズが走っているし・・・ん？「ミミック」？なんだ？こりゃ？・・・うーん・・・

あと。現状、確認できることは・・・

１・目の前にいる赤毛の女の子と、後から出てきた赤毛の少年は兄妹

２・日本語が普通につうじている・・・当たり前か？

３・俺の服装が変わっている。・・・ってあれ？俺、部屋ではジャージ着ていたはずなのに・・・

　グレーのジーンズ、灰色のシャツ、レザーのベスト、黒いロングコート、レザーの手袋、レザーのロングブーツ、そして黒いハット（今は腰のベルトに引っ掛けている）・・・って。

　何故に俺の私服フル装備！？・・・これも保留。

４・あの金髪は、あの少年にしたがっている？でも、なんか揉めてる。

５・俺は、“サーヴァント（サーヴァント）”とか呼ばれた。・・・“下僕”？

６・この女の子と、俺の間に、何か“繋がり”がある。・・・これは意味不明だ。

７・この子は、“メイガス”とか呼ばれていた。否定もしなかった・・・“魔術師（メイガス）”？

８・あと、俺の体自体には異常は無いと思う、とりあえずは。

・・・ってところか？こうしてみると、わからないことだらけだな・・・でも、一つだけ、重要かつ、唯一理解できていることがある。

それは・・・

「良かった・・・いきなり切りかかられていたから・・・」

（この子が、俺の命を救ってくれた・・・ってこと、だな・・・）

あ、あと、この場にいる全員が自己紹介をしていないな。

「・・・!?マスター、謝罪は後ほど。・・・新手です、すみません、治療をお願いします。」

「・・・え?新手!?って治療ったって・・・君、治ってるんじゃ・・・?」

・・・って何か、また物騒な気配が・・・

「・・・この傷程度なら、戦闘は可能ですか・・・＜シュタッ＞」

「・・・!?オイ?セイバー!?」

へー、アイツ、セイバーっていうんだ・・・ってマズイッ!?

（このままじゃまた被害者が出る!?）

「ってマテ!?この戯け!?」

「え!?あ!?ちょっと・・・!?」

（手、離すんじゃなかった!!クソっ!!）

さっきの少年を追い、門の外へと走る!だが・・・

「＜止めろ!!セイバーーーーー!!＞」

俺が見たのは

「くっ!?何故です、マスター!?」

動きを（何故か）止めたセイバー（仮）と

「お前こそ、いきなり人に切りかかるなんて、何考えてるんだ!!!」

言い合っている赤毛の少年、そして・・・

「ふぅん・・・敵を目の前にして・・・ずいぶんと余裕ね?」

赤い外套着た白髪男を連れた、赤い服着た少女・・・だった

「・・・って遠坂!?なんで・・・?」

「こんばんは、衛宮君?」

「いったい、何がどうなっているのさ!?さっきから!?」

そこに、あの赤毛の女の子が到着。

「・・・って何ィッ!?」

何故かしらんが驚く白髪（仮）

（えーっ・・・と）

この状況って・・・

「くっ・・・答えなさい！マスター！」
「いや、それはこっちの台詞だ！！って何ブツブツ言ってんだよ、遠坂！？」
「本当に・・・なんでこんな奴にセイバーが・・・（ブツブツ）」
「って遠坂！？なんで家に？」
「・・・女・・・だと！？いや、それ以前に二人！？・・・どういうことだ・・・？」

・・・ナニコノカオス・・・
とりあえず・・・さぁ？

「Ｉ・Ｉ・ＫＡ・ＧＥ・Ｎ・ＮＩ・ＳＩ・ＲＯ！！！！！！！！！！！！！」

・・・
・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「それじゃ、説明してあげるわ。」

全員で居間に移動し、この赤い子（仮）が“聖杯戦争”とやらの説明をしてくれる。という流れになったが・・・

「その前に！自己紹介とか、必要なことがあると思うのだが？せめて名乗りあわないか？最低限。」

「・・・それもそうかも・・・コホン！私は遠坂　凛、この冬木のセカンドオーナーよ。」

・・・セカンドオーナー？地主みたいなものか？

「で、このアーチャーのマスターでもあるわ。」

・・・あの白髪が“アーチャー”っと

「えーと、色々気になるけど・・・俺は衛宮　士郎、一応魔術師見習いだ。」

「同じく、衛宮　志保、です。」

あの子は志保で、兄が士郎か・・・

「私は、サーヴァント、セイバーです。」

あ、やっぱり“セイバー”なのか。

・・・“アーチャー”に“セイバー”？それに・・・サーヴァント？

そういや・・・俺も“サーヴァント”とか呼ばれていたような・・・？もしかして・・・？

「で？アンタは「・・・“ミミック”・・・？」」

・クラス：ミミック

・真名：クロウ

・性別：男
・属性：混沌・中立
・ステータス・・・

ミミックなんて名前じゃない。断じて。

「「「ハァ!?」」」

・・・ん?セイバー、何をそんなに驚いている?遠坂も、目が落ちるぞ?そしてアーチャー、お前のキャラがわからん。

「正気か!?いきなり「真名を口にするなどと!!いやそれよりも「日本人!?つか大学生!?んなわけあるかぁっ!!」」」

「「息、ピッタリだな、三人とも。」」

いやまったく、そしてお前らもな?士郎、志保。ついでに志保はそれが素、と。

「答えなさい!大学生ってどういうことよ!?アンタ、サーヴァントでしょう!?」

「待て、そもそもサーヴァントって何のことだ?そしてそれがお前の地か、遠坂。」

見ろ、衛宮兄妹が目を丸くしているぞ?

「ついでに言うなら、自己紹介が終わったことだし、その“サーヴァント”やら“マスター”、ついでに“魔術師”ってのが何なのか、いいかげんに説明を頼む。」

正直、つっこみたくてしかたがない。

「・・・イレギュラー?聖杯に!?よくよく考えれば、コイツは八

人目？いや・・・でも・・・「オイ」ナニよ！！？」

おお、結構な迫力、でも・・・少女としてはどうなんだ？それ。

「わけがわからんのはこっちもなんだ、ブツブツ言ってないで、説明しやがれ、元々その予定だっただろうが。そして、もう猫は被らないでいいのか？」

「うっ・・・！？そ・・・そう・・・ね・・・＜コホン＞じゃあ、聖杯戦争について、あと魔術師について説明するわ・・・ハァ・・・」

「ああ、そうだ、志保？喋り辛いだろうから、素で喋って良いぞ？俺も呼び捨てにするから。」

「え？そ・・・そう・・・？じゃぁこれからは普通に喋るよ・・・えと・・・定霧さん？」

「クロウでいい。姓で呼ばれるのはあまり好きじゃない。」

「わかった、クロウ。・・・これでいい？」

「ああ。」

「説明、始めるわよ？」

――――ｓｉｄｅ　ｏｆｆ

＊ここからはダイジェストでどうぞ

――――遠坂、説明中・・・（魔術師について）

ク「つまり、非常識な力で常識的なことを起こすのが魔術であり、魔術師、と？」

凛「そういうこと、それじゃあ、こんどこそ聖杯戦争について説明するわよ？」

――――遠坂、説明中・・・（聖杯って？）

ク「つまるところ、なんでも願いをかなえる不思議アイテムっと。」

ア「・・・ずいぶんと適当な・・・」

士「・・・ん？でもさ、それって・・・」

志「なんで戦争になるのさ？皆で分け合えばいいのに・・・」

凛「しかたがないのよ、だって、それは・・・」

――――遠坂、説明中・・・（なんで戦争に？）

士「つまり、一人しか願いか叶わないから・・・」

志「取り合いになった・・・？」

凛「そういうこと。」

ク「“皆の願いを叶えてくれ”なんていうやつもいなかった、そして・・・殺し合いになったか。」

凛「で、反省した彼等はルールを決めた。それが聖杯戦争の始まりってわけ。」

――――遠坂、説明中・・・（ルール、そしてサーヴァント）

士「え・・・じゃあ、セイバーって・・・」

セ「はい、英霊、と呼ばれるモノです。」
凛「彼等にも、聖杯を欲しがるだけの理由があるから、ギブ&テイクってところかしら？」
志「あれ・・・クロウ？どうしたのさ・・・顔色・・・悪いよ？」

＊ここからは元に戻ります

――――ｓｉｄｅクロウ

今の説明だと・・・サーヴァント＝死人？
じゃぁ・・・俺・・・は・・・

「――――ロウ！？――――――夫！」

そうだ・・・あの時・・・雷が・・・

「ク――――なぁ！？――――ば！？」

そうか・・・俺は・・・

「ハハハ・・・そっか・・・俺は・・・・」

コントローラーを伝った雷で・・・

「クロ――――――？」

「死んでいる・・・のか・・・ハハ・・・なんて戯け・・・」

＜パシィン！＞

・・・！？叩かれた？今のは・・・

「目・・・覚めた？」

・・・志・・・保？

「よくわかんないけど・・・今まで、自分が死んだって知らなかったのか・・・？」

知らなかったんじゃない・・・見ない振りしていただけだ・・・

「・・・」

「たとえ、クロウが死んだ人だとしても・・・今、私は触れたぞ？」

「クロウに、セイバーから助けて貰ったぞ？」

「クロウは・・・ここにいるぞ？」

「その・・・行くところがないなら、家にいていいから・・・」

俺は・・・何をしている？

「だから・・・そんな・・・泣いたり・・・しないでくれ・・・」

こんな・・・サヤと大して年の変わらない女の子に・・・

「人が泣いてる所を見るのは・・・嫌いなんだ・・・」

命の恩人に・・・

「それに・・・私が、クロウの・・・サーヴァント・ミミックのマスター・・・みたいだし・・・」

泣きそうな顔させて・・・

「頼りないかもしれないけど・・・」

壊れそうな笑顔させて・・・

「クロウの・・・居場所に・・・なるからさ？」

そんなのは・・・さ

「・・・それじゃぁ・・・プロポーズみたいだぞ・・・？それも・・・ずいぶん男前な。」

俺の主義に合わない！

「・・・え？ちょ・・・／／／／／こ・・・こっちは真面目に！「わかってるよ・・・」・・・え？」

受けた恩は、必ず返す！！

「事実は事実、受け止めなくちゃ・・・な？」

＜――――落ち込む暇があったら、前をむけ！クロウ！＞

「ようは、これからどうするか、だ。」

――――そうだろ？アカ？

「マスターとサーヴァントは、運命共同体・・・」

＜――――お兄ちゃんは、いつでも不敵に笑っていて！ハードボイルドに！！＞

「だったら・・・守り抜くさ・・・二度も死ぬのはゴメンだ。」

――――だったよな？サヤ？

「だから・・・頼むぜ？マスター？」

＜それが・・・＞

＜それでこそ・・・＞

「物真似師のサーヴァント・・・ミミック。」

＜私の自慢の・・・＞

＜私の最高の・・・＞

「我が名に誓い、君を守り抜こう・・・この第二の命尽きるまで！！」

＜大親友だ！！＞

＜お兄ちゃんだから！！＞

「これから、よろしくな?志保!」

――君が、俺のマスターで良かった・・・君は、俺の・・・

「どこにでもいる大学生だけど・・・」

ただ一人の・・・

「頼りないかもしれないけど・・・」

最高の・・・

「これから、頑張っていくから・・・」

・・・マスター（主）だ!!

「君から、頼られるくらいにはな!!」

その日が来たら、胸を張って伝えよう・・・

（ありがとう、志保・・・君には、何度も・・・本当に、助けられた・・・）

――――そう・・・これから頑張っていく・・・

・・・サヤ・・・？

・・・アカ・・・？

心配すんな、俺は、この場所で、生きていくから・・・！！

“第二話／「これから…」”

――よろしく、マスター。

“第二話／「これから…」”

――sideクロウ

「悪かったな・・・取り乱して。」

ひとしきり取り乱した挙句、年端もいかない女の子（それも、妹と同年代）に頼らざるを得ない事実に落ち込みつつ、謝罪しておく。

冷静になると、結構ハズいこと言ってるし・・・orz

「え？ああ・・・その・・・別に・・・」（／／／／／／）

・・・ん？何をモジモジしてるんだ？志保？

「ううう・・・いまのはちょっとからかえない・・・」（／／／）

遠坂まで・・・？

「貴方こそ・・・男らしいと言いますか・・・なんというか・・・」

セイバー？なんで感心したような表情を？

「なぁ・・・士郎？アーチャー？三人はいったいどうしたんだ？」

「いや・・・俺に訊かれても・・・」

「私に訊くな・・・おそらくは先程の貴様のギャップに驚いているのではないか?多分だが。」

ギャップ?俺だって偶には真面目な顔するぞ?・・・うーんやはり女はわからん。

「（コホン!）と、とりあえず現状の確認は済んだかしら?これ以上説明することもないから、私としては“監督役”のところに行こうと思うのだけど。」

「“監督役”って?」

「参加表明や、参加しない・・・脱落したマスターの保護役って認識で良いとおもうわよ。」

・・・っと、話が進んでら。

“監督役(ジャッジ)”・・・か。

「だったら、どっちにしろ、一度は行くべきじゃないか?俺(イレギュラー)もいることだし。」

そう、何か情報が手に入るかもしれないからな。

「そうだね・・・遠坂、そこってどこ?」

「教会よ、場所は・・・」

「ああ・・・あそこか。今から行くのか？」

どうやら、場所自体は士郎も知ってるようだな・・・

「ええ、早い方が良いでしょ？こういうのは。」

「そうだな・・・準備するか・・・ってクロウはともかく、アーチャーやセイバーはどうするんだ？流石にその格好は・・・」

浮くよな、確かに。

と思っていたら遠坂がこんなことを言い出した。

「？そんなの霊体化させとけば良いじゃない？」

「「霊体化？」」

なんだ？そりゃ。

「・・・見せたほうが早いわ・・・アーチャー？」

という遠坂の言葉により・・・

「・・・了解した。＜スゥ・・・＞」

アーチャーが消えた！？いや・・・これは・・・

「守護霊化・・・ってところか？便利だな、サーヴァントって。」

うっすらとだが、アーチャーは見える。

そういや、俺も今幽霊みたいなものだったんだっけ・・・

「見えてるの？ってアンタも一応サーヴァントだったっけ・・・」

これは、サーヴァント全員が出来る必須技能？

・・・よし、試すか。今のアーチャーの真似すりゃいいだろう。

自分自身の存在を、薄めて・・・

＜スゥ・・・＞

「クロウ！？」

おお、出来た、意外に簡単だな、これ・・・でも・・・

＜スゥ＞「これ・・・なんか自分で自分を空気にするみたいで、好きになれそうもないな・・・」

取りあえず戻ろう、なんか変な感覚だ。

「いきなりやるな！？驚いただろ！？」

・・・と、怒られたよ。

「わ・・・悪い、志保・・・」

俺もまさか一瞬でできるとは・・・

などと謝っていると、セイバーがとんでもない？ことを言い出した。

「すみません・・・シロウ、私は霊体化できないのです・・・」

・・・へ？俺でもできたのにか？

「もしかして、不完全な召喚の所為？・・・セイバー、貴女大丈夫！？」

「ええ・・・ラインが不十分ですね、通常戦闘では問題ありませんが・・・」

・・・セイバーにも異常が？ってことはもしかして・・・

「なぁ、遠坂、もしかして、アーチャーにもなにか不具合がでてるんじゃないか？」

「ぅ！？なんでそれを！？・・・てしまった！？」

・・・やっぱりか。

「いや、なんとなく。この流れで。・・・嫌なら言わなくていいぞ？ちょっと確認したかっただけだから。」

・・・“俺”のことといい、やっぱり・・・

「ミミック？どうしたのですか？」

「ん？ああ・・・この聖杯戦争自体に、なんかしらの不具合が出ているんじゃないか、と思っただけだ。」

そう、イレギュラーが1と2／7出ているんだ、既に。しかも・・・

「・・・確かに・・・戦争自体本来の周期よりはるかに早いし・・・

その辺も、監督役に訊き出さないとならないわね。」

そういうことだ。

どう考えても異常が多すぎる。

「というわけで、行かないか？教会とやらに。」

「そうだね・・・って、結局、セイバーはどうするの？一応、私の服でも着る？サイズが怪しいけど・・・」

「いえ、このままで十分です。」

・・・いやいやいや

「戯け、悪目立ちし過ぎる。・・・せめてその上からコートでも着ろ、貸してやるから・・・」

現代なめんな。

「そうしたら？セイバー、流石に目立ち過ぎよ？武装したままっていうのは。」

「し・・・しかし・・・だからといって・・・彼の武装を借りる、というのは・・・」

・・・マテ。

「武装ってなんのことだ？」

これは、ただの私服だぞ・・・？

「あ・・・貴方は自分の武装すら把握していないのか!?そのコートは間違いなくサーヴァントの固有武装だぞ!?」

「・・・そういや、さっきから俺は自分の能力も把握していなかったな・・・」

なんたるイージーミス。

「志保、移動の間、少し熟考するけど構わないか?コートは渡しておくから。」

「え?ああ、うん、いいけど・・・?」

「自分のことを確認しておきたい。・・・自分自身がなんなのかもわかってないからな。」

――そう、俺に何ができるか?“ミミック”ってなんなのか、などを確認しておきたい・・・

「・・・わかった、何かあったら声をかけるから。」

「・・・スマン」

――結局、セイバーにコートを貸し、移動することになったが・・・

アーチャーと俺が霊体化してしまうと、うっかり補導されそうなので、服装・存在が明らかに現代人な俺が実体のまま（保護者っぽく）移動することになった。

熟考中に浮かんだ疑問は、セイバーまたは遠坂に答えて貰えるそうだ。

――side out

――ランクってのがなんなのか？

ク「なあ？このCだのEだのは能力の強さって認識で良いのか？んで、＋は・・・瞬間的に倍化するってところか？」

セ「ええ、大体合っています。」

ク「耐久にAがついてる以外・・・セイバー（女の子）に完全に負けてるな・・・」

凛「当たり前よ、セイバーのクラスは“最優”なんだから・・・」

セ「・・・もしや、貴方にはサーヴァントとしての能力補正がかかっていないのでは？」

ク「クラス補正か・・・耐久以外には無さそうだな・・・（幸運E一ってなんだよ・・・）」

――スキルって？

ク「このスキルっていうのは・・・？」

凛「固有の能力・・・魔眼とか魔術とかそういった特殊なモノってとこかしら？」

ク「そうか・・・（これは・・・つかえるか？）」

――宝具・・・？

ク「なぁ、この宝具ってなんだ？」
凛「ハ！？アンタなんで宝具なんて持ってるの！？大学生なんでしょ！？」
ク「とりあえず・・・ステータス欄の中に入ってるから聞いただけなんだが。」
凛「あ・・・そういうこと。」
セ「簡単に言うなら、私達英雄のシンボルといったところですか。」
凛「ジークフリートのバルムンクとか、クーフーリンのゲイボルグとかね。」
ク「ガラティーンとか草薙の剣とかフルンディングとかゲイ・ボゥとかエスカリボルグとか、ああいう伝説の武具・・・ってことか。」
凛「それらが、一つの幻想として力を持ったモノだけど・・・微妙に日本ではマニアックなモノ知ってるわね・・・？」
ク「博物館でバイトしてたり、映画のエキストラやったりしてたからな。」
凛「ふぅん？」
士「なあ、エスカリボルグってなんだ？聞いたこと無いぞ？」
ク「・・・別名“イクス・カリバーン”・・・エクスカリバーのことだ。」
凛「・・・んな回りくどい言い方しなくたって・・・」
ク「別にいいだろ・・・んなこと言ったらゲイボルグも“ガエ・ボルガ”になるぞ？綴りの上では。」

――宝具（２）

ク「ブフゥッ！！？」
凛・志「「（ビクゥッ！）な・・・何っ！？」」
ク「す・・・すまん・・・ちょっと驚いただけだ・・・」
セ「一体、どうしたのですか！？」

ク「いや・・・俺、宝具持ってるみたいでな・・・」
凛「ハァッ!!?」
ク「そして、その名前と能力が・・・ね・・・」
セ「貴方は学生ではなかったのですか!?」
ク「・・・これ・・・ゲームのだ・・・死の瞬間までやってたゲームの・・・」
凛・志・士・セ「「「「ゲーム!?」」」」
ク「・・・ゲームやってる最中に落ちた雷が、コントローラー伝って・・・」
凛「そ・・・」
士「それは・・・」
志「・・・なんというか・・・」
ク「・・・言うな、悲しくなる・・・」
凛・士・志「「「・・・うん。」」」
ク「しかも、これ・・・一人では絶対に他人に勝てない・・・」
志「?」
ク「・・・決め手には・・・なりそうも無い・・・」
凛「・・・どういう能力よ・・・それ・・・」
ク「・・・機会があれば・・・な。」
凛(チッ)

――sideクロウ

驚愕と共に自身のあまりの弱さにすこし凹みながら確認を続けていたのだが。（どうやら、俺の現在の服装は、魔力とやらで生成された固有武装で、壊れても魔力があれば直せるらしいことが判明した。）
そうこうしている内に、俺達は教会に着いた訳だが・・・

「私は、ここに残らせていただきます。」

セイバーがこんなことを言い出した。

「なんでさ?」

「ここならばシロウは安全なのでしょう?でしたら・・・」

なるほどね・・・

“姿を見られる必要も無い”・・・か?セイバー。」

「・・・ええ。」

・・・セイバーは外に残る・・・と。

ちょうどいい・・・

「・・・志保、少しセイバーと話がしたいんだが・・・」

「え?セイバーと?」

「ああ、少し・・・でもそれなりに重要なことなんだ。」

そう、今後のために・・・な

「アンタ、ここに情報訊きに来たんじゃないの?」

「・・・後で、志保達から聞くさ・・・というか・・・」

「「「というか?」」」

「その“監督役”・・・会わないほうが良い気がして・・・少なくとも、今姿を見られてはマズイ・・・多分。」

・・・俺がこう感じるんだ・・・アカの奴なら、『絶対に行くな』って言うだろうな。

「クロウ・・・？」

――――そう、昔からそうだった・・・

俺の身には、結構な頻度でトラブルが降りかかってきた・・・命の危機っていうトラブルが。

その中でも、こういう嫌な予感を無視したとき、自分のみならず周りの人間にも飛び火した。

それを、いつからかアカの奴は察知するようになっていた（・・・ただ、アイツのおかげで、トラブルを回避出来た試しは無い、かなりの好条件にはなっていたかもしれんが）、本当にヤバイ時は、「行くな」と言ってくれていた。（まぁ、結局は巻き込まれていたが。）

・・・今は、アイツはいない。だったら、自分のこの感覚を信じてみよう。

それに実際問題・・・

「まぁ、セイバーに話があるってのは事実だ・・・それに、アーチャーや遠坂が一緒なんだ、何かあっても、俺・・・少なくともセイバーの到着までにみすみすやられるってことはないだろ？」

・・・信用してるぜ？“英霊”？

「・・・そう言われると・・・反論しづらいわね・・・」

「じゃあ頼む。志保、なんかあったら、その“令呪”とやらで呼んでくれるか？」

「うん・・・わかった。」

――そうして、三人プラス守護霊１は教会の中へと入っていったが・・・

「・・・で？何か話があったのでは？」

「・・・今のうちに言っておきたいことがあってな・・・」

むしろ、言わなきゃならないこと、だ。

「俺は、聖杯なんて物に興味は無い。」

欲しいとも思わん。

「・・・？」

「お前の邪魔も・・・する気は無い。」

お前が、人をむやみに傷付けるような奴ではないって事くらいは理解している。

「ミミック？」

「むしろ、協力だってする・・・」

俺は、単騎でサーヴァントには勝てないことも理解した・・・

「貴方は・・・一体何を・・・」

「だから。」

・・・だからこそ。

「・・・どうか、俺に力を貸してくれ、セイバー・・・」

「・・・どういうこと、ですか？」

今の俺独りじゃぁ・・・

「マスターの命を・・・」

志保の命を・・・

「守りきることは、不可能だから・・・な。」

悔しいけど・・・な？

「俺の持ってる能力だと、どんなに足掻いても敵の足止めが限度だ・・・」

「・・・だから、せめて逃がすまでの助力を願う。と？」

そういうことだ・・・

「ああ・・・情け無い上、厚かましい願いだってことくらいはわかってる、・・・けど。」

アイツのためなら・・・

「このとうりだ！頼む！」

――頭だろうが、なんだって下げてやる！

・・・俺のプライドなんかより・・・アイツの命の方が重要だ！

「な！？」

――傍から見たら、訳がわからんだろうな・・・

「頼む・・・セイバー・・・！」

――大の男が、少女に土下座してる光景は、な。

「・・・頭を上げて下さい、ミミック・・・」

「・・・」

「・・・それが、偽りの無い貴方の本音、ですか・・・」

・・・セイ、バー？

「・・・わかりました・・・その、貴方の忠義に応じよう。」

・・・じゃぁ!?

「セイバーの名において誓おう。彼女を・・・シロウと共にシホを守ることを。」

＜ガバッ!!＞

「本当か!?セイバー!」

「・・・!?え・・・ええ、ただし、シロウが聖杯戦争に参加する、と決めた場合ですよ?」

それでも・・・

「・・・助かる!・・・サンキュー、セイバー・・・恩に着る!」

これで・・・一つ、問題は解決・・・かな?

「い、いえ・・・その・・・そ、それに!シホは、シロウの妹君!ならば、私が守っても問題はありません、ええ、ありませんとも!」

・・・ハハッ・・・コイツ・・・気をつかってくれたのか?

「ククッ・・・そうかもな・・・」

!?おっと、忘れるとこだった。

「ああ・・・セイバー?ついでに頼みたいんだが・・・」

「?なんですか?」

「・・・さっきのこと・・・志保達には黙っていてくれるか？」

「・・・？別に、構いませんが・・・何故ですか？」

「流石に・・・少しハズイ。」

「フフッ・・・恥じることはないでしょう？むしろ格好良かったのではないですか？」

・・・そのへんはわからんが・・・

「それに・・・志保、絶対気にするぞ？あんなこと話したら。」

自分のために、大の大人が土下座したりしたら・・・なぁ？

少なくとも、俺なら少し罪悪感が・・・

「・・・そうかもしれませんね・・・」

「ただでさえ俺は情け無いところしか見せてない気がするし、な。」

「そうですか？そうは思いませんが。」

・・・切りかかられて慌てふためき、取り乱した挙句に叩かれて渇入れられ、果てにはヒモ同然・・・

・・・十分に情け無いｏｒｚ

「・・・男ってのは、常に格好付けたいものなんだ。」

「・・・そうなのかも・・・しれませんね。」

「・・・それに、いつか誰かが言っていた格言がある。」

「・・・?なんですか?」

あれは・・・そう

「『格好付けることをやめた男に、生きる価値は無い』だ。」

騎士道、武士道・・・プライド、ポリシー・・・約束・・・
いろいろな言葉がある、生きる上では絶対に必要というわけではない
いそれらを護ること・・・そういう生き方を“格好付ける”っていう
うんじゃないかな?見た目じゃなくて、さ。

「・・・少し、わかる気がします・・・いつの世も、誇りを貫く者達は敵も味方も輝いていた・・・そして、誇り無き者には・・・」

「哀れな末路・・・ってか?」

「・・・そう、だった・・・かもしれませんね・・・」

まぁ、何が言いたいか、というと。

「ってなわけだ、少しは格好付けさせろ、と。」

「フフッ・・・そうですか。」

そうこうしていると

＜ギィイイッ！＞

出入り口が開いたか？話が終わったらしいな。

「戻ってきたぜ？俺達のマスターが。」

「ええ、そのようです。」

さて？どんな結論に至ったのやら？

「さあ、話を聞きに行くか？それぞれのマスターに。」

まぁ、予想はついているけどな？

「ええ、そうですね。」

お前もなんだろ？セイバー？

「シロウ！結論は出ましたか？」

「ああ、セイバー、俺は・・・」

「志保はどうだ？結論は出たか？」

「・・・クロウ！私は・・・」

「「聖杯はいらない！けど戦いを止める！そのために力を貸してくれ！」」

・・・やっぱりな！！そうくると思ったぜ！

「勿論だ！――――あらためて、これからよろしくな、“マスター（志保）”？」

――――さて、頑張るか！！！

“第三話／「初戦闘とハッタリと…＜ミミック＞の意味。」”

――話は終わった？お兄ちゃん達。

“第三話／「初戦闘とハッタリと…＜ミミック＞の意味。」”

――sideクロウ

志保の聖杯戦争への参加表明を聞き、俺も気合を入れることにした・・・

と言っても、俺のステータスと能力じゃあ、本格的に「足止め」くらいしかできないんだがな！・・・orz

「――私は貴方の剣となり。貴方に勝利をもたらしましょう。」

「ああ、よろしく頼む。」

お、向こう（士郎＆セイバー）の方も話は纏まったようだな。握手してるし。

「じゃあ、話も決まったことだし、さっさと帰ろうか・・・ここは、空気が良くない、それに・・・」

「それに？」

「・・・いや、なんでもない。」

・・・実は、さっきから何か首筋がチリチリするのだが・・・こんな感覚に覚えがないし、話して不安がらせる必要もないだろう。

――後で思った事だが、これは所謂“死亡フラグ”だったらしい・・・

「？ならいいけど・・・」

そして、俺達は教会から帰ることになった・・・っと、忘れるところだった。

教会を出たところで、士郎に話し掛ける。

「ところで・・・士郎？お前・・・その格好は無いんじゃないか？今更だが。」

・・・そう、士郎の制服？には胸に風穴が開いていた、ご丁寧に血糊付きで（ランサーのサーヴァントに刺されたんだとか、よく生きてるな？）。

「・・・う、もう少し早く言ってくれても・・・」

僅かに責めるような視線でこっちを見てくる士郎・・・だが俺もテンパッていたんだ。色々と。

・・・よく見たら志保と遠坂が視線を泳がせているな・・・お前らも、セイバーにはツッコミ入れてたが、士郎の格好はスルーしてたな・・・あとアーチャー、何ニヤニヤしてやがる、こっちは見えてるんだぞ？

「悪い、今さっき気付いたんだ・・・ということで・・・」

そう言いながら、ちょっと、俺の宝具を使うことにした・・・実際に使えなかったらかなりマズイし。

・・・＜シャン！＞という音と光と共に、俺の両手に赤と黒、二着のロングコートが出現する・・・バッツっぽいな、これ。

「・・・へ？」

「コート？」

「！？アンタ、今どっから出したの！？」

上から士郎、志保、遠坂。

「魔力を感じなかった・・・？今のは・・・」

『投影！？いや・・・今のは・・・』

そしてセイバー、アーチャー。

・・・投影ってなんだ？

「取りあえず、これでも着ておけ、志保も寒いんじゃないか？その格好。」

（因みに、志保は袖の赤いシャツに黒いジーンズである。）

皆の反応を見つつ、両手に出現したコートを渡す。

「無視するな！」

遠坂・・・わかっている、焦るな。

「・・・これが、俺の宝具、“幻想の道具欄（ファンタジック・アイテム・リスト）”・・・能力は、自分の“所有物”を９９種類・９９個ずつ俺の脳内のステータス欄に保管しておき、任意のタイミングで装備・出現させることができる・・・俺の手に。」

・・・そう、これが俺の宝具。
簡単に言うなら、ＦＦのアイテム欄のことだ。

「あ・・・さっき言ってた“ゲームの能力”って・・・」

「まあ、これのことだ（まあ、俺が噴出したのは別のなんだが）。」

そう、俺の宝具はこれ一つではないが・・・今は良いだろう、話す必要性が無い。
それに・・・

「・・・ふぅん？確かに、便利かもしれないけど。戦闘には使えそうにないわね。」

遠坂の奴が、いい感じに誤解してくれてるしな。

「じゃあ、このコートって？」

ああ、それは・・・

「俺の“生前の”私服。・・・何故か最初っから生前の所有物が、結構な量既に入っていたんだ。」

何故か、ね。

「へぇ・・・不思議だね？」

本当になんでだろうな？それに・・・何故か“アノアイテム”まで・・・ってこれに関しては黙っていよう、絶対騒ぎになる。

「結局このコート・・・借りてもいいのか？正直助かるけど・・・」

士郎が黒いコートを手に持ったままそんなことを聞いてきた。

・・・いやいやいや

「戯け、そのつもりで出したんだ。」

今更返されても逆に困る。

「じゃ・・・じゃあ借りるね？クロウ・・・ちょっと大きいけど・・・（あ、温かいや・・・ボソッ）」

志保は素直に着てくれたか、赤い方は若干小さめなんだが・・・志保が着ると地面スレスレだな・・・ところで、最後なんて言ったんだ？小声で聞こえなかったぞ？

「う・・・わかった。有難く借りることにする・・・（お・・・良いな、コレ・・・そのうち買おう、どこに売ってるかな・・・？ボソッ）」

士郎もなんだかんだで着ることにした・・・というか、お前に選択肢は無い。

・・・因みに、そのコートは特注だ、防弾防刃の、な。

そのことを教えたら・・・

「「「・・・へ？」」」

っと予想通りに驚いてくれた。・・・うん、やっぱり驚くよな・・・

――ココで少し、“生前”の話をしよう。

俺は、生まれてから１９年で、合計４０発の銃弾を受け、５１回ナイフに刺されている。

銃弾の方は、銀行強盗、ハイジャック、シージャック・・・その辺の事件に巻き込まれた結果だ・・・因みに、生後一週間の時、病院に起こったテロ事件が最初だ（流れ弾が右掌に命中）・・・４０発中１３回はコートで止めている。・・・ナイフの方は、いろいろと（理由は・・・まあ訊くな。）・・・まあ、５１回中３２回はコートで止めたが・・・

・・・そんなことがあってな、自分の服は、全て防弾防刃付けることにしたんだ・・・ああ、安心していい、いま渡したコートは、一度たりともそんな事件に巻き込まれてない奴だから。

・・・と話すと・・・

「切実だったのね・・・」

「俺も、この一日に二回死にかけてるけど・・・そんなにか・・・」

「・・・よく・・・生きてたね・・・クロウ。」

「・・・壮絶ですね、現代人としては。」

『・・・？お前とは友になれるかもしれん、と思ったぞ・・・何故だ？』

・・・と、こんな反応が返ってきた。

・・・アーチャー、お前の人生に何が・・・

「こ、幸運Ｅ－はダテじゃないってことね？えーと・・・そ、そんだけ不運だったら、トラックとかにも１００回くらい跳ね飛ばされてたりして！？なーんて・・・」

「そ・・・そんなわけないだろ？遠坂！？いくらなんだって・・・」

「そ・・・そうだよ！１９年で三桁交通事故に遭うわけ・・・」

・・・話を逸らそうとしたのだろうが・・・

「あるぞ？具体的には２５０回くらい。」

――――そう、俺の人生は事件・事故と共にあると言っても過言ではない。

なんせ、俺の出産時、救急車で母親が搬送されている時に救急車にトラックが突っ込んできたからな。

・・・妹が産まれて物心付くまで、入院続きで外に碌に出られなかったくらいだ。

なんせ、退院したその日に跳ね飛ばされるんだから。

あ、だから今セイバーに渡してるコートにはついでに対衝撃仕様でもあるんだ。

「「「ご・・・ご、めん・・・」」」

気にするな、もう気にしてない。むしろそのおかげで俺の体はトラックに跳ね飛ばされたくらいじゃぁ骨折しないし、直撃してもせいぜい打ち身程度しかダメージ入らなくなったんだ。・・・今となっては、むしろ助かっている。・・・ナイフも俺には碌に刺さらなく

なったし。
・・・コートは保険だ、最早。
俺の骨格は、最早人間の範疇を越えている、と医師に宣告されたし。
レントゲン見て爆笑したぞ・・・
筋肉に関しても・・・昭和風改造強化人間っぽくなってしまったし。
・・・人間の身体は、普通こんな風に筋肉は付かない。絶対に。少なくとも、バンプアップしてるからといっても銃弾が筋肉貫通しないってのはないだろうｗｗｗ

・・・医者曰く、『環境（不幸）に対抗するため、肉体が進化（突然変異）したのだろう。』
だとさ。

「アンタ・・・どんな身体してんのよ・・・」
「いろんな意味で凄い・・・んだな。」
「限界、軽く越えてるような・・・」
「耐久Ａはそういうことですか・・・」
『・・・今度、一緒に酒でも飲まないか?』

・・・言うな、自分でもそう思う。そしてアーチャー・・・お前の人生にいったいナニガ。

「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」（俺）

やべぇ・・・会話が切れた・・・気まずい・・・と。

「そ・・・そうそう、衛宮君?今日は見逃してあげるけど、明日から覚悟するように!」

突然、遠坂がこんな事を言い出した。
それを聞いた衛宮兄妹は、ポカンと口を開けて・・・

「「へ?覚悟?何の?」」

となんだかわけがわかっていない顔をした。
・・・まあ、気持ちはわかる

「な・・・何のって・・・貴方達、ちゃんと話聴いてたの?・・・私や、他のマスターと戦う覚悟。私達は、夜が明けたら敵同士なのよ?」

ああ・・・そういうこと、か。
確かに、最後の一組になるまで戦わなければ・・・ってまてよ・・・?

「む・・・でも、俺は遠坂と戦う気は無いぞ?」
「・・・私も・・・同じく。」

士郎達はこう言っているが・・・

「ハァ・・・どちらにせよ、最後の一組まで「なあ・・・聞き忘れていたんだが・・・」・・・何よ?」

そう、これは絶対に訊かなくてはならない。

「・・・ここに、八組目の参加者がいるんだが・・・どうなるんだ？」

「・・・あ。」

そう、あの説明だと・・・あくまで七騎のサーヴァントによるサバイバルなんだ。

なら、八騎目の俺は・・・？

「言い忘れてた、監督役の似非神父曰く、『前例が無いが、参加するもしないも好きにしろ。』だってさ・・・要約するとね。」

「ついでに、今回のイレギュラーについて、何か情報があったら教えろ、だとさ。」

「後、あっちでも何かわかり次第連絡をくれるそうよ？」

・・・なんか、テキトーだな。監督役。

「そっか・・・サンキュ。・・・話の腰折って悪かったな。」

・・・まあ、俺がやることは変わらない。

ただ、この恩に応えるだけ・・・なんてな。

「・・・途中で切られたけど・・・教会に連れてったことで、令呪分の借りは返したわよ？・・・これで、気兼ねなく戦えるわ。」

と、どこか不機嫌そうに言葉の続きを語る遠坂。

・・・でも、コイツも大概お人よし・・・というか“いい奴”なんだな。

とか思っていたら、士郎が・・・

「・・・」

何か難しい顔して考え込んでいた・・・って心が読めた。

「？どうしたの？」

士郎は、急に真面目な顔になり、言葉を紡ぐ。

「いや、」

よし、俺も同意見だし・・・合わせてみるか。

「「“遠坂ってやさしいんだな・・・ってさ。俺、お前みたいな奴は好きだ”ぞ。」・・・だろ？士郎。」

「んなっ！」（／／／／／）

士郎の台詞に合わせて言ってみる。すると・・・遠坂が顔を真っ赤にして黙り込んでしまった。褒められるのになれてないのだろうか？・・・本音だったのだが。俺も、士郎も。

「むぅ・・・」

・・・ただ、何故に志保、俺を睨むか？ああいう義理堅い奴には、人間少なからず好意を持つ・・・と思うが？

（・・・！？何か、来る・・・否！いる！）

・・・などと、じゃれ付いていると、圧倒的な存在感が、迫ってい

た・・・

「ねぇ、お話は終わった？お兄ちゃん達。」

そんな、場違いな声が俺達の耳に届く。

高く、幼い・・・少女の声が。

「何者だ！」

セイバーが声を張り上げる。

「こんばんは、お兄ちゃん。」

俺達は、声が聞こえた方向・・・坂の上を見た。

・・・そこには、銀色の、綺麗な髪をした女の子がいた。

「そしてはじめまして、お姉ちゃん。私はイリヤ、イリヤスフィール・フォン・アインツベルン――」

「アイン・・・ツベルン・・・」

アインツベルン・・・たしか、始まりの御三家の一角。

・・・ってことは、この子・・・！

「ええ、そうよ。トオサカの当代さん。」

――マスター！

・・・後ろにぼんやりと見える、鉛色の巨人は・・・サーヴァント！

「それじゃあ、挨拶は終わり・・・潰しちゃえ！バーサーカー！」

・・・最悪だ！よりにもよって、“狂戦士”かよ・・・

「■■■■■■■――――――！！！！！！」

＜ゴウッ！！＞

声だけで大気が震える・・・これがバーサーカーか・・・

「・・・セイバー、アーチャー・・・ここは共同戦線を張るべきじゃないか？アイツ・・・間違いなく“最凶”だ・・・ステータスでも、こっちは負けてるぜ？」

そう、アイツは・・・まともにやって勝てる相手じゃない・・・

「・・・そのようだな。」

「ええ・・・アーチャー、ここは協力体制を敷きましょう。」

アーチャーは実体化しながら、セイバーは俺にコートを返しながら、それぞれ戦闘態勢に入る・・・

「ミミックは、マスター達を。・・・貴方の耐久なら、可能でしょう？」

・・・そうは言うが・・・な。

「（待て・・・セイバー、アーチャー・・・少し、俺に時間をくれないか？）」

「（何？アンタ・・・何か手があるの？」」

そんなものはない、無いが・・・

「（・・・確認と、時間稼ぎだ。二人は、場所取りだ。・・・今の内に、ベストな位置へ・・・）」

「・・・クロウ・・・」

志保・・・安心しろ、俺はともかく、二人がいる。

「（わかりました・・・では、）」

「（ああ・・・それに、うまくいけば、コイツを退散させられる・・・）」

「ナイショ話は終わった？じゃあ、殺すね？バーサー・・・」

「まあ、待て・・・少し、話をしないか？リトル・レディ？」

――――ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「少し、話をしないか？リトル・レディ？」

ミミックはそう言って、前に出て行く。だが。

「・・・何かしら？ジェントルメン？」

三歩目で銀髪の少女・・・イリヤに止められる。

傍らの狂戦士・・・理性を奪われし鉛の巨人の眼が、彼を射抜く。

だが、彼は怯えることも無く。腰の帽子を手に取りながら言葉を放つ。

「ジェントルメンなんて柄では無いな・・・俺は、ミミック・・・物真似師のサーヴァントだ、お初に御目に掛かる。」

苦笑するように、そう、落ち着いた口調で語りかけた・・・

だが、対する少女は表情を険しくする。

何故なら彼女はアインツベルン・・・主催者側の人間だから。

「ミミック・・・?何よ・・・そのクラス・・・そんなの、私は知らない!それに・・・サーヴァントは既に、七騎揃っているハズよ!」

彼女の心は、幼い少女のモノだったから・・・主催者側の人間である自分が、シラナイモノがいる・・・それは、どれほどの驚愕なのだろうか?当事者ではない我々には理解できないことだろう。

だが、そんな少女の驚愕を無視したようにミミックは続ける・・・

「・・・ほう、やはり君にもわからないか・・・ああ、別に君を侮辱しているわけではない、誤解しないでくれるか?・・・俺がいったいなんなのか・・・俺自身にもわからないのだから。」

そう、あくまで確認を続けるような・・・それでいて言い聞かせるような声色で語る彼。

・・・だが、少女の方は、望んだ答えではなかったようだ。

ますます表情を険しくさせ、呆れたように言葉を発する。

「・・・何?貴方・・・自分の事すら理解できていないというの・・・?・・・だったら、「存在を残さず潰れちゃいなさい・・・か?」

・・・っ！？」

だが、少女が言葉を言い終える前に、その言葉に、ミミックは被せる。

・・・彼女が発しようとした言葉を。

驚愕する少女を他所に、彼は続ける。

「理解できないからこそ・・・知ろうとするべき。・・・違うかい？リトル・レディ？」

そう、右手で帽子を回しながら、聞き分けの無い子供に言い聞かせるように語る彼。

・・・ここで、少女は少し冷静になる。『相手は間違いなくサーヴァント、その相手に、ペースを奪われてはマズイ。』と。

表情に余裕を取り戻し、表面上だけでも冷静に、彼に語りかける。

「それもそうかもね・・・？ならば、貴方は一体何者なのかしら、教えていただける？」

そう、表面上は。・・・内心、まだ冷静になりきれていないようだが。

だが、それに気が付いているのかいないのか。

彼は、あくまで自身のペースで語り続ける。

「なに、何処にでもいる一般人さ。ただ、サーヴァントになってしまった、ね。」

そう、なんでもないように語った。

だが、少女は字面どうりには受け取らなかった。

「ふざけないで。・・・一般人がサーヴァントなんかになれるわけない！」

最初の優雅さは何処へやら、激昂する少女
それを受け、彼は肩を竦めながらも、余裕を持ってこう返す。

「そういわれてもね・・・なってしまったのだから仕方がないだろう？むしろ、その理由を訊きたかったのだが。」

彼の言葉に一切の嘘は無い。
だが、彼女には、彼が馬鹿にしているようにしか映らなかった。
・・・そして、ついに・・・

「・・・っ！！馬鹿にして！バーサーカー！コイツから先に潰しなさい！」

「■■■■■■■■――――――――！！！！

激昂した少女の声により、鉛色の巨人が咆哮する。
それを受け、今まで手に持ち続けた帽子を被りながら彼は言う。
――彼が、知るはずも無いことを。

「別に、馬鹿にはしていないが・・・潰されては敵わん。というか、ただの一般人に対して『ヘラクレス』はオーバーキルだぞ、完全にな。」

その瞬間・・・その場にいた、彼を除く全ての人間は驚愕する。
・・・サーヴァントたちも、だが。

「ウソ・・・なんで・・・」

「サーヴァントの真名を・・・」
「知っているの・・・ですか・・・？」

驚愕する者達を置き去りに、彼は語る・・・
さらなる驚愕を与えることを・・・

「俺は物真似師・・・知っているだろう？物真似は人間観察から始まることを・・・今まで、ただ無駄口を利いていた訳ではない、そのバーサーカーの全て・・・観察は終了したぜ？」

――クラススキル：人間観察・Ａ
　人物を観察し、その人物の全てを見極めるスキル。このランクだと、観察が終了した相手のステータスのみならず、その深層心理まで読み取れる。この観察にかかる時間は、対象の技量、精神構造によって変動する。

そう、ときおり彼が他人の心を読んだりするのは、このスキルが無意識で発動していたのである。

（・・・っ！？では、ミミックには・・・）
（真名を隠しても・・・）
（どんな策をたてようと・・・）
（（（（無駄・・・ということ・・・か。））））

皆の戦慄を余所に、彼はただ淡々と語る

「そいつの名はヘラクレス・・・“ヘラの栄光”ギリシャ神話最大の大英雄。
その宝具は“射殺す百頭（ナインライブズ）”、彼の意思によって変化する変幻自在の武具、本来の使い道は九つの竜の如きホーミングレーザーを放つ剛

弓。
しかし、バーサーカーとして召喚された影響で、この宝具は使用不能となっている。だが、もう一つの宝具は問題なく発動している・・・“十二の試練（ゴッド・ハンド）”・・・かつて、彼がのりこえた十二の難行、この試練を乗り越えた彼の肉体こそがその宝具。
その能力は簡単に言うならば、“スーパーアーマー（超硬度）”“リレイズ（蘇生）”そして“エヴォリューション（進化）”、一定ランク・・・Bランクに届かない攻撃を無効にし、十一の命のストックを持ち死亡から蘇る・・・殺しきるには十二回の殺害が必要・・・これは、時間があれば補充されるようだな、そして一度死亡した場合、その殺害方法は二度と通用しなくなる・・・ほとんど反則だな。」

・・・淡々と語る彼を、誰も止められなかった・・・

「『どうかしら？何か間違っているところがあるかしら？私？』・・・なんてな。」

挙句に、少女の声をも模倣する・・・完全に。

「・・・っ！私の声まで・・・」

動きを止めた彼女に、追い討ちをかけるように話すミミック（物真似師）。
彼女達が見ている前で、さらに、驚愕すべき事態が発生する。
彼は・・・宝具の、真名を開放した・・・

「“物真似師の意地（プライド・オブ・ミミック）”・・・！！」

・・・彼の身体が、光に包まれる。

・・・そして

「『間違っているわけないじゃない、だって、私は、バーサーカーのマスターなのだから。』」

光が静まった時、そこには、銀色の髪を持つ幼い少女・・・服装の色以外まったく同じ、二人目の“イリヤスフィール”がいた。

「「「「「「なぁっ!!!?」」」」」」

「う・・・ウソ・・・なんで・・・」

「『頭が悪いのね・・・?だって、物真似師のサーヴァントなのよ?』」

少女は、少女に話し掛ける。・・・まったく同じ声で、同じ仕草で・・・

「や・・・やめて・・・やめなさい!」

「『私(イリヤ)の観察も・・・終わっているのよ?』」

クスクスと・・・笑いながら・・・少女は少女を追い詰める。

「き、消えなさい!!偽者!!バーサー＜パアッ＞カ・・・・・・ウ・・・ソ・・・」

少女の声は、最早悲鳴だった・・・少女は、己が従えし鉛色の巨人に、指令を出す。

己が偽者を消し去らんと。

だが、その指令を終える前に再び輝くミミック・・・光が消えたとき、そこにいたのは。

――――鉛色の巨人・・・二人目のバーサーカーだった。

「クロウ・・・？そ・・・それって・・・」

あまりの驚愕に動きを止める少女達。
そして、すぐに元の姿に戻るミミック。

「あの姿だと喋れないんでね・・・ああ、今いったとうり、偽者に過ぎない。ただの“物真似”だ・・・けれど・・・こちらにはさらにセイバー、アーチャーがいる・・・」

そして、また淡々と語り始める。

「どうだい？ここは俺たちを見逃し、退くというのは・・・？」

そして、こんなことを言い出した・・・
敗北を確信した少女は訝しむ・・・何故？向こうの方が優位なのに・・・？
その答は、すぐに訪れた。

「こちらも、このまま戦うと・・・街を破壊してしまうだろうし・・・やるなら、人気の無い・・・そう、森の中とかが好ましいな。」

・・・彼は、街を壊したくない、と言っているのだ。
絶対に自分達に優位なこの状況を破棄してまで。
ふざけるな・・・そう言いそうになったが。

「・・・それに・・・俺には、君は殺せないよ、イリヤ・・・士郎の、志保の・・・」

そう、彼は少女と、赤い髪の兄妹の関係を知っているのだ・・・なら・・・自分は・・・

「そう・・・ね・・・じゃあ、その内、私の城に招待するわ？あそこでなら、邪魔も入らないし・・・」

「迷惑も掛からん。と。」

今は・・・良い、顔合わせだと思おう。
少女はそう判断し、退くことを決定した。

「ええ・・・じゃあ、私はコレでお邪魔するわ・・・お姉ちゃん？物凄いサーヴァント引き当てたわね？」

「逃すとおも＜ガバッ＞（モガモガ）」

・・・赤い服のツインテール少女が、何かを言う前に、金髪の少女騎士に口を塞がれたが・・・

それはともかく、ミミックは語る。

「・・・夜も遅い、風邪を引かないようにな？」

先程までと違い、温かい口調で・・・

「・・・ええ、それじゃあね？お兄ちゃん達。」

少女が、鉛色の巨人とともに帰っていった・・・
少女の姿が見えなくなると・・・

「ックハァッ!!なんとかなった!!」

一気に気が抜けたように息を吐き出した者がいた・・・

――――ｓｉｄｅクロウ

・・・ッマジで潰されるかと思った!!でも退いてくれたぜ・・・

「クロウっ!?」

志保が駆け寄ってくる・・・心配かけたかな・・・

「大丈夫ですか?ミミック。・・・しかし、本当に戦わずして退散させるとは・・・」

本当にな・・・セイバーもサンキュ、後ろで待機していてくれたからな・・・

・・・と、基本的に被害ゼロで切り抜けたのに・・・納得してない奴がいた。

「・・・で?なんで逃したの?」

そう、今の今までセイバーに口塞がれてた遠坂だ。

「・・・ハッタリだったけどな。ほとんど。」

「ハァ？」

そう、ハッタリだったのだ。

「考えても見ろ・・・どうやって倒す気だよ・・・」

アイツ、一回殺したら、それは二度と効かなくなるんだぞ・・・

「・・・あ。」

このうっかりめ。

「それにもう・・・精神集中させているのが・・・ツライ・・・」

――――宝具：物真似師の意地（プライド・オブ・ミミック）・・・相手の全てを真似する能力だが・・・

・・・常に、相手の心と同化するようなものだからな・・・精神力と魔力の消耗が激しい。

・・・特に、魔力に関しては、戦闘は辛うじて１０分が限度だろうなぁ・・・あれ・・・

「だ・・・大丈夫？クロウ・・・」

志保・・・大丈夫だ。

「ああ、・・・しかし・・・正直・・・今日はもう勘弁だ・・・」

「・・・うん、お疲れ様・・・クロウ。」

そうして、俺の心理戦だけど、始めての戦闘は幕を閉じた。

そう、思い返せば、これが俺の初戦闘だったんだよな・・・

初戦闘・○ミミックＶＳ●イリヤ＆バーサーカー

決まり手・ハッタリ

・・・なんてな。

――キリツグ・・・

それにしても・・・あの子・・・助けてやらないと、な・・・

あんな悲しい戦い、させてはならないよな・・・

でも、助けるのは士郎と志保の役目だ。・・・俺の出る幕でもない・・・かな。

――ままならない・・・な。

“第三話／「初戦闘とハッタリと…＜ミミック＞の意味。」”（後書き）

この駄文をお読み頂き、本当に感謝です、侑斗です。
ごめんなさい、展開が遅いのは仕様なんです（汗
「ここはこうしたら？」等が御座いましたら、感想にて・・・（ただ、出来るだけ優しい言葉で・・・）今後の糧にさせていただきます。
ご意見・感想・質問等お待ちしてます。

・・・あ、某舞人とは血縁関係ありませんので（断言）ｗ

「ラジオトーク！ｉｎ“俺いろ”！！」

サヤ（以下サ）「サヤと！」

アカ（以下ア）「アカの！」

サ＆ア「「ラジオトーク！ｉｎ“俺いろ”！！」」

――ラジオトーク――

（ＢＧＭ・ＴＨＩＳ　ＩＬＬＵＳＩＯＮ）

サ「このコーナーでは、“俺達の・・・”本編では語られなかった小ネタや。」

ア「本編では語れない疑問点や没ネタ、裏話などを答えていくコーナーだ！」

サ「司会進行は私達！クロウの妹、サヤと！」

ア「クロウの親友、アカの二人でお送りするぞ！」

サ「・・・まあ、本編に出番無いしね、私達。」

ア「・・・う・・・ま、まあこうやってコーナー一つ貰えたし・・・一応本編に出番あったし・・・マシだと思おうな？」

サ「プロローグだけだけどね・・・ま、まぁ気を取り直して！本日のスペシャルゲスト！」

ア「誰だ?まあテンプレ的には作者だが。」

サ「う・・・ひどいやアカさん・・・言っちゃうなんて・・・」

ア「・・・マジかよ?冗談だったのに・・・」

???「問題は無い、作者は来ないから。」

サ&ア「「・・・誰!?」」

(BGM・ビ○クブリッヂの死闘)

???「俺は貫紀　剣義・・・通りすがりの悪役・・・じゃなかった、今日は作者の代理人だ。」

ア「・・・?結局、誰なんだ?コイツ。」

サ「・・・あ!もしかして、作者の現在未公開作品の主人公の?」

剣義(以下、ツ)「正解、作者は女と会話するのが苦手らしいからな。」

ア「あれ・・・?"俺いろ"が処女作なんじゃぁ・・・」

ツ「・・・一応、これが初公開だから間違ってないぞ?ただ、俺の物語は一話だけ書かれて放置されているだけだ・・・二年近く。まぁ、そのうち改定して公開されるかもしれんが・・・」

サ「その前に“俺いろ”完結させてからですけどね？」

ツ「俺の物語の公開は最初からあきらめているさ・・・まぁ、今のところ机の肥やしだし・・・」

ア「・・・ん？でも、アンタの名前・・・どこかで見た気が・・・？」

ツ「ああ・・・今まで、何度かコノ作者に名前を貸していたからな・・・」

サ「・・・へ？」

ツ「なんでも、良いハンドルネームが思いつかなかったらしくてな・・・だから、名前だけなら結構しっている人がいるかもしれないな。」

ア「不憫な奴・・・（ホロリ）」

ツ「まぁ、今後は、作者の代理人として登場するのでよろしく。」

サ&ア（泣）「「だ・・・題名だけでもこの場でどうぞ！」」

ツ「ん？ああ、“通りすがりの悪役”っていう、俺がディケイドモドキやる話。」

サ&ア「「いつか、公開されることを祈ってます。」」

ツ「ありがとう。でもその前に“俺いろ”の完結が先な？」

ア&サ「「・・・ハイ。」」

（ＢＧＭ・ゴル〇ーザ四天王）

ツ「ところで、お前らは自己紹介したのか？」

サ&ア「「あ。」」

サ「えーと・・・では、自己紹介をさせていただきます。アカさん！どうぞ！」

ア「私からか？・・・えーと“穂村（ホムラ）　真朱（マアカ）”、１９歳の大学生だ。クロウとは・・・小学２年からの付き合いだな。」

サ「因みに、黒髪・長髪で黒目、身長高め、胸控えめの日本美人で、高校時代は剣道部主将でした。」

ア「今・・・一言余計な事が混ざってなかったか・・・？」

サ「気のせいです♪私は“定霧（サダギリ）　沙久夜（サクヤ）”、１４歳です！」

ア「・・・いまだに小学３年で通るロリっ娘だけどな・・・（ボソッ）」

サ「グフッ！？人が気にしてることをストレートにッ！？」

ア「お前が先にやったんだろうが・・・（涙目）」

ツ「えーと・・・」

サ「アカさんは良いじゃないですか！？背はちゃんと大人なんだから！？（半泣）」

ア「五月蝿い！背だけ高くて胸ペッタンコの悲しみがお前にわかるか！？ちゃんと全体ではバランス取れてるお前に！！？（涙目）」

ツ「・・・お二人さん？」

サ「こっちなんかバスに乗ろうとすると心配されるんですよ！？」

ア「年下の女子にラブレター渡されるこっちの身にもなれ！？」

ツ「・・・そういや、未確認情報だけど・・・クロウは貧乳フェチらしいな・・・（ボソッ）」

サ&ア「「ッ！！！！！！？」」

ガシッ！！

サ「その情報を！」

ア「詳しく！！」

ツ「（食いつきいいな！？オイ！？）後でな・・・それと、さっきからオンエア中だぞ？」

サ&ア「「あ！！！！」」

（ＢＧＭ・エレキ・〇・チョコボ）

サ「で・・・では、気を取り直していってみよー！」（／／／／／／）

ア「こ・・・今回は、第一回だからな・・・お便り・質問は届いていないので、こちらから、質問の多そうな事柄について話し合おうと思う！」（／／／／／／）

ツ「コメント、解説は俺が担当だ。」

サ「ではまず、これ！“志保って何者！？”」

ア「あー・・・多そうだな。」

サ「オリキャラですもんね？ではツルギさん、解説お願いします！」

ツ「ああ・・・結論を先に言おう。彼女の正体は“衛宮　士郎”だ、平行世界の、な。」

ア「・・・あれ？その士郎もいなかったか？本編に。」

ツ「ついでに言うが、どこぞの宝石うっかりの仕業だ。」

ア「あのうっかりコンビ？うわ・・・なんて・・・」

ツ「テンプレ乙！！だろ？でも仕方が無いと思うぞ？原案（Ｊ・Ｂ

氏作）ではクロウは士郎第二のサーヴァントだったんだが・・・普通にどう考えても維持不可能だろ?そこで、この作者は、彼女にご登場願った訳だ。という裏話がある。」

ア「・・・?J・B?誰だ?」

ツ「今作のクロウの原案を創ったキャラメイカーで、作者の友人。作者・・・侑斗は彼の生んだ“ミミック”というキャラを頂いたところから執筆が始まったのがこの“俺いろ”なんだ。」

サ「へー・・・?じゃあ、私達の生みの親ってわけですか?」

ツ「・・・」

ア「?ツルギ?」

ツ「・・・彼は、あくまで“ミミック”の生みの親だからな・・・それに・・・彼原案の“玖朗”はどっちかというと・・・チートキャラだったからな・・・」

サ&ア「「へ?」」

ツ「“結果的に最強系オリ主”が元々のミミックだ。」

サ「どういうこと・・・ですか?」

ツ「今作のクロウ・・・久郎は“玖朗”に能力調整かけた結果生まれた存在って事。そして、家族、戦う訳などを侑斗が追加し、執筆しているのが今作“俺いろ”ってわけだ。」

ア「ややこしいな・・・」

ツ「まあ、J・B氏の“ミミック”は、本編終了時点のクロウの百倍は強いな・・・なんせ、魔力ゲージ常にマックスだし・・・」

サ「それって・・・パワーバランスが・・・」

ツ「彼も、それに気がつき、恥ずかしくなったので公開を止めたらしいぞ?」

ア「それに、調整を掛けて、“無茶ではあるが無理じゃない”ようにしようと頑張ったのが。」

ツ「作者ってことだ。」

（BGM・穏やか○毎日）

サ「あれ?何の話をしてたんでしたっけ?」

ツ「志保についての途中だったな?話を戻すぞ?」

ツ「彼女は、キリツグ氏が士郎を救出した現場に、一緒に倒れていたそうだ。」

ア「なんでだ?」

ツ「詳しくは端折らせてもらう。」

サ「えー?なんでですか?」

ツ「その辺語るとＳＳが一本できてしまうからだ。」

ア「そんなにややこしいのか！？」

ツ「結果だけ見ると簡単なことなんだが・・・一言で言うなら“バタフライ効果”だな。」

サ＆ア「？」」

ツ「もう一つヒント、『うっかりコンビは、この現象の原因ではあるが、感知はしていない。』」

サ＆ア「？？」」

ツ「これが最後、『志保のことを観測していた訳でもない』あとは各自脳内補完してくれ。」

ア「投げやりだな・・・」

ツ「まあその後、士郎と共に引き取られ、兄妹として暮らすこととなったわけだ。」

ア「スルーしやがった！？」

ツ「男女の違いと、“鞘”との親和性、あとは得意料理が違う位で基本的には同一の存在と見ていいんじゃないかな？」

サ「“鞘”との親和性？」

ツ「あー・・・本編でもそのうち語られるから、これ以上はＮＧということで。」

ア「気になるな・・・ヒントはないのか？」

ツ「・・・実は、本編でのクロウの台詞・・・モノローグ？にヒントが含まれている。」

サ「そうなんですか！？」

ツ「まあ、このラジオをよーく聞いて（見て）見ると、本編に一つ、気になる所が、な？（ニヤリ）」

ア（悪い笑みだな）

サ（悪い笑みですね）

ツ「で、この問題はもう良いんじゃないか？いいかげん、時間が・・・」

サ「ああっ！？そ・・・そうですね！！」

ア「原作との微妙な違いは、さっき言ってた“バタフライ効果”で片がつくしな。」

（ＢＧＭ・疾風〇剣士）

サ「で・・・では次にょっ！？」

ツ（噛んだな・・・）

サ「あう・・・いひゃい・・・」

ア「慌てるからだ、しかたがないから私が言うぞ？ありそうな質問、＜クロウの外見描写が服装以外無いぞ？＞」

ツ「あー・・・今回はクロウ視点オンリーだったからな・・・」

ア「ここは、私達で解決可能だな？サヤ。」

サ「うぅ・・・そうですね・・・」

ア「まず、髪は黒くて・・・長さはアーチャーと同じ位で、前髪以外をオールバックにしているのが基本だな。」

サ「身長は１８２ｃｍで・・・服を着てると見た目細いけど・・・実は・・・」

ア「なんと体重９８キロ！太ってる訳じゃないぞ？」

サ「ただ単に、筋肉の密度と骨密度がモノスゴイことになってるんだよね・・・インドア派なのに。」

ア「本編でセイバーを片手で止めたのはダテじゃない、ということだ。」

サ「一切の無駄が無くて、手足長くて・・・マッチョじゃなくて・・・お風呂上りとか・・・うっかりみとれちゃうんだよね・・・（ニヘラ／／／／／）」

ア「（こ・・・こいつぅ・・・うらやま・・・じゃなくて！！）＜シパァン！（注・竹刀です）＞いいかげんにしろ！」

サ「はう！？ご・・・ごめんなさい・・・」

ア「まったく・・・後は、瞳の色が灰色だな？」

サ「突然変異らしいよ？アレ、私は黒いし。」

ア「後は・・・顔、か。」

サ「こういうのにありがちな女顔の美形・・・じゃなくて・・・」

ア「男らしい良い顔だ。」（／／／／／／）

サ「ハードボイルド系だよね・・・」（／／／／／／）

ツ「２５過ぎたらハードボイルド俳優で大ヒットしそうな顔だよな、たしかに。・・・帽子が似合う男だぜ。」

サ＆ア「「ハァ・・・（／／／／／／）」」

ツ「・・・」

（ＢＧＭ・ｄａｙ○（Ｆａｔｅ　ｖｅｒ，））

ツ「・・・もう、時間だし、締めるぞ？」

サ「ふぇ!?」

ア「な!?も、もうそんな時間か!?」

ツ「ああ、お前らがクロウ談義でトリップしてる間にな・・・?」

サ「はぅっ!?こ、今後も、本編での疑問や!!」

ア「う、裏話が知りたい、などがあったら!!」

サ&ア「「感想に一言添えてお願いします!!」」

ツ「えー・・・と・・・今後も“俺達の（いろんな意味で）運命の物語”を・・・」

サ&ア&ツ「「「よろしくお願いします!!」」」

（お前ら・・・無理やり締めやがったな・・・？）
（ご、ごめんなさい！！）
（ううう・・・クロウがいないと調子が狂う・・・）

“第四話／「交渉と同盟…それとハッタリの裏側。」”

――さあ、今度こそ帰ろう・・・

“第四話／「交渉と同盟…それとハッタリの裏側。」”

――sideクロウ

イリヤの事をどうやって士郎達に伝えるかを考えながら、俺は疲れた身体を引きずるように衛宮邸への帰路を歩いていた。

・・・その間、志保がすっごく申し訳無さそうな顔して心配してきたり、遠坂が難しい顔して考え込んでいたり、士郎がまた何かうんうん唸っていたり、セイバーは何か無表情で真後ろ歩いていたり、アーチャーは探るような顔していたり・・・うぅ、胃が・・・

などと居心地の悪い空間を歩いていたら、遠坂が立ち止まった。どうやらここが二人の自宅への分かれ道らしい。

「それじゃあ、私はここで・・・」

・・・まてよ、上手くいけばコイツと・・・

「ま「待ってくれないか?遠坂、アーチャー。」」・・・クロウ?」

「何よ?ミミック。」

よし・・・何か士郎が言いかけていたが気にせず話し掛ける。
・・・敵は少ないに越したことはない・・・ってことで。

「・・・同盟を組まないか?俺達三組で。」

――――“交渉、開始”

「・・・何故かしら?」
「ミミック!?」
「・・・クロウ?」
「同盟?」
『・・・』

五者五様の反応を返してきた・・・
とりあえず、今は遠坂以外を意図的にスルー。

「・・・単純だ、あのバーサーカーは脅威だからな・・・」

「・・・貴方達二組なら、勝てるんじゃないかしら?そちらにメリットはあまり無いんじゃない?」

・・・さっきの俺の台詞・・・忘れられてるな。

「最初にも言ったが、俺では“相手には勝てない”、さっきのはただのハッタリだ。・・・それに、仮にセイバーがバーサーカーを殺せたとして・・・十二回は厳しいだろう?セイバー。」

アイツは、同じ方法では二度と死なないからな。

「・・・っそう・・・ですね・・・あの大英雄が相手では、単騎で勝利するのは厳しい・・・」

「そして、それはアーチャーにも言える事だ、と思うが？」

お前の正体は“観察”していないが、アレを単騎で倒しきれるようなら、最初から逃さないだろう。

「・・・！？・・・アンタ・・・もしかして、アーチャーの真名を！？」

まあ・・・そうとられても仕方が無いがな。

「観て無い・・・というか、技量が高くて、かなり時間がかかるな、見ようとしても。」

そう、相手の全てを観るためにかかる時間は対象の技量と精神構造によって異なる。

・・・コイツを、“理解”するには、集中して目を皿のようにして観察し続けても・・・丸二時間って所か？

・・・それに・・・なぁ？

「敵対していない者の人生を・・・心を覗き込むのは、どうかと思うしな。」

そんな理由で、俺はセイバーも“観察”していないんだが。

「なんだ・・・そう、で？」

「どうせ戦うなら、一度で倒しきるべきだ、ならば・・・」

「アンタが足止め・・・セイバーとアーチャー、二人が最大攻撃・・・ってことかしら？」

正解、・・・まあ、他力本願みたいで嫌だがな。

「そう、一度の戦闘で焼ききればいい。そのための同盟だ。」

まあ、それ以外にもかなり意味があるんだが。

「無論、バーサーカーの事を別にしても、意外なまでにお互いにメリットがある。」

「ふぅん？どんな？」

遠坂が、挑発的な表情で訊いてくる。

・・・大方、見極めるためだろうな。

「ああ・・・

第一に、こちらのマスター・・・未熟なはみ出し者、と自認している二人のサポートをしてもらえる。

第二に、そちらは未知のサーヴァントが出現しても、対処が楽になる・・・なんなら、俺が“観察”すれば、その能力もわかる。

第三に、こちらは監督役との連絡が容易くなる。

第四に、お互い、“無害”なマスターだ。どちらが勝ち残ろうと、そこまで大変な事態には陥らない。だったら、そういったマスターが勝ち残る方が良いだろう？

第五に、こちらのマスターは“お前達と敵対したくない”と思っている。

第六に、そちらは、こちらの・・・セイバーを見極める時間が手に入る。
最後に・・・この聖杯戦争、イレギュラーが多い・・・それを、調査する手が増える。」

・・・と思いつく限りのことを羅列したが。
さて、どうなるかな?

「・・・たしかに・・・そう悪い話じゃない・・・か。良いわ、私はその提案を受けてもいいけど・・・」

よし、勝った!

「そっちの三人置いてきぼりで話してたけれど、良いの?」

・・・と、遠坂が聴いてきた。
問題は無い、だって・・・

「ああ・・・俺は構わない、というか願ったり叶ったりだ。」
「うん・・・私も、遠坂達とは戦いたくないし・・・」
「……構いません。そうですね、たしかにミミックの言いたいことも理解できる。」

・・・な?こいつらは、自分へのメリットがわからないほど馬鹿じゃない。

「そう・・・だったら、同盟、成立・・・ってことかしら?正直、言われなかったら、こっちから声をかけていたかもね。」

と、遠坂は手を差し出しながらこちらに声をかけた。

そして、俺はその手を取りながら。

「ああ・・・これからよろしく、凛。」

これから仲間な訳だし、いつまでも家名じゃあ失礼だろう、ということで、下の名前を呼びながら笑顔で握手した・・・したんだが・・・

「・・・ッ!?」（／／／／／／）

「・・・ッ!!」

凛は顔を真っ赤にした・・・何故?

と思うよりも・・・志保が物凄い勢いでこちらを睨んでいることの方が重要だな。

・・・怖ぇ。

てなわけで、俺は握った手を、そのまま士郎に渡すことにした・・・

「ほら・・・お前らの方が先に握手すべきだろ。」

・・・逃げてないぞ。

「え・・・あ、ああ。そうね・・・これからよろしく・・・衛宮くん。」

「え、ああ・・・よろしく、遠坂。（ニコッ）」

「・・・ッ!!!!!」（／／／／／／／／／／）

・・・もしかして、遠坂って・・・人の笑うとこ見慣れてないのだろうか?

「・・・（じー）・・・」

って悩んでいる場合じゃない！志保の視線が怖い！

「あー・・・っと、悪い、忘れてたな・・・二度目になるが、これからもよろしくな？志保。」

・・・と右手を差し出しながら声をかける。

そういえば、今まで志保と握手をしていなかったな。

それで怒っていたんだろう、きっと。

「あ・・・う・・・うん・・・よろしく・・・」

・・・機嫌は直

「・・・ところで、なんで遠坂を名前で呼んだのさ。」

・・・って無いな・・・

「ああ・・・仲間を、いつまでも家名で呼ぶのは失礼だと思ったからなんだが・・・不味かったか？」

正直、不機嫌の理由がわからないんだが・・・

「あ・・・そ・・・そういうこと・・・なんだ、そっか。」

・・・なんか、ほっとしてる？

そういや、アカやサヤも、俺が女性を名前で呼ぶたびにこんなことがあったな・・・？

うーん？女性には何かあるのだろうか・・・女心はわからんな・・・

「あ!!と、ところでミミック!?さ、さっきから気になってたんだけど!!」

と、凛が焦ったような怒ったような戸惑ったような・・・ようするにテンパッタ様子で俺に声をかけてきた。・・・なんだろうか?

「ああ・・な、なんだ?それと、いいかげんクロウで良い。」

結構な剣幕なので一瞬戸惑ったが、聞き返す俺。

・・・もしかして。

「・・・じゃあそうする。・・・じゃなくて!!アンタ、さっきからハッタリって言ってるけど、どの辺がハッタリなのよ!?ステータスも、完全にバーサーカーと同じだったじゃない!?」

「『何ィ!?』」

セイバー、アーチャーが驚愕してるが・・・

仕方が無い、同盟組んだ訳だし説明するか・・・

「正確には耐久以外のステータスが、な?アレは俺の二つ目の宝具で“物真似師の意地(プライド・オブ・ミミック)”、相手の能力をコピーする能力なんだが・・・そんなに使い勝手良くないぞ?」

「ハァ!?何よ、その反則能力・・・」

「・・・その辺、少し詳しく説明するか・・・聞いた後で、もう一回その言葉言ってみな。」

――宝具：物真似師の意地（プライド・オブ・ミミック）
対人宝具・ランクＡ　レンジ・０　最大補足・１人
自分の耐久以外のステータスと姿を、他人と同じにする能力。発動中は相手の持つ固有スキルもコピーするが、その身にかかる加護はコピーできない。
ただし、相手の技術的、身体的な能力からくるモノであるならば、それが魔術、宝具であっても真似することが可能。
あくまで真似でしかないので、相手が取った行動しか真似（ロード）する事が出来ない。その範疇を越えると、範疇を越えた部分から解除される。
発動中は魔力が常に消費され続ける。

「・・・ってなわけだ。」

「つまり・・・クラス能力などの恩恵はかからないってこと？でも、十分凶悪な気が・・・」

そうとれるかも知れんが・・・

「・・・あのバーサーカー、“狂化”がかかってなかったぞ？」

・・・狂化されたら話しにならん。

「ハァ！？狂化無しであのスペック！？」

ついでに言うと、だ。

「・・・加護、だからな・・・“十二の試練”もコピー不可だ。」

「・・・そう聞くと、確かにハッタリだったってことか・・・」

そういうことだ。・・・正直、マジで潰されるかと思ったぞ・・・
・・・俺の能力は、絶・対・に、他人に勝てないように出来てる。

「・・・ってクロウ?さっき、思い切りイリヤの声で話してなかった!?」

志保、気がついたか。

「・・・あ!?そういえば確かに、なんでさ?」

「（コホン!）『これは単なる特技ですよ、シロウ。』・・・俺の特技、声帯模写だ。」

「!?私の声?」

士郎と志保の疑問に、セイバーの声で回答してみる。

――固有スキル：声帯模写・A
他人の声を完全に再現可能。

・・・俺の生前の特技が、何故か固有スキル扱いになっていた。
まあ、何がどう変わったって訳でもないんだがな。

「さっきのは、クラススキルで観察し、宝具でイリヤの姿を真似て、声をコレで別に真似ただけだ。」

そう、この辺のスキルを組み合わせて、ハッタリかけただけなのだ。

「・・・クロウって何者だったのさ・・・（汗）」

・・・志保、その反応は少し傷付くぞ?
俺は、ちょっと人よりトラブルに巻き込まれた回数の多い大学生だ。

「ただの大学生は、声帯模写なんかできないと思うぞ?（汗）」

士郎・・・

「なんて無駄な特技・・・（汗）」

お前もか、凛

「やはり、只者では無かった、ということですね。」

・・・納得するのか、セイバー。
まあいいや。

「・・・ほら、ハッタリについては理解できただろ?さあ、凛、クラス補正はかからない、しかも装備品はそのまんま、相手の宝具は論外、さらに時間制限付き、おまけに相手の“真似”しかできない、つまり相手の先手は打てない。・・・さあ、どの辺が反則だ?」

・・・こうして並べると・・・俺、ｙｏｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅ!!
ハハハ、サポートとかは出来るけどさぁ・・・
相手が動かないと何もできない・・・まさに物真似師ｗｗｗ

「・・・たしかに・・・完全に勝ち手が無いわ・・・」

ＨＡＨＡＨＡようやく納得しやがったか!!

アレ？オカシイナ？視界ガ歪ムヨ？

「クロウ・・・何も泣かなくても・・・」

志保？泣いてなんかないぞ？これはキラリと輝く心の汗って奴だ。

「そ・・・そう？なら、良いんだけどさ・・・」

で、だ。

いいかげん、本当に帰らないか？

流石に、眠いんじゃないか？志保。

「まぁ確かに・・・ってクロウ！？身体が！？」

ん？どうかしたか？

「！？ミミック！身体が霧散しています！！」

・・・？身体？

「ちょっ！？アンタ、魔力切れおこしてるんじゃ！？」

おお！？なんか粒子化してる！？ってか散ってる！？散ってるのか！？

「マジか！？なんだコレ！！ど・・・どうすりゃいい！？凛！？」

いきなりライブで命の危機！？

うおおおお！？視界が霞む！？

「志保！すぐに魔力をクロウに送りなさい！！このままじゃ消滅するわよ！！！！」

「わ、わかった！！・・・ってどうやるのさ！？」

「ラインから魔力流しなさい！！それくらいわかるでしょ！？」

「う、うん！！」

くうっ！！魔力使い過ぎたのか！？
スマン！志保・・・

「・・・！？ダメ！？魔力が通らない！？」

「そんな！？ま、まさか契約が不十分だったってこと！？」

「な！？私と同じ状況だったのですか！？ミミック！！」

・・・げ、マジか・・・
こ、こうなったら・・・！

「遠坂！どうすればラインを結べるのさ！！！」

「・・・どんな方法だって、もう・・・」

「そんな！？・・・ゴメン・・・クロウ・・・」

アレを使うしかないか・・・！
正直、まだ効果確認してないから使いたくなかったが・・・

「・・・志保、先に言っておく。お前の所為じゃない。そして・・・まだ、多分大丈夫だ。・・・“幻想の道具欄（ファンタジック・アイテム・リスト）”！！！！」

「・・・え・・・？」

シャン、という音と共に、俺の右手に緑色のガラス瓶が出現する。そして・・・

＜キュポン！！＞（瓶の蓋を開ける音）

＜ングッ！！ゴクゴクゴク！！＞（中身を一気飲みしている音）

＜シャン！！＞（瓶が“幻想の道具欄”に保存される音）

「・・・よし。何とかなったか・・・」

「ふぇ？」

薬品を一気飲みした直後、身体の霧散が収まる。続いて俺自身の確認・・・良し、魔力は全快したか。

・・・俺が一気飲みしたのは、ＦＦでおなじみの初級ＭＰ回復アイテム、「エーテル」だ、？だとＭＰ１００回復するアレ。

何故に！？とも思ったが、最初から“幻想の道具欄”に入っていたんだよな・・・まあ、助かったからよしとしておこう。

「い・・・今の、何！？アンタ何飲んだの！？アンタの魔力、全快してるじゃない！？」

「ク、クロウ！？大丈夫なの！？」

と、全員かなり驚いているな・・・俺自身もびっくりだ。

とりあえず、俺が何飲んだかの説明をしよう。志保も心配してるし。
・・・で、説明すると・・・

「「「「『・・・ハ？』」」」」

目を丸くしたよ。アーチャーまで。
・・・仕方が無いか？

「ちょ、待ちなさい！！何でそんな物が！？」

凛・・・そう言われても・・・

「むしろ、俺が知りたい。」

理由なんか知らん。

「なあ、クロウ？その・・・『エーテル』？初級のアイテムなんだろ？それでなんで全快するんだ？」

ああ・・・確かにそう思うかもしれないがな、士郎？

「・・・別に、疑問でもないぞ？」

「「なんでさ。」」
「なんでよ。」
「何故ですか？」
『何故だ？』

よくよく考えると当然かもしれないんだ。

「だって・・・コレ一回使えば、不死鳥（フェニックス）とか炎の魔人（イフリート）召喚出来るぞ？作品にもよるが。」

「何ィ！？」

狂戦士なんか目じゃないぜ。

そう考えると・・・

「幾らなんでも、俺が幻獣より格上ってことはないんじゃないか？だったら、全快してもおかしくない。作品にもよるが。」

ってことさ。

「・・・た、確かに・・・」

まあ、作品にもよるから、一概にどう、とも言えんがな。

「確かに、ゲームなんかだとそうかもしれないけど・・・マジか？」

「マジだ。作品にもよるが。」

「・・・アンタ、やっぱり反則だわ。・・・そのアイテム、少し譲ってくれないかな？なんて・・・」

・・・数があれば譲っても良かったんだが・・・

「う～ん・・・これ、数があんまり無いからな・・・」

「そうなのか？」

「ああ、あと3個しかない。」

・・・う~ん・・・作れるかな?これ。

「そう・・・あ!一つ譲ってくれないかしら!それ、再現できるかもしれないし!!」

ふむ・・・

「・・・ちゃんと、調べるってんならいいが・・・」

「・・・が?」

これだけは言わないと、不安でならない。

「それ・・・2個半もあれば、理論上ナイツ・オブ・ラウンド13人召喚するだけの魔力が得られる危険物ってことになる可能性があるから気をつけろよ?」

?仕様だとな。

「「『・・・』」」

?どうした?

「遠坂?」

「セイバー?」

それにアーチャー。

・・・あ、嫌な予感。

「「何ですってぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！？」」
『何だとぉぉぉぉおおおおおおお！！！！！！！！！？』

ぬおおっ！？やっぱり！？

「あうっ！？」
「うわっ！？」

――この後、三人が軽く暴走したため、士郎・志保と一緒に頑張って静めた。
・・・近所迷惑な連中だよな、俺達。
その後、帰宅することになったが、その際凛が「明日の昼頃行く」とか言っていた気がしたが・・・士郎、聞いてたかな？

こうなる気がしたから、黙っていたかったんだがな・・・これは、“アレ”だけは秘密にしておこう・・・あの、ネタ宝具だけは、なぁ。

――P．Sエーテルは一個持ってかれました。

“第五話／「穏やか？な日常。」”

――アンタって、やっぱ反則だわ・・・

“第五話／「穏やか？な日常。」”

――side志保

――夢

――夢を見ていた・・・

――そこには、１人の少年がいた・・・

――真っ白な病室

――真っ白なベッド

――そこに１人、何をするでもなく・・・

――ただ、窓の外を見ていた・・・

――その眼には、何も映ってはいない・・・

――突然、扉が開いた。

――そこには・・・黒い髪の・・・少女がいた

――そして・・・少女は少年に言う・・・

――“ひとりで、さみしくないのか？”

――そして・・・少年は・・・
――“　　？”
・・・え？君は・・・何を・・・
――夢が覚める・・・待って！まだ・・・

「・・・夢？今のは・・・誰の・・・？」

いったい、誰の夢だったんだろうか？私は・・・あんな光景は知らないのに・・・

ふと、窓の外を見る。
・・・朝日が眩しいや・・・ってこれは朝日じゃない！！寝坊した！？時間は・・・１１時！？
なんで！？今日は・・・私が朝食当番！？って違う！
あああああ落ち着け！こんなに寝坊するなんて・・・私は・・・昨日何を・・・

――“よろしくな？志保！”

ッ！！？
顔に熱が集中したのがわかった・・・

「・・・そうだ、私はクロウを召喚したんだっけ・・・」

思い出した・・・昨日は、ミミック・・・クロウを（何故か）召喚して、聖杯戦争に参加して・・・そうだ、士郎はセイバーを召喚したんだ・・・んで、バーサーカーが襲ってきて・・・クロウが追い払ってくれて・・・ああ、遠坂と同盟組んだんだよね・・・そして、家に帰ったきた後、部屋に戻って、そのまま眠ってしまった、と。

・・・そういえば、遠坂が言ってたような・・・サーヴァントを召喚するのに、結構魔力持っていかれているはずだ、って。

・・・それで寝坊したのか。・・・本当に魔力使ってたんだな・・・でも・・・

――“これから、頑張っていくから・・・君から、頼られるくらいにはな!!”

ッ!?

・・・顔が熱い・・・真顔で言われると、結構恥ずかしいというか・・・

あああああ!?思い出した!?私は何大学生叩いてるのさ!?それに・・・

――“クロウの・・・居場所に・・・なるからさ?”

――“・・・それじゃあ・・・プロポーズみたいだぞ・・・?”

「はぅあっ!?」

私は何を口走っているのさ!?

あれじゃたしかに告白!?

――“だったら・・・守り抜くさ・・・”

きゅう・・・

今、鏡を見たら、絶対に真っ赤だよ・・・

・・・駄目だ、考えるとどつぼにはまる・・・

「・・・頭、冷やそう。」

お風呂に行こう・・・

・・・よくよく考えたら、昨日入りそびれてるし・・・

気になるのですよ、女としては。

――――ひとしきり転がった後、お風呂に向かうことにした。

そして、お風呂に入っているのだが・・・

「あれ・・・？なんで沸いているのさ？」

はいってから気が付いた

・・・何故か風呂が沸いていた。

「・・・士郎かな？」

そういえば、顔を見ていない気がするし。

・・・顔を見ていないといえば・・・

「そういえば、セイバーやクロウは何処で寝たんだ？・・・案内も、指示もした記憶が無い・・・」

・・・後で訊いてみよう。

・・・クロウ、といえば・・・

「あの夢・・・もしかして、クロウ？」

・・・１０歳になるくらいまで、入院続きだったって言っていたし。

「・・・あの子は・・・誰なんだろう？」

・・・訊くこと、増えたかな・・・

・・・そろそろ上がろう。昼の用意もしなくてはならないし。

「・・・ん？」

お風呂場から出て、着替えていると・・・
なにか、いい匂いがしてきた・・・

「士郎かな？・・・今日は私の番なのに・・・」

・・・まあ、寝坊した手前強くは言えないけどさ・・・
とりあえず、急ごう。・・・少しくらいは手伝わなきゃ・・・

「ごめん！寝坊した。・・・士郎？手伝おうか？」

・・・と、台所にいるであろう士郎に声をかけたのだけど・・・

「悪いが、俺は士郎ではないぞ？志保。」

そこにいたのは、灰色のＹシャツにジーンズというラフな格好の上にエプロン姿のクロウだった・・・ってなんでさ？

「クロウ！？なんで・・・？」

「いや、魔力の補充のためにも食事は重要かな？とね。・・・志保も士郎も起きてこなかったし。」

という答が返ってきた。

・・・そうじゃなくて。

「いや、なんでクロウが？というか料理できるのか？」

・・・大学生、って話だけど・・・

「それなりには、な？・・・家での料理は俺がやってたし。まあ、妹を満足させるくらいには、ってところかな。」

あ、妹さんいたんだ。

・・・でも。

「そう・・・？ってそうじゃなくて、起こしてくれれば・・・」

わざわざ、クロウがやらなくってもよかったのに・・・

「戯け、疲れていたんだろ？・・・なら起こせるかっての。」

・・・気を使ってくれていたのか・・・

「う・・・ゴメン・・・」

「気にするな。ってか、このくらいやらせろ。・・・ただでさえ、戦闘ではあんまり役には立たないんだからな。」

そんなことないと思うけど・・・

「でも・・・」

「・・・戯け、人の好意は素直に受け取ること!・・・人付き合いの基本だぞ?」

・・・そうか・・・な?

「逆に、こっちが悪いことした気がしてくるぞ?あんまり遠慮されると。」

そうなのかな・・・?

・・・と、そこで・・・

＜ピンポーン＞

「・・・お客さん?」

誰かな?

「・・・やっぱり忘れてたか・・・」

?クロウ?

「何を?」

「昨日・・・というか、昨晩、凛が言ってただろ・・・『明日の、お昼頃におじゃまするから準備しておくように。』・・・って。」

軽く訊いたら、わざわざ遠坂の声で教えてくれた。
・・・って

「そ、そうだっけ?」

おぼえてないよ・・・

＜ピンポンピンポーン＞

「・・・早く出た方が良いぞ?」

「あ!そ、そうする!」

今は早く出ないと!

玄関まで走る・・・と。

「志保?起きたのか?」

士郎も走ってきた。

・・・でも。

「それはこっちの台詞。・・・急いで出よう。遠坂だ。」

今は遠坂が先決。

「え・・・マジ?」

「マジ。」

・・・やっぱり士郎も忘れてたみたいだね・・・

そして、玄関に到着。
急いで開ける士郎。

＜ドガッ！＞

「ぐはっ！？」

そして外から飛んでくる旅行カバン。士郎の顔面に命中。

「遅いっ！！さっさと出なさい！昼頃には着くって言ったでしょ！？」

怒りを隠そうともしない遠坂。
・・・ゴメン。士郎。

「・・・ゴメン遠坂。私はついさっき起きたところだったんだ・・・」

士郎は知らないけど。

「そういえば、髪も湿ってるわね・・・そっか、昨日召喚したから今日に出た、か。まあ良いわ。上がらせてもらうわよ？」

と、何か納得してくれたみたいだね。

「ああ・・・うん、ところで、そのカバンは？」

士郎が潰れてるけど・・・

「?そりゃ、ここで生活するんだから、着替えとかその他諸々だけど?」

・・・はい?

「ここで生活!?なんでさ!?」

あ、士郎が復活した。

「あのね・・・同盟組んだんだし、一緒にいるのが当然でしょ?」

と、さも当然のように言ってくれた。

「そ・・・そういうことなら・・・いいのか?」

士郎は渋々?納得したみたいだね。

「むしろ、そのほうがいいんじゃないかな?士郎。」

まあ、元々私も反対はしてないし。

「そういうこと!というわけで、私が使って良い部屋って何処?」

「あ、ああ・・・離れで良いか?鍵も掛けられるし・・・」

「それでいいわ。じゃあ案内よろしく。」

・・・あの部屋かな?案内は士郎に任せよう。

「あ、士郎？セイバーはどこにいるか知ってる？クロウがお昼用意してくれてるから、そろそろ呼ぼうと思うんだけど。」

「セイバーだったら・・・今道場にいるはず、というかさっきまで一緒にいたし。」

「・・・って、ミミ・・・クロウが料理？セイバーを食事に？なんでよ？」

ん？遠坂・・・私何か変なこと言った？

「基本的に、サーヴァントは食事必要ないはずなんだけど？」

そうなの？

あ、そういえば・・・

「なんか、魔力の補充がどうこうと・・・？」

言ってた気がするんだけど・・・

「・・・アーチャー？どういうこと？・・・そう、そういうことか。」

遠坂は、アーチャーに訊いているみたい。

・・・そして、なにか納得したのかな？

「アーチャー曰く、食事でも多少は魔力が回復するらしいわ。・・・貴方達の場合、むしろ食べさせたほうが良さそうね。」

と、いうことらしい。

だったら、なおのこと呼ばないとね・・・？

「じゃあ、セイバー呼んで来る。士郎は遠坂の案内よろしく。」

「ああ、わかった。」

・・・そうして、私は道場へ・・・

道場には、セイバーがいた。
正座をして、瞑想しているのだろうか・・・？
それは、すごく、綺麗だった。まるで、一枚の絵のような光景で。

「・・・セイバー？」

でも、声を掛けなければいけないので、声を掛ける。

「・・・シホ？何か御用ですか？」

「ああ・・・そろそろお昼だから、声を掛けに来たんだけど・・・
邪魔・・・だった？」

だとしたらゴメン。

「いえ・・・食事ですか？わかりました、行きましょう。」

意外と、あっさりと同行してくれた。

そして、居間へと向かう。

居間に着いたとき、既に士郎と遠坂が着いていた・・・先に来てい

たらしい。

「あ・・・志保？今更だけど・・・なんでクロウが料理してるんだ？」

と、着くなり士郎が声を掛けてきた。

「私達が、疲れて寝てたから・・・だって。」

「ふぅん？アイツ、料理なんてできたんだ？」

「なんでも、家ではクロウが料理してたんだって。」

「へぇ・・・」

「志保～？食器出すの手伝ってくれないか？」

と、出来たようだ。

「うん、わかった！」

そして・・・準備が出来た。

それにしても・・・？

「なぁ・・・クロウ？コレはなんだ？」

「塩の汁？・・・なんか、見たこと無い具材の使い方だけど・・・」

「アンタ、適当に具材ぶちこんだんじゃないでしょうね・・・？」

「・・・」

なんか・・・見たこと無い汁物と、鮭の・・・刺身?にご飯が並んでいる。

「凛・・・地方の郷土料理に対してなんということを言いやがるか。」

・・・郷土料理?

「三平汁とルイベ。どっちも北海道の郷土料理だ・・・宝具(リスト)の中に材料が揃っていたからな。」

へぇ・・・意外な物が出て来たな・・・

「・・・嫌なら食うな。」

な、なんか不機嫌になっちゃったよ・・・

「「「ゴ・・・ゴメンナサイ。」」」

・・・あたりまえだよね、食べる前に文句言われたんじゃ・・・

「え~っと、それじゃあ・・・」

「「「「「いただきます。」」」」」

号令とともに、全員が箸をつける・・・

＜ぱくっ＞

――口に入れた瞬間、衝撃が走った。

「っ！！！？」

――side　クロウ

まったく・・・失礼な奴だな、凛。
この俺が適当な料理を出すわけがないだろうに・・・

「っ！！！？」
「これは！？」
「う、美味い・・・」
「ま、負けたぁ・・・」

おお、なかなかの反応。

・・・ん。我ながらいい味だ。

「・・・この魚の切り身・・・この食感はいったい！？」

と、セイバーが訊いてきたので答えることに。

「ルイベ・・・アイヌ語で『溶ける食べ物』の意味がある。生の鮭をいったん冷凍し、その身を薄く切っただけ。」

「なんと!?」

「保存食だしな、元々。」

寄生虫の類を死滅させる意味があるんだ。
水分が抜けると同時に、油も抜けるので鮭自体の風味が増す。って意味もある。

「これが・・・保存食?・・・くっ・・・この味があれば・・・私達はまだ戦えた!!」

セ、セイバー?お前の人生に一体何が!?
うちひしがれたような表情で、黙々と食べ始めた・・・

「なんで・・・くぅ・・・美味しい・・・」

と、凛が落ち込んでいるが・・・
ふっ・・・どうだ参ったか!

「・・・」

志保は・・・無言になってしまった・・・なんか、真剣な表情で箸を進めている。

「お前・・・料理上手いんだな・・・?」

士郎は、そんなことを訊いてきたので、答えることに。

「・・・妹が、やたらと舌が肥えててな・・・下手なの作れなかったんだよ。」

・・・１５の時から、俺が作ることになったんだがね・・・
まあ、そこまで苦労はなかったが。

「妹さん、いたんだ・・・」

サヤ・・・どうしてるかな・・・？
アイツ・・・何故か料理あんまり作らないしな・・・俺の三倍上手かったのに。

「ミミック、おかわりを要求します。」

ずいっ、とセイバーが茶碗を突き出してきた。

「お、おう・・・」

よく食うな・・・コイツ。

・・・そして・・・

「「「「ごちそうさまでした。」」」」
「おそまつさま、と。」

・・・と、食事が終わり、後片付けをしているのだが・・・

「・・・（自信・・・あったのに・・・ボソッ）」

な、なんか志保が涙目に！？

「・・・（男に・・・負けた・・・ボソッ）」

凛は知らん。勝手に落ち込め。上には上がいるのさ。（酷

「クロウ・・・夕食は私が作るから・・・」

なんか、真っ赤なオーラを背負った志保に宣言された。

・・・気迫は感じるが・・・涙目で睨まれると・・・すごい罪悪感が・・・

「あ、ああ・・・わかった。」

そして、後片付けが終わった直後に士郎が声を掛けてきた。

「・・・あ、そうだクロウ、セイバーもなんだけど・・・」

「どうした？士郎」

「なんですか？」

「ああ・・・昨晩、二人はどうしてたんだ？部屋、用意してないし・・・」

ああ・・・そのことか。

「俺は、昨晩はセイバーと魔力の温存、補充・・・あとランサーについて語り合ったあと、霊体化の練習をしていたが？あと、家の中の確認。」

あと、アイテム類の再確認と好奇心を満たすための実験。

・・・たいしたことじゃないが。

だが・・・一つ、なくした・・・どこいったんだろ・・・アレ。

たいした物じゃあないんだけど・・・

「私は、その後夜が明けるまで家の周辺の気配に気を配ってました。」

・・・まあ、そんなことをしていた。

まさか、食事にこんな意味があったとはな・・・

「そ、そうだったのか・・・今日からはどうする?」

「どうする、とは?」

「いや、寝室とか・・・」

ああ・・・それか。

「もちろん、シロウの同室に・・・」

「と、言いたいのはわかるが、やめとけセイバー。」

健全な男子には毒だろ、絶対。

「な!?何故ですかミミック!?」

「・・・お前・・・士郎を睡眠不足で倒れさせたいのか?」

・・・コイツ、少々ズレているな。

「ど、どういう意味ですか!?」

「・・・少なくとも、隣で少女が眠っている状況で、グースカ眠れ

る男はそういないと思う。」

・・・お前、十分“美”が付くし。

「・・・シロウ!?」

「あ、ああ・・・ちゃんと、別の部屋を用意するから、同じ部屋は勘弁してくれ。」

だが、俺としては・・・

「とはいえ、だ。それではセイバーが納得しないだろ。」

「あたりまえです!!」

「そ、そんなこといったって!」

「落ち着け戯け、そこで、だ。」

「「そこで?」」

「俺が士郎の部屋で警護、セイバーは志保の部屋で警護、でどうだ?隣り合ってるし、部屋。」

そう、士郎と志保の部屋は隣り合っているし・・・

「志保だって、正直嫌だろ?俺が寝顔見てるって状況は。」

・・・マナー違反にも程がある。

「う!?い、言われてみれば・・・（恥ずかしい・・・かな・・・ボソッ）」

なんか、小声で言ったか？

・・・まあいいや。

「と、いうわけで。双方のためにも、そのほうがいいと思うのだが？これが妥協点だろ？」

・・・正直、これを断るってことはさせん。

――俺が。

「ああ・・・俺は構わない。というかそうしてくれ！」

「シロウ!?・・・くっ、わかりました・・・」

「わかった・・・私はそれで良い。」

話は決まった。

と、遠坂が・・・

「じゃあ、士郎？志保もだけど・・・魔術について、貴方達ができることを教えてもらえるかしら？知らないことには教えようがないし。」

魔術講義か・・・？

俺は・・・

・一緒に訊く。

・少し、周辺のマッピングをする。

・家のより詳しい探索。

・直感に任せ、ブラブラしてみる。

・・・なんだ?選択肢がでてきた気がする。
う~ん・・・どれも、意味はありそうなんだけど・・・
どうしよう?

・・・よし。俺は・・・

――外に出よう、マッピングは重要だ。
いざとなったら逃げ出す自信はあるしな。

「志保?少し留守にしても良いか?」

そうと決まれば許可を取ろう。

「クロウ?なんでさ?」

「ああ、少し、この周辺のマッピングでもしようとね。」

「アンタ・・・今がどんな時だかわかって言ってんの?」

「当たり前だ・・・逆に、今のうちにマッピングしておかないと、
後々困る。・・・逃走経路とか。」

「ああ・・・そういうこと・・・」

「かまわないけど・・・日が落ちるまでに戻ってきてね?」

「わかっているさ・・・じゃあ行ってくる。」

よし、着替えるか。

シャン、という音と共に、俺の服装が変わる。
黒いライダースーツ姿に。

「!?その格好は?」

と、志保が眼を丸くしていた。

「ああ、“幻想の道具欄”の中に入っていたんだ。」

どうやら、こういったモノは、簡単に装備できるようだ。

「へえ・・・でもなんでそんな格好?」

?何を言ってるんだ?

「?バイクで動くからに決まってるだろ?魔力の消費も無いみたいだし。」

「「「ハイ?」」」

凛、士郎、志保が驚いていた。

・・・あれ?

「言ってないっけ?“幻想の道具欄”には俺のバイクも入っていた

んだが・・・」

あと車も。

「「「聞いてない！」」」

「・・・わり、言い忘れてたみたいだな。」

むう、またしてもイージーミス。

「ねぇ？クロウ・・・？その・・・バイク、見せて貰って良いかな？」

志保？興味があるのか？

「別にいいぞ？ああ・・・庭で一度出すから、そこでいいか？」

「うん！」

庭に移動、外に出る瞬間、足元はライダーブーツ装備で。

「良し、出すか。」

＜シャン！＞

「「おおっ！？」」

「・・・アンタって、やっぱ反則だわ・・・」

黒光りする車体の、オフロードバイクが披露された。

・・・今回はコイツで動こうと思う。
取り回し楽だし。

「ＸＲ２３０？・・・でもマフラーが違うね・・・」
「あと、ボディの形状も少し変わっているな？」

――ほう？士郎も志保も詳しいな？

「ああ、最大トルクを最大限に上昇させ、どんな荒地だろうと走破可能にチューンナップしたんだ。ボディは、対磨耗性と強度、そして軽さを追及し、チタニウム合金製だ。」

まあ、金だけは余ってたし。

「・・・でも、あんまり速度は出ないんじゃないの？ソレ。」

凛・・・

「確かに、せいぜい１５０ｋｍ／ｈが限度だな。そこで・・・」

＜シャン！＞

「スピードに拘ったマシンも勿論もっている。こちらは４００ｋｍ／ｈまで出るようにチューンナップした。」

・・・出したことはないけどね。

「「ＨＡＹＡＢＵＳＡ！？」」

・・・正解。

「・・・アンタ、どんだけ金持ちだったの!?」

「う～ん・・・預金額１５億ってとこだったかな?」

「「「・・・は?」」」

「いや、何度もトラックに跳ね飛ばされたから・・・保険金やら慰謝料やらが・・・ねぇ?」

「「「あ～・・・」」」

あれ、一応サヤの手に渡るようにしておいたけど・・・大丈夫かな?“自称”親戚やらなんやら・・・弁護士・・・アカの母親にはそのへん頼んであるけど・・・

「じゃあ、行ってくるよ。・・・夜までには戻るから。」

＜シャン!＞

ハヤブサ改はしまってから・・・

＜シャン!＞

メットとグローブ装備して、と。

「ああ・・・いってらっしゃい。」

＜ドルルゥン!!!＞

――――そして、町にくりだしたのだが・・・

正直、あそこまで大変な目に遭うとは思わなかった・・・・

・・・結果論、出て良かったけどさ。

あくまで結果論は、な！！

“第六話／「クロウの予想外な午後。」”

――主人公って、こんな気持ちなのか？

“第六話／「クロウの予想外な午後。」”

『副題／原作ブレイク、始まります。』

――sideクロウ

町の中のマッピングのため、バイクで冬木の町を走る。

・・・“冬木”・・・知らない名前。知らない町。

少なくとも、俺の生きた日本には無い名前。

・・・ここは、どこなんだろう？

日本であることには間違いない。

・・・けれど、“俺の故郷”ではない。

――パラレル・ワールド

ＩＦ・もしも・・・そんな可能性の果ての世界？
・・・そう考えるのがしっくりくる。
・・・日付も、俺の“命日”よりも、前だったし、な。

・・・何故、俺はココニイル？

――ワカラナイ

考えるだけ、無駄だろうな・・・
・・・学校の男子連中なら、なにか考え付くかもしれないが。俺にファンタジーな知識はあんまりないし・・・（神話、伝承はそれなりだが。）

世界は無限。
一見、まったく別の世界でも繋がっていることだってある。

たとえば・・・空我とＡＧＩＴΩ・・・ＡＧＩＴΩと５５５・・・そしてＤＣＤ。

――クリスタルワールド・・・パンデモニウム・・・

途方も無い考えかもしれないけれど、俺は信じている。
世界は無数に広がっていて、それらは少しずつ繋がっている。
もしかしたら、世の“物語”は、別の世界で実際にあったことなのかもしれない・・・って。

――だとすると。

俺のいるこの世界も、もしかしたらゲームや小説・・・アニメになっていた世界だったのかもしれないな・・・

・・・まあ、俺がいる時点で、別物だろうけれど。

――――でも

もしかしたら・・・“俺”やサヤ・・・アカも、生きているのだろうか？
だとしたら・・・

ふぅ・・・我ながら、馬鹿な考えだ。

・・・と、考え込んでいたら着いた。

――――“柳洞寺”――――
（１３：３０）

ここは・・・何かしらの力が流れ込んでいるな？
まあ、だからわざわざ来たのだけど。

もし、サーヴァントがいるのなら・・・一目見て逃げる。
できれば真名を探ってから。
話が通じれば交渉だ。

・・・さて、地味に嫌な予感もするが・・・行くか。

バイクとメットを仕舞い、石段を登る。
・・・結構、段数あるな。

ふ、と周りを見る。
・・・結界？とでも言えばいいのか？
なにか、この石段を外れた所に“入りたくない”。

ふむ・・・いきなり、“アタリ”なのか？
・・・嫌な予感しかしない。
俺の幸運値（Ｅ－）的に。

再び登る。
・・・山門に着いた。

何か・・・いるのだろうか？
・・・俺がマスターなら、ここにトラップでも仕掛けるところだが・・・

警戒しつつ、山門へ・・・

・・・通れた、な？

ただのパワースポットだったのか？

まあいいや・・・少し、見学させてもら・・・

〈ザッザッ〉

・・・なんか、いた。
――具体的にはローブ姿で、箒で落ち葉掃きしている怪しい奴が。（サーヴァント）

「～♪」
〈ザッザッ〉

なんか、ご機嫌に鼻唄付きで。

・・・うん、一応声をかけてみよう。

「お疲れ様です！・・・最近、落ち葉多いですよね？」

自然に、自然に・・・っと。

「ええ♪でも、楽しんでやってますから♪」

・・・やべえ、普通に返された。

・・・よし。

「そうですか・・・ところで、お寺の方ですか？少し、見学に来たのですが・・・」

さて、どうくる？

「見学ですか？ええ・・・と、私も、居候の身でして・・・」

・・・どうしようか・・・このまま、世間話で帰っても良いけど・・・

「そうですか・・・自分も、最近この町に来たばかりで・・・居候の身なんですよ。」

無理っぽいなぁ・・・（諦

「まあ？そうなんですか？」

だったら・・・爆弾、投下！（自棄

「お互い、辛いですよね・・・サーヴァントって。」

「ええ、サーヴァ・・・っ!!!?」＜ビックゥッ!!!!＞

おお!?すごい驚きようだな・・・フードが脱げて、顔が見えた・・・涙目の。

・・・悪いことしたか?

「な、サーヴァント!?なんでここに!?アサシンはどうしたの!?」

・・・アサシン?

「アサシン?どうしたって・・・なにが?」

・・・コイツのクラスは・・・キャスターか。

何故にアサシンが出てくる?

「とぼけないで!門番よ!!・・・くっ・・・門番すら果せないなんて・・・!」

・・・共闘しているのだろうか?

・・・しかし・・・

「あ~・・・彼?の名誉のために言っておくが、何もいなかったぞ?山門。」

「な!?なんですって!?」

門って、あの山門だろう?

まあ、なにかあってもおかしくないが。

「アサシン!?どういうこと!?」

この様子だと・・・そのアサシンが門番をしているのだろうな・・・

「あ～・・・キャスターさん?とりあえず、こちらに戦闘の意思は無いぞ?・・・ただ、少し話が聞きたいな?と思って声をかけただけなんだが・・・」

「っ!?何故・・・私のクラスを!?」

・・・すこし、自己紹介でもするか・・・

「名乗り遅れたな・・・聖杯戦争第８のサーヴァント、物真似師・・・ミミックだ。」

「ミミック・・・ですって!?何・・・そのクラス・・・」

よし、掴みはＯＫ，で、ここからが本題。

「とりあえず、少し話を聞いてくれないか?・・・言いたいこと、訊きたい事がある。」

「・・・何、かしら?」

警戒されてるけど・・・しかたがないよな・・・まだ涙目だし。

「言ったように、俺はミミック・・・存在しないクラス、しかも８人目。」

「・・・ええ、それで？」

「つまりイレギュラー。・・・ここまでは良いか？」

「・・・そうね。」

・・・で、だ。

「何故、俺が出たのか？を調査しているんだ。・・・他のサーヴァント達にも何かしらの不具合が出ている、という話も聞いている。」

「っ！！？・・・何故、それを私に？」

「この聖杯戦争・・・何かおかしくないか？と思ってな・・・」

「・・・おかしい？」

ここから先は、セイバーどころか志保にも言ってないことだが・・・

「ああ・・・イレギュラーサーヴァント、本来存在しないクラス、8人目のマスター、異常の出ている英霊達、周期が早まった開催・・・ほら、異常だらけ、だ。」

だから、俺は・・・

「このまま、戦って・・・本当に聖杯が得られるのか？俺には、とてもではないが信じられない。」

むしろ・・・疑うことの方が多い。

今まで、四回の聖杯戦争が行われてきたようだが
・・・一度たりとも勝者・・・聖杯を手に入れた者がいない？
そもそも・・・何故英霊なんかを召喚しなければならない？
それに、だ・・・“万能の器”？
・・・ありえないな。

“万能”を作りたければ、自身も“万能”じゃなければ無理だ、と思うのは俺だけだろうか？

「そこで、だ・・・時期が来れば、聖杯は勝手に出てくる・・・みたいなことを監督役が言っていたらしいので・・・」

考えれば、おかしな話だな・・・

「その聖杯が出てくるまで、一時停戦しないか？とね・・・」

正直、“戦争”の意味が見出せない。

「そう・・・でも、この場で貴方を滅ぼしても構わないのよ？」

・・・いや、意味が無いな。
少なくとも、メディアには。

「そうか？・・・貴女には、聖杯に望む願いなんか無いんじゃないのか？メディア・・・さん？」

「な！？何故真名を・・・！！」

やべ、口が滑った。

「ああ、俺の特殊能力・・・クラススキルで、相手のことは大体わかる・・・貴女のマスター、とか宝具もね？」

葛木宗一郎・・・学校教師の殺人鬼・・・か。

「な！？マスターのことまで・・・・」

驚いているが、流石に高度な理性を持っているし、表層しか読めてないのだが・・・

「貴女の今の願いは、マスター・葛木宗一郎と共に在ること・・・だろ？」

結構表層に出ていたから、アッサリ読めた。

「・・・な！」（／／／）

「その願い・・・聖杯戦争、関係ないよな？生き残れれば。・・・それに、今俺を倒すとそれこそ何が起こるかわからないし・・・セイバーとアーチャーが乗り込んでくるぞ？一応協定締結してるし。」

実は、交渉ではなく通告だったりするんだよな・・・コレ。

「・・・そう、そうなの・・・勝ち目は・・・無いのね？」

「多分ね・・・で？停戦・・・受け入れてくれるか？受けてくれるなら、セイバーやアーチャーの襲来は避けられると思うが？・・・葛木も、襲わせないと約束しよう。」

「・・・受けるしか・・・なさそう、ね・・・」

よし、勝った！

「じゃあ、受けてくれるか？」

「ええ、私はマスターが無事なら、それで構わないわ・・・」

コイツ・・・いい奴なんだな・・・一生懸命な。

「ああ、アサシンは・・・」

「ああ？アサシンなら、私がマスターよ？文句は言わせないわ。」

・・・ハイ？

サーヴァントがサーヴァントのマスター！？

洒落になってないイレギュラーだな・・・

「そっか、ならば問題無い・・・か？」

「・・・ところで・・・残りのサーヴァントはどうなの？」

あ～・・・それは・・・

「バーサーカーは交渉次第・・・かな？ランサーとライダーは・・・

謎だな、遭遇してないからな・・・」

ランサーは好戦的だったそうだが・・・

「！？あのバーサーカーと交渉が可能だって言うの！？」

「正確にはマスターと、だけど・・・知っているのか?」

・・・志保達次第、だけどな。

「ええ・・・先日どうにか追い払ったのだけど・・・正直、二度と戦いたくないわ・・・」

ヘラクレスだもんな・・・

「・・・同感だ。」

――その後、少しばかし話し合った。そして決まったこと。

俺からは・・・

1・他のサーヴァントと協定を締結させられたら、連絡をいれる。

2・セイバー達を、ここに襲撃させない（キャスターが、人々に危害を加えたらこの限りではない）。

3・今度料理を教える。（頼まれた）

キャスターからは・・・

1・未知のサーヴァントが出現した場合、連絡を入れる。

2・ここが壊滅的な被害を受けるようなら、衛宮邸に逃げ込む。

3・今後、人に危害を加えない。（破った場合、協定破棄とみなす）

そして、これはお互いに・・・

“イレギュラーについては情報交換をする。”

・・・ってことで纏まった。

「じゃあ、俺はそろそろ行くぞ？マッピングの途中に立ち寄っただけだったからな。」

「そう・・・貴方がここに立ち寄ったのは、私にとっては幸運だったのかもしれないわね・・・」

「こっちは冷や汗モノだったけどな・・・サーヴァントに挟み撃ちされたら話しにならん。」

正直、死ぬかと思ったぜ・・・
・・・まあ、得る物もあったしな・・・

「そう？じゃあ・・・さようなら、私は掃除に戻るわ。」

と、キャスターは掃除に戻るようだ。

「ああ、聞き忘れていたのだけど・・・何故、アサシンは貴方を素通ししたのかしら？」

と、不意にそんなことを訊いてきた。

「ああ・・・多分・・・」

1・今は昼間。
2・俺は堂々と歩いていた。
3・バイクでココまで来た。
4・俺は、元を正せば一般人。つまり気配も一般人。
5・サーヴァントは、本来他のサーヴァントのステータスなどわからない。

6・そのアサシンが、俺を注視しなかった。
7・あまり、察知が得意な方ではなかった。
8・そして、俺がアサシンに気が付かなかった。

「・・・ってのが複合した結果なんじゃないか？」

「・・・なるほど、ね・・・確かに、私も最初普通に参拝客かと思ったものね・・・わかったわ。・・・もういいわよ。」

「ああ、それじゃあな。」

そして、（無許可で）協定を締結させることに成功した俺は、悠々と下山・・・

「まあ、まて。」

しようとしたら止められた。
・・・陣羽織の侍に。

「・・・アンタは？」

サーヴァント？

「アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎。」

・・・
・・・・・
・・・・・・・・ハ？

「はじめて見たよ・・・自分から真名言う奴。」

俺は置いといて、な。
・・・にしても佐々木小次郎、ねえ?

「まあ、隠す物でもあるまい?」

と、堂々と言い切られた。
・・・漢だ。

「いや、隠す物だって!・・・だが名乗られたら名乗り返すぞ?俺は・・・」

名乗ろうとしたら止められた。

「いや、すまんな。存外堂々とした男だったようだ・・・名乗らなくてもよい。隠す物なのだろう?」

・・・だが断る。

「答えは聞いてない。・・・物真似師のサーヴァント、定霧久郎だ。」

「強引な男よ・・・物真似師、と?」

「ああ、だから、アンタと戦っても千日手。決着は絶対につかない。
・・・どうしても死合たいなら、セイバーでも呼ぶか?ただし、キャスターに許可取っとけよ。」

・・・そんな剣気出されても、技量で戦うタイプの奴とは戦うだけ無駄だ。

割れない鏡に切りかかっても、剣同士がぶつかるだけだ。

「ふむ・・・残念だが、セイバーに期待するとしようか。・・・だが、一合願おうか。」

＜ヒュン！＞
＜シャン！＞＜ヒュン！＞
＜ガキィ！＞

・・・いきなり、首狙いの斬撃が飛んできた。
俺は、“幻想の道具欄”から「虎鉄」を取り出し、迎撃する。
――まったく同じ軌道で。

「・・・あぶねえな・・・！」

注視してて助かったぜ・・・
文句を言うも、小次郎は・・・

「ふむ、確かに決着は付かんな・・・まったく同じ軌道とは、恐れ入る。」

・・・と、しれっと返してきやがった。
だから言ってるだろ、千日手だって。

・・・“物真似師の意地”を使わなくても、元々猿真似は俺の特技だ。
それに・・・

――クラススキル：物真似・A
他人の動き、技能を真似するスキル。このランクだと、目視して

から真似するまでのタイムラグがなく、相手の技を相手の技で迎撃可能。

――固有スキル：猿真似・B（A）
他人の動きをそのまま鏡映しに真似するスキル。クラススキル：物真似との相乗効果により、タイムラグ無しで真似できるようになっている。

・・・ってことらしい。

つまり、俺の身体で再現可能ならば、“物真似師の意地”を使う必要も無いってことになる。

・・・技量で戦う相手との相性は最高で最悪だな。

――皆には言いそびれているが、武器・防具の類も多少入っていたし、対応力は半端じゃない。

「・・・わかったなら、俺は帰るぞ。」

正直付き合いきれん。

「ふむ・・・できれば、一度全力の死合いがしたかったのだが・・・仕方あるまい。」

・・・俺の所為で、戦いの機会削っちまったからな・・・
やはり、今度セイバーに頼んでみるかな？

「ああ、俺と殺りあっても正直つまらんだろ？・・・今度、やはり

セイバーでも呼んで手合わせするか？紹介してやるぞ。」

「ふむ、では一度頼んでおくかな。」

「ああ・・・つっても、正直何時になるかはわからないからな？そこまで期待するな。」

・・・アイツ、結構頭固いし。

「ああ・・・気長に待っていよう。」

よし、今度は・・・教会にでも・・・って、ん？何だ？アレ・・・？

「なあ、小次郎？・・・アレ、何だ？なんか、結界に細道が開いているんだが・・・」

今気が付いたが、何か細道のような孔がある・・・あそこは通れそうだな、って場所が。

「む？・・・あの女狐は何も言ってはおらぬが・・・？」

ふむ・・・？

キャスターが気付いていない・・・？

・・・何かあるな。

「・・・そうか？・・・少し、調べてくる。・・・戻ってこなかったらキャスターに報せろ。」

気になったので、少し見てくることにした・・・

何か、嫌～な予感もするけど・・・今回は逆に行った方がいい気がする。

「そうか？・・・せいぜい気を付けるが良い。」

・・・アイツのキャラがよくわからん。

・・・そうして、俺は細道を進む・・・・

進む

・・・進む

・・・・・進む

何も無いな・・・？

岩が在るくらいで。

「はあ・・・無駄足か？」

ふと時間を確認する。

（１４：３０）

・・・結構、時間経っているな・・・

やれやれ、とその岩によりかかって一息・・・

＜スカッ！＞

「ぬおっ！？」

・・・吐こうとしたら、すり抜けた。

危うくこける所だった・・・

「何だ・・・？隠し通路？」

岩の先には、謎の空間が広がっていた・・・

何だ？ここは・・・？

・・・行ってみる、か。

少し中に入った所で、服装をサーヴァントの武装（私服フル装備）に変更し、先に進む。

・・・内部は洞窟、といった感じだが・・・だんだんと広がってきた。

・・・ここまで広いとは・・・

「柳洞寺地下大空洞・・・ってところか？」

などと呟きつつ、奥へと進む。

・・・マナ、だっけか？が、やたらと濃い気がするな、ここ。

そして、最も広い（と思われる）空間に出た。

その中心は、盛り上がっているようだ。

・・・登ってみる、か。

その中心を目指して歩を進める。

・・・しっかし広いな・・・

サーヴァントが戦闘できそうなくらいだ。

あ、戦うってことになったら皆でここに来るのもありかな？目撃されることも無さそうだし。

・・・などと考えていたら、登り終えたようだ。

中心は、擂鉢型に窪んでいて・・・

俺は、その中心を見た。

「・・・な、なんだ・・・これ・・・？」

そこには、一見何も無かった。
以前の俺ならば、何も気が付かなかっただろう。
けれど、今なら・・・
――サーヴァントとなった今なら理解できる。

「魔術・・・回路？」

そこには、魔術回路が敷き詰められていた。
――その中心には、一人の・・・女性だったモノがある。

「まさか・・・聖杯？・・・これが・・・」

凛の説明だと・・・マキリ、アインツベルン、トオサカの始まりの御三家が作り上げたという聖杯戦争。
もしかして、これが・・・聖杯の元？

・・・いや、これは・・・

――確認の必要がある、な。

「――鑑定（ジャッジメントタイム）、開始。」

――固有スキル：鑑定士・Ａ＋

物の真価を鑑定するスキル。このランクだと発動前の宝具でも、眼に映ればその能力を把握できる。人物の鑑定には、かなりの時間を要する。

――生前、俺は確かに異常な鑑定能力があった。近所の博物館に、一度世界の秘宝展という名目で、各国の宝・・・のレプリカが展示されたことがあった。

そのさい、アカに誘われて見学に行ったことがある。

そして・・・その中の１点、とある名画を見たときのことだ。

『――なあ、クロウ？良い絵だな・・・』

『――ああ、確かに。』

『――レプリカ、であっても・・・来て良かったな・・・』

『――いや・・・？あれ・・・本物じゃねえか？そんな気がする。』

『――そんなわけあるか！レプリカ、として展示されている物だぞ！？』

『――でも・・・あれ、間違いなく百年は経過しているぞ？そんな年期の入ったレプリカってあるか？』

『――はあ？なんでそんなことが・・・』

『――そ、その少年の言っている事は本当じゃ！！・・・間違いない、本物じゃ！！』

――後で聞いたことだが、このじいさん、かなり有名な絵画の鑑定士だったらしい。

そして、その後ちょっとした騒ぎになった。

・・・なんでも、日本に送るはずだったレプリカと、保管してあった本物が入れ替わって送られてしまったんだとか。

――この後、俺（とサヤ）はこのじいさんに誘われて、鑑定士の助手をしながら大学に通っていた。

・・・将来は、歴代最高の鑑定士になれる、とか言われていたっけ・・・（サヤも）

そういや、じいさん・・・どうしたかな・・・サヤに、ちゃんと修行付けてくれているといいんだけど・・・

・・・それはともかく、そういうことらしい。

サーヴァント化により、はっきりとした所為か神秘の類も鑑定可能になったらしい。

このスキルを全力で使用し、この・・・聖杯と思わしきモノを鑑定する・・・!!

・・・ちなみに、さっきの掛け声はなんとなく?出ただけで他意はないぞ?

――

――――――30分後――――――

そして、俺は・・・全てを、理解した。

「これが・・・こんなモノが・・・聖杯・・・だと・・・・!」

――駄目だ！これは・・・あっちゃならない！！

サーヴァントという名の生贄で満たされる杯。
天の杯（ヘブンズフィール）。
聖杯の器・・・アインツベルン。

「・・・イリヤ・・・！」

器が満たされる・・・人でなくなる。
それで出来るのは・・・願望器？

「・・・ふざけるなよ・・・英雄（セイバー達）が生贄？しかもホムンクルス（イリヤ）が器？」

・・・しかも、これは・・・！！

「汚染・・・されてやがる・・・！！」

内部に、真っ黒いナニカが在る・・・いや、居る！！
それが何か、までは鑑定しきれなかったが・・・

「・・・叶える願いは、破壊のみ・・・！？」

・・・この聖杯・・・大聖杯が今、どんな情態か位は理解した・・・
コイツは既に、願いを叶えている・・・
この杯から溢れ出るのは黒い“汚れ”・・・悪意の塊。

「・・・イレギュラーの原因は・・・コイツ、か・・・？」

十分に考えられる・・・

これは、もう・・・破綻している。

・・・勝者にもたらされるモノは、呪の塊・・・

「・・・破壊は・・・出来る、のか？」

俺だけでも・・・時間は掛かるだろうが最後の宝具を使えば、破壊だけならば、可能かもしれない。
けど・・・何が起こるかがわからない。

「イリヤと・・・凛。」

二人と、相談だな・・・
マキリはわからないしな・・・

「クソッ！！」

結局、他人頼りか・・・
今は・・・帰ろう。
何も出来ない・・・

「・・・ラスボスと、序盤に遭遇してしまった主人公って・・・こんな気持ちなのか？」

・・・チクショウ。

ハァ・・・

溜息を吐きながら、空洞を脱出する。

・・・ライダースーツに服装を変更した上で。

・・・キャスターには・・・伝えていくか？

・・・いや、イリヤ達と相談した後にしよう。

アレは、下手に手を出せない。

・・・と。

「戻ってきたな？・・・何か、あったか？」

山門に着いた所で小次郎が声をかけてきた。

「ああ・・・盛大な無駄骨だったぜ。」

・・・ウソは言っていない。

「そうか・・・そんなこともあろう。気を落とすな。」

「ああ・・・じゃあ、今度こそ帰る。・・・また、な？」

――そうして、俺は山を降りた。

正直この二時間弱の間に、かなりのイベントをこなした気がする。

・・・だが、俺の予想外な昼下がりは、まだ終わっていなかった・・・

――（１５：１５）――

“第七話／「続・クロウの予想外な午後」”

――・・・・・・・・・

“第七話／「続・クロウの予想外な午後」”

――side out

＜ギンッ！ギャイン！！キン！＞

――金属同士が打ち合う甲高い音が響く。
それらは、雷光の如き速度を持って打ち合っていた――

＜キュインッ！！＞

「チイ！！」

――一際甲高い音が響き、紅い魔槍を振るう蒼い男が飛びのいて距離を取る。
対する、血の色をした魔槍を振るっていた黒い男も飛びのいていた
――

――蒼い男は、獰猛な貌で口を開いた。

「テメェ・・・猿真似も大概にしやがれ！！」

――対する、黒い男は言う。
同じような・・・獰猛な貌で――

「ハッ！だったら真似できねぇことでもやってみな！！・・・クランの猛犬の名は飾りか？」

――蒼い男の表情が変わる。

「・・・言ったな、物真似師・・・！」

空気が凍る・・・血の色に――
――対する黒い男も、表情が変わる。

「だったら・・・どうする？」

全く、同じ容貌で――
――蒼い男は、それだけで人を殺せる程の殺気を放つ。

「ならば受けてみろ――その心臓、貰い受ける――」

紅い魔槍を深く下に下げた独特の構えを取った蒼い男に対し、黒い男は――

「死棘の魔槍、か・・・良いだろう――その命血（イノチ）、削り取る――」

――血の色の魔槍を深く下げ、全く同じ構えを取った。
そして――

「“刺し穿つ”――」
「“削り取る”――」

二つの魔槍は――

「――“死棘の槍”！！！！」
「――“命血の槍”！！！！」

交差した――

――ｓｉｄｅクロウ

・・・冒頭でいきなり打ち合っているが、ここに至るまでに何があったか？・・・時間は遡る

話は、俺が柳洞寺を後にした後のことだった――

――（１５：３５）――

「カラミソッ♪カラミソッ♪」

軽く鬱な気分を吹き飛ばそうと、バイクで疾走しながら歌を歌う・・・

・・・オンドゥルってみた上で。

オンドゥル語・・・嫌いな奴は嫌いだけど・・・俺はネタとしてなら面白いと思うし。

・・・そういや王子・・・キングになって帰ってきたよな。

「テキハタライッ♪・・・って、ん？」

・・・少し、気分の転換に成功した所で、ふと気が付いた。

俺・・・何処に向かってるんだ・・・？

「たしか・・・教会に行く予定だったよな・・・？」

・・・なんか、住宅街にいた。

「俺・・・力の流れるラインを追ってきたんだが・・・？」

前に行った感じ、教会はパワースポットだったから・・・ラインを辿ってみれば辿り着く、と思っていたから特に意識しないで走ってたんだけど・・・

「・・・こっちにも、何かあるのか・・・？」

そう考えると、チェックは必要かな？

・・・柳洞寺地下にはあんなモノまであったし・・・な。

そうと決まれば行ってみよう。

・・・あっち、か。

――――遠坂邸――――

――――（１５：４０）――――

“力”を辿ってみたら、やたら広い・・・洋館に辿り着いた。

「・・・遠坂？って凛の家か。」

・・・パワースポットなのか？
帰ったら、訊いてみるか・・・

「これ以上、ここにいても意味が無い、か・・・」

・・・移動しよう。

だが、ここはすこし寄り道しよう。
・・・マッピングのために出た訳だし。

そして、ＸＲを再び走らせる。

・・・そして、道を覚えたあと、今度こそ教会へ向かう。

――教会――
――（１６：０５）――

「・・・教会、か・・・」

ここも、やはり怨念じみたナニカを感じるんだよな・・・？

「少なくとも、教会が醸し出す雰囲気ではないな、確実に。」

・・・入るのは・・・やめとくか？
ええい・・・男は度胸だ！・・・と。

「・・・キャスターさえ誤魔化した一般人モード舐めんなよ！とか言ってみる。」

・・・馬鹿やってないで行くか。

＜ギ・・・ッ＞

・・・音を立てないように扉を開けたが、やっぱり音が出た。

（人の気配は、無い・・・）

しかし・・・ナニカ・・・中に入った瞬間から、かなり嫌な空気を感じた。

（霊体化で・・・行くか？）

・・・中から・・・ナニカ、聞こえてくる・・・これは・・・？

調べる必要が、ある、な・・・

スゥ・・・と自身を空気と同化させる。

そして・・・奥へ。

・・・奥へ。

・・・・・・奥へ。

なにも・・・無い？

一応、全部見たつもりだが・・・

それにしても・・・ここの神父、酒飲んでるな・・・？

無駄足・・・？いや・・・でも・・・

“・・・テ・・・”

・・・さっきから、ナニカが聞こえるんだよな・・・

“タス・・・”

・・・やはり、人の声・・・？

“・・・テ・・・”

だとすると・・・何が言いたい？

“・・・シテ・・・”

“カ・・・テ・・・”

・・・か、して・・・貸して？何を？

“タ・・・ケテ・・・”

“・・・シテ・・・”

“カエ・・・”

“・・・スケ・・・”

・・・た、けて・・・かえ、して・・・帰して！？

（助けて、帰して・・・！？）

っ！！悲鳴だ！これは・・・！

（何処だ！？どこにいるんだ！？）

・・・こっちか！！

聞こえてくる方向へと急ぐ。
・・・よく見ないとわからないが、階段があった！

・・・降りる
“イ・・・イ・・・”
・・・・・・降りる
“カ・・・テ・・・”
・・・・・・・・・降りる！

（ここは・・・）

――――辿り着いたのは、祭壇？のような空間。

（・・・地下室、か。）

嫌な予感しかしない、が・・・

“タス・・・ケテ・・・”

（行くしか、ないな。）

声のする方向へ、進む・・・

そして・・・

“タスケテ”
“ココハドコ”
“カエシテ”
“イタイイタイイタイ”

――そこは、一つの地獄だった・・・
・・・四肢が生きながらに腐り果てた少女。
・・・顔が溶けた少女。
・・・内臓を剥き出しにした・・・性別すら解からない子供達・・・
それらが、貼り付けにされていた・・・

「なんだよ・・・これは・・・!!」

俺は、霊体化を解除し駆け寄った・・・

・・・ヒデェ・・・

「死にながら・・・生かされてる・・・!!」

彼らは、生命を吸われている・・・クソッ!!ゲームじゃねぇんだぞ・・・!!

ギリッ、と・・・奥歯が軋んだのがわかった・・・きっと、今の俺は凄まじい形相なんだろうな・・・

「・・・外道が・・・」

・・・今は、この地獄を作った外道のことはいい!!
・・・助け・・・られるのか・・・?

「“幻想の道具欄”・・・!!」

・・・一縷の望みを込め、リストからアイテムを取り出す・・・

まずは、この・・・目の前の少女だ。

シャン、という音と共に右手にアイテムが出現する。

――――ハイポーション。

ＦＦにおける中位体力回復アイテム。
数は少ないが、エーテルと同じように“ファンタジック・アイテム・リスト”の中に入っていたシロモノ。

・・・これを、飲ませる。
頼む!!効いてくれ・・・!!

「・・・んっ・・・だ、れ・・・？」

効果は、劇的だった・・・溶けてしまった顔も、腐りかけていた肌も・・・治った!!!
気が付いたのだろう、その少女は俺に声をかけてきた。

「俺は・・・」

なんて答えれば良い？
サーヴァント？
・・・今回は、完全に俺の勝手な判断で、貴重な回復薬を使っている。
なら・・・そう、だな・・・

「通りすがりの・・・幽霊、さ・・・」

これでいい、ただの幽霊。
・・・そう。

「お兄、ちゃ・・・ん・・・幽霊・・・さん?」

この子は・・・いつからここにいたのだろう?
少なくとも、生きた人間が腐る位は長くいたはずだ・・・

「ああ、そうだよ・・・」

「や、と・・・おむ、か・・・えに・・・き、て・・・くれ・・・
た・・・」

・・・違う。

「違うよ?残念かも、だけど、まだ君は死んじゃダメなんだ・・・」

そんな、悲しいこと・・・言わないでくれよ・・・

「や、だ・・・っ!!もう・・・い、たい・・・の・・・ヤ・・・」

・・・・・・・・・

「君は、まだ・・・幸せに、なってないじゃないか・・・」

「え・・・」

「だから・・・お帰り?明るいところへ・・・楽しい、場所へ・・・
」

「かえ、れ・・・る・・・の・・・・？」

「ああ！だから・・・おやすみ・・・今は・・・おやすみ・・・」

「う・・・ん・・・・・」

・・・絶対に、帰すから。

「お・・・やす、み、な・・・さ・・・・」

・・・眠った、か・・・

早く、他の子達も・・・！！

――――そうして、可能な限りの子供達を治そうとした・・・が・・・

・・・解かったことがある。

このポーション系のアイテムは、欠損部分までは治らないらしい・・・

失われた四肢、内臓を治すことはできなかった・・・

・・・それが原因で、実際に“治った”のは最初の少女と、他二名程。

・・・他の子達は、もう・・・

「・・・クソッ・・・！！」

・・・エリクサーでも、結果は同じだろう・・・なんせ、エクスポーションでも再生しないんだから、な・・・内臓は、カケラでもあれば治ったが・・・

・・・エクスポーションは使い切った、ハイポーションも後一個、ポーションは残り三個、か・・・

「ゴメン・・・俺には、君達は・・・」

・・・助けられない。

俺には・・・何ができる？

この子達に！何をしてやれる！！

“シナセテ・・・？”

「っ！？」

ふ、と・・・もう生きられない少年が、そんなことを言ってきた。

“アリガトウ”

“タスケテクレテ”

“トモダチヲオネガイ”

そう、皆は言ってきた・・・

俺は・・・

「ゴメン・・・な・・・忘れないから・・・絶対に、憶えているから！！」

――その子達を、見捨てた。

・・・三人の少年少女達を、抱えながら、この教会を出る。

そして――

シャン、という音と共に、右手に赤い杖を出現させる。
――炎の杖。
・・・振るえば、“ファイア”の効果を発生させる杖。

「――さようなら・・・！！」

それを、振るう・・・教会に向けて。

――真っ赤な焔が、教会を包む。

・・・放火だ？知るか、そんなこと。

――俺は、生まれて初めて・・・人を、殺した。

この子達は、どうしよう・・・？

燃え盛る焔を前に、意識の無い皆に服を着せながら俺は頭を悩ませた。

・・・凛に、頼んでみるか。
・・・どう考えても、魔術絡みだし・・・

――結局、人任せ、か・・・

「・・・ごめん、な。」

“アリガトウ、ヤサシイオニイチャン・・・！”

ふ、と・・・そんな声が聞こえた。
・・・そんな、気がした。

――忘れないから、絶対に。

「・・・電話、探そう。」

衛宮邸の番号は暗記してきた、凛も、今はいるはず。

・・・この子達を運ぶためにも、車を使おう。

シャン、という音と共に、一台の車が出現する。

――W221・改

俺の所有したすべてのモノ（家を除く）でもっとも金の掛かった車・

・・に、馬鹿な改造を施した車。

・・・完全防弾・完全防水・完全耐熱はやりすぎたか?例え火の中、

水の中、テロの中・・・ってな感じの馬鹿車・・・短時間なら、水

中もOKだ。

なんか、『HEY!大統領でも乗せる気か?』・・・とか言われた

んだよな。工場の人に。

・・・億単位で金掛けたのは決して無駄ではない・・・と思いたい。

・・・その車に、三人を乗せる。

乗せ終わり、運転席に行こうとした所で・・・

「まあ・・・待てよ、薬屋・・・」

・・・呼び止められた・・・サーヴァント、か。

「・・・薬屋じゃない、物真似師だ・・・ランサー。」

振り向いた俺の目に映ったのは、赤い焔を背にした獣のような眼をした蒼い服の男。
・・・この特徴は、ランサーだ。士郎たちの情報と一致した。
「そういや、そうだっけか・・・あんなものすげぇ薬を持ってて、か？」
・・・見てやがったのか。
「ああ・・・で？なんの用だ・・・」
俺は、今・・・正直機嫌が悪い。
・・・あたりまえだが。
「いや・・・人の家焼いておいてそれはねぇだろ・・・」
・・・ほおう・・・？
なるほどなるほど・・・？
「へえ・・・人の命を弄んで置いて・・・よく言ったモノだな・・・？」
・・・決定、コロス。
「・・・ソイツらのことは、俺も知らなかった。・・・オマエを追いかけて、初めて知ったんだよ。」
・・・？
「・・・だからどうした。」

・・・シラナイ・・・ダト？

「・・・オマエが言いたいことは解る、俺も正直、今のマスターがここまで外道とは、な・・・」

今、の・・・？

「・・・お前、マスターが換わっているのか？」

ふ、とした疑問をぶつけてみる。

「ああ・・・眼の前で、な・・・クソッ」

よほど忌々しい出来事だったようだな。

・・・今の状況は、令呪でも使われている、って所か。

「しかも、令呪で一度全てのサーヴァントと戦え、だとよ・・・忌々しい。」

・・・なるほど、な。

確かに、昨晩セイバーがそんなことを言っていた。

「・・・俺と、戦うのか。」

「ああ。・・・正直、今は行かせてやりてぇんだが、な・・・」

予想通りの回答だった。

・・・説得は、しない。

少なくとも、今だけは・・・

「そうかよ・・・だったら・・・」

この、怒りに・・・身を任せてみよう。

「あそこで死んでいった子供達の・・・弔い合戦だ。」

・・・ゴメン、志保・・・今だけは、約束を忘れる。

――俺は、俺のために戦う。

「・・・ああ。・・・だが、手加減はしねえぞ・・・？」

ハッ！上等！！

「戯け。・・・最初に言っておく！！俺は、今・・・最ッ高に機嫌が悪い・・・！！」

俺の口上を聞き、奴に殺気が宿る。

「奇遇だな？・・・俺もだ！！」

そして、奴が赤い槍を取り出した。

・・・なら、俺も・・・！

「――俺は物真似師・・・相手の武装を真似るのも道理だぜ・・・？」

――右手に、槍を出現させる。

血のような色をした魔槍・・・ブラッドランスを。

「・・・テメエ・・・槍で俺と張り合う気かよ。」

そう言って、奴は槍を構えた。

・・・張り合う？違う・・・

「殺り合うんだよ・・・いくぜ、ランサー！！」

「ハッ！！上等！！」

言うが早いか、奴は槍を突き出してきた。

それを、全く同じ軌道で迎撃する。

＜キンッ！！＞

――甲高い音が鳴り響いた。

「ッ！ハアッ！！」

それを見て、一瞬顔を歪めたが、すぐに怒涛の連続突きを放ってきた。

それを、同じ軌道で迎撃するが・・・

＜ギャン！！＞

＜ギン！！＞

＜キィン！！＞

＜ギギン！！＞

＜ガッ！！＞

「くっ！！」

追いつけねぇっ！！
なんて速度だ！！

・・・一瞬の均衡も、すぐに破られた。
俺の速度では、奴の速度を追いきれない・・・！！

「どうした物真似師！！もうギブアップか！！全然速度が足りねえぞ！！」

・・・！！
ザシュ、と俺の頬に浅い傷を付けたランサーがそんなことをほざきやがった。

＜ギャイン！！＞

一度、槍を振るい、無理やりぶつけて距離を取る。

「猿真似は終わりか？」

・・・最初からわかっている、俺では他のサーヴァントには勝てないってことは。

――だが！！

「・・・んな訳あるか！！・・・むしろ、これからが本番だぜ？クーフーリン！！」

――俺にだって意地がある。

「ほう・・・？今までのは手加減してたって訳か？」

ニヤニヤと、笑いながら話し掛けてきた。

・・・せいぜい笑ってな。

「いや・・・？俺は最初っからクライマックスだぜ？・・・ただ、“俺”では届かなかっただけで。」

・・・眼にモノ見せてやる。

「ああ・・・？どういう意味だ・・・？」

――思い描くは最速。

「忘れたか？俺は物真似師だぜ・・・？」

――奴に追いつける、最速。

「だから・・・どうした？テメエのステータスじゃあ、俺に追いつけねえらしいぜ？」

――それは即ち。

「確かにな・・・さて、質問だが・・・『テメエは、テメエより速いのか？』」

「っ！？今のは・・・俺の声！？」

――“最速”そのもの！！

「――――“物真似師の意地（プライド・オブ・ミミック）”!!」

「ッ!!?宝具!?」

「『さあ、一手遊んで行かないか!?』」

――――テメエに追いつけねぇのなら、テメエそのものになればいい!!

奴の姿になった俺は、奴が最初に放った突きを放つ。

「ッ!!面白ぇ!!ついてきな!!」

奴は、それを迎撃する。

――――そして

「「ハアッ!!」」

・・・まったく同じ速度、同じ軌道を持って槍で突きあう。

「「ウォオオオオオオオ!!!」」

それは、奴が速度を上げようと変わらない。

――――何度か突きあった後、奴はこちらに声を掛けてきた。

「・・・テメエ、これじゃあ決着が付かねぇんじゃねぇか・・・?」

・・・いや、正確にはこのままでは俺が負けるだけだ。

「『だったらどうする？まあ、お互い得物は違うんだ・・・それで決着が付きそうだぜ？』」

そんなことは微塵も表に出さず、挑発する。

「ハッ！！違いねぇ！！」

そうして、挑発に乗ったのか、奴は再び槍を突き出した。

・・・俺は、全く同じ軌道で槍を突き出した。

＜＜ザシュッ！！＞＞

――二つの槍は激突せず、お互いの肩を掠めた。

・・・そう、この戦術には、こんな穴がある。

相手の動きを真似るということは、狙いようによってはお互いが相打ちになる。

――だが、奴の槍・・・ゲイボルク（ゲイボル“グ”じゃないらしい・・・何故？）には、治癒を邪魔する呪がかかっている。

・・・普通ではこのままではジリ貧となるが・・・

「グハァッ！！？」

・・・奴が、血反吐を吐き出した。

何故なら、俺の槍は・・・

「『相打ち覚悟で、治癒を阻害する魔槍での攻撃・・・悪くねぇが・・・』」

「な、何・・・が・・・？」

ランサーは何がおきたのか理解できていないようだ。

「『悪いが・・・俺の槍も魔槍でな？・・・傷つけた時“必ず”相手の身体を、その全快時の十六分の一、削り取るんだ・・・つまり、その戦術は悪手だったってことだ。』」

――ブラッドランス。

チートアイテム扱いされても可笑しくない性能のシリーズ、ブラッドウェポンの一つ。

鑑定した結果、こんな性能をそのまま持っていた。

・・・まあ、宝具ではないため、バーサーカーには通じないし、神秘の護りを突破できない。

なにより、俺自身は槍なんか使えない。

――だが、今だけは・・・俺は最速の槍使い！！

「クッ・・・！！まだまだぁ！！」

「『こいよ、クーフーリン！！』」

――そうして、最速同士の戦いが再発した。

――どれほど打ち合っただろうか？

残りの魔力から計算して、時間にしておよそ七分程度打ち合ったのだろう。

その間、お互いの攻撃は、お互いに迎撃しあい、時折お互いの身体を掠める。

・・・その度に、ランサーは大ダメージを受けているようだ。

――限界だな、お互いに。

・・・俺は、そろそろ魔力切れ。

・・・奴は、体力（ＨＰ）が尽きるはずだ。

――だが、奴は止まらない。

――――――こうして、冒頭に至る。

＜ギンッ！ギャイン！！キン！＞

――金属同士が打ち合う甲高い音が響く。

相変わらず、雷光の如き速度を持って打ち合っていた――

＜キュインッ！！＞

「チイ！！」

――一際甲高い音が響き、奴が飛びのいて距離を取る。

対する、俺も飛びのいていた――

――奴は、獣のような獰猛な貌で口を開いた。

「テメェ・・・猿真似も大概にしやがれ!!」

――対する、俺はこう返す。

同じような・・・獰猛な貌で――

「『ハッ!だったら真似できねぇことでもやってみな!!・・・クランの猛犬の名は飾りか?』」

――奴の表情が変わる。

「・・・言ったな、物真似師・・・!」

空気が凍る・・・血の色に――

――俺も、それに習う。

「『だったら・・・どうする?』」

全く、同じ容貌で――

――奴は、それだけで人を殺せる程の殺気を放つ。

「ならば受けてみろ――その心臓、貰い受ける――」

奴は紅い魔槍を深く下に下げた独特の構えを取った――

「『死棘の魔槍、か・・・良いだろう――その命血(イノチ)、削り取る――』」

――俺は血の色の魔槍を深く下げ、全く同じ構えを取った。

そして――

「“刺し穿つ（ゲイ）”――」
「『“削り取る（ブラッド）”――」

二つの魔槍は――

――“死棘の槍（ボルク）”！！！！」
――“命血の槍（ランス）”！！！！』」

交差した――

＜ザンッ！！＞

結果――俺の心臓が、貫かれていた。

「・・・ヘッ・・・俺の・・・勝ちだ・・・ぜ？」

無茶苦茶な軌道・・・あれが、因果の逆転、か・・・
俺の槍は、奴の足を貫いていた。

俺は、既に元の姿に戻っている。
もう、もう一度“物真似師の意地”を使うだけの魔力も無い。
けど、な・・・？

「そいつは・・・お前の妄想さ・・・！！」

・・・本来ならば、突き刺した相手の体内を、無数の棘でズタズタにする魔槍。

だが・・・今は、万全の状態では無かった所為か、心臓を貫いただけ、で終わっている。
――人間・・・心臓が止まろうが、即死はしない！！

「な・・・にぃっ！？」

驚く奴を蹴り飛ばす。

「ぐっ！！？」

吹き飛んだ奴目掛けて、胸の槍を引き抜き、投げる。

＜ガギンッ！！＞

・・・槍は、奴の目の前に突き刺さる。

だが、そんなことを気にする暇は無い。

――このままでは、死ぬ。

そこで、俺は“幻想の道具欄”から、二つのアイテムを取り出す。

――じゅうじか（十字架）
呪い状態を回復するアイテム。
・・・ゲーム内では、その呪いがどんなモノなのか、という描写は無い。
しかし、悪魔が使った呪いだろうがゾンビが使った呪いだろうが、魔術師が使った呪いだろうが問答無用で解呪するアレだ。

――エリクサー

ＦＦ伝統の最高の回復薬。ＨＰとＭＰを完全回復するアレ。
あまりに貴重品であるが故、使いどころが難しく下手すると、ゲームクリア時に余っていることがあるアノエリクサーだ。

俺は、まず“じゅうじか”を胸に押し当てる。
・・・何か、身体が軽くなった気がする。

おそらくは呪いが解けたのだろう。

そして、すぐにエリクサーを飲む。
・・・効果は劇的、一気に完全回復!!流石エリクサー!!・・・
意外と、さわやかな味だな・・・？（エーテルは苦かった。）

・・・これで、エリクサーはあと一個、か・・・

「・・・クッ・・・テメエ・・・そりゃ反則だろ・・・」

完全回復した俺を見てか、ランサーはそんなことを言ってきた。

「・・・勝てば良い。・・・それに戦闘はもう終わりだ。」

俺は、石畳に突き立ったゲイボルクを見つめ、そう言った。

「ああ・・・そうだな・・・最高の闘いだったぜ・・・？闘いはやっぱ、こうじゃなくちゃ、な。」

・・・俺も、やっと頭が冷えた。
・・・そんな訳で・・・

「そうか・・・じゃあ、俺はいくぞ？早く、あの子達を何とかして

やらんと、な。」

・・・電話はどこだろう・・・
クルリ、と踵をかえし、車へと歩く。

「ま、待て!!止めは刺さねえのか!?」

・・・と、焦った様子で呼び止められた。

「戯け、よくよく考えたらアンタを殺すメリットよりも、デメリットの方がデケェ。」

・・・聖杯があれじゃなぁ・・・

「あん!?どういうことだ!?」

ふぅ・・・少し、話すか・・・？
いや、あの腐れ外道が何してくれやがるかわからんからな・・・
あ、そーだ!!（きゅぴ～ん!）

「・・・じゃあ、止めのかわりに一つ俺の言うことを聞け。」

・・・コイツの表層心理から、コイツの元マスターの情報も読めたし・・・

「・・・なんだよ。」

「キャスターに会ってこい。」

「・・・はあ？」

腐れ外道に嫌がらせの一つもしないと・・・ね？

「そして、“ミミックからの紹介で来た、アンタのナイフを刺してくれ。”と言えば良い。・・・ああ、門番には“今度全力でやるから”とでも言えばきっと取り次いでくれるから。」

・・・や、多分だけど。

「・・・どういうことだ・・・？」

ケケケ・・・破戒の宝具ってものがあるのさ。・・・言わないけど。

「秘密だ、んで、その後・・・アンタの元マスターのアジトに向かえ。」

「バゼットの？・・・何考えてやがる・・・？」

・・・元の鞘に収めるだけだ。・・・まあ言わないけど。

「やれば解るさ。ほら・・・コレでも飲んで行ってこい。」

そう言って、ポーションをランサーに投げ渡す。

・・・そうしたら、余計に驚いていたが・・・結局飲んだ。

「・・・すっげー回復量だな！？オイ！？」

ふっ・・・ファンタジーなめんな。

「・・・とっとと行け。俺も忙しいんだ・・・」

主にこの子達のために。

・・・そして、俺は答えも聞かずに車に乗り込み、エンジンを掛ける。

・・・だって、サイレンが聞こえてくるんだよ・・・？

そして、一気に走り出した。

「あ！？ちょ・・・こらまて！！？あああもう！！・・・行きゃ良いんだろ！？行けば！！！」

・・・後ろで、なんか言ってたかも知れないが・・・無視！！

――こうして、ランサーとの闘いを終えた訳だが・・・

・・・俺の予想外の午後は終わらなかった。

そして、ギアチェンジをしようとして気が付いたが・・・この車、電話付けてんじゃん（汗

なんで忘れてたんだ・・・？まあ、離れてから電話しよう・・・使えるよな？

――教会・全焼。

――（１６：３２）――

“第八話／「続々・クロウの予想外な午後。」”

――――あ、貴方は一体・・・？

“第八話／「続々・クロウの予想外な午後。」”

――――ｓｉｄｅクロウ

――――（１６：４１）――――

『――――はい、衛宮ですが。』

・・・あの場所から少し離れた後、衛宮邸に電話を掛けた。

・・・車載電話、何故か使えたんだよな・・・契約とか料金とか、どうなってるんだ？

「士郎か？・・・俺だ、クロウ。」

電話に出たのは士郎だった。

『――――クロウ！？何かあったのか？』

・・・何か、どころじゃない程にな。

「ああ・・・済まないんだが、凛に代わってくれないか？」

凛に代わって貰わなくちゃ、ならない。

『――――遠坂・・・？なんでさ？あ！遠坂！？』

何か、電話越しに何が起きてるのかが容易にわかるな。

・・・近くに、居たんだろ。

『――――代わったわよ。で？何の用・・・くだらないことじゃないでしょうね・・・？』

・・・と、凛が受話器を奪い取ったようだ。

――――その前に。

「その前に、確認なんだが・・・お前、確か“セカンドオーナー”とか言ってたよな？」

『――――そうだけど・・・それが？』

・・・たしか、セカンドオーナーって・・・

「地元で、一般人に魔術師が手を出す・・・魔術的に被害を出したら・・・どうなる？」

『――――・・・取り締まる手筈になっているわ。・・・ってまさか・・・』

「・・・そのまさか、だ。・・・外道が居たよ。」

・・・最悪の部類が、な。

『――ちょっ!!?アンタ、遭遇したの!?大丈夫なわけ!?』

と、かなり焦った様子の声が聞こえてきた。

「俺は、な・・・だが、その被害者を保護した。・・・今、車に乗っている、どうすればいい?」

『――そう・・・教会に運んでくれる?綺礼・・・監督役には、私から・・・』

――教会、その単語が耳に入った瞬間、俺は口を開いていた。

「教会?そんなものは無い!!・・・さっき、俺が焼いたからな。」

『――はぁ!?ちょ、焼いたぁ!!?教会を!!!?ア、アンタ何やってんのよ!!!?』

凛の怒号が聞こえてきたが・・・

俺は、間違ったことをした憶えはない。

「その、被害者・・・教会から助け出したんだよ。」

そう、事実を並べると、こうなる。

――教会に、あの子達が幽閉されていた。

――ランサーは、“人の家”と言っていた。

――“マスターが、ここまで外道とは・・・”とも。

――つまり、犯人は・・・

『――――それって・・・どういうこと・・・』

「詳しい事は、帰ってから話すが・・・結論だけ言うと、教会に住んでいた人間が犯人であり・・・ランサーのマスターだった、って訳だ。」

――――あの教会に住んでいる人間・・・監督役、ってことになる。

『――――っ!?』

凛の、息を呑む音が聞こえたが、俺は構わず話を進めた。

「・・・で?どうすれば良い・・・?教会はナシだ。」

そう言うと、凛は少し悩んだ後・・・

『――――被害者の状態は・・・?』

そう、確認してきた。

「ああ・・・三名いるが・・・皆歳は14~18ってところだな。一応外傷は治したが、内臓関係はわからん・・・酷く衰弱している。意識は・・・無い、眠っている。」

現状を教えると、少し考えた後、凛はこう言ってきた。

『――――そう、だったら・・・少し待ってくれる?今から、伝を当たって病院を確保するわ。・・・連絡は、どうすればいいかしら?』

ふむ、そうか・・・

「ああ、この電話にかけてくれ・・・多分繋がる。番号は――」

『――・・・わかったわ、確保できたら連絡する。』

「ああ、繋がらなければ、志保に頼んでみてくれ。・・・軽い合図位は送れるんじゃないか、と思う。」

ラインを通じて、な。

『――ええ・・・じゃあ気を付けて。』

「了解、連絡を待つ。」

・・・こうして、電話を切った俺は、移動を開始した。

――郊外の森へ、と・・・

――謎の？洋館――

――（17：04）――

俺は、森の中の洋館まで車を走らせた。

・・・ランサーの、元マスターの拠点だ。

俺が到着し、車を停めた時、すでに先客がいた。

「・・・遅かったな。」

その先客・・・ランサーは、俺に声を掛けてきた。

少々不機嫌か？

「さっきも言っただろ、忙しいんだ。」

だが、俺は普通に返す。

・・・実際、忙しかったし。

「・・・あんな宝具があったとはな・・・つうか、テメエ・・・何時の間に同盟なんぞ組んでいやがったんだ？」

・・・“破戒すべき全ての符”を使って貰えたようだな。

「ついさっき。・・・それよりも、だ。」

今は優先事項がある。

「ああ、で？今度は何させる気だ？」

こっちの言いたいことを一部察してか、ランサーは質問してきたが・・・

「ああ・・・少しの間、この子達を見ていてくれ・・・ああ、後電話が掛かってきたら“少し待て”と言っておけ。」

ようは、留守番なんだがね。

「ああ？まあいいが・・・このままじゃあ、俺も消えちまうぞ？」

・・・多分、そうはならないな。

「安心しろ、極上のマスターを紹介してやる。・・・やばくなったら、とりあえずキャスターのところにでも行け。」

そう言い残し、答えも聞かずに走りだす。

・・・後ろで、何か言っていた気もするが、気にしない。

俺は、洋館内部へと入っていく・・・

・・・内部は、あまり掃除はされていないようだな。
しっかし・・・立派な洋館だね・・・俺の家と比べても、まだデカイぞ?

俺は、洋館内部の奥へと進む。

「・・・さて、予想が当たっているのなら、どこかに・・・」

俺は、探し物をしつつ、奥へと・・・

・・・
・・・・・・
・・・・・・・・・見つけた、か?

「隠し扉・・・?アタリ、かな?」

隠し扉(のようなもの)を発見、内部へ侵入。

・・・放火に、不法侵入・・・ついでに詐欺。
完全に犯罪者だな、俺。

・・・などと考えていると・・・

「・・・いた、か。」

――死体を、発見した。
ワインレッドの髪をした若い女性。
確か・・・

「バゼット・・・だっけか?」

・・・俺は、気になっていたんだ。
あのランサーとの闘いの途中で、アイツの記憶の一部を垣間見た。
その中では、この洋館で、女性が腕を奪われていたが・・・

その後、奴はここに足を運んでいたが、死体すら見つかっていない。
――血痕はあったのに、な。

この洋館内部、血痕は残っていたんだ。
隠蔽にしても、お粗末過ぎる。
――考えられることとしては、“死体が動いた”ってこと。

・・・死ぬ前に、動いたんだろう。
そして、まだランサーが知らなかった隠し部屋にいたから、見つけられなかった。

「息は・・・無いな。」

やはり、死んでいる・・・
・・・いや、仮死状態?
肉体の損傷は・・・左腕がなくなっているだけか?

・・・周囲を見渡すと、部屋の入り口あたりに落ちていた。

「これなら・・・多分、いける。」

――今後、使うこともまず間違いなく無いであろうアイテムを取り出す。

赤オレンジの、鳥の尾を・・・

――フェニックスの尾

ご存知、ＦＦの死者蘇生アイテム。旅の必需品。

“幻想の道具欄”に、二個だけ入っていたシロモノ。

・・・これは、昨晩鑑定した結果、こんな判定が出た。

１・肉体の損傷が少ない（出血多量はＯＫらしい）
２・自然死（病気・寿命）じゃない
３・対象者に、生きる意志がある
４・魂が滅んでいない
５・そもそも“死”んでいない・・・つまり仮死状態。

・・・この条件さえ揃っていれば、蘇生が行える。

・・・さっきの子供達は・・・損傷が、な・・・
・・・それに、蘇生しても“死因”が消えるだけで肉体が完治するわけじゃあないからな・・・

――ちなみに・・・“羽”のほうは、条件１が軽減され、２・５が消える。
・・・１個だけ、だが。

・・・死者が蘇るのが、摂理に反する？
確かに、そうかも知れないが・・・

・・・そもそも、まだ仮死だ。

「生き返れ・・・まだ、死ぬには早い・・・！」

・・・少々マナーに反するが、彼女の胸元をさらす。
そして、胸にフェニックスの尾を突き立てる。

すると・・・光が彼女を包み込んだ。
――――優しい、光が。

「・・・ぅぅ・・・」

すると、彼女は息を吹き返した。
・・・が、失われた血液が戻ったのか、左腕から血が噴出す。

俺は、急いで左腕を拾い、切断面に押し付ける。
・・・その上で。

「ングッ！？」

・・・口に、ポーションを流し込む。

・・・これで、残りは一個になってしまったが・・・

だがやはり、効果は反則級。

腕がくっついた。

まあ・・・全快には到底見えないが。

傷痕は消えたけど・・・内部が、まだ完全じゃあないな。

・・・と・・・

「ぷはっ!!?な、何!?」

完全に、息を吹き返したようだ。

「・・・眼は覚めたか?バゼット・・・さん?」

そこに、俺は声をかける。

すると・・・

「ここは・・・?・・・!?わ、私に何をした・・・!!」

自分の姿を見た後、顔を真っ赤にして・・・

胸元を抱え込み、涙目で睨まれた。

「何をって・・・」

“胸に(フェニックスの尾を)突き立ててから(薬を)飲ませていたんだが?”

――そう詳しく答えようとした瞬間、俺の時間が加速した。

(0,01)待て、昔もこんなことがなかったか?

(0,02)公園の林の中で倒れていた女子校生に救急救命を行ったとき・・・

（０，０３）意識も、呼吸も無い状態だったから、心肺蘇生をしたんだよな。
（０，０４）んで、サヤが持ってきた除細動機を使おうとして、上着を脱がしたんだ。
（０，０５）そしたら、そのタイミングで何故かその女子は目を覚ましたんだっけ。
（０，０６）んで・・・確か・・・
（０，０７）「な、何を・・・してるんですか！？」
（０，０８）そう、言われた俺は・・・
（０，０９）「何って・・・（ＡＥＤ使うため）服を脱がそうと・・・」
（０，１０）当時１７歳の俺は、少々テンパッテそう答えたんだ。
（０，１１）「な、なんで・・・？」
（０，１２）「それは・・・（パット貼るためには）当たり前だろ？」
（０，１３）「い、いやーーーー！！！」
（０，１４）・・・その悲鳴で、俺が助けを求めた時には集まらなかった人間が。
（０，１５）・・・わらわらと、集まってきて・・・
（０，１６）・・・思い出した、性犯罪者扱いされて、襲い掛かられたんだ！！
（０，１７）五人ほどシメてから、救急車呼んできたサヤの証言で、誤解は解けたが・・・
（０，１８）うん、不用意な発言はお互いのためにならないな。

――――そして、時間の流れは元に戻る。
・・・ここまで、約０，２秒。

「・・・治療してやった人を性犯罪者にするな。」

・・・と、当り障りのない言葉を選んだ。
すると・・・

「!?そういえば・・・何故、私は生きている・・・?」

と、ようやく自身の状態に思い至ったのか、混乱しはじめたようだ。
そこに・・・

「簡単に言うなら、生き返した。・・・腕は、サービスで繋げてやった。」

と、説明してやった。

「!?い、生き返した・・・!?ま、まさか“死者蘇生”!?
あ、貴方はいったい・・・
ま、まさか・・・“魔法使い”だと言うのか!!?」

・・・まあ、間違ってはいないんだが・・・
一部訂正。

「条件付、回数制限つきの“蘇生”をそういうのならな。
ついでに言うなら俺は・・・サーヴァント、だ。
さらに言うと、アンタまだ死んでなかったし。」

魔法なんか・・・使えん。
・・・せめてケアルが使いたかった・・・
マテリアも・・・無かったし。

「サーヴァント!?・・・ならば何故、私を助けた・・・?敵のハズだ・・・」

・・・っと、落込んでいる場合ではない。
急がないと・・・

「色々と忙しいので、簡単に言うぞ？ああ、質問は受け付けん。
まず、俺はこの聖杯戦争を“破壊”するのが目的になった、つまり敵もクソもない。」

アノ、大聖杯を見た後じゃあな・・・

「破壊！？どういう意味・・・」

「質問は受け付けない。
次に、アンタを生き返らせたのは・・・一つは、腐れ外道への嫌がらせ。
もう一つは・・・アンタを、必要としているサーヴァントがいる。」

「サーヴァント・・・？一体・・・」

「と、いう訳で行くぞ。」

答えを聞かず、バゼットを無理やり背負って歩き出す。
・・・流石に、怪我人を一人で歩かせる趣味はない。

「ちょ！？は、放せ！？」

「・・・答えは聞いてない。」

・・・背中で、文句を言っているバゼットを無視し、館の外へ。
そして・・・

「・・・遅かったじゃねえかってバゼット!?」

「ラ、ランサー!?」

・・・感動?の再開かな。

「「一体どういうことだ!?」」

・・・だが、再会を喜ぶ前に俺に掴みかかってくるランサー&バゼット。

やっぱりいいコンビだよ、お前等。

だがバゼット・・・

「戯け!!!耳元で怒鳴るな!!!!

・・・まず、バゼット、さっき言った、“アンタを必要としているサーヴァント”ってのはランサー。で、ランサー?お前に言った、“極上のマスター”ってのは・・・まあ、バゼットのことだ。」

「「何・・・?」」

いつまでステレオ続ける気だ?

「と、いう訳で契約するならとっととしろ。

・・・ほら、お前が受け取れ。マスターなんだろ?」

そう言いつつ、俺はランサーにバゼットを押し付けた。

「お!?オイ!?」

「あ、ちょ!?」

・・・なんか言ってもキコエナーイ
聞く気もないし。

・・・あ、車の電話が鳴っている。

ランサー達を無視し、急いで電話に出る。

『――クロウ？私。病院の手配が出来たわ。』

電話は、凛からだった。

・・・よし。

「そうか！・・・場所は？」

『――ええ、住所は――だけど、わかる？』

新都側、か・・・

「・・・スマン、わからん。」

クソ・・・新都側のマッピングはまだなんだ・・・

『――じゃあ、ナビゲートするわ。・・・電話したまま運転って、可能？』

捕まらなければ・・・って

「・・・少し、待て。案がある。」

ふ、と視線を後ろに向けた。
そこには、契約を終えたのかこちらをじっ・・・と見ている二人組み。

「バゼット・・・手伝え。」

・・・使えるモノは、親でも使う。

「は?何を・・・」

答えは聞いてないって感じで、再び通話に戻る。

「よし、運転中は通話相手を代える。・・・ソイツに道を言ってくれ。」

『――――は?ちょ、アンタ今誰か傍にいるわけ!?』

「紆余曲折あってな。・・・ってな訳で、バゼット、助手席に。・・・運転中は頼む。」

そういって、俺は運転席に移動。
すると・・・

「ちょ、何をさせる気ですか!?」

と、イマイチ事態が掴めないのか、困ったように問いかけてきた。
・・・仕方がない。

「簡単に言うなら、俺の車の助手席でナビをしろ、と。
理由は、子供を病院に運ぶから。

ついでに、その子供は魔術師の被害に遭っている・・・教会の中で、な。
詳しくは、また後で・・・何か、まだ必要か？」

・・・正直、これ以上簡単には出来ん。
すると・・・

「んな！？わ、わかりました、協力しましょう。あ・・・ランサーはどうすれば？」

「霊体化させとけば良いだろ。・・・行くぞ、急げ。」

・・・そうして、バゼットを助手席に、ランサーは霊体化して後部座席に乗せ。
車を走らせた。

・・・電話を代わった瞬間、何か揉めたが・・・ブラッドランス出して黙らせた。
今はそれどころじゃないんだっての・・・

――――病院――――
――――（１８：３１）――――

「・・・じゃあ、お願いします。」

病院に到着した後、俺達を迎えた担当者に三人を預けた。
・・・ゴメン、後は・・・頑張ってくれ。

・・・今後、この子達はどうするのだろう？

どうやって、生きていくのだろう・・・？

俺の、“生前”だったら・・・引き取ることもできたが・・・
“今”の俺は、何も出来ない、か・・・

・・・力も何も無い、俺が“助ける”・・・？
・・・偽善なのか・・・？
確かに、結局は俺が“気に入らない”から、引きずり出しただけ。
・・・でも・・・

「――例え偽善だったとしても、貫き通せば、それは――」

――“偽”じゃあ、なくなるのだから――

・・・善人も、正義も名乗るつもりは毛頭ない。
・・・けれど、俺は自分の“意地”を貫く。

ただ・・・それだけ、だ。
プライドなんか無いけれど・・・
それが、俺の“格好付けた”生き方だから。

「・・・なにか、言いましたか？」

・・・と、バゼットに聞こえていたようだ。

「なんでもない・・・さあ、行くか・・・説明、しないと・・・だろ？」

・・・今は、良い。

さあ、帰ろう。

・・・最後に、ふ、と空を見上げた。
もう、日も落ちている・・・

「・・・ええ。」
『・・・ああ。』

――――衛宮邸――――
――――（１９：１０）――――

俺は、再び車を走らせ、衛宮邸に戻ってきた。

・・・絶対、説明が面倒くさいが・・・仕方がないか・・・

「・・・さあ、入るぞ。」

「え、ええ・・・」
『おう。』

そうして、ランサー＆バゼットを引き連れて家の中へ。

・・・ああ、勿論移動中に少しは説明してあるぞ？

そして・・・

「・・・遅かったね、クロウ。」
「で？・・・勿論説明してくれるのよね？定霧さん？」
「・・・何故、ランサーが居るのですか・・・？」
「す、すまん・・・助けようが無い・・・」

家に入った俺を待ち受けていたのは、三人の般若・・・いやむしろアスラ・・・？
と、何かを抱えて非常に困った顔をした士郎だった・・・
・・・アーチャー？姿が見えない。
逃げやがったな・・・
そ、そんなにプレッシャーを放たないで欲しいかな～（汗
ほら、ランサー組が震えてるじゃないか。
「あ、ああ・・・勿論。・・・だが・・・その前に・・・士郎？お前何持っているんだ？」
白くて丸くて・・・タマゴ？結構でかいけど・・・？
「「「聞きたいのはこっちだ！！！！」」」
・・・へ？
・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・
宥めながら、居間へと移動し、説明を開始する。
・・・あのタマゴは今は置いておこう。
・・・さて、と・・・

「どこから説明したことか、とも思うが・・・まず、俺はこの台詞を宣言しなければならない。」

いきなり・・・難易度高いな・・・

「・・・何よ。」

「セイバー、凛・・・お前達に・・・協力できなくなった。」

「「「「・・・え・・・？」」」」

この発言の後・・・一瞬の間が空き。

「な、なんですってーーーー！！！」

「ど、どういうことさ！！クロウ！！」

「どういうつもりですか！！！ミミック！！！！！！」

「なんでさ！！！？」

・・・怒号が響いた。

まあ、そうなるよな・・・

「・・・落ち着け、状況が変わったんだ。もちろん、納得できる理由もある。・・・今は、黙って聴いてくれ・・・」

だが、俺が一切の迷いを見せずに発言したことで、場の空気が締まった。

「・・・いいわ・・・話して。」

そうして、場を代表して凛が口を開いた。
だが、セイバーが怒りを隠さずに口を開く。

「なっ！？リン！！ミミックは、この場にいる我々全員を裏切ると言っているのですよ！！！」

だが、それを嗜めたのは士郎。

「待て、セイバー・・・クロウが、そんな奴じゃないってことはわかっているはずだろ？」

・・・そして、志保。

「何があったのか・・・何を見たのか・・・どうして、この場で発言したか、理由を訊いてからでも、遅くないよ。・・・それに、私はクロウを信じてるから。」

この発言を聞いて、セイバーは苦虫を噛み潰したような顔で発言した。

「・・・わかりました。ただし・・・納得が出来なかった場合・・・」

「わかっているさ、その時は、剣の錆にでもしてくれ。・・・じゃあ、始めるぞ？」

ゴクリ、と・・・だれかが唾を飲んだ音が聞こえた。
そして・・・俺は語り始めた。

「まず・・・俺は、この聖杯戦争を・・・“破壊”することに決め

た。この聖杯戦争・・・勝者を出しては、いけないんだ・・・」

――俺は、柳洞寺の地下空間で見たことを、語った・・・

――サーヴァントという名の、生贄。

――闘いの根源、大聖杯。

――全てを歪めた、汚染。

――あらゆる望みを“破壊”によって叶える、呪い。

話が進むにつれて、段々と皆の顔色が悪くなっていく。

・・・そして・・・

「――そんなバカな!?デタラメを言うな!!!」

・・・セイバーが、始めに叫びをあげた。

「・・・デタラメか?か・・・確かに、俺の言葉だけでは信用に足らないだろうな・・・だが、それでなくても・・・」

俺は、その叫びを受けながらも、話を続けた・・・

――キャスターに話した内容を。

すると・・・

「・・・言われてみれば、イレギュラーが多すぎるわ。それに・・・」

「前回の聖杯戦争の結果は、確か・・・私の、士郎の全てを焼き払った・・・」

「・・・あの、大火災・・・」

・・・と、なにやらマスター3名には心当たりがあるようだ・・・
・・・大火災？

「・・・話の途中だが・・・なんだ？その・・・大火災って・・・？」

気になったので、訊いてみることにした。
すると、志保が口を開いた。

「・・・十年前、今で言う新都で大火災が起きた。
多くの人の命を焼き払った、悪夢・・・」

続いて、士郎が・・・

「その火災で、俺と志保は名前以外の全てを無くした。
そこで・・・オヤジに拾われたんだけど・・・」

そして、凛が・・・

「あの時、アノ場所では聖杯戦争の最終決戦が行われていた。
・・・勝者の名は、衛宮　切嗣・・・士郎と、志保の養父、ね。
そして・・・監督役の話だと・・・切嗣氏は、聖杯を拒絶・・・破壊したらしいわ。」

と、続けた・・・
・・・なるほど、な・・・
・・・と、セイバーが口を開いた。

「・・・ええ、あの時、キリツグは令呪を使用し私に命じました・・

・『聖杯を破壊しろ』と。」

!?じゃあ・・・その大火災の引き金を引いたのは・・・

・・・俺が口を開く前に、凛が口を開いた。

「!?セイバー、貴女・・・二回連続で召喚されているの!?」

「ええ・・・前回は、キリツグのサーヴァントとして戦い、最後の一人まで勝ち残りました。・・・だが、キリツグは・・・!!」

・・・セイバーは、歯を軋ませながら俯いたが・・・

・・・状況が、大体わかってきた・・・

確認のため、志保と士郎に声をかけた。

「・・・士郎、志保・・・その、大火災の時・・・何か、見なかったか・・・?具体的には・・・黒い・・・泥、のような・・・」

・・・最後の確認だ、もしも、俺の想像通りなら・・・

「私は・・・黒い、太陽を見た・・・今でも、時々夢に見る・・・」

「・・・確かに、黒い、ナニカを見た・・・気がする。」

・・・俺の、仮説は正しいのかも・・・しれない、な・・・

「・・・おそらく、だが・・・状況が理解できた、と思う。

・・・俺が見てきた・・・『聖杯が、ナニカに汚染されている』・・・

・それを前提とすると・・・

・・・切嗣氏は、その聖杯の中身・・・“悪意の塊”を理由は不明だが察知・・・

故に、それを表に出さないために・・・令呪を使って、破壊させた。
その、大火災は、おそらく聖杯を破壊したことで“呪”が溢れ出したことが発生原因。
・・・辻褄が、合うな・・・」

・・・少なくとも、俺には否定の材料が・・・無い。
すると・・・凛が。

「・・・確かに、否定しきれないわ・・・」

と、肯定の言葉を出した、が・・・
・・・セイバーは、よほど認めたくないのか、尚も否定を続けた。

「な!?では・・・いや、そんなバカな!!!」

・・・もはや、ただの“懇願”だった。
しかし・・・何故?

「なあ・・・セイバー?俺にはわからないのだが・・・何故、そこまで聖杯を欲しがる?」

わからない。
“必死すぎる”

「貴方が例外なだけです!!我々英霊は、聖杯を望んでいるからこそ召喚に応じ・・・」

「・・・いや、少なくとも俺は違うぜ?」

セイバーが、言葉を言いかけたが、その途中で今まで沈黙を保って

いたランサーが口を開いた。

「俺は、“全力で戦いたい”から召喚に応じただけだ。・・・聖杯に、何か願うことがあるわけじゃねぇぞ？」

・・・そうだったな。

お前は・・・

「な!?で、ではアーチャーは・・・」

と、セイバーは霊体化しているアーチャーに質問をした。

すると、霊体化を解除し、アーチャーは答えた。

「・・・私自身には、聖杯に望む願いなどありはしない。

願いが無いではないが、それは聖杯に望むモノではない。」

・・・と、アーチャーは答えた。

・・・ってことは・・・

「先に言うが・・・バーサーカー（ヘラクレス）の願いは“マスターを護ること”、キャスター（メディア）の願いは“マスターと添い遂げること”で、アサシン（佐々木小次郎）は“強いて言うなら強者との死合い”だったな・・・んで、俺は“死なない”こと。

ライダーは知らんが・・・こうしてみると・・・聖杯、誰も欲しがってないな・・・セイバー以外。」

・・・やっぱり、争う意味が無い。

ついでに・・・

「まあ、それはいいや。まあ、現状で戦う・・・聖杯戦争を続けて

も、ちゃんとその“願い”が叶うかは・・・疑問だろう？」

・・・前例も、あるしな。

「そ、それは・・・ミミックの言い分が正しければ、ですが・・・」

「それは、アインツベルン・・・イリヤに、訊こうと思っている。」

・・・餅は餅屋、ってね。

「アイツ、そのうち“招待する”って言っていたし。・・・で？この提案・・・“しばらく現状維持”、そう悪くないと思うんだが？」

「・・・そう、ね・・・アンタが、協力できなくなったって言った意味・・・理解したわ。・・・私は納得したわ、これからどうするか・・・それは、アインツベルンとも相談が必要ね。」

俺の発言を受け、まずは凛が発言した・・・よかった、納得してくれたか。

続いて、志保。

「うん・・・そもそも、私は戦いを止めるために参加したんだし。」

そして、士郎。

「ああ、戦わないで済むならそれが一番いい。」

さらに、ここまで黙っていたバゼットが。

「・・・私は、貴方・・・ミミックに命を拾われました。・・・な

らば、恩は返します。」

・・・と発言、つまり・・・

「とりあえず・・・この場においては、“聖杯戦争の一時凍結”に同意してくれた・・・ってことでいいのか？」

「ええ・・・けど、その前に・・・もう一つ、聞かなければならないことがあるのよね・・・？」

・・・？何か・・・あったっけか？
と考え込んでいると、志保が。

「まず・・・その女性が誰か、ってことと・・・」

な、なんだ？このプレッシャーは！？
続いて、凛が・・・

「何故、教会を焼いたか、ってこと！！」

そして士郎が・・・

「この・・・タマゴの正体も、だろ？」

・・・あれ？それ・・・俺に訊くことなのか？
それはおいとくとして・・・

「先に言うがタマゴは知らんぞ・・・？あ～・・・わかった、説明するか・・・ランサー？細かいとこの証言頼むぜ？」

「あ、ああ・・・」

――こうして、俺は教会を焼いた理由などの説明を始めたが・・・

俺の、予想外の午後は、まだまだ続く。

・・・あのタマゴとか、な。

――（19：55）――

“第八話／「続々・クロウの予想外な午後。」”（後書き）

…投稿を開始した早々パソコンが壊れた…

何故だぁっ！？

そして、気が付いたら一万ヒット＆ユニーク千人を超えていた・・・

皆様！この駄文をお読みくださり、本当にありがとうございます！！

今後も精進いたします！！

“第零話／「もう一つのプロローグ・前編」”

――体は、剣で出来ている・・・

――Ｉ ａｍ ｔｈｅ ｂｏｎｅ ｏｆ ｍｙ ｓｗｏｒｄ

“第零話／「もう一つのプロローグ・前編」”

――ｓｉｄｅ士郎

――気が付けば、そこは焼け野原だった・・・

大きな火事の痕・・・

見慣れた町は、もはや戦場跡のよう・・・

――それも、長くは続きはしない

夜が明けたころ、火の勢いは収まった・・・

全てが焼けた、廃墟の中・・・原型を留めているのが、自分のみ・・・

生きているのも、自分のみ・・・

――生き延びたからには、生きなくちゃ・・・

そう思い、あても無く歩き出した・・・

希望があった訳じゃない・・・
このまま助かるなんて思えなかった・・・

何故なら、ここは地獄・・・子供が、助からないと理解するほどの・・・

あてども無く歩いて・・・そして、倒れた。

周りには・・・黒焦げになった人たち・・・
空は雲に覆われて・・・じきに雨が降るだろう・・・

（・・・苦しいなぁ）

――暗転・・・
チャンネルを切り替えるように、目の前の光景が変わる。

――夢
そう、これは夢・・・

＜――君が、士郎君だね・・・＞

俺の、始まり（エミヤシロウ）の日の・・・

――「先輩？起きてますか？」

意識が覚醒する・・・

「ん・・・おはよう、桜・・・」

身体を起こし、目の前の後輩に声をかけた。

「はい。おはようございます、先輩。
もう朝ですよ？まだ時間はありますけど…ここで眠っていては藤村先生に怒られます、それに志保さんだって声をかけてくれませんよ？」

…また、土蔵で寝てしまっていたようだ…

「う……そうだな、よく起こしに来てくれたな。…いつもすまない。」

「そんな…いいんですよ、先輩？いつも朝は早いですから。
こんなふうに起こしに来れるなんて、たまにしかありません。」

・・・？

なんか、嬉しそうだな・・・？いつもより、元気だ。

「いや？結構、桜には起こされている気がするぞ、俺。
まぁ藤ねえには文字どうり叩き起こされるから、桜の方が助かる。
…志保は起こすとなったら容赦しないからなぁ……うん、次はがんばる。」

と、寝起き頭で返答する。
自分が何言ってるかもよくわかってなかったが。

「はい、わかりました。

…でも、頑張ってもらわない方が嬉しいです、わたし。」

クスクスと、桜は笑っている。

……いいかげんに起きないと…

「――――待ってくれ、すぐ起きる。」

こういう時、外の冷たい空気はありがたい。

・・・寝ぼけた思考を、情け容赦なく叩き起こしてくれる。

――――目の前には、一つ下の後輩である間桐　桜がいた。

ここは衛宮家の土蔵、時刻は…午前六時直前か。

「……先輩？」

「ああ、目が覚めた。悪い桜…またやっちまった。

朝の支度、手伝わないといけないのに。」

「わたしはいいんですけど…先輩、昨夜も遅かったんでしょう？

なら、朝はゆっくりしていてください、朝食は、わたしが用意しますから♪」

弾むような声で、桜はそう言った。

……今朝の桜は元気だな……って

「ばか・・・そういう訳にいくかって。今起きるから、一緒にキッチンに行こう。」

宣言し、立ち上がる。

…身体が、地味に痛い。

変な風に固まった身体を急いで解し、桜に声をかける。

「…準備完了、行こうか、桜。」

「あ…いえ、その…先輩？」

すると、恥ずかしそうに俺に声をかけてきた。

「…？なんだよ、他に何かあるのか？」

「いえ、その…先輩、家に戻る前に着替えた方がいいと思います。」

・・・・・・・・・・あ

「――――――あ。」

言われて、自分の格好を再確認。

…作業中に寝ちまったから、ツナギのままだ。

作業着であるツナギは所々汚れていて、こんな格好で家に入ったら…

＜……士郎？寝坊した上にその格好って……私に対する挑戦？それとも“もう家事はやりません”って宣言？別に良いよ？何時でも衛宮家の家事は引き受けてあげるよ？エプロンとか処分しとく？＞

…志保の前で正座している自分が、容易に想像出来る。

「うわ・・・普段に増して寝惚けてるな、俺。」

「そうかもしれませんね。

ですから、朝食の支度はわたしに任せて、先輩はゆっくりしていってください。
…それに、ここを散らかしっぱなしにしても、藤村先生に怒られますよ？」

・・・確かに。

「……そうだな、それじゃ着替えていくから、桜は先に戻っていてくれ。」

「はい♪お待ちしてますね、先輩。」

桜は早足で立ち去っていった。

――さて、この場を片付けなくては。
…あと、着替え。

――この庭の隅に建てられた土蔵、一見ガラクタを押し込んでいるだけの倉庫だが…
俺――衛宮士郎にとっては、この場所こそが自分の部屋なのかもしれない。
・・・妹を泣かせてまで勝ち取った空間だし。

・・・と、片付けが済んだ。
「……よっと。」
作業着から制服に着替える。
…ここには、着替えも生活用具も揃っている。

「――さて、今日も一日精進しよう。」

ぱん、と土蔵に手を合わせ、屋敷へと向かった。

町外れにある武家屋敷、衛宮邸。
親父が死んだ後、日本に親戚がいなかったことから、なし崩し的に養子である自分…と妹の志保の物となってしまった。
正確には、土地が俺の、家が志保の、といった形・・・だったハズ。
…まあ、実際の話、俺にも志保にも、そんな管理能力はない。
相続税だとか資産税だとかは全て藤村の爺さんが受け持ってくれている。
藤村の爺さん…藤村　雷画は近所に住んでいる大地主。

オヤジ曰く“極道の親分みたいなじじい”
志保曰く“…ジジばか？”

…オヤジの方は、無論偏見だ。
雷画爺さんは“みたいな”じゃなくて、ずばり極道の親分さんなんだから。

・・・・・・・・・・・・

追求しない方針で行きたい、というか突っ込んだら負けだ。

・・・ともかく、そんな訳でこのだだっ広い屋敷に住んでいるのは俺・衛宮　士郎と妹・衛宮　志保だけだ。

オヤジ…衛宮　切嗣が死んでから、もう五年。

オヤジを超えると修練してきたけれど…現実は上手くいかない。

現状は…うん、理想が高すぎてスタート地点に届かない、といった

ところだ。

まあ、焦ったって仕方ない。
今は、出来ることからやっておこう

さしあたって――桜の手伝いだな。

そう思ってキッチンへ向かったが…

時既に遅し。
朝食はもう出来上がっていた。

しかも…

「桜、そっちのお椀を取ってくれる？」
「はい、これですね？志保さん。」

…後は食器を並べるだけで、キッチンには志保もいた。

…くっ！？ちょ、ちょっとは手伝わないと！！

「め、面目ない。せめて、食器の用意くらいは「おはよう、士郎。生憎だけど手は足りてるよ？どっちかといえば食卓でも拭いといて。」や……了解。」

言い切る前に封殺された。
ううう…志保の言葉に棘が…

「え……？あ、もう来ちゃったんですか先輩？」

桜はそう言ってくれるが…

「桜…六時十分って言ったら、既に朝ごはん食べてる時間だよ？完全に寝坊。」

俺が口を開く前に、志保にピシャリと言われる。

…俺が言おうとしてたことそのままなだけに反論不能。

――――コイツが、俺の妹・衛宮　志保。

外見は…髪は赤く、長さは…今はちょうど桜と同じ位で、多分そろそろ切る、長いのは面倒だとか…基本は肩にかかる位、で、そのあと放っておいて、適当なタイミングで切る。サラっとしているというより、ツンツンしてるイメージ。

瞳は茶…というか赤銅、髪の色、髪型と相まって睨まれるとゲームに出てくる火竜をイメージさせるな…ただ、竜は竜でも“ちびどらごん”だ、とはもっぱらの噂。

桜より背が低く、幼く見えるが俺と同い年・同学年だ。

…最近、“年上としての威厳が…”とかでバイクの免許を取った（“免許証をみせれば、年齢を信じて貰えると思った”とは本人の弁）。

…お互い、養子なので、血の繋がりは一切無い…が、遺伝子的には異常なまでに近いらしい。

その上、行動パターンが似ている（美綴談）らしい。

しかも思考も似ているらしく、こちらが言おうとしていることをさらっと当ててきたり、台詞がよく重なる。

さらに一部を除いて趣味も同じ。

そのため、“実は生き別れていたリアル双子の兄妹”説が流れている。（発信元は藤ねえらしいが…）

――密かな悩みは元々発育が遅かったのに二年ほど前からほぼストップした（現在身長１４３ｃｍ、ただ見た目は細いが身体を確り鍛えているため、バイクの運転もこなせる。）ことと、時々男言葉になってしまう（語尾が“～だ”“～ぞ”になる）ことらしい。後は６年前にプールの女子更衣室に入れてもらえなかった（男子と思われた）のがトラウマとなっている…らしい。

「朝錬のことを考えたら、そうなのかもしれませんが…先輩は十分早起きだと思いますよ？」

――と、俺を擁護してくれている、今朝俺を起こしてくれた後輩・間桐　桜

俺の親友の一人・間桐　慎二の義妹で、一つ年下。

今から三年ほど前、慎二に紹介されたのが馴れ初めで、一年半前から今朝のように家事を手伝ってくれるようになった。

…確か、俺と志保がインフルエンザで同時に倒れたときに慎二共々見舞い＆看病に来てくれたのが始まりで…ああそうだ、そのときのお礼に、って完治した後に食事に招待したときに…

――『桜、オマエ…衛宮（志保の事）か士郎かに料理習ったらどうだ？』

…って慎二が言い出したのがきっかけだった。

で、習うだけじゃ悪いから、と家事を手伝ってくれるようになった。

掃除・洗濯完璧で、本当に助かっている。

…んだけど…稀に、本当に稀に志保に対して敵意のようなモノを感じるんだが…

志保は志保で夜…風呂上りに桜を険しい目付きで睨んでいるのを目撃したことがある。

…仲、いいのか？と慎二に訊いたが…
――『ああ…わからないんだったら桜の方は気にしないほうが良いよ、士郎は。まあ、衛宮の方は…そっとしといてやれよ…桜には、一応注意しとくからさ…』
…と言われた。

…念のため、美綴にも訊いたが…
――『知るか朴念仁。』
…一刀両断にされた上…
――『志保は…その…乙女の秘密ってヤツだ。』
…と謎めいた台詞を残された。

「自分で朝食を作ろう、という人間からすれば寝坊って意味だよ桜。…まぁ、それはともかくとっととテーブル拭いてくれない？もう運んじゃうよ？」

！？うお、熟考してる場合じゃなかった！！

「わ、悪い！すぐやる。」

急いでテーブルを拭く…こ、これくらいはやらないとマジで面目が！？

――そうして一分後

テーブルに朝食が並んでいく。
鶏ささみと三つ葉のサラダ、鮭の照り焼き、ほうれん草のおひたし、大根と人参の味噌汁、おまけにとろろ汁まで完備！文句なしの献立

だ。

…ふむ？おそらく、志保は味噌汁を作ったのと、材料を切っただけ…かな？

切り方の癖で大体わかる。

まあ、それはともかく…

「「「いただきます。」」」

三人、きちんと座ってお辞儀をして、静かに食事を始める。

…まぁ、三人が三人とも、食事中は静かなので、ゆったりとした時間が流れる。

普段はもっと“喧しい”のだが（五月蝿い、ともいう）、今朝に限ってその喧しい人（その１：藤ねえ）は…

新聞紙で顔を隠しながら、俺達の様子を窺っていた。

…スパイ映画でも見たか？

ちなみに、その２：慎二は今日は何か速く学校に行く用事があったらしい。

その３：美綴は…そもそも滅多にいないから除外。

まあ、慎二も美綴も藤ねえが喧しいから迎撃しようとして、結果喧しくなるだけだしな。

「…藤村先生？ご飯時に新聞は見ないほうが…」

「……」

・・・桜の注意を無視する藤ねえ・・・怪しい。
まあいつものことか？

桜も、慣れているのかそれ以上は何も言わなかった。
・・・俺も、気にしてないが。

――――だって…

「悪い。桜、醤「――――藤ねぇ、雷じぃに頼んでお小遣い一生カット。」油…って今日は突然だな、志保…」

――――こんなふうに・・・

「な！？なななななななんでよぅ！？志保！？」
「…食事を、冒涜した罪は、重い。」

――――藤ねぇが何かやらかそうとすると…

「今度は、なにやったんですか？藤村先生。」
「私と士郎の目の前の醤油…中身がコーラ、しかも煮詰めてある。」

――――誰かに被害が出る前に、決まって志保が迎撃する。

「・・・あ、ほんとだ・・・甘いです・・・」
「え？中身は冗談だったのに…コホン！気がついた理由は、入れ物が違う。」

――――今のところ、連戦連勝。

・・・昔、藤ねえは志保に対して“スキンシップ”と称して食事中に悪戯を仕掛けた。
その時のは…確か、“ピザの裏側にビッシリとタバスコを塗っておく”だった。
…その時、志保は見事に引っかかり、ぶっ倒れた（俺は志保が先に倒れてしまったので引っかかってない）。
…その後、志保は一週間味覚が使い物にならなくなり…

「前にも…その前も…そのまた前も…何度も言ったよね？“次ぎやったら許す気は無い”って…」
「しほ！？ご、ごめんなさい！！つ、つい出来心で～！！！」

――藤ねえには、一切容赦が無くなった。

「困った先生だね？桜？（ボソッいいかげんにしろよこのクソアマァ…オレにだって我慢の限度ってモノがあるんだよ…アタマ虎刈にしてやろうか？大河だけに…ボソボソッ）」
「ひっ！？ひいいいいいいいいいい～～～～～～～～～～～～～～！！！！！！？」

――この件に関しては、志保は自重しない。

「ねぇ士郎？確か土蔵に…バリカンあったよね？あれ…使える？」
「い、いやぁ…確かバッテリーが壊れてて使えないハズ…」
「（ボソッ！チッ！使えねぇ…ボソボソッ！！）そう？じゃあいいや。（ボソッ部屋の剃刀持ってくるかボソボソッ）」

――“ちびどらごんでも竜は竜”…とはこの状態の志保を見た人間（美綴）談。
・・・まぁ、単なる演技だけどさ、これ・・・

実際、志保が本当にキレると、無口になる。
現在の状態は“対藤ねぇモード”らしい。
小声で、でもしっかり聞こえるようにいうのがポイント、らしい。

「いやぁ～～～～！？刈らないで～～～！？」
「ふぇ？刈るってなんのこと？（ボソッオレがヤるのは“狩”だぞ？ボソボソッ）」

――効果の程は…

「あわ、あわわわわ…！！（ガツガツガツガツガツ！！！！）んぐっ！！ご、ごごごごご！ご馳走様！！お、美味しかったよ！桜ちゃん！！！！さ、ささささ先に行くね！？さ、三人とも、ち、遅刻しちゃだめよー！？」

か、狩られる～～～～！？
と叫びながらだだだだだー、と走り去っていく

…まあ、見ての通りだ。
藤ねえ曰く“生存本能が訴えてくるのよー！”
美綴曰く“やっぱ、虎じゃ竜には勝てないのかしら？”
慎二曰く“ヤメテヨシテソンナメデミナイデサクラーー！？ソ、ソンナヤヴァイモノハハヤクステルンデスノゥッ！！？”
・・・最後のが意味不明だが、こんな感じだ。

「はぁ…いいかげん懲りてくれないかな…これやるの疲れるんだよ…自分の中の大事な何かがガリガリと削れて行くし…」
「あはは…」

――さっき走り去っていった人物：藤ねえ、藤村　大河。

俺のクラスの担任で、２５歳・女性。
もともとオヤジの知り合いで、俺達がこの家に来た頃からこの家に入り浸っていた人だ。
今では朝飯、晩飯を家で食べていく見事なまでの居候だが。

・・・まあ、あの明るい藤ねえがいたから、俺達は今までやってこれたのかもな・・・
志保も“女の子特有”のナニカで世話になったって言ってたし。

・・・まあ、こんな四人が衛宮家の住人、だな。
あと準レギュラーが一人とレアキャラが一人いるが…

……まぁ、オヤジが魔術師だったのを知っているのは俺と志保だけだ。

――曰く、魔術師はその正体を隠すもの。

オヤジに弟子入りした俺達も、その教えを護っている。

・・・半人前だけど、さ。

――そうこうする内に朝食も終わり、後片付け。
それも終わり、登校の準備を済ます。

そして・・・
「先輩、裏手の戸締りはしました？」
「志保？どうだった？」
「大丈夫、ちゃんと確認してきた。」

「じゃあ問題ありません。鍵、かけますね？」

がちゃり、と門に鍵をかける。

「よし、じゃあ行くか。急がないと朝錬に間に合わない。」

「はい。それじゃ少しだけ急ぎましょうか、先輩♪」

「ん、行こう。」

三人揃って歩き出す。

寄り道せず、学校へ…

まだ七時になったばかり、人気の少ない通学路を歩く。

学校へ到着、そのまま弓道場へ。

――俺、志保、桜は弓道部に在籍している。

「…ん？あれは…慎二？」

「…と遠坂だね。」

道場の入り口で、軽く話している慎二と遠坂を発見した。

「…あ、遠坂先輩行っちゃいましたね。」

…が、すぐに遠坂は校舎へ向かってしまった。

…なんだったんだろう？

「おはよ、慎二？遠坂と一緒って、随分珍しい組み合わせだね？」

「おはようございます、兄さん。」

…と、何時の間にか志保と桜は慎二に声をかけていた。

「ん…？あ、あぁ…おはよう衛宮、桜…と士郎。」

「…俺はついでか？まぁおはよう、慎二。」

それに気が付いたのか、挨拶を返してくる慎二。

――間桐　慎二

俺の親友の一人で、桜の兄。

俺とは中学の頃からの友人、今は弓道部の副主将。

ルックス良し、女子に優しく、成績優秀、スポーツもこなすいい男…とはもっぱらの評判。

…まぁ実際その通りだが、俺達の間では“シスコン（良い意味で）”“ロリコン疑惑”が追加される。

衛宮家の準レギュラーで、週に二、三回は家で食事をしていく。

「衛宮、今日は遅かったけど…何かあったのかい？」

「ん？今日は士郎が若干寝坊したのと…桜とキッチンの取り合いやってたら遅くなった。」

で…志保に気があるらしく、真面目にアタックしているが…

肝心の志保からの評価は“友人”で固定されている。

…まぁこの件に関しては後ほど。

慎二曰く、八年前に一目惚れしたらしいが…詳細不明（志保は知らないらしい）。

「士郎…妹に迷惑かけるモノじゃないぞ？」

「面目ない…が、お前もな？」

時々桜がぼやいている、“家の掃除を手伝って欲しい”って。
…まぁ、本人曰く“老人の世話が…”らしいが。

「う…ま、まあ折角来たんだ、練習してくんだろ？」

「ああ、“いつも通り”な。」

そう言って、俺達は道場へ入る。

「お？おはよう、衛宮、桜！…と志保。」

弓道場に入った俺達に声をかけてくるのは、美綴。

「ああ、おはよう綾子？…私はついでか？」
「おはようございます、美綴先輩。」

――美綴　綾子
志保の悪？友で、弓道部主将。
志保とは学校に入った頃からの友人らしい。
俺とは弓道部に入った頃からの付き合い。

竹を割ったような性格の美人で、結構気兼ね無く付き合える友人。
“美人は武道を修めていなければならない”とは本人の弁で、実際ほとんどの武道に精通している。
弓道部に入った理由は“学校にあるもので、唯一心得が無いから”だったからとか。

因みに、さっき慎二と会話していた遠坂と、志保、美綴で“学園にて敵に回してはいけない三大女子”として有名…だとか。
――遠坂は社会的に。

――志保は精神的に。
――美綴は肉体的に。
…それぞれ“クル”モノがあるとかないとか…
本人達は…知らないらしいが。

衛宮家のレアキャラ（？）で、月に一度は家で食事を取る。
志保曰く、“遠坂のライバル”らしい。

「ははは！言葉のアヤよ！気にしない気にしない！！」

「良いけどね…（どうせ目当ては士郎だろうしボソッ）」

「！？ちょ！？何言ってんのよ志保！？」（／／／／／／）

まあ、こんなふうに日ごろから志保とはじゃれているイメージがある。
…ところで志保？今何か言ったか？小声で聞こえなかったぞ？

「桜？今、志保何か言ってなかったか？」

「先輩は知らなくて良い事です♪」

桜に訊いてみたが、何か妙なプレッシャーと共に返された。
…うん、気にしないようにしよう。

「そ、そうか…おはよう美綴。
え～っと…俺は先に着替えてるからな？志保。」

…君子、危うきに近づかず。

――さっさと着替え、練習を開始することにしよう。
――…他の生徒が顔を出す前に。

……

「…はぁ…相変わらず衛宮兄妹の射は神がかってるねぇ…」

他の生徒が顔を出し始めたので、弓を片付け、下級生の朝練や、慎二の指導風景を見ている俺達に、美綴は声をかけてきた。

「「…そうか？」」

「そうよ、衛宮も志保も百発百中じゃない…間違いなく、この弓道部の真の主将・副主将は衛宮兄妹ね。
…その二人が、なんでこんなにこそこそと練習しなきゃならないのさ…」

――一年前の夏、俺はバイト中に怪我をした。
それ自体はたいした事無かったんだけど、結構な火傷が残ってしまった。
…弓道は、儀礼的な要素が強いため、俺の傷痕は結構見苦しい。
そう思って、一度は退部しようとしたが、美綴と慎二に止められ、今ではこんなふうに人がいないタイミングで練習することにしている。

「…まぁ、俺はこれで良いと思ってるし…」

――志保の方はまた別で、入学当初、志保は新聞配達のバイトをしていた（夏には辞めていたが）。
そのため、朝練に参加しない日も多く、放課後も他の生徒の頼みご

とを聞いている事が多かったため、練習に参加できないことが多かった。
…が、たまに練習に出れば百発百中。
見た目と相まって、上級生達の目に留まり、陰湿なイジメを受けた事がある。
…俺・慎二・一成・そして藤ねえによってその騒動は鎮静化したが、志保は“周りの迷惑になりそうだから”と部をやめようとした…が藤ねえ&美綴によって止められ、人の目に付かないタイミングで部に出ている、といった感じだ。

「私はほとんど幽霊部員だしね…」

「でも、アンタ達の射は、観ているだけでも得る物が多いんだ！たまに、でいいから皆の前で弓を引いてくれない？」

…で、その状況が気に入らないのか、美綴はこうやって俺達を復帰させようとしてくれているけど…

「「…そのうち、な。」」

…実際、俺達って放課後に色々やっているから参加できないことの方が多そうなんだよな…

……

まぁ、そんな事を考えているうちに朝練の時間も終わり、後片付け。
それも終わり、教室へ。

「それじゃあ、また放課後に。
先に着いたら、夕食の下ごしらえをしておきますから。」

「ああ、わかった。
じゃあまた後で。」
「ああ、桜？僕は夕食、自分でなんとかするから気にしないでくれよ？」
「わかりました、兄さん。」
その途中で桜と別れ…

「じゃ、またね衛宮？…志保も。」
「はいはい、またね。…あ、三枝さんに伝言、“了承”って伝えといて？」
「？まぁわかったよ。それじゃ。」
？なんだろう？

「志保？さっきのは…？」
「陸上部の女子更衣室の備品がいくつか怪しいんだって。で、それを見てくれるかな？って昨日聞かれててね。」
――志保は、良く女子（運動系部活動マネージャーが多い）に頼まれごとをしている。
無償で大抵のことを引き受ける志保は、結構人気がある…らしい。
付いた渾名は“冬木の小人”“ちびどらブラウニー”。

…まぁ、大概のことを引き受ける弊害もある…
去年、それを利用して、志保を襲おうとした不届き者（上級生男子）がいた。
その日たまたま学校に残っていた俺・慎二・一成がそれを発見。
んで三人で加勢…ボコボコにのしたことがある。
志保本人も身体を鍛えているので、あっという間に鎮圧できたが…

（正直、志保一人で十分だったと思う）
三日ほど、四人揃って停学になった。
その停学中に何があったかを学園が調査。
結論として…犯人は退学になり、俺達も無罪放免となった。

…それ以来、あまり遅くまで学校に残る時は、俺と一緒にするようにしている。
…まぁ、噂が広まり、女子生徒の有志がガードをし、怪しい依頼は潰しているという話だが…

「そっか、女子更衣室じゃ仕方ない。んじゃ今日は遅くなりそうか？」
「ん～…かもね、でも大丈夫だよ？今日は藤ねぇも一緒に帰るから。」
…といった感じで、ちゃんと自衛しているのでそんなに心配してない。
普段、俺や一成が学校に残っているし。

――と、教室に着いた。
すると…

「おはよう、士郎、間桐。」

いきなり、男子生徒に声をかけられた。

「「おはよう、一成。」」
「ああおはよう柳洞。」

…また志保と声が重なった…

――柳洞　一成
俺の親友でクラスメイト。
生徒会長・容姿端麗・頭脳明晰とパーフェクトな青年…という評判。
女生徒からの人気を慎二と二分しているとか。
俺達とは入学当初からの友人で、慎二とは悪友だ、とか。

「うむ、おはよう衛宮。」

…で、志保に惚れている。
一成曰く“まさに理想の女性”だとか…見た目じゃなくて中身が。
その絡みで慎二とは恋敵を自認している。

「ん？生徒会長は衛宮だけ特別かい？」
「な…違う、“衛宮”、“士郎”と繋げるとフルネームで呼んでいるように聞こえるだろう。
だから一呼吸置いただけだ。」
「まぁ、実際そうだと思うぞ？慎二。」

俺としては、慎二も一成も信頼してるし、どちらが志保と恋人になっても祝福する気なんだが…

「ふふ…うん！今日も三馬鹿トリオは元気だね？」

「「「な！？三馬鹿ぁ！？」」」

…志保からの評価は“友人”で“三馬鹿トリオ”。
…何故に俺まで…

「どうでもいいから、さっさと席に着かないと、藤ね…藤村先生が

来ちゃうよ?」

そう言って、呆然としている慎二・一成をスルーした志保はスタスタと自分の席へと歩いて行った。

「……」

「……」

「……行こうか。」

慎二と一成は、肩を叩き合って動き出した。

…俺も、席に着こう。

藤ねえ（ウチのクラスの担任）が来る前に…

――これが、俺達の日常。

ある意味で、これが最後の日常だったのかもしれない。

――この二日後、俺は、俺達は…運命に、出会った。

“第零、五話／「もう一つのプロローグ・後編」”

――その体は、きっと、剣で・・・

――■■■－－－－unlimited blade works

“第零、五話／「もう一つのプロローグ・後編」”

――side志保

――気が付けば、そこは焼け野原だった・・・

大きな火事の痕・・・

見慣れた町は、もはや戦場跡のよう・・・

――それも、長くは続きはしない

夜が明けたころ、火の勢いは収まった・・・

全てが焼けた、廃墟の中・・・原型を留めているのが、自分のみ・・・

生きているのも、自分のみ・・・

――生き延びたからには、生きなくちゃ・・・

そう思い、あても無く歩き出した・・・

希望があった訳じゃない・・・
このまま助かるなんて思えなかった・・・
何故なら、ここは地獄・・・子供が、助からないと理解するほどの・・・
あてども無く歩いて・・・そして、倒れた。
周りには・・・黒焦げになった人たち・・・
空は雲に覆われて・・・じきに雨が降るだろう・・・
（・・・苦しいなぁ）
――暗転・・・
チャンネルを切り替えるように、目の前の光景が変わる。
――夢
そう、これは夢・・・
＜――君が、志保ちゃんだね？＞
――私（エミヤシホ）の、始まりの日の…
「――んっ…ふぁ…ぁ…」
――朝、意識が覚醒する。
「今は…五時、か…」

…随分、懐かしい夢を見たな…

「んっ！よ…っ…と…」

起き上がり、布団を畳む。
そして、着替えを持ち部屋を出る。

…外は、まだ薄暗く、肌寒い。
人々が動いている気配も無い。

――早朝の冷気に体を強張らせながら、廊下を歩き道場へ。

――この衛宮邸には、道場がある。
・・・専ら、肉体的な鍛錬の場として利用しているが、そこまで広い訳じゃない。
…まぁ、自宅に道場がある時点で可笑しいと思わなくも無い。
切嗣、町の名士でもなんでもなかったハズなんだけどな…

道場で私がすること…

「ふっ…んっ…ふ…ん…」

日課であるトレーニングをこなす。
…ある程度は声を出しても、ここならば大丈夫だろうし。

「…ふぅ…今日の分、終わり！！」

柔軟、トレーニング、クールダウンを終えた私は、そのまま着替えを持ってお風呂へ向かう。

＜ザァーーー＞

シャワーを浴びながら、鏡を見る。

…我ながら、締まった体だ…

腰も、ちゃんとくびれあるし…

…腹筋も、割れてはいない…さわると、相応に硬いけど。

元々、脂肪も筋肉も付き難い体質と骨格だったから、無駄な部分は無い…貧相、とも取れる。

ただ…背は、下手したら小学生に抜かされるし、胸なんか…グスッ…で、でも一応少しは…本当に少しは膨らんでる…ちょっと、だけど…ぅぅ…

「…もうすぐ、三年になるのに…なにこのミニマムボディー…」

私は、二年ほど前から色々と育たなくなってしまった…

胸とか背とか…

「…肉体的には…大人、なんだけどな…」

ただサイズが小さいだけで、子供って訳じゃない。

一応、（サイズ以外）ちゃんと年相応のバランスだとか…

「…しかたない、か…」

まぁ、ある程度は諦めているし、気長に待つことにしたけど…もうちょっと、育ってから止まって欲しかった…唯でさえちっこかったのに…

それでも、十年近く続けているトレーニングのおかげか、バイクの運転はこなせる。

「…ん？」

ふ、と右手の甲に痛みを感じ、目をやると…

「あれ…どこかに引っ掛けたかな…」

結構、派手な痕が在り、血が滲んでいた。

「…はぁ…包帯は…居間、か…」

…手当てをするため、シャワーをから上がり、風呂場を後にする。

髪を軽く乾かし、居間に向かうと…

「…あ、おはようございます、志保さん。」

「おはよう、志保。今日は風呂長かったな？」

…桜と士郎が、キッチンに入ろう、というタイミングだった。

「あ～…うん、おはよう。

…士郎？確か包帯って救急箱に入ってたよね？」

普段だったらジャンケンだけど…

…まあいいや、今日は怪我のこともあるし料理は自重しよう。

「包帯？どうかしたのか？」

「なんか、昨日あたり何かに引っ掛けちゃってたみたいで…朝に気が付かないままシャワー浴びちゃって、血が出てきてね…そんな訳で、今日は料理任せるよ。」

…まあ、非常に残念だけど、ね…

「そうか？え～っと…ああ、入ってるハズだぞ。」

「気を付けてくださいよ？志保さん♪」

…桜、嬉しそうだね…そんなに私が調理に立てないのが嬉しいか…

「ハァ…って…ん？士郎？左手…血、出てない？」

一瞬、赤い何かが目に入ったため、目をこらしてみると、士郎の左手から血が流れていた。

「へ？左手って…うぉ！？あれ？俺もどこかに引っ掛けたかな？」

どうやら、気が付いていなかったらしく相当驚いている。

「先輩！？大丈夫ですか！？」

桜も、結構驚いた様子で士郎を心配している。

「…その様子だと、士郎も料理は無理だね…」

「そう、だな…ごめん、桜…頼んでいいかな？」

そして、士郎は桜に朝食の準備を頼んだ。

「ぇ!?あ…は、はい…わかりました。
で、でも手当は…」

「私は右手、士郎は左手…だったらなんとか私達で出来るから、大丈夫だよ?」

「ああ、流石に、そこまでやって貰っちゃ悪いよ。」

桜は、若干顔色が悪くしながら、手当をしようとしてくれたけど、このくらいはなんとでもなる。
そう言って、私達はお互いに協力しながら手当を始めた。

……

桜が朝食の準備をしている間、私はやることが無くなってしまったのでテレビを点け、ぼ〜っとしてたら…

「志保?並べるから付き合ってくれ。」

…出来たみたいだね。

――食卓に、朝食が並んだタイミングで…

「おっはよー!!今日のご飯は何かな〜?」

…登場する藤ねぇ。
相変わらず喧しい。

「見ての通り、日本の朝ごはん!だよ。」

――納豆、豆腐とわかめの味噌汁、焼き魚（アジ）、キュウリと海藻のサラダ。
…ついでに生卵もある。
「おー…ってあれ？志保も士郎もその手…どうしたの？怪我？」
「「よくわからないけど、引っ掛けたかもしれない。」」
…被った、見事に。
「気を付けなさいよー？…ってことは、今日の朝ごはんは…」
「「全部、桜に作って貰った。」」
…また…
「ごめんねー？桜ちゃん。二人ともドジで…」
「い、いえ…いいんです！お料理、好きですから！それに、怪我じゃ仕方ありませんし。」
「「いや、面目ない…」」
…もういいや。
…食べよう。
……
「…あ、そうだ三人ともなんだけどさ。

最近色々物騒じゃない？新都のガス漏れとか…昨日はなんか変質者が出たらしいのよ…」

と、朝食が終わった直後に藤ねぇが切り出した。
私達三人は、片付けながらそれを聞いていた。

「「変質者？」」

反応したのは私と桜。
…あれ？士郎…聞こえなかったのかな？

「そーなのよー…ウチの生徒が遭遇しちゃったらしくて、それで昨日は緊急職員会議！
おかげで志保のクリームシチュー食べそびれちゃったのよー！！」

あ～…それで昨日はこなかったのか…
先日の“醤油・コーラ入れ替え事件”、あの日の夕食時、リアルで食事抜きにしたら…

『もうゆるしてー！？もう絶対やらないからー！！？』

とジャンピング土下座されて、流石に許してあげて、次の日…つまり昨日は士郎も遅かったし、藤ねぇのお気に入りの特性クリームシチューを作ったんだけど…
…こなかったんだよね、藤ねぇ。

「一応、雷じぃの所の人呼んで、鍋ごと送ったはずだよ？」

…流石に不憫なので、藤村組に電話入れて運んで貰ったよ？

「うー…そりゃちょっとは食べられたけど…ほとんどお爺ちゃんに食べられちゃったのよー！！」

ら…雷じぃ…

「ってそうじゃなくて…その職員会議で、しばらく早朝と放課後六時以降の部活動禁止って決まっちゃったから、そのこと頭に入れといて？」

…ぇ？

「じゃあ、今日の朝練は？」

「ううん、まだ連絡前だから今日は良いの。
けど、放課後はダメだから気を付けてねー？
じゃ、先行ってるねー！遅刻したら怒るよー？
あ、皆から伝言！“志保ちゃ～ん！！偶にはウチにご飯作りに来てくれー！！”だってさ！！あとお鍋、玄関に置いてあるからー！！
それと士郎？昨日はご苦労様―！」

だだだだー、と言うこと言って走り去ってしまった…

「ふ、藤村組…志保さんなら乗っ取れるんじゃないですか…？」

…桜って、やっぱりちょっとズレてる…
それはともかく、変質者、か…

「大丈夫だったのかな…その生徒…」

藤ねぇはあんまり深刻そうじゃなかったから…大丈夫かな？

「大丈夫、ちゃんと家に送ったし。」

・・・？

士郎がなんで知ってるの？

「先輩？昨日先輩の帰りが遅かったのと何か関係があるんですか？」

「あ、ああ…昨日、学校から帰る途中に陸上部の三人が襲い掛かられてて…」

「三枝さん達！？」

「ああ…助けた後家に送ってたんだよ。」

…なるほど、ね…それで遅かった訳か…

…に、しても…

「変質者って…何だったの？」

ちょっと気になるよね。

士郎が撃退できたみたいだけど…

「…覆面付けた…露出狂…」

…ぅわ…

「…しかも逃げられたし…」

「「…」」

別の意味で、最悪…

「…先輩方、大丈夫でしょうか…」
「…今度、何か奢ってあげよう…」
「…もうちょっと速く通りかかっていれば…」

……

なんか、気分が重くなった…

「学校、行こうか…あ、桜?帰り、送ろうか?今日は…間桐の内でご飯作るんじゃなかったっけ?」
「はい、そうですね…お願いしていいですか?」
「…行けるようなら、俺も行くよ…最悪、慎二に頼む。」

そして、私達は無言で家を出た。

…に、しても…朝から気が滅入るなー…

終始無言で登校したが…
学校に着くと、空気が…なんかべた付く感じがした…

…はぁ…どんだけ気が滅入ってるのさ…

そのまま、弓道場へと歩いた。
…弓道場に着くと、綾子が道場の前に立っていた。

「…あれ?美綴、朝練はやんないのか?」

と、綾子に士郎が声をかけた。

「ん？ああ、衛宮！…いや、藤村先生から連絡があってね、朝のうちに部員に連絡回したんだよ。
…そうしたら、“じゃあ、行きません”って感じで、皆来ないんだって。
…間桐のヤツは何か忙しいらしいし…で、時間の問題で連絡できなかった衛宮達はどうするのかな？と思ってね…」

…あれ？微妙に回答がずれてるな…

「で？綾子はどうしたのさ？練習してればよかったのに…」

「う…まぁその通りなんだけどね…昨日左手捻っちゃって…
って衛宮！？左手どうしたのよ？」

そう言う綾子の左手は、包帯で覆われていた。
…なるほど、それで練習できなかったんだ…

それにしても…目の前で話している私より先に士郎の方に気が付くなんて…

――乙女だねぇ…
男性に興味が無い、という噂すら流れている女傑：美綴　綾子。
…実は、既に好きな人がいるから、反応が鈍いだけなんだよね。
その相手、というのが…

「ああ…これか？なんか気が付かないうちに引っ掛けてたみたいで
…まぁ別に痛みは無いし、たいした事ないぞ？」

…この朴念仁：衛宮　士郎だ。
何で好きになったか？

…遅くまで学校に残って、黙々とストーブを直している姿を偶然見てから、ずーっと目で追ってて…気が付いたら、だとか。
…まぁ、本当は別の理由があるらしいが…流石に、そんなことは知らないよ？

「そうなの？気をつけなよ…本当に。
あれ…志保も怪我してるの？…出て来た面子がこの調子じゃあ本格的に朝練無しにした方がいいかな…」

「そうですね…私はそれで構いません。」

…はぁ…士郎はそんなに競争率が高い訳じゃなかったから、今の今まで桜と綾子の一騎打ちみたいな状況だったんだけど…

「そっか…じゃあ、俺は生徒会に顔出してくるよ。
じゃあ、また後で。」

…今朝の話だと…
厄介なことになりそう…

「あ…いっちゃいました…」

「で？桜…アイツ、本当に何でもないんだな？」

「え？ああ、はい…」

「ならいいんだけど…」

…一応、言っておいてあげようかな…
そう思って、二人の肩を叩く。

「ん？」
「何ですか？志保さん。」
「…多分…競争率、高くなったから。
…まぁ…頑張れ…私は、永世中立だから…」
「「…へ？」」
呆然とする二人の肩をポンと叩き、そのまま教室へと向かった。
ちょ、ちょっと…
とか聞こえてくるけど意図的にスルー。
…仕方ないじゃん…私は、人を“好き”になったことなんかないし…
アドバイスもへったくれもないしね…
恋愛は…わかんないや…
教室に着くなり、私は机に突っ伏した。
…机に突っ伏してしばらくしたら、声をかけられた。
「あの…衛宮さん？」
「お、おい由紀っち…寝てんの起こしちゃ流石に悪いって…」
…やっぱり、来た、か…
「起きてるよ…どうしたものかと頭抱えてただけだから。
…予想は付くけど、何の用？三枝さん、蒔寺さん、氷室さん？」

私は、起き上がりながら返事をする。
…うん、やっぱり三人いた。

「む、やはり起きていたか衛宮。
まぁ予想は付いているのなら話は早いが…」
「その…昨日、衛宮君に助けて貰っちゃって…その…」
「後になって落ち着いたら、アイツに礼言ってなかったからさ…その…」
「まあ、蒔の字の場合、それに加えて衛宮兄を“ばかスパナ”などと呼んでいた前科があって礼を言い難かったらしくてな…このように三人で来た訳だ…弓道部は休みみたいだったが、兄はいないのか？」

…予想通りか…
たまにこういうことがあるからな…士郎。

――私の（義？）兄：衛宮　士郎。
“極度のお人よし”“便利屋”という評価を受ける通称“ブラウニー”。
友人達の評価は“一家に一台・衛宮が欲しい”…私達は洗濯機か！？
最近の悩みは自身の身長。“せめて一成位は欲しい”らしい。
士郎・慎二・一成の三人が揃うと大概出来ないことが無い、という噂。
頼めば大概の事を引き受けるため、結構“利用”しようとする連中がいる…が、本人が気にしていないためごく普通に引き受ける。
…そのため、女生徒からの評価は大体“便利屋”か、さっき出て来た“ばかスパナ”、
人気の慎二や一成の“引き立て役”らしい。
…ただ、結構“紳士”なため、実は隠れファンがいるとかいないと

か…

桜曰く“先輩の良さがわからないなんて、女として終わってます”

…そこまでかなぁ？

まぁ実の所、士郎と“まともに”会話した女子からの人気は高いのは確かで、ときたまこんなふうに助けた相手が教室までお礼を言いに来たりお弁当を作ってきたり（…後者の場合、士郎自作のお弁当の出来に撃沈するけど…それのフォローが私の役目だったり…）することがある。

…結構な高確率で、士郎への感謝が私経由で伝えられる。その理由はさっき氷室さんが言ったのが大半。…でも…

「本人、別に気にしてないから、そういうのは本人にどうぞ。でも…むしろ、“もっと速く通りかかっていれば…”とか言ってますまなそうにしてたよ？」

…別に、本人気にしてないし、大概“当然の事”をした結果だから感謝されるいわれも無い…別に、私も士郎も感謝されたくてやってる訳じゃないし。

「…そうか？だがその本人の姿が見えないのだが…」

「…多分、生徒会の手伝いで校内うろついてるはず。何か伝えとくことあるなら聞くけど…どうする？」

士郎の現在を教えた所、あからさまに落胆した。

そういえばこの三人、大概一緒にいるよね…

「そうか…いや、いい…自分で伝えよう。邪魔したな、衛宮。」

「…後でややこしそうだから、士郎か私かを名前で呼んでくれるかな？全員に言えることだけど。」

――このクールな女生徒：氷室　鐘
陸上部・高飛びのエースで、眼鏡をかけた美人。
…陸上部三人娘のツッコミ担当。
趣味は人間観察…何故だろう、なんかもうすぐこれを極めた人に出会う気がしてきた…

「そうか?…でもアニキの方、勝手に名前で呼んでもいいのかよ?」
「大丈夫、というか基本的に名前で呼ばれてるから問題無い。」

――口が悪い女生徒：蒔寺　楓
陸上部・エーススプリンターで、実は和服の似合う日本美人。
…陸上部三人娘のボケ・暴走担当。
綾子曰く“遠坂の悪友”。
趣味は風鈴集め、苦手なモノは怪談話（綾子情報）

「うぅ…でも悪いよ…じゃあ、志保ちゃん、て呼んでもいいかな?」
「そう?まぁ…別に良いよ。」

――このやわらかい感じの女生徒：三枝　由紀香
陸上部・マネージャー、周囲を“ほにゃっ”とさせてくれる。
…陸上部三人娘の良心。
この三人の中で、唯一私・士郎両方とまともに会話したことがあり、それなりに仲はいい（私は、友人の一人と数えている）。
趣味は…応援?で苦手なモノは怖い話と運動。
“男にやるのはもったいない”と、由紀香死守同盟なる組織が存在するとかしないとか…
実は特技として、かなりの霊視能力があるらしい（本人無自覚）。
一成曰く、“疑う要素が無い”らしいけど…
三人娘最強の存在。綾子曰く“遠坂の天敵”らしい。

「その言い方だと、兄を名前で呼ばせようとしているように聞こえるのだが…？」
「うん…なんで？」
「ちょっと…怪しいぞ？ちびどら？」
…ばれた？
「ちびどら言うな！別に…“姉候補”が増える訳だし、どうせならなるべく公平に応援を…「「待って！？」」…なんか間違った？」
桜は基本的に一緒に暮らしてるようなモノだから、一番有利。
綾子は普段から仲が良いし、結構士郎と一緒に繰り出す（私も一緒だけど）友人だし…
…この三人の参戦は、既に二年分のハンデがあるわけで…
個人的には、誰が勝っても良いんだけど…出会いのタイミングが原因で勝負が決するのは…負けた人が泣きそうだし、そのフォローも大変だろうからね…
「基本、私は中立のつもり…」
「「そうじゃなくてっ！？」」
「ど、どどどどどういうつもりだ！？というか、何でそんな話になってるんだよ！？」
「違うの？」
この三人、士郎のこと好きになっちゃった、と思ったんだけど？

「コホン！…な、何故“そう”だと思ったんだ！？」

「三人とも、士郎のことを話す眼…というか雰囲気が綾子とか桜と重なったから、だけど？」

…まぁ、なんとなく、だから当てにはなんないけどさ。

「綾子…ってえぇ！？美綴さん！？美綴さんも衛宮君のことを！？」

「ま、待て落ち着け由紀香！？」

「由紀っち！それじゃぁ自白だ…ってあああ！？」

「…当たってるじゃん。」

…教室、誰もいなくて良かったね？三人とも。

顔を真っ赤にして、俯きながら

「由紀香…」（／／／／／／）

「ご、ごめんね鐘ちゃん…」（／／／／／／）

「ちくしょー…よりにもよって妹に即日バレかよ…」（／／／／／／）

…とつぶやいている。

「あ～…安心して？私は基本的に中立だから、士郎にばらしたりしないよ。

…それに、そもそも恋愛とか、よくわからないし…むしろ、教えて欲しいくらいだし、ね…」

…一応、“好みのタイプ”は存在するよ？けど…恋愛…特に、“恋

”の部分が良くわからないんだよね…

「…信じるぞ？志保…」（／／／／／／）
「絶っっっっっ対に誰にもばらすなよ…？」（／／／／／／／）
「はぅぅ…」（／／／／／／）

…そのうち、現われるのだろうか？私が夢中になれる人が
…こんなふうに、私は可愛くなるのだろうか？いつか…

「言わないから、そろそろA組の教室に戻った方が良いよ？そろそろ教室に他の生徒入ってくるだろうし。」

…そう言えば、結局私の方を名前で呼ぶんだ…ま、良いけど。

「うぅ…わかった。…邪魔したな、志保…」（／／／）
「ってか美綴もかよぅ…はぁ…」（／／／）
「うん…また今度ね？志保ちゃん。」（／／／）

こうして、三人は教室を後にした。
…その直後、クラスメイト数名が教室に入ってきた。
…藤ねぇくるまで、寝てよ…

――その後、ホームルームで昨日の変質者騒動の件や職員会議の結果等が伝えられた。
――まぁ、教卓に頭ぶつけて気絶した藤ねぇにタイガー（藤ねぇの渾名）コール（大合唱）が行われたけど…
――その後は、特筆すべきこともなく放課後になった。

「…にしても、士郎って鈍感だよね…」

今は桜・慎二と下校中。
…士郎は弓道場の掃除をしてから帰るってことで、別行動。

「僕はノーコメントだよ…」
「それ…志保さんが言っちゃダメです…」

終始無言なので、思った事を口に出してみたが…
…芳しくないなぁ…やっぱり、私は人の会話に合わせるほうが基本なのか…

「そう…？」
「…」（無言の肯定）
「はい。」（キッパリ）

…何故だろうか？アウェイな気がする。
結局、それから黙り込んでしまった。

「…」
「…」
「…」

そうこうする内に、交差点。
…ここから、衛宮邸・間桐邸に分かれる。

「じゃぁ…私はこっちだから。」

そう言って、自宅へと向かおうとした。

「またな、衛宮？…藤村じゃないけど、実際最近結構物騒だから夜

に出歩かないようにしとけよ？しばらくは…さ。」

と、不意に後ろから声が聞こえた。

…心配、してくれてるのかな？

「ん！心得とくよ。

慎二こそ、桜のことしっかり護れよー？」

後ろを振り返らずに返事をし、自宅へと足を向けた。

…後ろから、勿論さ！という声が聞こえた気がするが…きっと、これは空耳じゃないはず。

慎二がいるなら、桜は大丈夫だよね？きっと…

自宅に着いた私は、私服に着替え、夕食の下ごしらえを済ませ、時間を見る…

ん…もうそろそろ本格的に作らないと、だけど…

「ま、少し待ってやるかな？」

士郎の帰りを少し待つことにして、今日の新聞を読む。

……

…読み終わってしまった。

「掃除って…どれだけ気合いれてるのさ…」

読み始めてから、既に一時間は経っていた。

「はぁ…もう待つのもヤメ！勝手に作って先に食べてよっと…」

そう思い、一人で夕食を作る。

「…出来たのに…帰ってこないな…また変質者でも追ってるのかな？」

藤ねぇもこないし…

「…いただきます。」

久々の、一人での夕食。

…何か、落ち着かないな…

「ごちそうさま、おそまつさま…」

…シュールな光景だった気がするけど。

一人での夕食を終え、冷蔵庫に士郎の分を仕舞う。

…修理作業でも、してよう…

そう思って、庭のイ○バ物置へと向かう。

……

……

＜ガシャーン！！＞

「な！？何！？」

作業に熱中し、結構な時間が経った頃、家の方からいきなりガラスの割れる音が響いた。
驚いた私は、慌てて物置の外へ出る。
そこには…

「――飛べ！」
「っづ――――！？」

庭に転がる士郎を、土蔵へと蹴り飛ばす蒼い服の男。
その男の手には…赤い槍が握られていた。

（な…何…アイツ…）

ただごとじゃない。
そう感じた私は、急いで飛び出した。

「士郎！！」

気が付いた時には叫んでいて…

「あん！？なんだよ…また見られちまった…本当についてねぇ…」

あの男には気付かれてしまった…

「あの坊主の妹か？ワリィな…後で同じところに送ってやるから、今は見てな…」

！？完全に殺す気だ…！
どうする！？士郎は簡単に吹き飛ばされていた…私じゃぁ、もっと無理。

…魔術！…ダメ！“強化”する物が思いつかない！！
でも…

「やらせるかぁっ！！」

…諦めて、たまるか！！
私は、その男に殴りかかる。
だけど…

「チッ！女を殴る趣味は無ぇってのに！！」
「っ！？――投影、開始！！」

＜ガキィン！！＞
＜ガシャン！！＞

――拳の一撃。
そのたった一発で、私は吹き飛ばされた。

…とっさに使った投影魔術で、服の下に鉄板を投影…これに奇跡的に成功して、骨が折れたりはしてないけれど…縁側まで、弾き飛ばされた。

「くっ…はっ……」

私は肺の中の空気が全部強制的に排出され、軽い呼吸困難になっていた。

「そこで待ってろ…嬢ちゃん。」

あの男は、渋い顔でそれだけ言うと、士蔵へと歩いていった。

（士郎！！）

このまま…殺されるの？

まだ…切嗣の夢、叶えてないのに…？

――誰か…士郎を、たすけ…

そんな考えが脳裏を過り、右手が、陣に触れた瞬間意識が――

「…まさか…は…の光の…か！？」

――一瞬、落ちていたようだ。

無理やり体を起こすと、そこには胸から血を流す金色の髪の綺麗な女の子とそれに駆け寄る士郎、跳び去っていく蒼い男の姿。

そして…

「！？貴様！いつからそこにいた！」

まるで、私を護るように佇む、黒いコートの男性がいた。

「答えないか…ならば！切り伏せるのみ！」

そして、その男性に切りかかる、金色の女の子。

…気が付いた時には、叫んでいた。

…右手が、熱かった。

「――＜伏せて！＞」

…この時、私は何も知らなかったけど…
この後、少ししして…確信した。

――この人との出会いは必然で…
――途方も無い奇跡だったんだ、って…

“第零、五話／「もう一つのプロローグ・後編」”（後書き）

改定の理由：士郎と志保の令呪の位置が逆でした…
なんて凡ミスｏｒｚ

“外伝・七話裏／「バッドエンドと新たな命。」”

――バカだな・・・ボク。

“外伝・七話裏／「バッドエンドと新たな命。」”

――side???

今・・・ボクは焔の中にいた。
周りには、トモダチ達。
ここは・・・教会。

もうすぐ、ボクは死ぬ。
でも・・・嬉しいな・・・
最後に、“助け”が来たから・・・
・・・黒っぽい服の、男の人。
知らない、ダレカ。
・・・アーチャーとか、士郎が来てくれるかと思っていたけど・・・
違ったみたい。
あの人は、誰だったのかな・・・？

ボクは・・・どこで・・・間違えたのかな・・・？

こんなハズじゃ・・・なかったのにな・・・

迫る焔の中、ボクは・・・この、二回目の人生を思い返した・・・

――――１４年前――――

気が付いたら、赤ちゃんになっていた・・・

「・・・ふぇ？」

「あ、ふぁぅあえぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！？」
（な、なんだこれぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！？）

・・・
・・・・・・
・・・・・・・・・・

その後・・・“両親”が慌ててボクのことをあやしてくれた。
そのおかげで、落ち着いたが・・・

どうやら・・・ボクは転生していたみたい。
もともとは・・・確か、１５歳の男。
でも・・・今は０歳の女の子・・・ｏｒｚ

よりによってＴＳ・・・

しかも、“前世”のことは・・・“自分”の名前もわからないよ・・

・

“知識”があるのに“記憶”がない・・・ってかんじ。

・・・ゲームとかのことはしっかり憶えているから・・・

・・・それを知った後・・・何が起きたのかは解からないケド、新しい人生を送ることに。

前世の知識を使えて、ボクって天才!!を実践できる!!

・・・女の子にもモテモテ!ってボク女の子・・・ｏｒｚで、でも男に興味は無い!!今は・・・だけど。

・・・とか思っていたら・・・

二歳の時、両親の会話で気がついたよ。

「冬木の冬は、やはり長いな・・・」

「そうですねぇ・・・」

・・・“冬木”!?

まさか・・・ここって・・・

Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔの世界!!?

あのセイバー様やらイリヤさんやら・・・シロウってかアーチャーさんやらランサーのアニキが戦うあの冬木!?

一応Ｒｅａｌｔａ　Ｎｕａはやってたし、知識もあるから・・・

オリ主が出来るぜ!!女の子だけどな!!

セイバー様やイリヤさんと仲良くなるぜ!!!女の子だけど!!!
・・・魔術、習えないかな・・・？
は!?もしかして、ボクは固有結界が使えるとか!?だって、こういう転生には特殊技能が付き物だし!!!

――そう思っていた時期が、ボクにもありました。

ボクが、４歳の時・・・

――黒い、炎が・・・ボクの町を覆った。

完全に、忘れていた・・・
この町の聖杯戦争・・・第四次は、この町を破壊し尽くして終わる。

・・・こんな、基本も忘れるなんて・・・!!

――そっか、ボクはすでに間違えていたんだ・・・

「おとうさーん!!おかあさーん!!!」

・・・叫んだ、力の限り。
炎の中、ボクの知っている人の姿を探しながら・・・

――こうなるまえに・・・逃げなきゃならなかったんだ・・・

・・・そして、どれだけ歩き回っただろう?
気が付いたら・・・もう、町は焼け落ちていた。
目の前には・・・ボクの・・・

「お、とう・・・さん・・・おかあ・・・さん・・・？」

やさしい・・・両親、だったモノがあった・・・

――バカだな・・・ボク。

そして・・・ソレを見た瞬間、ボクの意識は落ちていた。

――調子に乗って・・・なにがオリ主だよ・・・

・・・どれくらい、眠っていたのかな・・・？

――だから・・・これはきっと罰。

そうして・・・気が付いたら、ボクは磔になっていた。

――助けようと考えもしなかった・・・罰。

・・・ああ、そうか・・・

教会の、地下か・・・

（はは・・・こんな、オチか・・・）

ボクは・・・“死んだ”

・・・ここで、ボクの人生は“終わった”。

・・・十年間は、終わらない。

でも・・・きっと・・・十年で、終わる。

（きっと・・・いつか、終わる。）

・・・その日を・・・待って・・・

“イタイイタイイタイ”

“ココハドコ？”

“カエシテ”

・・・そうだ・・・ボク以外にも、何人もいるんだ・・・

“トモダチ”が・・・

（ボクが、生命力を振り絞れば・・・皆、少しは楽になるかな・・・？）

・・・どうやればいいのか、わからないけど・・・頑張って、みようかな・・・

――そうして、十年。

・・・どれだけの日が過ぎたのかな・・・？

また・・・苦しみの日々が繰り返されるだけ・・・

――そう、思っていた。

「なんだよ・・・これは・・・！！」

・・・？誰・・・？

誰かが・・・来た！？

（ああ・・・皆、やっと・・・終われるよ・・・？）

「死にながら・・・生かされてる・・・！！」

その人は、ボク達の現状を・・・怒っている。
怒って・・・くれている。

「・・・外道が・・・」

あれ・・・？

（士郎？にしては・・・声が渋い・・・？アーチャーの声にも聞こえない・・・？）

“ファンタジック・アイテム・リスト”・・・！！」

そう、考えていたら、シャン、という音が聞こえた・・・

（宝具・・・！？）

もしかして・・・サーヴァント！？
でも・・・一体誰・・・？

そう思って、必死に、もう何年も動かしていない首を動かした。
そこには・・・顔が、溶けてしまった女の子。
・・・ボクの、幼稚園のトモダチ。

その子に・・・何かを飲ませている・・・？黒いコートの男の人。

そうして、何かを飲まされた子は・・・

「・・・んっ・・・だ、れ・・・？」

（ウソ！？治った・・・！？）

溶けた肌も、顔も・・・治った！？

そんな・・・驚くべき光景を作りだした人は、あの子の質問に、答えていた。

「俺は・・・通りすがりの・・・幽霊、さ・・・」

・・・幽霊？

サーヴァント、って意味・・・？

さっきの薬？は・・・やっぱり、宝具だったのかな・・・？

そんなことを、考えていたら、あの子と、その人は会話していた。

「お兄、ちゃ・・・ん・・・幽霊・・・さん？」

「ああ、そうだよ・・・」

「や、と・・・おむ、か・・・えに・・・き、て・・・くれ・・・た・・・」

「違うよ？残念かも、だけど、まだ君は死んじゃダメなんだ・・・」

そう、ボク達にとっては・・・少し、辛いことを言った。

何も知らないくせに・・・そう、叫びそうになった。

「や、だ・・・っ!!もう・・・い、たい・・・の・・・ヤ・・・」

けど、それは・・・すぐに・・・覆された。

「君は、まだ・・・幸せに、なってないじゃないか・・・」

その声は・・・とても、悲しそうで・・・優しかったから・・・

「え・・・」

「だから・・・お帰り?明るいところへ・・・楽しい、場所へ・・・」

とても・・・温かかったから・・・

「かえ、れ・・・る・・・の・・・?」

「ああ!だから・・・おやすみ・・・今は・・・おやすみ・・・」

“絶対に、帰すから・・・!!”

そんな、声が聞こえた気がした。

そして・・・あの子が眠ったのを確認してから、その人はボク達に薬を飲ませてくれた。

・・・けど・・・

「クッ・・・!?そんな・・・エクスポーションでも駄目なのか・・・!!」

・・・ボクは、治りきらないみたい、でも・・・大分、楽になったよ。

・・・ところで、エクスポーションって・・・ＦＦのあれ？まさか・・・ね？

「・・・クソッ・・・！！・・・ゴメン・・・俺には、君達は・・・」

・・・治せなかったのが、よほど悔しいのか・・・今にも、泣きそうな声で、謝ってきた。
そして・・・その、言葉の先もわかった。

“・・・助けられない”

・・・そう言おうとしたんだろう。
でも・・・ボク達の“トモダチ”の一人が、“ボク達”の代表として・・・

“シナセテ・・・？”

・・・そう言った。
そして・・・口々に、皆が、思い思いの言葉をかけた。

“アリガトウ”
“タスケテクレテ”

・・・ボクも、言おう・・・この、やさしい人に・・・

“トモダチヲオネガイ”

・・・上手く、喋れないけど・・・届いたかな？

そうしたら、泣きそうな声で・・・

「ゴメン・・・な・・・忘れないから・・・絶対に、憶えているから！！」

そう叫んで・・・“トモダチ”を抱えて、走っていった。

少しして、焔が迫ってきた。

・・・きっと、あの人がやってくれた。

でも・・・なんでかな・・・？

あの人が、泣いている気がした・・・

届くかどうか、わからないけど・・・

この気持ちを、伝えよう・・・

「ありがとう、優しいお兄ちゃん・・・！」

――――こうして、ボクの二度目の人生は終わった。

もう・・・なにも感じない。

むしろ・・・この焔が心地よい。

・・・あ、結局、あの人のこと・・・何にもわからなかったな・・・

一瞬、顔は見えたけど・・・格好良かったな・・・

「・・・もしも・・・普通に出逢えていたら・・・ボクは・・・」

・・・最後まで、その言葉を紡ぐことなく、意識が焔に包まれた。

――もしも、願いが叶うなら・・・あの人に、恩返しがしたいな・・・

これくらい・・・願っても・・・良いよね・・・？

・・・ん？なんだろう・・・

何も無い・・・

白い、空間・・・？

そして・・・何か、温かい・・・温もりを感じた。

何故かな・・・？この温もりの先に・・・あの人がいる気がする・・

・

――――行こう・・・行って、みよう。

――――ピシッ・・・

・・・Ｎｅｘｔ　ｅｐｉｓｏｄｅ９・・・

“第九話／「爆誕、予想外の存在…ってか何故に!?」”

――何故、こんなことに・・・？

“第九話／「爆誕、予想外の存在…ってか何故に!?」”

――sideクロウ

ついさっきまで、ランサーと共に、教会で何があったか?の説明をしていた。
あと、バゼットについても。

・・・教会での出来事を説明していたら、だんだんとマスター組が機嫌が悪くなっていったが。

・・・士郎の場合・・・
「ふざけるな!!なんだよ・・・それ・・・・!!」
・・・と激昂し。

・・・志保の場合・・・
「・・・っ・・・」
・・・静かに、涙を流し・・・

・・・凛の場合・・・
「綺礼・・・!!」
ギリギリと・・・拳を握りしめ・・・

・・・バゼットの場合・・・
「外道に・・・落ちたか・・・！」
左腕の付け根を押さえ、俯いた・・・

そして、バゼットを助けた状況から帰宅するまでの流れを語り説明を終えたが・・・

・・・場の空気が、悪いな・・・
と思った瞬間、かわいい音が聞こえた。

＜くぅ～・・・＞

・・・？腹の虫？誰だ？
・・・あ、顔が真っ赤になっているのがいる・・・

「え、あ、いや・・・その・・・」

・・・セイバーだった。
コイツ、結構食うからな・・・

「ああ、そういえば腹が減ったな・・・志保？夕食は準備出来ているのか？
出来ているなら、頼みたいんだが・・・正直、腹減っちまったし。」

俺も結構腹減ってるし・・・
ここは食事を頼もう。
・・・セイバーが暴走する前に。（失礼）

「とあるおばあちゃんが言っていた・・・

“食べる”とは、“人”が“良くなる”と書く。食事はおろそかにするべからずってな。
・・・飯食って、嫌なことは置いておこうぜ？」
と、微妙に言い回しを変えた天道語録でも言っておこう。
・・・まあ、“忘れる”気は毛頭無いがね。
・・・と、天道語録を聞いた皆さんの反応は・・・
「食べる・・・人、良くなる・・・あ、本当だ。」
「とあるおばあちゃんって・・・一体誰だよ・・・」
「というか、アンタが何者か、が一番気になるわよ・・・」
「ええ！！素晴らしい言葉です！！」
「まあ、確かに飯は重要だよな・・・」
「・・・格言、ですか？」
とのこと。
まあ誰がどれかは御想像にお任せするとして・・・
「じゃあ、すぐに準備するね？士郎、お皿出すの手伝って。」
「ああ、わかった・・・あ！バゼット・・・さんとランサーはどうする？」
「あ～・・・食って良いならもらえるか？マスター、今あんまり魔力無ぇからな・・・少しでも補充したい。」
「すみません、ランサー・・・私は、少量貰えますか？・・・体力が、あまり無い状況ですので・・・」
「あ・・・そういえば仮死状態だったんだっけ・・・クロウ？回復薬ある？」
「あ～・・・悪いが、品切れだ・・・あとはジョーカーと一番効果が弱いのが一個ずつしかない・・・」

「・・・使った、って言ってたものね・・・」

・・・こんな会話の後、食卓の準備が完了。

今夜のメニューは・・・

「・・・元をただせば日本版ビーフシチュー、肉じゃがを作ってみました！」

――見事な肉じゃがだった。

良い匂いだな・・・

汁も透き通っている・・・この量を作ってこれは凄いな・・・

それにしても・・・よくそんな雑学知っているな？

「へぇ・・・なんか、具材がカレーっぽいわね？？」

と、目の前の皿を見て凛がそんなことを言った。

・・・やっぱり、知らないよな。

少し解説しよう。

「いや、この場合それで正しいんだ。

志保も言ってたが肉じゃがってのは、元を正せばとある歴史上の偉人が『ビーフシチューが食べたい』と日本で駄々をこねたんだけど・・・当時の料理人はビーフシチューを食べたことが無くて、味の決め手がわからなかった・・・ので、仕方が無いからみりんと醤油を入れてみた結果生まれた料理なんだ。

で、あえてその具材で作る方法も実際存在するってことだな。

・・・だろ？志保。」

そんな雑学、まあ・・・その後、変化していったのが所謂“肉じゃ

が”なんだけどな。

「そうだけど・・・よく知ってるね？結構微妙な雑学なのに・・・？」

「や、それは俺の台詞だ。
まあ・・・俺が知っている理由はそういった雑学に詳しい奴を親友に持っていたからだけどな。」

・・・アカのことだけどな。
アイツと付き合っていると、結構知識が広がる気がするな・・・

「それは良いだろ？セイバーの眼も真剣だしな。」
「な！？何を言うのですかミミック！？」

早くしないとセイバーが暴走しそうだ。

「ははっ・・・そうだね、じゃあ・・・」
「シホ！？聞いていますか！？」

「「「「「いただきます。」」」」」
「ああ！？い、いただきます！！」
「じゃあ俺も、いただきます・・・でいいのか？」

慌てるセイバーを全力でスルーし、皆は食べ始めた。
ランサーは、意外に順応していた・・・服装以外はな。

「おお！うめぇな！？嬢ちゃん。」

これはランサー。

「・・・」

無言で食べているのはバゼット。

「・・・相変わらず美味いな・・・」

微妙に悔しそうなのは士郎。

「ぅ・・・また、負けた・・・」

うちひしがれているのが凛。

「（コクコク！）」

時折頷きながら一心不乱に箸を進めるのはセイバー。

・・・評価は上々だな。

さて・・・俺も食べ始め・・・

「（じ～）」

ようと思ったとき、真剣な視線に気が付いた。

・・・志保だ。

「・・・？」

俺の箸の先を凝視していた。

・・・あ、もしかして・・・？

「（じ～）」

評価が欲しい、とかか？
料理を作ったことがある人間なら、よくわかる感覚だな。

「・・・」

ひょい、とジャガイモを摘む。

「（！）」

そして・・・それを俺の口に・・・

「（・・・ごくっ）」

・・・入れた。
よく味わって、よく噛んで・・・

「（じ～・・・）」

・・・飲み込んで。

「（・・・）」

・・・なんだろう、なんかかわいいぞコイツ。
なんというか・・・小動物ちっく。

「（じ～・・・！）」

おっと、感想を言ってあげよう。

「うん、美味いな。
・・・優しい味がする。」

うん、俺が今まで食ったモノの中でも最上位だな。

「！（やった！！）」

俺の感想を聞いて、嬉しそうな顔をして小さくガッツポーズをした。
・・・隣で、凛が落込んでいるのが印象的だった。

それにしても・・・この年でこの腕なら・・・

「（・・・いい嫁さんになりそうだな、志保・・・ボソッ）」

・・・自分で言ってて、ふと思う。
料理は上手い、家事も完璧・・・気も利くし、もしかしなくても理想的な嫁なんじゃないか？

「！？」

小声で呟いた直後、ボン！！と音が聞こえた気がした。
・・・志保の顔が、真っ赤になっていた。

聞こえてた・・・のかな・・・？

「クロウ？アンタ・・・平気な顔しているけど・・・これ以上のが作れるって言うの・・・？」

志保に声をかけようと思っていたところに凛がそんなことを訊いてきた。

・・・志保はなんかワタワタしてる。

・・・とりあえず答えておくか。

俺の持論を。

「・・・凛、俺は料理に勝ち負けは無いと思っている。
人間、一人一人味覚は違うんだ・・・凛には美味く感じても俺には不味く感じるってことだってあるかもしれん。
そしてその上で言っておく・・・答えは微妙だ。
そもそも俺は肉じゃがを作った事が無いからな・・・それに、俺は大抵妹の舌に合うようにしか作らないからなぁ・・・
まぁ・・・すくなくとも、サヤの奴に文句を付けさせない味・・・にはあと一歩、かな？」

＜ピシッ＞

・・・俺の言葉を聞いて、今までワタワタしていた志保がピシッ、と固まった。
そして、ギギギと擬音が聞こえてきそうな動きで俺に顔を向け、口を開いた。

「・・・ど、どのへん・・・が・・・？」

・・・声は震えていて、前髪で目元が見えない。
・・・ぶっちゃけ、怖いぞ・・・

「え～と・・・だな・・・あ、あくまで俺の味覚では、だから気にしなくても・・・」

「・・・どのへん、が・・・？」

今度は、肩が震え始めた・・・
・・・ど、どうしてこんなことに・・・？
・
・・・この状況を作った凛は、ニヤニヤとこっちを見てやがった・・・
・
くっ！？た、助けは・・・
・・・セイバーは・・・黙々と食べている、そしてなにか期待を込めた目で俺を見ている。
（貴方はこれ以上の味を出せるのですか！？）
・・・クラススキルを使わなくても思考が読める。
士郎は！？・・・真剣な顔でこちらを見ている。そしてその手には・・・メモ！？
助ける気がねぇっ！
ラ、ランサー・・・は駄目だ！バゼットと端に避難してやがる！！
くっ・・・し、仕方が無い・・・
「え、え～・・・と・・・あくまで俺の主観だが・・・ちょっと、甘い・・・かな、と・・・」
「「「・・・甘い？」」」
即座に士郎、志保、凛が聞き返してきた。
・・・こうなりゃ、ヤケだ・・・！！
「多分、志保はこの量を作ったことが無かったんじゃないか？・・・量が多くなっている分、食材の甘味が出る・・・この量を作るなら、砂糖はいらないんじゃないかな・・・俺の主観だがな！！

というか！さっきも言ったが勝ち負けなんか無いっての！！要は、相手に喜んで貰う事が一番なんだ！！」

・・・俺なら、こうするってだけだけどな！！
と、俺の超理論を自棄になって発言したんだけど・・・

「！？・・・こ、心構えで・・・負けた・・・」
「ぐはっ！？・・・か、勝ち目が・・・無い・・・」
「うっ！？・・・これじゃ・・・勝てないわね・・・」

・・・あれ・・・？納得されちゃった？
結構暴論だったんだけど・・・？

「うぅぅうぅ！！こ、今度は負けないから！！」

うぅ・・・涙目の志保に、何かライバルって認定されたらしい・・・
だから料理は勝負するものじゃないって思うんだが・・・

「・・・敵は、強大だな。」

・・・ブルータス（士郎）、お前もか。

「・・・これは・・・負けられないわ、男には・・・！！」

・・・訂正、お前達もか。

・・・ふ、と脳裏をよぎったことがある。
（・・・サヤのこと教えたら・・・どうなるんだ・・・？）
・・・アイツ、俺の3倍上手かったからな・・・

「あ～・・・盛り上がっているところワリィが・・・いいかげんマスターが限界っぽい。
どっか部屋で休ませてやりたいんだが・・・」

思考が変な方向に逝った（誤字にあらず）瞬間、ランサーが声をかけてきた。
そちらをみると、バゼットがランサーによりかかっていた。

「あ!?そうだった!?案内するから、そこで休んでいてくれるか？」

「ああ、わかった。・・・行くぞ、バゼット。」
「す、すみません、ランサー・・・」

その様子を見た士郎が、慌ててランサー達を空き部屋へと案内した。
ランサーはバゼットを背負ってそれについていった。

そして、食事も終わり俺はこう切り出した。

「さて、と・・・話がか～な～りずれたが・・・そのタマゴについていいかげん話して貰いたいんだが・・・？」

・・・いいかげん、気になって仕方が無い。

「「「それはこっちの台詞!!」」」

・・・はい!?
俺、何かしましたか!?

「クロウ？これに見覚えは・・・？」

俺のアホ面を見てか、志保が出したのは黄色い羽・・・って

「あ！？そ、それは！？」

「あるんだね・・・？」

あるもなにも・・・

「あ、ああ・・・それは“チョコボの羽”っていってだな・・・“幻想の道具欄”の中に入っていた装飾品なんだ。」

「「「「チョコボ？」」」」

説明を開始した直後に、セイバー、士郎、志保、凛に突っ込まれた。

うぅ・・・ＦＦを知らない相手に説明するのは難しいな・・・

「え～・・・チョコボってのは、俺の能力の元となっているゲームの世界にほとんど必ず登場する生き物。

まぁ作品ごとに微妙に設定が違うけど・・・鳥の一種で馬のように人を乗せて大地を１２０ノット（約２２２，２ｋｍ／ｈ）で駆けたりしてくれる生き物で・・・ああ、魔術師の魔力を全快にしてくれたり、天馬のように空を飛んだり、岩盤を砕いたり、ときには隕石を落としてくる亜種がいるな。」

・・・こんなところか？

「どんな生き物よ・・・それ・・・」
「凄いダチョウを想像しちゃったけど・・・」
「ものすごくゴツそうだな・・・」
「ほう・・・そんな生き物の羽だったのですか・・・」

・・・ああ！実物見せてやりたい！！特にチョコボシリーズのカワイイ奴！！！
？とか？のでも良いから！！！！

「断言するが、その想像は絶対に間違っているからな。
・・・それはともかく・・・これがどうかしたのか？これは装備するとすばやさが上昇するだけなんだが・・・」

正直、これとタマゴの関係が・・・ってまさか・・・

「それを触媒に、召喚しちゃったみたいなんだよ・・・事故で。」

額にでっかい水玉をつけた志保が、想像どおりのことを言ってくれやがりましたとさ。
・・・？凛がそっぽを向いているな・・・ま・て・よ・・・？

「・・・なぁ、凛？ま・さ・か、とは思うが・・・エーテルどうした・・・！」

嫌～な予感がしたので凛を睨んでみた。

「う！？そ、その・・・こ、こぼしちゃったのよ！！ていうかなんでその羽が縁側に落ちてるのよ！？」

・・・そ、それは・・・

「・・・なくしたんだよ。」

「「「・・・へ？」」」

「・・・は？」

一瞬、固まった後・・・

「「「「な、なくしたぁ！？」」」」

「なんでさ！？」

「なんでさ！？」

「なんでよ！？」

「何故ですか！？」

・・・叫ばれた。

これは・・・

俺の所為だな。断言できる。

「・・・話は昨晩に戻るが・・・俺はアイテムの鑑定を行っていたんだ・・・縁側で、一つ一つ、な・・・実際のアイテムと、想像したモノが違ったら危ないだろう？」

「うん・・・それはそうだけど・・・それで？」

・・・話したくはないんだが・・・

「・・・その途中で、な・・・チョコボの羽の鑑定を終えた直後に突風が吹いてな・・・そのときに飛んでいってしまったんだ・・・」

・・・あまりに間抜けだったな・・・俺。
俺のカミングアウトを聞いて、４人が固まってしまった。

・・・ははははははははははは・・・ｏｒｚ

「一応探したんだが・・・見つからなくて、な・・・たいしたモノじゃなかったからそのままにしちまったんだよ！！」

・・・しーん・・・
居間の空気が凍った。
い、イタイ・・・

「ハハハ・・・笑え、笑えよ！！笑ってくれよ！？でもなきゃせめて罵れよ！？
ってか俺はそもそも単なる大学生だぞ！？ミスったっていいじゃないか！？
・・・いや、だからってそんな生暖かい視線もやめてくれよ・・・泣くぞ、しまいにゃ・・・」

慌てた俺の主張を聞いている途中から、なんかだんだん視線が生暖かくなってきた。
・・・今回は俺の所為だから反論もできない・・・

・・・今の俺の姿勢は見事な・・・

――――ＯＴＬ

「えっ、と・・・いや、アンタだけの所為じゃないから・・・わ、私がエーテルこぼしたのも悪いんだし・・・」

「い、いや！羽に気が付かなかった上に陣を起動させちゃったの私だから！！だから・・・えと・・・」
「い、いえ！？近くにいながら注意しなかった私にも！！」
「そ、それを言ったら俺だって・・・」
そして――――ｏｒｚ

と、年下の連中に慰められる俺（大学生）って・・・一体・・・
・・・ナイテイイディスカ・・・

「「「「え、と・・・」」」」

俺の顔――――（ＯフＯ）＜注・死んだ魚のような眼＋乾いた笑み＞

「・・・ど～せ俺なんて・・・」

机の上に鎮座していたタマゴを抱いて、膝を抱えてればい～んだ・・・

「そ、そんなに落込まなくたって・・・別に怒っていないから！？」

・・・志保・・・

「やさしいな志保・・・
でもい～んだ・・・俺なんか・・・
自分の所有物も碌に管理できない俺なんか・・・」
――――きゅっきゅっ

・・・タマゴでも磨いていればい～んだ・・・

――ピシッ

・・・へ？

今・・・何か・・・？

「ミミック？どうしたのですか？」

急に真面目な表情をした俺に気が付いたのかセイバーが声をかけてきた。

「いや、今コイツから音が・・・」

――グラグラッ

――ピシピシッ！

「「動いた！？」」

「ミ、ミミック！？」

ま、まさか・・・孵化が始まったのか！？

「・・・マジかよ！？」

――パキャッ！！

俺が驚くのをよそに嘴が殻を突き破った・・・

そして・・・

「・・・クェ？（・・・ふぇ？）」

一匹のチョコボが生まれた・・・

黄色くて丸っこいボデー、つぶらな瞳・・・チョコボシリーズ仕様（と思う）のが。
・・・しかも眼が合った。

「・・・はじめまして？」

・・・・・・・・・

「クェーーーーーー！！！？（なんだこりゃーーーーー！！！？）」

とりあえず、挨拶してみた。
そして・・・一瞬の間の後、チョコボ（仮）は絶叫した。

「ク、クェ！？クククェ！！？クェクエェェ！？クェ～！？（な、なんで！？ボクはさっき死んだんじゃ！！？ここどこってってああ！？さっきのお兄ちゃん！？）」

そしてワタワタと何事か叫んだ後、俺に突っ込んでくる子チョコボ（仮）。
・・・さっきから、何故か副音声のように意訳が聞こえてくるんだが・・・？
疑問に思った瞬間、脳裏にステータス画面が出現。

――固有スキル
意思疎通・Ｃ
意思を持つ生命との意思疎通が可能となるスキル。このランクだと、人語を理解している生物の“声”が聞こえるため、対話が成立する。

・・・なんだこれ・・・身に憶えの無いスキルなんだが・・・まあ

いい・・のか？
・・・試してみよう。

「なあチョコボ、お前・・・俺の言葉がわかるか？」

「クェ？クエェ・・・クェ～～～！？クエェェ！？（ふぇ？チョコボって・・・えぇ～～～！？ボクチョコボになってる！？）」

・・・わかるのか。

「落ち着け・・・お前は、俺のことを知っているのか？さっきの口ぶりだとそうなるんだが・・・」

・・・お兄ちゃん、ねぇ・・・？

「クェ・・・クエェ・・・ク、クエェ！？（うぅ・・・流された・・・ってさっきからボクの言葉がわかるの！？）」

一瞬落込んだ後、俺に質問をしてきた。
コイツも大概混乱しているようだな・・・

「ああ、わかるよ。・・・で？さっきの質問の答えは？」

まあ俺もかなり混乱しているようだけどな・・・

＜ここから先は、クロウ視点ではチョコボの鳴き声をカットしてお送りします＞

「（うん・・・さっき、助けに来てくれたサーヴァントの人・・・だよね？ほら、あの教会で・・・）」

・・・？なんだ？何か電波が・・・まあいいか。
って今・・・何て言った！？教会・・・！？

「！？お前・・・まさか・・・あの時、俺が・・・」

「（うん！なんでか今はチョコボだけど・・・そうだよ！えっと・・・エクスポーション使ってもらった・・・）」

まさか、と思った・・・
しかし予想は当たっていた。
・・・コイツの中身は、さっき、俺が助けられなかった・・・あの女の子だった。

「そう・・・なのか・・・？・・・あとで、少し話そう。・・・ここで話す内容じゃないから、な・・・とりあえずそこから出してやる。」

けど・・・今、志保達の前で話す内容じゃない。

話を逸らすように、俺はチョコボを抱き上げた。
・・・下半身、まだ殻の中だったからな。

「（ふぇ？あ、あぅ・・・ありがとう・・・）」

チョコボ（仮）を一度横において、殻を横によけて・・・
そしてもう一度抱き上げ・・・

「・・・か・・・」

ようとしたとき、志保がなにかプルプル震えながら声を発していた。
?そういや・・・さっきから全員無言だったな・・・?

「志保?どうか「「かわいい~~っ♪」」のわっ!?」

どうかしたのか?と声をかけようとした瞬間、黄色い声と共に志保と凛が突っ込んできて子チョコボ(仮)を奪い取られた。

「かわいい~♪クロウ!?これが・・・このかわいい生き物がチョコボ!?」
「なにこのかわいい生き物!?先に言いなさいよ!身構えちゃったじゃない!!」
「(うわぁ!?な、何!?わきゃぁ!?そ、そこはらめぇ!?)」

・・・そして、二人で嬉しそうにモフモフしだした。
子チョコボは・・・うん・・・撫で回されてる・・・

・・・何故、こんなことに・・・?

「クロウ?さっきから気になっているんだけど・・・あのチョコボと会話してなかったか?」

それを見て、額にでっかい水玉くっつけた士郎がそう尋ねてきた。
・・・あ、そっか・・・俺以外にはわからないのか・・・

「ああ・・・身に憶えの無いスキルで、な・・・会話は可能だった。」

・・・本当に身に憶え無いんだがなぁ・・・？

「え!?クロウ、この仔の言葉がわかるの!?ね、ねぇ!?この仔今何て言ってるの!?」

眼がキラキラした志保に尋ねられた・・・

・・・子チョコボは・・・

「（ふぇ～ん!?た、たすけてぇ!!や!?そ、そこは触っちゃらめぇ!?お、おにぃちゃ・・・た、たすけ、ひゃん!?）」

・・・大変なことに!?

は、早く助けないと!?

「え～・・・と放してくれ、ってさ・・・一応、その仔女の子みたいだからさ・・・泣きそうになってるぞ・・・？（汗）」

や、ほんとに放してやれよ・・・

「・・・ふぇ?あ・・・ああ!?ご、ごめん!?遠坂も放して!?」

と、志保は正気に戻ったのか、必死な鳴き声に気が付き手を離した。

・・・遠坂も、渋々とだが手を離した

・・・放された子チョコボは・・・

「（ふぇ～～ん!!）」

＜ドゴッ!!＞

「ぐふっ!?」

・・・俺（の腹）に突撃してきた。
くはっ・・・お、俺（の腹筋）にダメージを与えるとは・・・流石チョコボだ・・・

「（こわかったよ～って・・・ああ!?だ、大丈夫!?）」

痛みを堪えていたら、子チョコボ（仮）に伝わったらしく心配された。

「だ、大丈夫だ・・・俺は常人の十倍は頑丈だぜ!!」

・・・ま、俺以外なら大打撃だったろうけどな。
けど・・・子供（?）に心配させる趣味は無い。

「クロウ?え～と・・・その仔に、ゴメンって伝えて貰っていい・・・かな?」
「あ、その・・・私の分も・・・」

などと安心させようとしていたら、涙目の志保&物っ凄～く罪悪感を感じている表情の凛に、そんなことを言われたが・・・

「ん?ああ・・・俺が言わなくても伝わっているぞ?コイツ、人語理解してるから。」

・・・だって、元人間だし（言わないけど）。

「そうなの?えっと・・・さっきは、ごめんね?かわいくて、つい・・・」
「私も・・・ゴメン・・・」

言葉が通じていることを教えたら、二人は子チョコボ（仮）に謝った。

「（ふぇ？あ・・・うん、もういいよ・・・って通じないじゃん！？）」＜ドゲシッ＞

そうしたら、子チョコボ（仮）は返事をしようとして言葉が通じないことに気が付き、地団太を踏んだ。

・・・でもそこ、俺の膝の上なんだけど・・・（泣）

「うわぁっ！？お、怒ってる！？（泣）」

志保はコイツが怒っていると思ったのか、涙声だ。

凛もワタワタと焦っている。

「（ああ！？違うよ！？怒ってない・・・って通じない～！！）」＜ゲシッゲシッ＞

コイツはコイツで大混乱・・・

ってかさ・・・

「Ｉ・Ｉ・ＫＡ・ＧＥ・Ｎ・ＮＩ・ＳＩ・ＲＯ！！流石に痛いわっ！！」

＜ポイッ！＞（投げた音）

「（わきゃぁっ！？）」

＜ガシィッ！＞（爪で士郎の頭をホールドした音）

「のわっ！？イテテテテテテテテ！？」（士郎）

チョコボの脚力でゲシゲシ蹴られたら流石に痛いわ！！

・・・つか着々とＨＰが減ってくっての！！

あんまりにあんまりだったので、ぽいっと投げた。
投げられた当・・・人?は悲鳴と共に士郎の頭の上にパイルダーオン。

「・・・まったく・・・志保?別に怒ってないってさ。
てか・・・え~・・・ああ!もう!!そういや名前訊いて無い!!
まあいいや、そこのチョコボ!!通訳ぐらいならやってやるから一々踏むな!!」

・・・用件を伝えてやった後に注意しようとして気が付いた。
コイツの名前・・・まだ訊いて無いじゃん。

「(ご、ごめんなさい・・・えっと・・・赤毛のお兄ちゃんもごめんなさい・・・)」

シュン、と落込んだ様子で士郎の頭から降りるチョコボ(仮)
そして士郎に謝っている。
・・・通じてないけどな。

「いてて・・・クロウ?何て言ってるんだ?なんとなく謝っている気がするけど・・・?」

「それで正解、“ごめんなさい”ってさ・・・ってあれ・・・?セイバー?何やってるんだ?」

士郎に言葉の意味を教えていたとき、ふと気が付く。
・・・セイバー、さっきからなんで黙っているんだ?
そう思った俺は、セイバーのほうを見てみたんだけど・・・
何故かタマゴの殻の中を覗きこんでいた。

「いえ・・・さっき、一瞬赤い何かが見えたので・・・ミミック？これはなんでしょうか？」

どうやら、殻の中には何かが入っていたようで、セイバーはソレが気になっていた様子。

そして、殻の中から何かを取り出し、俺に見せようとした・・・のだが・・・

「なっ！？」

その赤い“何か”は、セイバーの胸に吸い込まれるように消えた・・・！？

「セイバー！？どうした！？」

セイバーの声を聞いて、士郎がセイバーに声をかける。

「い、いえ・・・宝珠のようなモノが入っていたので、ミミックに見せようとしたのですが・・・」

「セイバー！？身体に異常は！？」

吸い込まれる様を見ていた凛も、急いで声をかける。

「いえ・・・今のところ何も・・・」

「クロウ！？さっきのアレは何！？セイバーは大丈夫なの！？」

そして、志保が俺に詰め寄る。

アレは・・・おそらく・・・

「ちょっと待て・・・」

俺は、確認のため殻をひっくり返す。

すると・・・

「・・・やっぱり・・・か。」

中から、紫（三個）・黄色（二個）のテニスボールくらいの宝珠が転がり出て来た。

「宝石!?クロウ・・・これが何か知っているの?」

それに一番最初に反応したのは凛。

「ああ・・・これは・・・マテリアだな。」

「「「「マテリア?」」」」

「（嘘っ!?）」

・・・?チョコボ（仮）はマテリアを知っている?そういや・・・この子、チョコボのことも知っていたよな・・・?

・・・まあ、後で訊いてみよう。

今はマテリアの説明だ。

「これは、俺の能力の元となったゲームの七作目に登場するアイテムでな・・・」

――マテリア
ファイナルファンタジー?に登場するキーアイテム。
魔晄（まこう：ライフストリーム）が凝縮され生み出された結晶。
古代の知識、技術が蓄積されているとされ、これを介することにより一般人でも様々な“魔法”や戦闘技術を使用できる。
その能力は多種多様で、攻撃や回復魔法の使用、特殊な戦闘技術の付与や支援、強大な召喚獣を呼び出す・・・などが挙げられる。
その色によって能力がある程度わかり
緑：魔法・・・マテリアごとの固有の“魔法”が使用できる。
青：支援・・・単体では意味が無く、他のマテリアと組み合わせることで能力を発揮する。
紫：独立・・・単体で、装備しているだけで能力を常時発揮する。
黄：コマンド・・・特殊な戦闘技法が身に付く。
赤：召喚・・・召喚獣を召喚する。
に大別される。
使用法としては、武器防具、アクセサリー等にくっ付けるのが基本。

「・・・ってとこかな・・・基本的なことだと。
後は特殊なモノがあるけど・・・これは置いておくとしよう。」

「・・・それって・・・“幻想の道具欄”に入っているべきモノなんじゃ？」

「俺もそうは思うけど・・・入ってなかったんだよな・・・」

説明を終えたところ、最初に突っ込みを入れたのは志保。
・・・しかし・・・何故に殻にこんなモノが？しかも緑が無いし・・・

「ってことは・・・さっきセイバーが取り込んだのは召喚マテリア、ってことか？」

思考の海にダイブしかけたときに、士郎はそう訊いてきた。
色は赤かったからな、あれ・・・

「ああ・・・問題は、“どの”召喚マテリアだったのか、ってことだ。」

「どういうこと？」

「・・・召喚マテリアには色々ある、チョコボを召喚するモノとかならまだ可愛いが・・・竜王（バハムート）とか氷の女王（シヴァ）とか冥府の王（ハーデス）とか海竜（リヴァイアサン）とか・・・洒落にならないのが基本だからな・・・」

・・・暴走したら・・・ヤヴァイ。

「・・・ク、クロウ！？セイバーがどれ取り込んだかわからない！？」

俺のマジな顔を見て、志保が詰め寄ってきた。
そう言われてもなぁ・・・

「確かめたいことがある・・・それ次第、だな・・・」

俺はそう言って、マテリアを鑑定する。

紫：ＨＰアップ
装備すると、体力の上限が上昇する。

紫：ＭＰアップ
　装備すると、魔力の上限が上昇する。

紫：チョコボよせ
　装備すると、チョコボがよってくる。

黄：てきのわざ
　装備中に受けた一部の敵の技をラーニングし、自由に使えるようになる。

黄：ぬすむ
　盗みの技術を身に付ける。

・・・らしい。
・・・ふむ・・・

俺は、まず“ＨＰアップ”を手に取った。

「ミミック！？」

セイバーが驚いているが・・・

・・・うん、別に何も起こらないな。

「これは、仮に取り込んでも問題が無い奴だから大丈夫。
・・・セイバー、ちょっとこれを持ってくれ。」

そして、何も起こらないことを確認したうえで、セイバーに渡す。

「だ、大丈夫なのですか？」

だが、流石に心配なのか受け取ろうとしない。

「・・・これは“ＨＰアップ”、仮に取り込んでも体力の上限が増えるだけだ。」

・・・ので、効果説明をした。

「・・・わかりました。」

すると、納得したのか受け取ってくれた。

・・・やはり、何も起こらない。

「セイバーもういい、今度は・・・この黄色い奴を両方持ってみてくれるか？」

「はい。」

そう言って、俺は自分では触らずに“ぬすむ”“てきのわざ”をセイバーに持たせる。

・・・何も起こらない。

「・・・じゃあ、それを俺の手に置いてくれ。」

そして、俺は両手を差し出す。

「これでよいのですか？」

そう言って、セイバーは俺の手に二つのマテリアを乗せる。

すると・・・

「なっ！？」
「クロウ！？」
二つのうち片方・・・“てきのわざ”のマテリアが、俺に取り込まれた。
・・・そういうこと、か。
「落ち着け・・・少しだけど、法則が掴めた。
仮説だが、どうやらサーヴァントは自分に関係したマテリアに触れると、取り込んでしまうみたいだな・・・」
「どういうこと？」
俺の仮説を聞いて、凛が質問をしてきた。
「今、俺が取り込んだマテリアは“てきのわざ”といって、受けた技をラーニングすることができる。
・・・俺はミミック、物真似師だ・・・仮説が正しければ、取り込んで当然だな。」
能力的には、な。
「なので、セイバーが取り込んでしまったマテリアは・・・セイバーの真名に関わる内容になりそうだな・・・まあ、今のところ考えられるのは戦神（オーディン）あたりか？アレは剣を振り回すし・・・セイバーに関わりのある幻獣なんかがいればそっちかもしれんが。」
・・・なんか忘れてる気もするんだが・・・なんだっけ？剣を使う召喚獣がいた気がするんだが・・・ライディーンは作品が違うし・・・

・？

「セイバー？何か心当たりはないか？」

「そうですね・・・強いて言うなら龍、でしょうか・・・関わりがあるとすると・・・」

お？なんか士郎が聞きだしていた。

龍・・・か・・・

龍と剣、で連想出来る宝具・・・バルムンクとフルンディング？・・・でも両方男が所持者だよな・・・？あ、でも龍と縁のある英雄だったらまだいたかな・・・？

「クロウ？龍、で出てくるのって何がいる？」

おっと・・・志保に質問されたので、回答しないとな。

「龍だと・・・竜王（バハムート）、剛竜（バハムート改）、神竜（バハムート零式）と・・・広義的に見て海竜（リヴァイアサン）・・・ってところか？」

「能力は？」

「“バハムート”竜王が強力なドラゴンブレスを放つ“メガフレア”。

“バハムート改”は剛竜が対象を消し飛ばすほどのブレスを放つ“ギガフレア”。

“バハムート零式”は・・・神竜が宇宙空間からサテライトレーザーのようなブレスを放つ“テラフレア”。

“リヴァイアサン”は海竜の力で大津波をおこす“大海嘯”。

ついでに“オーディン”は戦神が全てを切り捨てる“斬鉄剣”か、

必中の槍を天に放ち、天より飛来させる“グングニルの槍”のどちらか、だな。」

・・・うん、どれも大災害だな・・・

「・・・ミ、ミミック!?大丈夫なのでしょうか!?」

流石に心配になったのだろう、セイバーが焦ったような顔で詰め寄ってきた。

「あ～多分大丈夫。どうやらこのマテリア、取り込んでしまっても使おうとしなければ使えないみたいだし・・・セイバーが取り込んでしまったマテリアの名前が特定できないと使いようが無いし。・・・宝具の一種とでも思えばいいんじゃないか?これ。」

“真名解放”とおんなじかな?

どうやら、“てきのわざ”も技名叫ばないといけないっぽいし。

「そ、そうですか・・・」

セイバーは、ほっとした様子で座り込んだ。

「（ちょ、ちょっと!?なんでＦＦのことそんなに知ってるのさ!?この世界にはＦＦは無いんだよ!?それにミミック!?そんなクラスのサーヴァントなんか知らないよ!?）」

すると、いままでポカンとしていたチョコボ（仮）が詰め寄ってきた。

・・・コイツ、やっぱり・・・

“俺のいた世界”か、それによく似た世界の出身!!

「クロウ?その子・・・なんて言ってるの?」

と、志保に訊かれた。

・・・少し、誤魔化そう。

「あ、ああ・・・ほら?さっき“後で話そう”って言ったろ?だから“ほっとくな!!”ってさ・・・もうそろそろ時間も遅いし、解散しないか?明日は学校行くんじゃないのか?」

「あ・・・うん・・・そうだね・・・」

志保は、渋々?引き下がったようだ。

「じゃあ・・・俺は部屋の準備してるよ、クロウは俺の部屋使うんだろ?」

「私も・・・布団とか運ばないと・・・セイバー?お風呂どうする?」

「あ・・・良ければ入らせていただきます。」

「あ~・・・私も入りたいから上がったら声かけてくれる?私はランサー組に訊きたいことがあるから後でいいわ。」

「わかりました。」

「着替えとかは、運んでおくから気にしないでいいよ?」

「ありがとうございます、シホ。」

「俺はこのチョコボと話すことがあるから、先に寝てていいぞ士郎。」

「そうか?まあ、俺も風呂使いたいからしばらく起きてるよ。」

この後の行動も、決まったようだな・・・

というわけで・・・

「じゃあ、解散！行くぞ？チョコボ。」

「（あ、うん・・・）」

――こうして、長い一日がようやく終わりを迎えた。

・・・まあ、俺はこの後も話すことがあるんだが、な。

“第九話／「爆誕、予想外の存在…ってか何故に！？」”（後書き）

久しぶり？の更新です。

・・・え～・・・と・・・

そろそろ、本当にストックがなくなってまいりました・・・

この辺から、一気に原作の跡形もなくなります。

・・・そろそろステータス表を作成しないとですかね？

では、次回の更新でお会いしましょう。

“外伝・六～八話裏／「私（俺）達の予想外。」”

――さあ、ここで少し他の人たちの視点では何があったか・・・？
これについて、話をしてみよう。

これは、俺・・・定霧久郎にとって予想外の午後の裏側での話。
長い長い今回の語り部は・・・マスター達。

“外伝・六～八話裏／「私（俺）達の予想外。」”

――side志保

＜ドルルゥン！！！＞

・・・バイクのエンジン音が響き、クロウのバイクは見えなくなった。

そして・・・

「じゃあ、クロウは良いとして・・・貴方達に何が出来るのか、しっかりと話してもらおうかしら。・・・じゃないと、教えることもできないし。」

と、遠坂が声をかけてきた。
教えてくれるのは、正直ありがたいんだけど・・・

・・・私に何が出来るのか・・・か・・・
・・・中途半端な強化と・・・がらんどうの投影、あと変化か・・・

「うん・・・とりあえず、部屋に戻ろう。
ところで・・・セイバー?なにを考え込んでいるの?」

・・・そういえば、さっき・・・クロウのバイクを見てからなにか考え込んでいるんだよね・・・?

・・・と、私が声をかけたら、驚いたのか・・・

「い!いえ!?な、なんでもありません!!た、ただミミックは色々とモノを持っているのだな、と思っただけです!」

と、少々テンパッタ返事を返してきた。
・・・もしかして・・・?

・・・と、少し思ったことを言おうと思ったところで、士郎が声をかけた。

「もしかしてセイバー、バイクに興味があるのか?」

・・・うん、私もそう言おうとしていたんだよ。
と、図星を刺されたのか、観念したような顔でセイバーが口を開いた。
・・・少し、顔が赤いね。

「う・・・え、ええ・・・その・・・疲れを知らない鋼の馬、というものには心惹かれるものがありまして・・・」

・・・昔には無かったモノだしね。

「そうか・・・あ、そういや志保?この前、雷画じいさんに古い２５０一台貰ってなかったっけ?」

ああ・・・カタナね・・・

――余談だけど、私は普通二輪の免許を持っている（士郎は持っていないけど）。
移動のため、と思って取ったんだけど・・・バイクは買っていない。趣味を兼ねて、古いモノを手に入れて直しながら乗ろうと思ったんだけど・・・
その話を、藤ねぇ経由で聞いてしまった雷じぃ（昔、こう呼んでいた・・・直そうとしたら、マジ泣きされかけたのでそのままに・・・）が、どこからかカタナを持ってきたんだよね・・・

「ああ・・・あれね・・・物置に入っているけど・・・乗れないよ?エンジン下ろしたばっかりだし・・・タンクの塗装もまだだし。」

もともと、外装がボロボロのやつで、リペイントが必要だったから、パーツごとにばらしたんだよ。

・・・エンジンも、中身真っ黒だったし。

そんな訳で、庭のイ○バ物置の中で大手術の真っ最中。

・・・まあ、後二日も頑張れば乗れそうだけど。

・・・そういえばクロウ、バイクに詳しいのかな?だったら一部ア

ドバイスが欲しいところがあるんだよね・・・塗装とか。

「そっか・・・ゴメン、セイバー・・・我が家にはバイクは無いんだ・・・見せてやることも出来ない。」

などと考えていたら、士郎はすまなそうにセイバーに謝っていた・・・

・・・その前に、人の物を見せる気だったのか・・・良いけどさ。

「い、いえ!?いいのです!!シロウの責任ではありません!!それに、少し気になっただけですから!?」

謝られて、慌てたのかセイバーは結構な勢いで声をあげた。
で、それを見た（忘れられていた?）遠坂が、なにか不機嫌そうに私達に声をかけてきた。

「（・・・出逢って一日経っていないのに、ずいぶんと仲がいいのねボソッ）・・・いいから、行くわよ!!」

そして、そのまま家に入ってしまった。
・・・でも遠坂?前半士郎に聞こえてないよ?

「あ!?待てって遠坂!?あ、セイバー?家の中で自由にしていてくれ!」
「わ、わかりました・・・では、道場にいますので何かあったら」

そして、士郎がそれを追いかけていった。
・・・セイバーは、道場に移動。

・・・私も、行こう。

・・・

「・・・で、貴方達には何ができるの？士郎は一応“強化”が専門って聞いているけど・・・成功率が低いらしいわね？」

遠坂に貸した部屋に移動した私達に、そう切り出した。

「ああ・・・正直、成功率が低いんだ。」

・・・士郎、基本失敗らしいしね・・・強化は。

・・・私も人のこと言えないけどさ・・・強化は。

「・・・志保は？」

と、そんなことを考えていたら遠坂が声をかけてきた。

「私は・・・“強化”はあんまり成功しないね・・・まだ“変化”の方が得意、一番の得意は“投影”・・・“投影”なら、九分九厘成功するよ？」

でも・・・切嗣は、『それは効率が悪いから』って“強化”をすすめてきたけど。

まあ、私は一日に一回は必ず投影を使っていたんだけどね・・・黙って。

――まあ、効率が悪いのはわかるよ？

“投影”・・・グラデーション・エアは魔力で物質を作りだす魔術。
本来は、儀式やなんかの触媒の代替を用意するためのモノ、らしい。
・・・実際、これを使うくらいなら最初から本物を用意したほうが早い、所詮贋作だし・・・

そして“変化”、これは元々存在している物体を魔力で文字通り変化させるもの。
・・・存在しているモノを歪めるから、ちょっと難しい。

最後に“強化”・・・物質に魔力を流し、性質はそのままで硬くしたりする魔術。
性質を変えないようにやるから・・・余計に難しい（少なくとも私には）。

・・・で、実際のところ。魔力の消費量が・・・

投影（１０）＞変化（５）＞強化（３）

・・・こんな感じ。まあ私の主観で。

・・・と私の出来ることを聞いた遠坂は・・・

「投影って・・・またずいぶんとマニアックな・・・って・・・あれ？・・・志保？ちょっと良いかしら・・・？貴女は投影が一番得意で、次に変化・・・で、苦手なのが強化・・・って言ったの・・・？」

・・・あれ？何かおかしいのかな？

「そうだけど？」

一瞬固まった後、遠坂は真面目な顔で説明をしてくれた。

「・・・なんで、実際の難易度と得意な順番が逆なのよ！？」

・・・へ？

「？何言ってるのさ・・・最初から在るモノに手を加えるより自分で創るほうが楽だろ？普通。」

呆けている私の横で、士郎は私の思いを代弁してくれた。

・・・実際、人の描いた絵に手を加えるよりも、自分で描いたほうが楽だと思うんだけど？

下手をすると台無しになるだけだし。

「って士郎もなの・・・逆、それ逆・・・魔力を物質化させるほうが遥かに高等技術だから！」

「「・・・そうなのか？」」

ぅ・・・またハモった・・・気を付けていないと何故か台詞が重なるんだよね・・・

後、言葉使いも・・・何故か男っぽくなっちゃうし・・・

ってそれはともかく・・・

「でも・・・私も士郎も、最初に出来たのは投影だったよ？」

「ああ、そっちのほうがすんなり出来たぞ・・・？」

「・・・訳わかんない・・・なんなのよアンタ達・・・ま、まあ良いわ・・・じゃあ、気を取り直して・・・」

と、なにか珍獣を見るような（失礼な）眼でこちらを見た後、遠坂はカバンからランプ（？）を取り出して、士郎の前に置いた。

「士郎？このランプを“強化”してみてくれる？志保は・・・ちょっと待ってて。」

「このランプを・・・？失敗しても怒るなよ？」

「ええ、そもそも何で失敗するか、も見れるから別に怒る気は無いわよ？」

そういうことか・・・そういえば、士郎の魔術は久々に見るな・・・いつも土蔵に篭っちゃうし・・・
うぅ・・・あの日の料理勝負で負けなければ・・・あそこは私の城だったのに・・・

・・・っと、始めるのかな？

「――――接続（トレース）、開始（オン）。」

――――魔術回路を作る・・・あの焼けた鉄棒を脊髄に差し込むような感覚を味わっているのだろう・・・脂汗が額に滲んでいる。
・・・士郎も、私と同じか・・・こうしてみると、命懸けなのが良くわかる。

「・・・え！？ちょ、士郎！？」

・・・？なんで遠坂はそんなに驚いているの？

・・・よし、魔術回路の作成には成功したみたい。

構造を把握して・・・

「――――強化（トレース）、開始（オン）・・・！」

「ま、待ちなさい！？」

遠坂が驚いているけれど・・・

士郎は“強化”を始めた・・・

物質に魔力を通す、でも・・・

＜――――パリン！！＞

「・・・くっ！？」

ランプが割れた・・・

・・・失敗、か・・・今のは・・・

「・・・士郎、流す魔力が多いよ・・・」

「――――接続（トレース）、終了（オフ）・・・！！

・・・そうだな・・・遠坂？失敗したけど・・・これでいいのか？」

と、接続を終了して遠坂に声をかけたが・・・

当の遠坂は物凄い剣幕で士郎に詰め寄った。

「・・・良い訳あるかぁっ！！？なんでアンタは魔術回路作るとこ

ろから始めてんのよ!?バカなの!?バカなんでしょ!?それに、なんで志保も平然としてんのよ!?」

ふぇ!?矛先が、こちらに向いた・・・!?

「え?だ、だって・・・魔術ってそういうものじゃないの?」

だって、そもそも存在しないモノを扱うのが魔術師なんだし・・・

「んなわけあるかぁっ!!?魔術回路ってのは、一回表したら後はスイッチを切り替えるだけで良いのよ!!アンタらの師匠は何考えてたのよ!!!」

・・・!

遠坂・・・!

「・・・私達が半人前以下なのは認める!!けど・・・!!」

「・・・親父のことを悪く言うな、遠坂・・・!」

そもそも、切嗣は・・・

「・・・元を正せば、私達に魔術を教える気は無かったんだ・・・それを無理言って教えて貰っただけだ・・・」

「それに・・・基礎の基礎を教わったところで死んだから、後は独学なんだ・・・それも二人別々の。」

・・・そう、私達はお互いの鍛錬を知らない。

実際、何か掴めたら情報交換する・・・という形だったからな。

・・・あ、また話し方が男っぽくなってた・・・

それはともかく、私達の剣幕を見た遠坂は“しまった”といった感じの顔をして・・・

「・・・ゴメン、貴方達のお父様を馬鹿にする気は無かったの・・・そっか、そういえば養子だって言ってたっけ・・・」

・・・と、謝ってきた。

・・・まぁ・・・わかればいいんだけどさ・・・

「そうか・・・まず、スイッチを作らないと、か・・・ちょっと待ってて！・・・え～と・・・」

・・・？なにかをごそごそしだした。

何か・・・探している？

「あった！・・・二人とも、これを呑みなさい。」

そうして・・・遠坂は赤い・・・ドロップス？を差し出してきた。

「なんでさ？」

・・・あ、士郎の口癖が出た。

まぁ・・・私も言うかもしれないけどさ・・・

「いいから呑みなさい！それでスイッチが出来るはずだから。」

・・・ふぅん？

便利な物があるんだね？

「あ、ああ・・・」
「わかったよ。」

私達は、遠坂の手からドロップス（と思う）を受け取り口へ入れた。

・・・？

「・・・？遠坂？これ・・・味がしないけど？」

「そのまま丸呑みしなさい、噛んだりしたら歯が欠けるわよ？」

・・・？
なんなんだろ？コレ・・・
・・・まあいっか。

＜ゴクン＞

・・・また・・・同タイミング・・・
それはともかく呑み込んだけど・・・

――ドクンッ！！

「「――ッ！！？」」

心臓が、跳ねた・・・
身体が・・・熱い！！
視界が、歪む・・・！？

「と、お・・・坂・・・何を、呑ませ・・・っ！？」

・・・士郎も、同じ状況のようだった・・・
そして、息も絶え絶えではあるけれど・・・遠坂に質問をしていた。

・・・私にはそんな余裕は無いけれど・・・

「私の魔力を溜め込んだ宝石よ。魔力で無理やりスイッチを作るの。」

・・・宝石!?
なんてもの飲ませるのさ!?

・・・顔に出ていたのか、疑問の回答をくれた。

「安心しなさい、すぐに溶けて消えるから。」

・・・そっか・・・
今は・・・耐えよう。
遠坂が無駄なことはしない・・・はず。

・・・
・・・・・・
・・・・・・・・・

一時間ぐらいしただろうか?
・・・だいぶ落ち着いた。

「・・・ふぅ、やっと平衡感覚が戻ったよ・・・こういうのは先に言っておいてよ・・・」
「まったくだ・・・」

・・・むぅ、士郎も同タイミングか・・・

と、少々文句を言ってみたら・・・

「・・・立ち直り、ずいぶん早いわね・・・半日は少なくとも起き上がれないと思っていたのに・・・」

と、わりかしとんでもないことを言ってくれやがった。

・・・本当に、そういうのは先に言ってよ・・・

と、いう思いを込めて睨んでみた。

そういえば・・・昔から、こうやって睨むと大体の人は慌てて謝ってきたっけ・・・？

「・・・ぅ（か、かわいい）！？わ、悪かったわよ・・・そ、それより、調子はどう？」

・・・？今、なにか言った？

まぁいいや・・・

「うん・・・体が少し熱いけど、問題無いよ。」

「こっちもだ。」

「じゃぁ、魔術回路を起動してみて？多分、スイッチもできているハズだから。」

・・・できてなかったら汗かいただけ損だよ・・・

・・・よし。

「――接続、開始。」
「――接続、開始（トレース・オン）。」

魔術回路を、起動させる・・・

――余談だけど、私の詠唱は日本語である。
・・・士郎は“トレース・オン”だけどね。

それはともかく・・・

・・・あった、多分、これ・・・
なんていうか・・・トリガーを引く感覚で、魔術回路に魔力が通った。

・・・あ。
起動したけど・・・どうしよう（汗）
ランプも借りてないし・・・
強化するモノが無い・・・（汗）

「ちゃんと起動したけど・・・どうしようか・・・？」
「ああ・・・スイッチはちゃんと理解できたけど・・・」

・・・士郎も同じか。

「あ・・・そうね・・・せっかくだから、貴方達の得意な投影を見せてくれる？」

・・・了解。

「「わかった。」」

・・・あぅ・・・また被った・・・
まあ良いや・・・

「――投影、開始。」
「――投影、開始（トレース・オン）。」

・・・ペーパーナイフでいいかな？

――骨子・形状・そしてその存在を想像・・・！！

手に重みがある・・・よし、一応出来たか。
・・・かなり適当にやったけど・・・まあいいか。

「――投影、終了。」
「――投影、終了（トレース・オフ）。」

魔術回路を閉じ、閉じていた目を開く。
そして・・・右手にあるモノを見る・・・
・・・あ

「・・・適当にやるものじゃないね、やっぱり・・・」

・・・なんか、青龍刀ちっくになってしまった・・・
京都とかで売っている日本刀形のを思い浮かべていたのに・・・ｏｒｚ

「・・・やっぱり、中身が無い・・・」

そう呟いた士郎の右手にあったのは・・・目覚まし時計？

・・・がらんどう、だけど。

投影結果に、二人揃って落込んでいたら・・・遠坂が、いきなり真面目な表情で口を開いた。

「・・・まさか・・・ちょ、そのナイフ見せなさい!!!」

そう言って、私の手からナイフを奪い取った。

・・・あれ?変なことをした憶えは無いんだけど・・・?

「嘘・・・完全に物質化してる!?・・・志保、コレは・・・いつまで存在しているのかしら・・・?」

物凄いプレッシャーだった・・・

なので、包み隠さず答えることに。

「そ、それは投影破棄しない限りいつまでも・・・だけど?ていうか投影ってそういうものじゃないの?」

「俺のもそうだけど・・・?」

私達の認識を述べたら・・・遠坂の気配が冷たくなった・・・!?

これは・・・殺気!?

「・・・今のうちに言っておくわ・・・投影っていうのは、あくまで一時的にレプリカを作り出す魔術なのよ・・・!魔術師が、魔術回路を閉じても存在しているなんてことは在り得ないのよ!!」

・・・え?

「で、でも・・・たしか、土蔵の中には士郎の投影の失敗作が転が

っていなかったっけ!?」

「あ、ああ・・・昔から、強化に失敗したときの気分転換に投影をして・・・そのままになっているのがあるけど・・・」

何年分かはあるはずだけど・・・?

「・・・そこまで異常だとはね・・・貴方達、このことは他言無用よ!私以外の魔術師に知られたら・・・まず間違いなく脳髄取り出されてホルマリン漬けね・・・」

・・・うぇ!?な、なんで!?
そんなに異常なの!?

「「な、なんでさ!?」」

「そんだけアンタ達が非常識ってこと!!いいから返事!!!」

「「は、はいっ!!」」

・・・自覚は無かったけど・・・そんなにとんでもなかったんだ・・・アレ。

「まったく・・・(ブツブツ)・・・?それにしても・・・ずいぶんと中身に差があるわね?志保のは完璧に近いけど・・・士郎の方は中身が無い・・・?」

しばらくブツブツと何かを呟いた後、遠坂は不思議そうな顔してそんなことを訊いてきた。
・・・う~ん・・・それは・・・

「それは・・・よくはわからないけれど、私は刃物の投影が一番完成度が高くなるみたいなんだよね・・・後は年期かな?投影、結構真面目に鍛錬していたから。
・・・でも、私も目覚ましなんか投影したら似たようなモノになっちゃうけど。」

「志保は投影の方を重点的にやっていたのか!?親父に効率悪いって・・・」

「確かにそう思うけど・・・失敗癖付けたくなかったから、上手くいく奴だけでも極めてみようと思ってね。」

「ふぅん・・・得意な分野の問題かしら・・・?それはともかく、師匠の言うことはしっかり聴くものよ?志保。・・・まあ、貴女の場合それが吉と出ているみたいだけど・・・」

まあ、言われなくてもわかっているんだけどね・・・

「・・・まあ良いわ。
貴方達は、“投影”の専門家みたいね・・・少なくとも、それだけは他の魔術師には真似できない・・・ううん、真似しようがない異能よ。
・・・うん、これからは“投影”を重点的に教えていくつもり。なにか意見はあるかしら?」

「「いや・・・ないぞ(よ)?そもそも教えて貰うんだし、遠坂の方針に従うつもりだしな(ね)。」」

う・・・長々とハモった・・・

「・・・本当に仲良いわね、アンタ達・・・ま、まあいいわ、と、とりあえず今日はここまで。
正直、“投影”なんて教え方もわからないから手探りだし・・・明日、何か教材持ってくるから今日は休息！！」

遠坂は、少し照れた？ような顔して休憩を言い出した。
・・・スイッチが出来ただけ、かなり成果もあったしね。

「わかったよ。
・・・そのナイフ、危ないから消しとくね？――投影、破棄。」
「俺も消しておくか――投影、破棄（トレース・カット）。」

・・・破棄は簡単にできるんだよね。

「・・・ずいぶんとアッサリ消せるのね・・・まあいいわ、じゃあしっかり休みなさい。
・・・結構負荷がかかっているハズだから。」

「「わかった。」」

解散宣言も出たし・・・汗かいたな・・・お風呂、入ってくるかな？
あ・・・お風呂、といえば・・・

「そういえば士郎？朝お風呂沸かしたの。」

そう、朝（お昼だったけど）起きたらお風呂が沸いていた。
・・・あれ、士郎なんだよね？
と思っていたら・・・

「・・・？俺は知らないぞ・・・？ってか沸いていたのか？」

・・・あれ？
ってことは・・・

「そうなの？ってことは・・・消去法でクロウ？」

・・・ってことになっちゃうよね？
まあ・・・別に良いんだけどさ。

「そうなるんじゃないか？セイバーはそういうことしないと思うし。」

そうか・・・クロウ、ご飯だけじゃなくてお風呂まで・・・って

「もしかして・・・主夫？」

・・・クロウが、主夫・・・？

――想像する、エプロン姿で帰宅を迎えてくれるクロウの姿を・・・！！

――“おかえり、志保！風呂も沸いているぞ、それとも飯が先か？”

――“ただいま！・・・うん、お風呂先に入るよ。”

――“そうか、・・・背中流すか？・・・なんてな。”

――“クスッ・・・じゃあお願いしちゃおうかな？”

――“ハハ、戯け！冗談だよ！冗談。”

――“・・・冗談じゃ、ないよ？”

＜ぼひゅっ！＞

――瞬間、顔が沸騰した。

うわ～～～～～～～～！！！！？（／／／／／／）

何考えてるのさ私！？ああでも厨房に立ってて違和感無いなって違う！！？クロウの笑顔はやっぱり反則ってこれも違う！！！？なんで私が働く奥さん設定！！！？それになんでさ！！？なんで背中流してもらって違うってば！！！！！？あああああああ想像しちゃった！！！！？なんで女の髪とか洗っている姿に違和感無いの！！！！？ってだから違う！！！？違うってばぁあ～～～～～！！！！！！！！？

ゴロゴロゴロゴロ！！（注・床を転がる音）

「うわっ！！？志保、どうした！？」

「ちょ！？顔真っ赤じゃない！！？大丈夫！！？」

落ち着け！！！落ち着け私！！！？

妄想でトリップするのは私のキャラじゃない！！桜のキャラ！！！

（失礼）

「はぁ、はぁ、はぁ・・・だ、だいじょぶ・・・ちょ、ちょっと頭に血が上がっちゃっただけだから・・・」（／／／／／／）

ふぅ・・・落ち着いてきた・・・

うぅ・・・昨日から何かおかしいよ・・・クロウのことばかり考えて・・・

「ほ、本当に大丈夫か！？」

「や、休んだほうがいいわよ！？」

・・・うぅ・・・というか逆!!絶対逆!!
どっちかといえば私が主婦だってば!
・・・美綴にも言われたけど・・・

・・・主婦?私が・・・?

――“ただいま、志保。”
――“おかえり、クロウ!お風呂、沸いてるよ?”
――“そうか、じゃあ先に風呂に入ってくるよ。”
――“うん、あ!背中、流そっか?”
――“ハハ、冗談はほどほどに、だぞ?”
――“・・・冗談じゃ、ないよ?”

＜ボン!!!＞

――思考が、沸騰した。

きゃあああああああああ!!!!!!!!!?わ、私なんてこと考えてるのさ!!!!?だからこういうのは桜のキャラなんだってば!!!?ああでも他の女性にはやってほしくないって違うってばああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!?

ガンガンガンガンガン!!!!!(注・床に頭を打ちつける音)

「志保――――!!?落ち着け!!?救急車!!?救急車ぁ!!!!?」
「ちょ!?私の所為!?まさか呑ませる宝石間違えた!!!!?」

はっ!?救急車を呼ばれてしまう!?
落ち着けってば私!!?

・・・びーくーる・・・びーくーる・・・

「あ、ん・・・ふぅ、ふぅ、だ、だいじょぶ・・・ちょ、ちょっと、あ、あつい、だけ・・・」（／／／／／／）

ほ、本当に思考が飛んでるよ・・・頭に、血が上っているんだね・・・

「（ちょ!?その顔は反則!?台詞もえっちぃ!?）ほ、本当に大丈夫!?」

な、なんかエライコト言われた気がするけど・・・心配させちゃったな・・・

「ふぅ・・・大丈夫、頭に血が上って、思考が暴走気味なだけ・・・シャワー浴びて、頭冷やしてくる・・・」（／／／／／／）

「そ、そう?何か違和感あったらすぐに言いなさいよ?」

「・・・うん。」（／／／／／／）

・・・私は、遠坂の心配そうな声を聞きながらトボトボとお風呂へと向かった。

あぅ・・・私のバカ・・・

――next side 士郎

“外伝・八話裏／「私（俺）達の予想外・後編。」”

――俺の戦いの裏側では、こんなことが起きていたらしいな。
・・・まあ、俺にとっての予想外・・・それはこの先で語られた。

“外伝・八話裏／「私（俺）達の予想外・後編。」”

――side士郎

トボトボと風呂へと向かった志保を見送ったが・・・

大丈夫かな？志保・・・
・・・アイツ、今まであんなになったこと無いはずなんだけどな・・・
・

「・・・士郎？アンタは大丈夫なの？」

と、遠坂がこちらに心配そうに声をかけてきた。
言われて、俺は自分の状態を確認する。
・・・魔術回路、問題無し。
・・・両手足、問題無し。
・・・身体、異常無し。
・・・思考は・・・多分問題無し。
・・・頭に血が上っている感覚は・・・あんまり無いな。

「ああ、問題無い・・・と思う。」

うん、おそらくは問題無い。

「そう?本当に?異常は無いのね?」

と、俺は問題が無いと言ったはずなのに遠坂は心配そうな態度を崩さない。

・・・なんでさ?

「ああ・・・なんでそこまで心配してくれるんだ?俺は頑丈な方だぞ?」

と、疑問をぶつけてみた。

すると・・・

「そ、その・・・私の呑ませた宝石が原因みたいだったし・・・し、師匠が弟子を心配するのは当然よ!!」

・・・と、顔を真っ赤にしながら答えてくれた。

そっか・・・責任感じていたのか。

「そうか・・・ありがとう遠坂。・・・お前、やっぱり良い奴だな・・・お前を師匠に選んで良かったよ。」

俺達は、自分で納得して師事したってのに・・・

それに、志保の体調も結局は俺達が半人前以下だったから発生した事態だろうに、それにまで責任を感じているなんて・・・

と・・・あれ?感謝しただけなのに、遠坂の顔が真っ赤に・・・?

「ぅ・・・そ、そうね・・・え、と・・・そ、その・・・う、うぅ・

・・あ、貴方達に魔術を教えようなんて魔術師、多分他にいないんだから！こ、幸運だと思いなさい！！」

と、モジモジとした後顔が真っ赤なままそんなことを言ってきた。

（・・・なんか、かわいい？）

・・・と、一瞬思考の隅を掠めた瞬間、遠坂がこちらを睨んできた。

「・・・衛宮くん？今、何か変なこと考えなかったかしら？」

か、かわいいなって思っただけなのに！？

そんなに変なことか！？

と、とりあえず誤魔化すか！？

いやここはあえて思ったことをそのまま口に出してみようか。

・・・志保は、“美綴曰く、女相手に隠し事は不可能らしいよ？”って言ってたし！

志保はともかく、美綴情報なら間違いは無い！！・・・はず！！

「い、いや何も変なことは考えてないと思うぞ！？ただ遠坂が“かわいいな”って思っただけだぞ。」

と、正直に話してみたところ・・・

＜ボン！＞

――――そんな音が聞こえた気がした。

「な、なななななな何言ってんのよ！？じゅ、十分へ、へへへ変なことよ！！？そ、それより十分休んでなさい！！！わ、私は色

々考えることがあるから!!!と、とっとと出てけぇ!!!」（／／／／／）

＜ヒュン！＞

「うわっ!?ちょ!?わ、わかったからヤメロ!?じゃ、じゃあ俺は道場か居間にいるから!!!」

物凄い勢いで顔を真っ赤にした後、かなりどもりながら早口で捲し立てたながら、割れた（さっき俺が割った）ランプを投げてきた。

俺はそれを回避しながら、転がるように部屋を出た。

＜バタン!!＞

「・・・ふぅ・・・エライ目に遭った・・・」

・・・どうするか・・・

すこし、休むか・・・

そして、俺は居間に到着、テレビを付けながらぼーっとしていた・・・

・・・

・・・・・・

・・・・・・・・・

＜ジリリリリリリリン!!＞

う・・・ん?

昼寝しちまったのか・・・？

今は・・・
１６：４１・・・か。

＜ジリリリリリリン！＞

・・・！電話だ！急いで出ないと。

廊下に出て、俺はすぐに電話に出た。

「はい、衛宮ですが。」

しかし・・・誰だろう？

『――士郎か？・・・俺だ、クロウ。』

電話に出たのはクロウだった。
・・・ってクロウ！？

「クロウ！？何かあったのか？」
「士郎？何かあったの？」

クロウに何があったのかを訊こうとしたら、後ろから遠坂が声をかけてきた。
そして・・・

『――ああ・・・済まないんだが、凛に代わってくれないか？』

と、遠坂にかわって欲しい、と言われた。

「遠坂・・・？なんでさ？「代わりなさい！！」あ！遠坂！？」

後ろからいきなり受話器を奪われた。

・・・まあ、いいけどさ・・・

「代わったわよ。で？何の用・・・くだらないことじゃないでしょうね・・・？」

そうして、遠坂がクロウと会話を始めたけれど・・・何の用だったんだ？

「――――そうだけど・・・それが？」

・・・何言っているのか、がわからないな・・・こっちからだけだと。

「・・・取り締まる手筈になっているわ。・・・ってまさか・・・」

「遠坂？それに士郎・・・？何かあったの？」

と、少々不穏な空気が流れたところで風呂から上がったのか、少々髪が湿った志保が来た。

「あ、ああ、クロウから遠坂に電話があったんだ。」

「クロウから！？って電話なんか持ってたの？」

「さぁな？でもかかってきたのは事実だし・・・」

・・・と、少々説明したところで、突然遠坂が慌てだした。

「ちょっ！！？アンタ、遭遇したの！？大丈夫なわけ！？」

何があったんだ!?
・・・志保も、かなり気になっているようだが・・・
「なあ?志保、クロウが今どうなっているかってわかるか?」
「う、ううん・・・なんとなく、“どっちの方角にいるか”程度しか・・・一応、緊急信号ちっくなのはできるだろうけど・・・」
・・・まあ、俺なんかそれもわからないからな・・・
などと、考えていたら、話が進んだようだ。
「――そう・・・教会に運んでくれる?綺礼・・・監督役には、私から・・・」
・・・まさか・・・聖杯戦争の被害者を発見した・・・とかか!?
と、想像したところで、かなり予想外の台詞が飛び出した。
「――はぁ!?ちょ、焼いたぁ!!?教会を!!!?ア、アンタ何やってんのよ!!!?」
――遠坂の怒号が耳に直撃した。
って教会を焼いた!?クロウが!?
「えええっ!?ク、クロウが教会を焼いた!!?な、何があったのさ!?」
・・・驚いたのは、志保も同じのようだが・・・
俺に詰め寄られても・・・(汗)
「――それって・・・どういうこと・・・」

？遠坂の雰囲気が変わった？
何か・・・嫌な予感、とでも言いたそうだな・・・

「っ！？」

遠坂が息を呑む音が聞こえた。
・・・なんだ！？みるみる遠坂の顔が・・・青くなっていく。

「――――被害者の状態は・・・？」

そして、確認するようにクロウに語りかけた。

「・・・何があったの？」

志保も、なにか不安そうに訊いてきたが・・・
俺にも何がなんだか・・・

「後で、クロウ本人か・・・遠坂に訊くしかないだろ・・・」

遠坂は、何かを考え込んでいるようだが・・・

「――――そう、だったら・・・少し待ってくれる？今から、伝を当たって病院を確保するわ。・・・連絡は、どうすればいいかしら？」

・・・病院？
やっぱり、何がなんだかわからない。
状況が掴めない。

「――――の・・・ね・・・わかったわ、確保できたら連絡する。

――ええ・・・じゃあ気を付けて。」

何かメモを取った後、話が終わったのかガチャンと受話器を置いた。

「・・・遠坂、何があったの・・・？」

「軽くで良いから、説明してくれると助かるんだけど・・・」

・・・そして、かなり渋い顔をしながら遠坂は口を開いた。

「・・・私にも、何がなんだかわからないわよ!!・・・クロウが帰ってきてから本人に訊いて。

・・・ゴメン、ちょっと電話借りるわね・・・病院、手配しないとだから。」

そう言って、遠坂は再びどこかに連絡を取り始めた・・・

・・・邪魔しちゃいけないと思った俺と志保は居間に移動した。

「・・・一体、何があったんだろうね？」

そして、志保は不安そうに呟いた。

・・・志保のこういう声は、あまり聞きたくないんだよな。

けど・・・何と言えばいいのかわからない。

「・・・悩んでても、意味は無い・・・か。

よし!!ご飯の準備でもして置こう!!」

何というべきか考えていたら、志保は気を取り直したのか一度自分の頬をパシン!と叩き立ち上がった。

・・・そういえば、今日は志保の当番だっけ。

「何か手伝うか？」

「ううん、私一人でやる。
・・・強敵だし・・・全力でかからないと・・・・！！」

手伝いを申し出たが、断られた。
・・・何か、背中にオーラが見える！？

凄い気迫だ・・・まあ、気持ちはわかる。

――志保の料理の腕は（スープ関係は特に）俺より遥かに高い。
最近は勝負しても負け越している・・・
昔は、俺のほうが上手かったんだけど・・・土蔵を取りあっての料理勝負をしたときに、俺が勝った後、志保は毎日毎日涙目で特訓をしていたことがある。

・・・半年で、大差つけられて以来勝負しても勝てなくなった。
悔しいので特訓もしたけど・・・何回やっても勝てない。

・・・で、一部の料理（スープ関係）は桜の師匠権限持ってかれた。
まあ、そんなわけで志保は汁物にはかなりの自信を持っていた・・・んだけど・・・

「・・・クロウの作った飯・・・異常に美味かったからな・・・」

・・・そこらの料亭で出してても違和感ないんじゃないか？
・・・本当に何者なんだろう、クロウって。

「ぅ・・・ま、負けない！！」

・・・まあ、俺も負けたまんまじゃいられないけど、な。

志保はエプロンをして、台所に向かった。

俺は・・・

「シロウ?なにやらリンが難しい顔をしていましたが・・・何かあったのですか?」

どうしようか、と思ったところでセイバーが来た。

・・・そうだ、話をしに行こう、と思ってたんだっけ。

「ああ・・・クロウから連絡があってな・・・何かあったらしい。」

「ミミックから?・・・何が、あったのでしょうか?」

セイバーに、遠坂の難しい顔の原因を教えたがやはり内容が気になるらしい。

・・・でもな・・・

「・・・遠坂本人にも、何がなんだかわかっていないみたいだからな・・・クロウが帰ってきてから訊くしかなさそうだ。」

「そうですか・・・」

セイバーは、一応納得したようだ。

・・・無言、になってしまった・・・

「あ！茶煎れるけど飲むか？」

「ええ、いただきましょう。」

無言に耐え切れなくなったので、お茶を煎れることにした。

「・・・」

「・・・」

トントンと、包丁の刻むリズムをバックにお茶を啜っている。

＜冬木を突然襲った大火災から十年を――＞

・・・テレビ、そういや点けっぱなしだったな・・・

・・・大火災、か・・・

志保と俺が、親父・・・切嗣に助けられ、兄妹になったそもそもの原因。

――もう、『衛宮』になる前の自分のことは記憶の彼方だけど・・・あの時の切嗣の顔は、絶対に忘れない。

あの時・・・俺は炎の中を彷徨って、そして力尽きて倒れた。

――“ここで死ぬんだ”と、理解して・・・生きることを諦めたとき、抱き起こされた。

あの時の切嗣の顔は・・・俺の、原初の風景。

・・・気が付いたら、俺は病院に・・・真っ白な病室に、いた。

そうして・・・いきなり現われた男。

男は、こう言った。

――――『君が・・・士郎君だね？・・・突然だけど、皆と一緒に施設に行くのと、知らないおじさんに引き取られるの・・・どっちがいい？』

それなら、おじさんの方がいいや、って思って・・・俺は、この男について行くことに決めたんだ。

そして・・・

――――『じゃあ・・・もう一つ訊くけど、妹は欲しいかい？』

・・・この時は、何のことだかわからなかったけど・・・

俺は、たしか・・・『欲しい』って答えた。

・・・そして、病院から出る日・・・男は、女の子を連れていた。

・・・俺と、同じ“色”の、女の子を。

――――『お互い、初対面だと思うけど・・・士郎？この子が、これから家族になる“志保”だよ？』

――――『・・・しろう、っていうの・・・？これから、よろしく・・・しろにぃ。』

・・・あの時から、俺達は家族になった。

家へと向かう道で・・・切嗣は、とんでもないことを言い出したん

だっけ・・・

――『さて・・・最初に言っておかなきゃならないことがあるんだ。

・・・僕はね？魔法使いなんだ。』

・・・普通に考えたら、信じる人はいないような台詞だけど・・・

俺達は、信じた。

そして・・・俺達は、渋る切嗣を無理やり説き伏せて、弟子になったんだっけ・・・

魔術を教わりながら・・・日々をすごした。

志保とは、何度も喧嘩した・・・

切嗣は、『冒険に行くのだ』とか言って突然ふらりといなくなって・・・また、突然ふらりと帰ってきた。

そういえば、土蔵の取り合いをしたのも・・・この頃だったな。

・・・あの時は、結局俺が勝って・・・志保に泣かれて・・・

――『良いかい士郎？・・・女の子は泣かせちゃ駄目だよ？自分のためにならないからね。』

とか言いながら、切嗣は家の縁側に魔法陣描いていたっけ。

・・・その陣が、志保の修行場になったんだっけな・・・

――あの陣、一種の防御結界で、志保の魔力に反応して起動するけど、それ以外の時はかなり優秀な魔術師でもわからないようになっている・・・らしい。

あそこに箸もられると、俺じゃあ手が出せない・・・切嗣曰く、最

高傑作らしい。

・・・そういや、あの日から“しろにぃ”とは呼ばなくなったな・・・志保。

お互いに、それぞれの修行をして・・・料理で勝負して・・・帰ってきた切嗣の冒険談を聞いて・・・

・・・いつからか、切嗣はあんまり家から動かなくなった。
まるで・・・死期を悟った動物のようだった。

そしてあの日・・・満月の、綺麗な夜だった。
三人で、縁側に並んで、月を見ていた。

虚空を見ながら切嗣は、突然こんなことを言い出した。

――『僕はね・・・正義の味方になりたかったんだ。』

俺に・・・俺達にとっては、親父はヒーローだったから、俺は噛み付いた。

――『なんだよ・・・今は違うのかよ?』
――『そうだよ切嗣・・・』

そうしたら、親父はこう言った。

――『うん・・・正義の味方は、期間限定なんだ・・・大人になると、名乗り難くなっちゃうんだ。』

そんな風に・・・諦めたような声で・・・

だから、俺達は・・・

――『そっか・・・』

――『それじゃあ、しかたないね・・・』

親父を、安心させたくて・・・

――『うん・・・本当に仕方ない。』

夢を・・・

――『仕方ないから、俺が・・・』

――『私達が、なるよ・・・正義の味方に。』

理想を・・・

――『・・・え？』

継ぐことに、したんだ。

――『安心して？私達は、まだ若いから・・・』

――『切嗣（じいさん）の夢は、俺が・・・』

――『『俺（私）達が、ちゃんと形にしてやっから（あげるから）！』』

一人じゃあ、挫けるかもしれないけど・・・俺達は、二人で頑張っていくから。

――『そっか・・・ああ・・・安心した・・・』

そうして・・・切嗣は、動かなくなった。

・・・これが、俺の生きる道。

――――＜正義の味方＞――――

・・・この理想を追って、生きてゆく。

・・・そのためにも、この聖杯戦争を・・・止める。

「・・・シロウ？どうしたのですか？」

・・・随分と、考え込んでいたようだ。

セイバーが、俺の顔を覗き込んでいた。

「いや・・・なんでもないよ。」

「そうですか・・・？」

随分と長考していたようだ・・・日が傾いている。

・・・セイバーの前、大量のみかんの亡骸（皮）もあるし・・・

・・・志保も、もう煮込んでいるだけのようだ。

「ふぅ・・・後は寝かせて、と・・・」

「はぁ・・・やっと一段落ついたわ・・・」

志保が台所から出てくるのと同じタイミングで、遠坂が居間にやってきた。

・・・疲れた顔しているな・・・

「用件は片ついたのか?遠坂。」

「ええ・・・にしてもアイツ・・・なんで他のマスターと一緒に行動してんのよ・・・」

「・・・へ?」

・・・クロウ、本当に何があったんだ・・・?

「遠坂?どういうこと・・・?」

志保は、流石に気になったのか遠坂に訊いたが・・・

「・・・電話かけたら、知らない女・・・魔術師にいきなり電話かわったのよ!訊いたら、ランサーのマスターだ、って言うし・・・!!」

・・・と、予想外の答えが返ってきた。

「な・・・なんですって!?」

「(ピクッ)・・・女?」

・・・そして、その言葉に反応したセイバーと志保。

・・・反応したポイントは違うけど。

「先に言っておくけど、私は状況全っ然わかんないんだからね!?・・・帰ってきたら、問い詰めないと・・・!!」
「「御一緒します!!!」」

三人の後ろに、赤青紅のオーラが見えた・・・

「「「フフフフフフ・・・・・・」」」

こ、怖ぇ・・・
・・・クロウ、頑張れ・・・俺にはこの三人は止められないから。

「「「ブツブツブツブツ・・・」」」

な、何かぶつぶつ言い出した!?
ち、近づけない・・・

・・・結構、時間が経った気もするけど・・・

「大体アイツは・・・」
「彼にはサーヴァントとしての・・・」
「・・・ブツブツブツ」

愚痴ってる!?
と、とりあえず話を逸らしておこう!!
これ以上ヒートアップする前に!!

「そ、そうだ!!遠坂!?さ、さっきは何の用だったんだ!?クロウからの電話の前!!」

「え?・・・ああ、それね・・・ちょっと、気になったことがあったから志保に訊きにきただけよ。」

・・・志保?

「ふぇ?私?何かあったの?」

「ええ、さっきの会話なんだけど・・・土蔵が、士郎の工房ってことでいいんでしょ?

・・・だったら、志保の工房はどこなのかな?って思っただけよ。」

ああ・・・確かに、その話は出なかったな。

「あ、ああ・・・私は、工房って呼べる所は持ってないよ?魔術の鍛錬所にしているところならあるけど・・・」

「そうなの?・・・教えて貰って良い?下手に近づかないようにしないといけないから。」

・・・他人の工房に、足を踏み入れるのは自殺行為って話だったな。

「良いけど・・・別に危険は無いよ?なんなら一緒に見に行く?」

「え!?いいの?」

「いいよ、じゃあいこうか?」

・・・行くことになったようだ。

・・・俺も、一緒に行くかな?なんか貴重な意見も聞けるかも知れないし。

・・・結局、セイバーも一緒に行くことになった。

――――縁側へ。

「ここが、私の鍛錬所・・・まあ縁側だけど。」

着くなり、志保はそう言った。

・・・うん、いつ見てもわからないな・・・結界。

「へ・・・?あ、アンタこんなところで鍛錬していたの!?」

「見たところ・・・普通の縁側、にしか見えませんが・・・?」

・・・セイバー達にも、わからないようだ。

流石親父の最高傑作・・・

「・・・まあ、縁側だね。

でも、切嗣の特別な結界が張ってあって、そこの中で鍛錬をしてたんだ。」

「「・・・結界?」」

「う~ん、見せた方が早そうだね――――接続、開始!・・・ってあれ?」

言うが早いか、魔術回路を起動させながら足元に手を置いたが・・・

・・・ん?なんだ?あれ・・・

足元には黄色い・・・羽?が落ちていた。

「わっ!?ちょ、いきなりやるな!?」
＜ガシャン!!＞
「・・・あ。」

そして、結界の起動に驚いた遠坂が、手から何かを落として・・・
割れた。
あれって・・・たしか、クロウに貰ったエーテル!?

「な!?なんですか!?この魔力は!?」

セイバーが慌てるのも無理は無いな・・・
・・・黄色い光が、あたりを包み込んだ。

――そして・・・

「くっ!?何!?・・・って・・・あれ?」
「ちょ!?な、なんなの!?・・・って、なに?コレ・・・」
「くっ!?無事ですか!シホ!!・・・それは?」

光が収まったとき・・・魔方陣の上には・・・

――無垢なる白色
――美しき楕円形
――光沢を持つ殻

・・・つまり、タマゴがあった・・・ダチョウのよりも大きな。

「・・・ってなんでさ。」

良く見ると、タマゴの上には、先ほどの黄色い羽が乗っていた。

「もしかして・・・何か、召喚しちゃった・・・？この陣、思い返せばクロウを呼んだ陣だったし・・・（汗）で、でも防御結界のはずなんだけどな～・・・（汗）」

志保が、額にでっかい水玉くっつけながらそんなことを言ったが・・・

・・・可能性は、ある・・・のか・・・？

もしかして・・・

「なあ・・・その羽・・・もしかして、“幻想の道具欄”のアイテムなんじゃないか？・・・だったら、そんなことが起きたって違和感無いぞ？」

元を正せば、エーテルもそうだし・・・

「・・・可能性はありそうね・・・その羽と、エーテル・・・クロウに、訊かなきゃいけないことが増えたわね・・・」

・・・でも・・・どうしようか？

「このタマゴ・・・どうする・・・？うっかり不死鳥が生まれるとか言われても俺は信じるぞ・・・」

・・・あの反則アイテムの一部だしな・・・

「う・・・そ、そうね・・・セイバーは、何かわからない？」

「いえ・・・そこまで大きなタマゴは見たことがありません。」

「・・・と、とりあえずクロウが帰ってくるまで刺激しないように！！」

「「「了解。」」」

・・・と、そのとき・・・外から、エンジン音が聞こえてきて、家の前で消えた。

「帰ってきた・・・のか？」

俺が呟いたときには、既に三人は消えていた。

・・・って速っ！？

・・・タマゴ、置いていってるし・・・

一応・・・持っていくか・・・

そして、タマゴを抱えた俺が玄関に着いたとき。

「・・・遅かったね、クロウ。」

「で？・・・勿論説明してくれるのよね？定霧さん？」

「・・・何故、ランサーが居るのですか・・・？」

・・・龍と、竜と・・・獅子が、見えた・・・

「す、すまん・・・助けようが無い・・・」

・・・俺は、助けるのは無理だな・・・クロウ、頑張ってくれ・・・

――next　side クロウ

――第八話に続く。

“第九、五話／「一夜の語らい…なんてな。」”

――あの長い一日の後、俺は一羽のチョコボと語り合った。
俺と、同じ場所から来た者と・・・
これは、そんな二人だけの語らい。

“第九、五話／「一夜の語らい…なんてな。」”

――sideクロウ

俺と子チョコボ（仮）は、縁側に移動していた。

「さあ・・・何から話そうか？
・・・とその前に・・・名前は？まだ訊いてなかったな。
俺は定霧　久郎・・・クロウでもクロでも良い。」

そして・・・縁側に腰掛け、話を始めた。
・・・あ、そういやアーチャーが聞いてる可能性もあるか・・・ま、いっか。

「（え～・・・っと・・・ボク、名前が思い出せないんだ・・・人だった頃の名前。）」

名前を訊いたが、こんな答えが返ってきた。

「名前が・・・わからないのか？」

「（うん・・・その・・・良ければ、名前付けて貰ってもいいかな？）」

そして・・・俺に、名前を付けてくれと言って来た。

「え・・・いいのか？俺は・・・君を・・・」

殺したのに・・・そう言おうとしたが。

「（うん・・・というか、だからこそ・・・かな？）」

その言葉を察したのだろう、コイツはそう言い返した。

・・・思うところもあるが、要望には答えよう。

「そうか・・・」

名前・・・か・・・

「それは・・・チョコボとして、でいいのか？それとも・・・」

ソレによってどんな名前を付けるか、が変わるのだが・・・

「（う～ん・・・どっちでも通じる名前がいいかな？）」

「わかった・・・」

チョコボ、で・・・メス、か・・・

・・・アレしか思いつかんな・・・

「・・・ココ。」

「（ココ？それが・・・ボクの名前？）」

「ああ・・・嫌か？」

「（ココ・・・うん！気に入ったよ！）」

まあ何はともあれ、名前も決まったことだし・・・

「じゃあ・・・話をしようか？」

「（うん・・・あの・・・久郎って・・・何者なの？）」

「俺は・・・どこにでもいる・・・とは言い難いくらい身体が頑丈なだけの大学生・・・だった、かな。」

そう、後は少々人よりトラブルに巻き込まれた回数が多いってことか？

「（だった？）」

「部屋でゲームやってたはずなんだけどな・・・気が付いたらここにいて・・・
今は・・・ミミック・・・物真似師のサーヴァントだな。」

・・・いきなり、切りかかられて・・・志保に助けられて、今に至る。

「（・・・そうなんだ・・・）」

「お前は？」

「（ボクは・・・よくわからないんだ・・・男子中学生だったはずなのに、気が付いたら赤ちゃん・・・しかも女の子になってて・・・あの大火災に巻き込まれて・・・それで・・・）」

・・・大火災・・・志保と、士郎の過去を焼き払った・・・

「あそこにいた・・・のか？」

・・・教会、か・・・

「（うん・・・で、久郎が来て・・・）」

「・・・俺が、お前達を・・・」

・・・ころ

「（助けてくれた！！）」

し・・・って・・・

「・・・え？」

違うだろ！？

俺は・・・君達を・・・

「（本当だったらね？あそこにいた皆は、全員あのまま死んじゃってたんだよ？

・・・けど、久郎が来てくれたから・・・三人位かもしれないけど、助かったんだよ？）」

・・・！！

「（だから・・・ありがとう、お兄ちゃん！ってボク達は感謝したんだよ？
だから・・・さ・・・そんな辛そうな顔しないでよ・・・ずっと・・・辛そうな顔してるよ・・・・？）」

「そう・・・か？俺は・・・そういうのはあんまり顔に出ないんだがな・・・」

「（うん・・・ボクは、昔から人の表情が何故か読めるから。
・・・その、人を殺したりしたのが・・・初めてだったんだ・・・ね？）」

・・・俺の、観察眼みたいなモノか？

「・・・ああ。
当たり前だよな・・・ちょっと前まで、普通に・・・暮らしてたんだ・・・そんな大学生が、人を殺したことがあってたまるかよ・・・」

ああ・・・そうか・・・何か、ランサーとあった時から俺のテンションとかが色々とおかしかったのは・・・そういうこと、か・・・

「（・・・普通に、生きてた人・・・一般人には、この世界は辛いよね・・・この、Ｆａｔｅの世界は、さ・・・）」

・・・？

「なんだ・・・？その・・・運命（Ｆａｔｅ）って・・・？」

「（え・・・？も、もしかして知らないの!?Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔを!?）」

Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ？
・・・もしかして・・・漫画か何か？
聞いたことがあるようなないような・・・？

「知らないな・・・俺は・・・」

「（そんな!?じゃ、じゃあ知らないで・・・あそこに!?
・・・Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔっていうのは、ボク達のいた世界で発売されていたゲームで・・・漫画化、アニメ化・・・映画化もされてた有名作で・・・今、ボク達がいる世界は、そのＦａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔの世界だよ!?）」

・・・以前考えた、途方も無い馬鹿な考えが、当たっていたのか・・・

「そうか・・・でも、ソレは違うぞ、ココ・・・」

・・・俺は、気が付いたら言葉を発していた。

「（・・・え？）」

「ここには、俺がいる・・・そして、お前もいる。
俺達の存在が・・・いろんな意味で、運命の物語を変えていく。
・・・ほら？もう、別物だろう？」

そのＦａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔって作品に・・・きっと、ミ

ミックなんてサーヴァントは存在しないのだろう。
・・・でもなければ、コイツが“俺”のことを知らない理由が無い。

「（あ・・・
ハ、ハハハハハハハハ！！そっか！！ボクは、そんな簡単なことから間違えていたんだ！！！）」

俺の言葉を聞いて、一瞬固まった後・・・ココは、いきなり高笑いした。

「ココ？」

「（当たり前だ！！ボクは・・・お父さんも！！お母さんも！！・・・この世界も！！！自分自身も！！！全部！！全部フィクションだって思ってた！！！！）」

そして・・・その、胸の内を叫んだ・・・
それは、笑っているようで・・・
それでいて、悲鳴のようで・・・

「・・・お前・・・」

「（ああそうだよ！！ゲームの世界だって勘違いして、調子に乗って！！！逃げられたはずなのに逃げ出さなかった！！！！だから・・・だから・・・お父さんも・・・お母さんも・・・）」

・・・泣き声、だった。
俺の耳に聞こえるその声は・・・確かに、泣いていた。

「（皆・・・みん、な・・・ボクが・・・ボク、が・・・）」

――気が付いたら、俺は・・・ココを、抱きしめていた。

「（っ！？な、何！？）」

――傍目はどうだか知らんが、元がなんだかもよくわからないが・・・

俺には、泣いている女の子にしか見えなくて・・・

「・・・っ」

――あの時、俺が見捨てた女の子にしか、見えなくて・・・

「（え・・・？泣いて、るの・・・？）」

――どうしようもなく、自分が情けなくて・・・

「みたい、だな・・・本当に、情けねぇな・・・俺・・・何やってんだろうな・・・本当に、さ・・・」

――俺は・・・色々なモノが、溢れ出していた・・・

「・・・ハハ・・・ッ・・・アイツ等に・・・妹（サヤ）に、会わす、顔も・・・っ・・・ねぇ・・・」

――一度、決壊してしまったら・・・止まらなかった・・・

「・・・めん・・・ゴメン・・・ヤ・・・ゴ、メンな・・・」

――sideココ

「・・・めん・・・ゴメン・・・ヤ・・・ゴ、メンな・・・」

気が付いた時には、抱きしめられていて・・・
抱きしめてくれた人が、泣いている・・・

――誰が？
・・・ボク達を、救ってくれた（殺してくれた）ヒト。

――何で？
・・・ボク達を（が）殺した（頼んだ）から？

それに思い至った瞬間、この、優しいヒトが泣いているのが、どうしようもなく許せなくなって・・・

「クェ・・・（なんで・・・）」

この、優しいヒトを泣かせてしまった自分が、情けなくて・・・

「クェェ・・・（なんで・・・）」

この、鳥類の姿が・・・喋ることも侭ならない、抱きしめ返すことも出来ない自分が・・・悔しかった・・・

「クェェェ・・・！（久郎・・・！）」

だから、ボクは・・・

＜ドゲシッ！！＞

「ぐふっ！？」

――――チョコボキックを、かました。

そのまま、後ろにバックステップ。

着地と共に光が生まれ、夜中なのに、あたりが一瞬明るくなる。

「い、いきなり・・・何、を・・・」

「あやまるなっ！！謝られたら、こっちは・・・どうすればいいのさ！？」

それを気にせず、スックと立ち上がって捲くし立てた。

・・・あれ？視点が高くなった？・・・今はどうでも良い！！

「お、お前・・・一体・・・」

「謝らなきゃいけないのは、こっちじゃないか！！ボク達が死んだのは、久郎の所為じゃない！！」

久郎が、何か言いかけるがそれを封殺し、捲くし立てる。

「いや、おま・・・」

「ああそうさ！！確かに頼んだのはボク達だし、頼まれて実行したのは久郎だよ！！けど！！」

「そ、それより、おま・・・」

「黙って聞けぇ！！だけど！！！それが原因で、泣かないでよっ！！！後悔、しないでよぉっ！！！！」

「！？」

「あのまま、全員死んじゃうハズだった！！！だけど、久郎が来て

くれたから!!助かった子だって、いるんじゃないか!!!助けられたって、思って、るんじゃ、ないか!!!!!!」

途中から、涙が流れてきて・・・声が、上手く出せなくなって・・・

「・・・ちょっ!?」

「それを、否定しないでよ・・・!!助けたことを、後悔、しないで・・・よぉ・・・っ!!」

――気が付いたら、ボクは久郎の胸に飛び込んで、抱きついていた。

「・・・」

「じゃ、なかったら・・・助かった、皆が、かわいそう、だよぉ・・・」

・・・ああ、もう何言ってるか自分でも良くわかんないや・・・

「――ゴメン、な。」

!?不意に、久郎が・・・また、謝ってきた。

ボクの、言葉じゃ・・・届かない、の?

「――そう、だよな・・・他ならない自分が取った行動を後悔したって、意味無いよな・・・

ああ・・・そうだよな?サヤ、アカ・・・?」

!!・・・そう思ったけれど、届いた!?

そう思って見上げた時、久郎の顔が見えた。

――優しい、微笑みだった。

「――ありがとう、ココ・・・やっと、自分を思い出せたよ。」

「～～～～～！！？」（／／／／／／）

――完全な、不意打ち・・・

「ば、バカ！！遅いよ！本当に、もう・・・」

しどろもどろになるボク。

――ああ、これは・・・やられちゃった、かな？

「ハハ、本当にな・・・しかし・・・志保といいココといい・・・俺は随分と男前な“女の子”に縁があるんだな・・・って、アカのヤツも男前だったか。

・・・それはともかく・・・」

？アカって誰？それに・・・志保？そういえば、さっきもみくちゃにされた時に、赤毛の女の子が・・・ってアレ？金色はセイバーだし、黒髪ツインテは遠坂・・・さっきボクがパイルダーオンしちゃったのが士郎・・・アレ？一人多い？・・・あ、久郎のマスター？

「――“幻想の道具欄（ファンタジック・アイテム・リスト）”」

＜シャン！＞

・・・などと考えていると、久郎が宝具（多分）を使ったのか蒼銀の光と鈴の音のようなモノが発生した・・・ってなんで！？

「久郎！？」

「・・・いいかげん寒いんじゃないか？と思うのと・・・仮にも女

の子がそんな格好で男に抱きつくものじゃないと思う・・・」

・・・へ？

何のことだかわかっていないボクを、ふわっと布・・・マント？が包み込む。

（・・・あ、あったかいや・・・）

・・・じゃなくて！？“そんな格好”？チョコボなのに？

そして、自分を見てみると・・・

――そこには、手があった・・・人間の、手が・・・

「・・・え？あれっ！？に、人間になってる！？」

大慌てで、自分の身体を確認する。

――ボクは、全体的に色白で髪は金色の女の子になっていた・・・控えめだけど、胸も膨らんでるし、股間に紳士もいないし・・・１４～１６歳くらい？

って・・・む、ね・・・？

まって・・・なんで、久郎は、ボクに、マント、を・・・？

――気がついてしまった・・・

（――ボク、ハ・ダ・カ・・・？）

・・・イツ、カラ・・・？

「ネ、ネェ・・・クロウ・・・？ボクハ、イツカラコノスガタダッタノ・・・？」

「・・・俺が蹴り食らった直後・・・お前がバックステップ踏んで、着地したあたりから・・・だけど？」

・・・つまり、僕は・・・

――全裸で、説教した上に、抱きついた？

――誰が？・・・ボクが。

――誰に？・・・久郎に。

――裸で？・・・全裸で。

――見られた？・・・見られた！

「～～～

赤い彗星!?でもまったくもってそのとうりだよっ!!!ボク、思いっきりチョコボのつもりだったのに!!!!!?うわぁ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～ん!!!!!

よりにもよってこのタイミングで人間化!?今はチョコボのままで良かったのにぃ～～!!!!!!!

・・・と、悶えながら地団駄踏んでいたら、どうやらボクに変化が起きていたらしい。

「・・・ってオイ?お前、また・・・!?」

「・・・クェ?(・・・ふぇ?)」

――また、チョコボに戻っていた・・・

「・・・なんか知らんが・・・どうやら、お前自身で切り替えられる・・・んじゃないか?制御、出来ていないみたいだが。」

・・・なんで、久郎は冷静なのさ・・・でも、そう・・・なの、かな?

「クェ、クェェ・・・(うぅ、ハズカシイ・・・)」

「・・・お互いに、見事に恥を晒したな・・・ハハ。まあ、この件は置いて置こう・・・この後の事だが!!」

若干、赤い顔をした久郎はそういって強引に話題を変えた。

「俺は、この世界で生きる・・・生き残るつもりだ。
・・・二度も死んでたまるか（ボソッ死なせて、たまるか・・・！）
・・・それに、しがない物真似師にも、意地はあるし、な（ボソボソッ受けた恩は、返す・・・志保にも、ココにも・・・）・・・
お前は？」

！？

きっと、今の小声で言った部分・・・それが、久郎の本音・・・かな？

・・・やっぱり、格好良いじゃん・・・（／／／）

なら・・・ボクは・・・

「クエェ・・・ク、クェ。（ボクも・・・手伝うよ。）
クェ、クエクェ・・・クェ？（流石に、三回も死にたくないし・・・ね？）」

（・・・久郎に、恩返ししたいし・・・傍に、いたいから。）

――こう思えるってことは・・・やっぱり、そう・・・なのかな？（／／／／／／）

「そっか・・・じゃあ、一緒に、戦ってくれるか？俺と・・・いや、俺達と・・・」

「クェ！！（勿論！！）」

「これからよろしくな？相棒（ココ）！」

――相棒！？ボクが、久郎の！？
や、やば・・・嬉しい・・・（／／／）
じゃ、じゃあ・・・ボクも・・・！

「クェ！！クエ！！クェェ！！（勿論！！よろしくね！！相棒（久郎）！！）」

――――ｓｉｄｅクロウ

――――こうして、俺達は“相棒”となった。

この後、俺は相棒から原作・・・“Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ ｎｉｇｈｔ”の概要を訊いた。

ただし、あくまで概要・・・“原作”の深い（設定）部分は黙っていて貰った。

何故って？それは簡単、だって、もう既に“原作”から外れていたから・・・あてには出来ないという判断。

・・・どうやら、“Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ ｎｉｇｈｔ”には、“ミミック”どころか“衛宮志保”もいなかったらしいし・・・

――――俺達の目的・・・“聖杯戦争を生き抜くこと”そして・・・

“この聖杯戦争で、これ以上死人を出さないこと”・・・どちらも、元一般人には難しいけど・・・やる、以外の選択肢は無い！ファイトだ、俺！！

――「お兄ちゃん？抱え込むのは、お兄ちゃんの悪い癖！！」
――「そうだぞクロウ？私の一番好きな言葉を教えてやる！“反省はしても、後悔はするな！！”」
――「そのとーり！！それに、お兄ちゃんは不敵に笑ってるほうが似合うんだから！！」
――「まったくだ！！お前に、泣き顔は全っ然似合わん！！だから・・・」
――「お兄ちゃんには、ハードボイルドな雰囲気が似合うんだから！！だから・・・」
――「――落ち込む暇があったら、前を向け！クロウ！」
――「――おにいちゃんは、いつでも不適に笑っていて！ハードボイルドに！！」

＜・・・わかった・・・その、ハードボイルドってのがよくわからないが・・・やってみるさ。＞

――――「ああ！！それでこそ、私の最高の・・・大親友だ！！」

――――「うん！！それが、私の自慢の・・・お兄ちゃんだから！！」

“第九、五話／「一夜の語らい…なんてな。」”（後書き）

皆様、この駄文をお読みくださり、本当にありがとうございます！！

さて・・・ストックがなくなりました。

・・・新しいパソコンを入手するまでは、“超”鈍亀更新となってしまいます。

・・・次回の更新はいつになるか・・・気長にお待ちいただけると幸いです。

ステータス&プロフィール

ステータス&プロフィール

クラス：ミミック（物真似師）

“ミミック＝擬態”の意味を持つイレギュラーなクラス。
クロウが“ミミック＝物真似”と意訳したため、物真似師となった。

このクラスに該当する条件は意外に厳しい。
「自分自身の究極の何かを持たない」
「何かの真似をしたことがあり、それに見合った技能を持つ」
「自身の肉体が人類の限界点」
である。

クラス補正として、全ステータスに1ランク上昇がある・・・ハズだったが、彼の幸運値が規格外に低かったため、全てがそちらに割り振られてしまった。

マスター：衛宮　志保

詳細は“衛宮　志保”にて。

真名：クロウ（定霧　久郎・サダギリ　クロウ）
性別：男
属性：混沌・中立

“現実”からの“来訪者”。
自分で借りたぼろアパートでゲームをやっている途中、落雷によって死んでしまった青年。
気が付いたら志保に召喚されていた上、初対面で命を救われている（一話・零、五話）。

幼少時代を病院で過ごしていた、そのため、少々常識が無いとされる言動がちらほら・・・
彼の人格形成には、当時放映されていた“仮面ライダー”が影響している。

彼は、所謂“レトロゲーマー”だったため、往年の名作をやりこんでいたようである。
サーヴァントとしての能力も、それが反映されているようだ・・・

基本的には善人で、面倒見が良い青年。
“現実”では、“チート”と呼ばれるほどの肉体、才能を持っていたが・・・
天は彼に“幸運”を与えなかった。
彼本人の幸運は、“生きていることが既に奇跡”なレベル。
・・・町に出れば、リアルに隕石に直撃されるレベルだったりした。
彼が生きていたのは、彼の妹の幸運（ＥＸ）に救われていたから。
ただ、彼の“命日”に彼女と大喧嘩しているため、その加護が消えてしまったのだろう・・・

口癖は“戯け”と、単語が“片言”になること。
趣味は“ハーブ（薬草）の栽培”“ゲーム（ＲＰＧ）”“仮面ライダー”
特技は“声帯模写”“鑑定”“人間観察”“一目で他人のスリーサイズを言い当てる”

“苦手”は“ヤンデレ”“巨乳”“女心”

身長１８２ｃｍ、体重９８ｋｇ。
外見は“年が足りないハードボイルド”といった感じ？
日本人色のアーチャーに万華鏡なイタチさんのような眼の下のライン、そして前髪を左側のみ下ろすとイメージが近いかもしれない。

ステータス
筋力：Ｃ＋
耐久：Ａ
魔力：Ｅ
俊敏：Ｄ＋
幸運：Ｅ－（生前：－ＥＸ）
宝具：？？？

クラススキル
人間観察・Ａ
人物を観察し、その人物の全てを見極めるスキル。このランクだと、観察が終了した相手のステータスのみならず、その深層心理まで読み取れる。この観察にかかる時間は、対象の技量、精神構造によって変動する。

物真似・Ａ
他人の動き、技能を真似するスキル。このランクだと、目視してから真似するまでのタイムラグがなく、相手の技を相手の技で迎撃可能。

固有スキル
猿真似・Ｂ（Ａ）

他人の動きをそのまま鏡映しに真似するスキル。クラススキル：物真似との相乗効果により、タイムラグ無しで真似できるようになっている。

声帯模写・A
他人の声を完全に再現可能。

鑑定士・A＋
物の真価を鑑定するスキル。このランクだと発動前の宝具でも、眼に映ればその能力を把握できる。人物の鑑定には、かなりの時間を要する。

一般人・EX
気配が一般人になる。サーヴァントと契約したマスターでもない限り、彼をサーヴァントと見破ることは不可能。

高速思考・???
常人では考えられない速度で思考を展開するスキルだが・・・？

交渉・B＋
他人との交渉能力のこと、他人との交渉を有利に進めるスキル。

意思疎通・C
意思を持つ生命との意思疎通が可能となるスキル。このランクだと、人語を理解している生物の“声”が聞こえるため、対話が成立する。

宝具
物真似師の意地（プライド・オブ・ミミック）

対人宝具・ランクＡ　レンジ・０　最大捕捉・１人

自分の耐久以外のステータスと姿を、目の前の他人と同じにする能力。発動中は相手の持つ固有スキルもコピーするが、その身にかかる加護はコピーできない。

ただし、相手の技術的、身体的な能力からくるモノであるならば、それが魔術、宝具であっても真似することが可能。

あくまで真似でしかないので、相手が取った行動しか真似（ロード）する事が出来ない。その範疇を越えると、範疇を越えた部分から解除される。

発動中は魔力が常に消費され続ける。

服装は、武装（コート）が変化して、相手のモノを外見だけ真似る。ただし性能、色は元のまま。

隠し能力として、コピーした相手の記憶を見ることが出来る。（相手の“脳”をも再現するため。）

幻想の道具（ファンタジック・アイテム・リスト）欄

対物宝具・ランクＣ　レンジ・―　最大捕捉・―

某ＦＦのアイテム欄の事。自身の所有物を９９種、９９個ずつを脳内に存在するステータス画面の中に保存しておける。

それらは光と音のエフェクトが発生するが、タイムラグ無しで取り出し・装備、収納が可能。

なお、使用には魔力等の消費はない。

“物真似師の意地”発動中は使用不能。（出して置いたものはそのまま使用可能）

なお、一度でも内部に保存したモノは、ランクＥ－相当の宝具となる隠し能力がある。さらに、一定の条件を満たしたモノはＦＦアイテムに変化する（例：純金製の針を入れる＝“金の針”に変化）。

・・・宝具に関しては、まだあるようだが・・・？
本人曰く、“ネタ宝具”らしい・・・

衛宮　志保

ヒロインその一？

ミミックのマスター。
本来は別世界の存在。“衛宮　士郎が女性だった場合”というＩＦ。
十年前の大火災、その時士郎に覆い被さるように倒れていたらしい、
詳細は不明。

彼女の存在により、ミミック云々以前にかなり歴史が変わっているようだ。

外見描写は“もう一つのプロローグ”参照。
ツナギ姿に違和感が無い（ｂｙ綾子）
幼く見えるが士郎と同い年である。

趣味は“機械いじり”“物品修理”“家事全般”“人助け”
“好き”は“かわいい生き物”“タイヤキ”
特技は“料理”“投影魔術”
“苦手”は“こげ茶色の悪魔”“恋愛相談”“ナンパ”

クロウに対しての思いは・・・？

性別、考え方が女性なだけで、基本的には士郎と同一の存在。
ちなみに、呪文詠唱は日本語である。

ココ

ヒロインその二？

“現実”からの“転生者”
種族は“チョコボ”、性別は“女”。
これで二度目の転生である。

一人称は“ボク”。
“男子中学生（死因不明）”～“女の子（焼死？）”～“チョコボ（現在）”と転生している。

クロウへの思いを自覚しているようだ。
クロウに“相棒”と呼ばれ、かなり嬉しい。

“原作知識”を持っているが、この世界ではあまり役に立たないとクロウに諭された。

なんと、人間になれる・・・が・・・まだ条件がよくわかっていない。
人間の姿での外見は、短い金髪、金色の目、色白の肌。
１４～１６くらいの外見年齢を持つ、ちょっとボーイッシュな美少女。

趣味は“ゲーム”“日向ぼっこ”
“好き”は“野菜”

特技は“蹴り”“変身（まだ制御できていない）”
“苦手”は“台所のイニシャルG”“教会”

“第十話／「人の趣味を馬鹿にしてはいけません。」”

ーーー人は誰でも、仮面ライダー。

“第十話／「人の趣味を馬鹿にしてはいけません。」”

ーーーside志保

・・・夢を見ていた。

ーーー「お兄ちゃん…お父さんが…お母さんがぁ…」

少女が泣いていた…

ーーー「これから…どうすればいいの…？」

真っ白な、無機質な部屋の中…二人の物言わぬ人影に泣きついていた…

ーーー「クロウ！小父さん達が事故にあったって…」

そこに駆け込んでくる、黒い長髪の少女。

そして、何も言わず、ただ佇む少年。

ーーー「…っの戯け…サヤの彼氏をぶん殴るんじゃ、なかったのかよ…親父…」

少年は、心底辛そうに、言葉を紡ぐ…

ーーー「クロウ…」

見ているこちらが、辛くなるような、そんな光景…

ーーー「まだ…家庭料理、教わってねぇぞ…母さん…」

…場面が、変わる…

…ここは…墓地…？

お墓の前に、少年が立っている…
雨だというのに、傘も差さずに…

ーーー「お兄ちゃん…風邪、ひくよ…？」

先ほど、泣いていた少女が、少年に近寄る。

ーーー「クロウ…」

あの、長髪の少女も、一緒に近寄る。
少年は、口を開く…まるで、少女達に気がつかないかのように。

ーーー「…人は誰でも…仮面ライダー…か…なってみるか…仮面ライダーに、さ…」

仮面ライダー？
なんだろう…それは…？

ーーー「お兄ちゃん？」
ーーー「クロウ？」

心配そうな少女達を尻目に、深呼吸をする少年。

ーーー「変…身！！」

そして少年は、いきなり空を向き、声を張り上げた。
そして、振り向く。

ーーー「帰ろうぜ！サヤ！アカも来いよ！親父達を送るための…馬鹿騒ぎだ！！」

その表情は…とても晴れやかな笑顔だった。

ーーー「えっ！？」
ーーー「ちょっ！？」

混乱する少女達の手を引き、走り出した…

…いつのまにか…雨は、やんでいた…

「…やっぱり…クロウ、か…」

目を覚ました私は、そんなことを呟いていた。
昨日も見た、私の知らない夢。

…クロウの、過去。
あの、小さい女の子が、妹さん…
そして、あの髪の長い女の子は…彼女さん？
そういえば…クロウのこと、私はちゃんと知らないんだな…
…それにしても…

「仮面ライダーって…何？」

…後で、訊いてみよう…

「…シホ、おはようございます。」

…そう思った時、横から声をかけられた。
…そういえば、昨日からセイバーと同室になったんだっけ？

「あ、うん…おはよう、セイバー。よく眠れた？」

とりあえず、返事をすることに。

「はい…ところで、仮面ライダー…とは？」

…すると、私にもわからないことを訊いてきた。
…独り言…聞かれてたんだ…

「聞こえてた…？私にもよくわかんない…クロウなら知っている筈だけど…」

「ミミック…ですか？何故？」

言ってもいいのかな？

「…夢に出たんだ。…多分、クロウの過去だと思うんだけど…そこで、クロウが呟いたんだ、『人は、誰でも…仮面ライダー…か』って。」

…どういう意味なんだろうか？

「彼の過去ですか…なるほど、ラインを通じて…おそらく、何かの称号でしょう。
…ミミック、といえばシロウと共に先ほど部屋を出たようですが？」

…む…出遅れたか…

「そう…？多分朝食の準備、私達も行こう。」

「そうですね。」

…仮面ライダーは、直接訊いてみよう。

そうして、私達は洗面所で顔を洗った後、制服を着て居間へと移動。
…案の定、士郎がキッチンに立っていた。

クロウは…テーブルの横で、昨日の…チョコボと話？をしていた。

…チョコボは、何故か白いネコミミフードと、それに合わせた服を着ていた。
…可愛い…（／／／）

「おはよう、クロウ。」

とりあえず、挨拶。

「ん？ああ、おはよう志保、セイバー。
朝食は士郎が作るとさ。後、ランサー組はしばらく寝てるそうだ。」

「クェ！」

すると、クロウと共にチョコボも挨拶を返して来た。
…ペットを飼う人の気持ちが、わかったよ…

「おはようございます、ミミック、ぇと…チョコボも。」

セイバーも、クロウ達に挨拶。
そういえば、まだ名前を聞いてなかったね…セイバーも、一瞬戸惑っていた。

「ああ、そうそう…コイツの名前は“ココ”だ、覚えておいてやれ。」

すると、クロウはチョコボの名前を教えてくれた。
…“ココ”か、覚えておこう。

「うん、わかった…改めておはよう？ココ。」

「クェ！」

…う～ん…ココの言葉がわかるクロウが羨ましいな…
…そういえば…

「何を話していたの？二人？で。」

ココとクロウは、何を話していたんだろう…？

「ん？ああ…相棒…ココが食べられそうなモノは？という話をね。…俺の記憶によると、チョコボの主食は野菜…“ギサールの野菜”っていうんだが、一応“幻想の道具欄”に入っていたからそれを出そうかと思ってね。」

どうやら、ココの食料についてだったらしい。
ギサールの野菜…？ちょっと気になるかな…

「へぇ…おいしいの？それ。」

ちょっと、好奇心で訊いてみた。

「ふむ…葉にはほのかな甘味がありやわらかい、本体にはわずかな苦味がある。人が食っても普通にうまいぞ？ちなみに、ピクルスにすると、強烈な臭みがあるけど非常に美味しいらしいが…まだ試してないけどな。
アイテムとしての効果は“バーサク解除”…精神の安定だな。後はチョコボの育成用品だったりチョコボを呼び出したり…だったか？」

「クェ。」（コクン、と首を縦に振る）

「で、俺は現在９５個所持している…どうにか栽培したいところだな。
…そういや、微妙に名前の違う奴は、ポーションと同等の回復アイテムとしても使えたか？まぁ持っていない物はどうでもいいか…

こんなとこか…他にも、チョコボの育成用の野菜は存在するけど他は一種類しか持ってないな。」

と、時々脱線しながらも結構詳しく教えてくれた。
へえ…食べてみたいかも。
…でも、数が限られているんじゃぁココに悪いよね…

「…庭、少し使う？栽培用に。」

クロウが、栽培に成功したら分けてもらおうかな？

「そうだな…けど、聖杯戦争に一区切りついたらな。」

ま、仕方ないかな…
あ、そういえば…

「ねぇ…クロウ？ちょっと訊きたいことがあるんだけど…」

「なんだ？」

…あの夢の事、訊いてみないとね。

「その…クロウって…お父さんとお母さん、事故で…亡くなっているの？」

「クェ！？」
「ッ！？」

あの夢の内容を、確認してみた。
すると、ココはかなり驚いた様子でクロウを見上げた。

クロウは、驚いた後、硬い表情で口を開く。

「…お前…なんでそれを知っている…」

それは偽りを許さない、といった表情、口調だった。

正直、怖かった…けれど自分が振った話題。

…逃げることはできない。

「夢…夢を見るんだ…クロウを召喚したときから。」

「夢？」

思えば、あの病院の夢も…クロウなんだろう。

「はじめは、病院で…ぼうっとしている男の子の夢。

…今朝は、泣いている女の子と、辛そうに佇んでいる男の人…駆け込んでくる女の子…そして、お墓。」

何故か忘れない夢の内容。

それを、クロウに語る。

「…そ「お～は～よ…ぅ…し～ろ～…ぎゅうにゅ～…」って凛！？えらいことになってるぞ！？」

と、クロウが口を開いた瞬間、遠坂が居間に出現。

…まるで、幽鬼のようだった。

そこには、学園のアイドルとしての威厳も…魔術師としての威厳もなかった。

「…！？」

セイバーなんか、驚いたまま固まってしまったし…ココも、もともと丸いつぶらな瞳が余計に大きくなって、まるで落ちそうだった。

「と、遠坂！？どうした！？」

そのまま、遠坂はキッチンへ移動。
士郎はテンパっている。

「ぎゅ～にゅ～…」

「ぎゅ、牛乳？あ、ああ…ほ、ほら…」

士郎は、要求に応え、冷蔵庫から牛乳を取り出し、遠坂に渡した。

…そのまま、牛乳を一気飲みする遠坂。

「…全校男子諸君には見せられない光景だね…一成が見たらなんて言うやら…」

私？ずっと呆然と視線で追ってただけ。
本当にえらいことになってる…

…シリアスな空気、どっか逝っちゃったよ…

「あ～…ようやく目が覚めた…ってあれ…士郎！？そ、そういえば泊まって…
～～～～～～！！！！！！！！？」

ドドドドッバタン！！ダダダダダ……

目が覚めた遠坂は、声にならない悲鳴と共に走り去った。

「え～…っと…俺はどうすれば…」

呆然と、士郎は呟いた。

「士郎？忘れてあげて…後生だから…」
「忘れておけ…自身の命のために…」
「見なかったことにするのが正解かと…」
「ク…クェェ…」

…その場にいた全員は、思い思いの言葉で士郎に声をかけた。

遠坂…朝、弱いんだね…

……

「…さっきのことは、忘れて…」

顔を洗った後、戻ってきた遠坂の第一声がこれだった。

「「「「「さっきのことって…なんのこと（ですか）？」」」」」
「ク…クェ？」

見事に、ハモった。

「そ、そんなことより、凛…少し訊きたいんだが…
サーヴァントと契約したマスターが、サーヴァントの過去を夢に見

る…なんてことはあり得るのか？」

クロウが、無理やり方向転換。

遠坂に質問をしていた。

「ぇ…？あ、ああ…無い、とは言えないけど…なんで？」

気を取り直したのか、遠坂はクロウに逆に質問。

「…志保が、俺の過去を夢に見たらしいからな…」

…ってことは…

「じゃぁ…あれは、やっぱり…」

「確かに、志保の見た通りだ…俺の両親は、俺が高校に入ったあたりで事故死している…」

私の質問の回答が返ってきた。

「何の話？」

話についてこれないのか、遠坂が微妙に戸惑っていた。

「夢を見たんだよ…悲しい、夢…そっか、やっぱりクロウだったんだ…」

「…なるほど…サーヴァントの過去を見たのね…」

私のちょっとした言葉で納得したようだ。

…クロウは、微妙に渋い表情をしている。

「…で？志保は何が訊きたかったんだ？…それ、だけじゃないんだろ？」

と、不意に尋ねてきた。

…確かに、他に訊きたいことがあったんだ。

…まずは…

「クロウ…恋人、いたんだ…」

きっと、あの髪の長い女の子が…クロウの…

「はぁ！？俺に？恋人？」

ってあれ？本気で混乱してる？

「え？あの髪の長い女の子が、恋人なんじゃ…」

もし“そう”なら…

「髪の長い…？あ、ああ！アカのことか！

ハハハ…アイツは恋人じゃねぇよ…腐れ縁の親友だ。

確かに、よく周囲からは夫婦扱いされてたが…なんていうんだろうか…ほとんど家族だったな。

下手な恋人より近い存在だったのは認めるが…一緒に馬鹿やる仲間って感じだったな…甘い空気が流れた例はないぞ？」

「ぁ…そう…なんだ…そっか…」

…あれ？なんで私…今、ほっとした…？

「ふぅん？（ニヤニヤ）」

って…何故に遠坂がニヤニヤと…

「なんでそんなことを？」

と、遠坂に一言言おうとした瞬間、クロウに訊かれてしまった。

…そういえば…なんで…？

「ちょ、ちょっと気になっただけ！え…と、あ、そうだ！！もう一つ訊きたいんだけど！？」

「あ、ああ…なんだ？」

な、なんだか顔が熱いや…

ともかく、あれを訊こう。

「その…“仮面ライダー”って…何？…後、“変身”って？」

「ブフゥッ！？」

「クェフゥッ！？」

と、私にとっての謎の単語について訊いてみたところ…

クロウは思い切り噴出した。

…ココも、何かに咽たようだ。

「な、何故にそこで仮面ライダーが…」

なんとも形容しがたい表情で、そんなことを訊いて来た。

「夢の中で、クロウが呟いてたんだよ…『人は、誰でも…仮面ライダー…か…』って。」

「龍騎!?な、何故に俺はそんなことを!?」

「『なってみるか…仮面ライダーに、さ…』とも言ってたよ?直後に『変身!!』って叫んでたけど?」

どんな意味があるんだろう?

「あ、あぁ~…あの時、か…思い出した…うっわ…俺、人生の分岐点で何叫んでんのさ…」

思い出したのか、何か恥ずかしそうに頭をかいている。

「で?どんな意味があるの?その…仮面ライダー?って。」

「私も気になります。」

と、セイバーと遠坂も気になったようだ。

…士郎は、キッチンで聞き耳立てている。

クロウは、微妙に恥ずかしそうに答えてくれた。

「…“仮面ライダー”っていうのは…そう、だな…俺の生まれ育った世界で、男ならまず間違いなく知っている英雄譚…だ。」

「英雄譚?」

「…言い換えれば、所謂ヒーロー番組だよ…」

…ヒーロー番組!?

あの戦隊ヒーローと動議ってこと?

「プッ!?ヒーロー番組!?うわ…くだらな…」

遠坂は、噴出した上でそう言った。

ーーーその瞬間、クロウの雰囲気が変わった。

「…貴様…今仮面ライダーを馬鹿にしたな…?」

ーーーこの時のクロウは、物凄く怖かった。

「な、なによ…所詮子供向けのヒーロー物でしょ?それを…」

「戯けぇっ!あれは確かに子供向けの番組かもしれないが!子供だからこそ!否!!大人が子供と共に観るから意味がある人間賛歌であり人間ドラマだ!!

そもそも仮面ライダーとは!!!」

ーーーこの後、えらい勢いでクロウは語りだした。

ーーー仮面ライダー。

それは、化け物と呼ばれようと自身の信念を貫く戦士達…

理不尽によって、家族を、人生を、肉体を奪われ…それでも、“人間”として戦いぬいた戦士達。

それは、見返りを求めず、仮面で己の顔を、涙を、悲しみを隠し戦う戦士…
時に、助けた者に感謝をされずとも、戦い続けた戦士達。

それは、戦士達の戦いの歴史…
たった独りで戦い、時に共闘し…なくならない人間の悪意と戦った戦士達。

それは、受け継がれし戦士の魂…
いかなる危機にも、立ち向かった戦士達。

彼らが守るのは、平和や正義なんていう曖昧なモノじゃない…彼らが守るのは…

人を…命を…未来を…笑顔を…

はじめは成り行きかもしれなくても…己の守るべき信念を見つけ、貫く者。

…それが…仮面ライダー

ーーー信念。

泣いている誰かを見たくない…
ただ、普通に生きるため…
戦いを、止める…
誰かの夢を、守りたい…
人を、友を…救いたい…
鬼と呼ばれようと、人を守りたい…
ただ、家族のために…

大切な時間を守るため…
人の奏でる、音を歪めないため…
己の世界を、見つけるため…
愛する町を、守るため…

どれだけ傷付こうと、どれだけ辛くても…
戦い続けた、戦士達の物語…

…クロウは、ここまで一気に語った。
時間にして、二十分程。

「はぁ…はぁ…はぁ…
最早あれは、子供番組の域を飛び越えた存在なんだ…二度と下らんとか言うな…」

…クロウは、どうやらこれが言いたかったらしい。

「ご…ごめんなさい…」

遠坂、撃沈？

…でも…クロウがここまで熱く語れるヒーロー番組、か…ちょっと、観たかったな…

「と、とりあえず落ち着きなさいミミック…」

「…スマン…どうにもこの話題だと熱くなってしまって…」

などと考えていたら、セイバーによってクロウはクールダウンしていた。

…よし、いまなら訊けるか？

「え～…と、ところで“人は誰でも仮面ライダー”って？」

今の説明には、入ってなかったよね？

「あ～…“仮面ライダー　龍騎”の名言…正確には『人間はみんなライダーなんだよ。』だけどな…

…ほら、なんていうかな…俺にとって、仮面ライダーってのは“大事なものを守るため、仮面を被って戦う者”って意味があってだね…

あ～…俺の過去を見たならわかると思うけど…俺って、本来結構根暗だったんだよ…」

「アンタが？根暗！？」

「…両親が死んで、俺が妹を守らなきゃ…なんて思ってね…“笑顔”っていう仮面を被ってみただけ…

…ガキらしい、馬鹿な格好付け方だよな…結局、アイツより先に死んでるし…ハハ…本気で戯けだな…俺。」

…そっか…妹さんのために…

…クロウは、自嘲気味に、笑っていた。

そんな顔を、して欲しくなかった…

自分の所為とはいえ、そんな顔を…そんな笑い方をさせたのが、悔しかった。

「って…志保？お前…

…ハァ…本当に、何やってんだかな…」

何故か、クロウはこちらを見て驚いていて…
ポケットから、ハンカチを取り出し、私に差し出した。

「…こんな戯けのくだらない過去なんかで泣くなよ…
ハイハイ！この話はここまで！！士郎！そろそろ朝飯もできるだろ？」

…泣いてたんだ…私…
クロウの差し出したハンカチを受け取り、涙を拭く。

…そういえば…涙を流したのって…いつ以来かな…

「ああ、もう出来る＜ピンポ～ン＞ぞ…って客？
…あああああああああああ！？桜達が来るの忘れてた！？」

…あ”
しまったぁ～～～～！！！！！？
藤ねぇの事とか、完全に忘れてた！？
ここ二日顔を見てないから、対策を練ってない！？

＜ピンポ～ン…ガチャガチャ…＞
「…出なくて良いのか？」

「あああああ！？ちょ、行ってくる！！」ダダダダダダ！！
「あ、ちょ…戯け！？料理をほっぽり出すな！？…ったく…しゃぁねぇな…」

…どうやら、テンパったのは士郎も同じらしく、玄関へとダッシュ。
クロウが、やれやれといった様子でキッチンへと移動した。

…どうしよう…

「おはようございます、志保さん…って、遠坂先輩!?」
「やぁ、おはよう衛宮…って遠坂!?なんでここに!?」
「ひさしぶりにご馳走になるよ…って遠坂!?なんでここに!?」

そして、居間にはいってきたのは桜・慎二・綾子…憔悴した士郎。
うわぁ…フルメンバー…こ、こんなタイミングで…

「お、おはよう三人とも…遠坂については、また後で…藤ねぇが着いたら説明するよ…」

「そ、そうですか…」
「そ、そうか…」
「そ、そうかい…」

テンパった私達を尻目に、遠坂は涼しい表情でお茶を飲んでいた。
…セイバーは、ひざの上にココを乗せて和んでる…

「おい士郎…危うく魚が焦げるところだったぞ…と、お客さんか?」

そこに、お盆に朝食を乗せたクロウがやってきた。
あぁぁぁぁぁ…説明することはまだあった!?

ど、どうしよう…

「あ!?スマン!!大丈夫だったのか?」
「ああ、ちゃんと仕上げておいた…で、そちらは?」

自然体で会話をするクロウ。

…なんでそんなに自然なのさ…

「ね、ねぇ志保？あの兄さん、誰？」

こんなことを訊いてきたのは綾子。

…なんといったものか…

「え、と…それも後ほど…じゃ駄目？」

言い訳、考えないと…

「…ま、良いけどさ…ちゃんと、説明しなさいよ？」

「やっほ～～～～！！今日の朝ごはんは何かな～～？」

等と考えていたら、現れた藤ねぇ…

「焼き鮭定食ってとこ…とりあえず、ごはんにしようか…」

藤ねぇが暴走する前に、食事を与えておこう…

言い訳を考える時間も稼がないと…

「…」

「…」

「…あ、衛宮、醤油くれるか？」

「ん、はい。」

「…むぅ…これは勝ち、こっちは…負け、かな…」
「シロウ、おかわりをお願いします。」
「ん、こんなもんか？」
「…食えそうか？相棒。」
「クェ…クェ♪」

のどかな風景。
…嵐の前の静けさ、ともいうけど…

「え～…と…ねぇ？士郎？志保？なんで遠坂さんが一緒にご飯食べてるの？それにこちらのイケメンさんとお嬢さんは？」

…来たよ…

「では私がここにいる理由から、でよろしいですか？藤村先生。」

まず、口を開いたのは遠坂。
クロウは…『お手並み拝見』といった視線を遠坂に向けている。

「実は…我が家の老朽化が発覚しまして、天井に大穴が開いてしまい、全館改装工事を行っているのです。
…その間、ホテル暮らしでもしようか、と町を歩いていた所、衛宮さんとばったりと出会いまして…
住むところがないのなら、家を使うといい、部屋ならば余っているから。と提案してくださり、こちらとしても、ホテル暮らしにかかる費用も馬鹿にはならないため…
お言葉に甘えることにしたのです。」

…なるほど、確かに言いそう。
私も、士郎も…

「う、確かに…志保なら言いそう。
本当なの？志保？」

「え、ああ、うん…そういうこと…」

「う～ん…そういうことなら…仕方ない、かな…？学生のホテル暮らしは褒められないし…
志保もいるし、士郎が変なことをしようとはしないはずだし…」

「ご理解いただき、ありがとうございます。」

…おお…あの藤ねぇを理屈で納得させた！？

…まぁ…桜と綾子は納得いってないって顔してるけど…ここは意識的に無視しておこう。

「遠坂さんは仕方ないけど…そちらのイケメンさん達は？どちら様？」

…さて…ここからが難しい…どう言おうかな…

と、クロウがこちらを見て…ウインク？何？『任せろ』？

「では、自分の番…でよろしいでしょうか？
自分は定霧　久郎…少々、衛宮　切嗣さんに縁のある男です。」

…あれ？私…クロウの前で切嗣の名前出したことあったっけ？

「切嗣さん？」

「今まで、少々遠い所にいたのですが…奇跡的にここにくることが出来まして…」

…嘘を、一切吐かないつもりみたいだね…

「たまたま、一緒になったセイバー…ああ、こちらの少女がそうなんですが…と共に、こちらに顔を出したのです。
それぞれ、微妙に似たようなことを切嗣さんの口から聞いておりまして…」

あ、セイバーを巻き込んだ？

「私は、シロウを守るように、と。」

うわぁ…どストレートだよ…クロウも苦笑している。

「自分の場合は…コホン！あ～…あ～…『自分の娘に、苦労はかけさせたくないしね…』と。
…ああ、今のは自分の特技の声帯模写です。
まぁ、見てのとおりこのセイバーは少々猪突猛進の気がありまして…身一つでここに着てしまい…放っておいたら逆に迷惑をかけてしまいそうだったので、そのサポートをしようと思いまして。」

「ミミック！？何を言うのですか！？」

！？今のは…間違いない！切嗣の声だ！！

なんで！？なんでクロウがその声を知っているの！？

「うわ…切嗣さんの声だよ…ミミック？」

「あ～…この特技等から、“擬態するモノ”“物真似師”などという称号がありまして…英訳すると“ミミック”になりますね…

それはともかく、士郎君も女ばかりでは大変だからと…そういう訳で、こちらに滞在させていただいている訳です。

…ついでに、後二名ほど…自分達と同じ理由でここに来た者が離れで眠っております…時差ぼけ等等で疲れているようでしたから。」

うわぁーお…さらっとバゼット&ランサーの存在もばらしたよ…

…でも、本当にいつの間に切嗣の声を?

「士郎?本当?」

「ああ、セイバーは切嗣のお客さんだし、むげに出来ないよ…クロウに関しても、正直助かっているし…」

…訊くこと、増えた…

「う～…切嗣さんのお客さんじゃぁ仕方ないか…定霧さんも、ちゃんとした大人の人だし…

いくら士郎と志保がしっかりしてても、大人の人がいるのといないのとじゃ安心感が違うし…

仕方ないなー…定霧さん?この子達の監督、しっかりとお願いしますね?

あ、それと…地でいいですよ?しゃべり方…」

きょ、今日は藤ねぇがまともだ!?

う～ん…大人の人には真面目な対応するんだね…藤ねぇ…

それとも、切嗣効果かな?

…に、しても…クロウの話し方を見破ってる…これでも教師、か…

「む…そう、ですか？
…了解。心配せずとも、年上として頑張らせていただくさ…
これから、よろしく…藤村さん？」

「あ、はい！志保達、妙に頑固だったりするけど、よろしくねー？」

ふぅ…何にせよ、助かったよ…
と、一息吐いたら…綾子につつかれた。

「で…志保？あの妙に可愛い鳥は何なわけ？」
「あ…確かに…」
「クェ！？」

綾子の言葉で、一斉に視線がココに集中した。

「おっと…コイツは、俺の相棒…新種の生物、チョコボのココだ。
…おそらく、世界にコイツしかいないな。
人語を理解しているから、その気になれば会話ができるぞ？」

「クェ！」（コクン、と首を縦に振る）

すると、クロウがココを紹介した。
…うん、やっぱり可愛い…

って…相棒？どういう意味なんだろう…？

「「「か、可愛い♪」」」

おお…藤ねぇ・桜・綾子もこの可愛さがわかるか♪

「あ、あの～…定霧さん?その…ココちゃん、抱いてみてもいいでしょうか?」

と、桜が不意にそんなことを言った。

「!?あ、あぁ…ココが良いと言えば…」

?あれ?クロウの様子が…変?
桜に声をかけられた瞬間、一瞬引いた?
そして、ココは…首を傾げながら、トテトテと歩いて…

「クェ♪」

チョコン、と桜のひざの上に乗った。

「きゃ♪可愛い♪手触りも…やわらかいですぅ♪」
「ああ!?桜!私にも撫でさせて!!」
「桜ちゃん、ずるいよぅ!!」

そして、桜・綾子・藤ねぇは撫ではじめた。
…夢中になっている。

「ねぇ…クロウ?そういえば…ココって、昨日は何も着てなかった気がするんだけど…?」

今のうちに、ちょっと訊いておこう。

「ん?…ちょっと耳を借りるぞ…
（アイツ、意識は人間のモノだし、一応女の子な訳で…裸は嫌だと言ってたんだよ。

…で、俺の“幻想の道具欄”の中にあったフードやらローブやらを組み合わせてみたんだ。）」

…そういうことか…
って意識は人間!?

「（意識は人間って？）」

「（詳しい経緯は不明だが…俺の出身世界と同じ場所から来たらしい。
…あれで、中身は人間なんだ。…体は、見紛うことなきチョコボだけどな。）」

クロウの出身世界!?
…相棒って、そういうことか…
それで、クロウが最初から人間扱いしてたんだね…

「（ん、わかった…不思議なこともあるんだね…）」
「（まったくだ。）」

…疑問も解決した…と。

「あ!すっかり忘れてた!!二人ともなんで昨日は学校サボったのよ?連絡も無しに…」

あ”…しまった…それがあったんだ…

「そういえば…遠坂も昨日は休んでたのよね…」

「「そ、それは…」」

なんて説明しよう…
と思った時、クロウがフォローを入れてくれた。

「あ～…その件に関しては、一昨日に遡るんだが…ほら、志保が凛を拾ってきたのと、俺…セイバーもだけど…が、この家に到着したのが同タイミングで…
夜通し、荷物の整理をしていたり、部屋割で揉めたりしたものだから…次の日、見事に寝坊した、という事情がある。
…んで、起きたら昼過ぎ…仕方が無いから昨日は凛の荷物をこの家に運んだり、周辺のマッピングをしてたんだ…
学校に連絡を入れなかったのは、二人…否、三人のミスかな？」

と、見事な言い訳を語ってくれた。
…ん？クロウがこっちを見てる？
『後は、自力でなんとかしろ』？
なんでアイコンタクトが成立するやら…

「ごめん藤ねぇ…」
「ごめん、藤ねえ…」
「ごめんなさい…」

後は、謝るだけ？という状況にしてくれたので、素直に頭を下げる。

「まぁ仕方ないか…もう無断欠席はしちゃ駄目よー？」

藤ねぇは、そう言って許してくれた…けど…

「ふぅん…」

綾子が、拗ねた…
どうしたものか…

「じゃ、私は職員会議あるから先にいくよー？遅刻しちゃ駄目よー？
…あ、美綴さんも今日は早く来てくれるとうれしいんだけど？」

「へ？どうしてですか？」

と思っていたら、綾子は先に行く用事があるようだった。

「ほら…何時まで部活の時間に制限かけるんだ？って運動部の部長が直訴してきちゃって…今日の職員会議ってその話し合いの準備なのよ…
…で、そのお手伝いをしてくれるとうれしいなーって…」

…時間制限からまだ三日経ってないのに…
堪え性のない人もいたものだね…

「…わかりましたよ…手伝います。
（ハァ…せっかく今日は一緒に登校できるかと思ってたのに…）
じゃぁ、また学校で…ハァ…」
「ごめんねー…じゃ、一緒に行こうか？…こんどお菓子でも一緒に食べに行こうか？」

…と、非常に残念そうに綾子は藤ねぇと学校へ向かった。
…ごめん…普段なら、それくらい手伝うのに…
…士郎も、すまなそうにしてる…

「…士郎？こんど、綾子の手伝いでもしてあげたら？」

…せめて、ちょっとくらいはフォロー入れとこ…

「そうだな…今度二人で手伝いに…」

「士郎一人で良いって…むしろその方がうれしいだろうし。」

まったく…この朴念仁…私が言えたことじゃないかもしれないけどさ…

「そうか？じゃあそうするよ…」

…まぁ、流石に今回は不憫なのか、桜も何も言わない。

…視線は痛いけどね。

「さ、て、と…これで、ここには関係者しかいなくなった訳だが…

…実体化したらどうだ？“ライダー”。」

ーーー突然、クロウはそんなことを呟いた。

…え？

「そうですね…敵対心を感じない、とはいえ…サーヴァントを目の前にして、気がつかない振りをするのも疲れました…

姿を見せなさい、騎乗兵。」

…どうやら、セイバーも同じのようだ。

驚く遠坂・士郎・私の目の前で…一騎のサーヴァントが実体化した。

「…やはり、ばれていましたか…」

黒いマスクを着けた、長身・長髪の女性が、そこには立っていた。

「「「なっ!?」」」

「驚きましたよ…この家には、すでに三騎士のサーヴァントが揃っているのですね…
…この場にセイバー、屋根の上にアーチャー…別室にランサー…ですか…」

「嘘っ!?」
「マジかよ!?」

…桜も慎二も…関係者!?
驚きすぎて、言葉も出ない私達を無視して、ライダーが言葉を紡ぐ。

「そこの少年がセイバーのマスターだとして…そちらの青年がランサーの、そちらの魔術師がアーチャーのマスター…といったところですか?」

そして、クロウはそれに答える。

ーーー向こうからすれば、かなりの爆弾発言を。

「残念、俺はマスターではない…ランサーのマスターは別だ。
…改めて自己紹介と行こうか…」

シャン、という音と共に、あの黒コート姿に変わる。

「はじめまして…そこにいる衛宮志保のサーヴァント…物真似師・ミミックだ。」

「え!?サ、サーヴァント!?」

「な、何だよそのクラス!?」
「サーヴァント!?そんな!そんな気配はまったくしなかった!」
と、桜も慎二も、ライダーも相当驚いた様子だった。
「ど、どういうことなの!?桜からはマスターの気配は…慎二だって、魔術回路が無いはず!!」
…ある意味、もっとも混乱しているのは遠坂かもしれない。
「…見たところ…そっちの…桜がライダーのマスターで…何かしらの方法で慎二にマスター権を譲渡している…ってところか?
…で、そのポケットの本が令呪代わり…かな?」
「「「!?」」」
桜、慎二…ライダーも、相当驚いている。
ーーーこれは、後で全員の共通見解となったことだけど…
ーーークロウが、敵でなくて本当に良かった…
ーーー後で聞いたけど、このときクロウは…クラススキルを全力で使っていたらしい。
「…で?こっちには敵対の意思は…今のところ無いんだが…なんの御用で?」
クロウは、不適に笑っていた…
全てを見透かすように…

ーーーｓｉｄｅクロウ

「…で？こっちには敵対の意思は…今のところ無いんだが…なんの御用で？」

…驚いたな…まさか向こうから顔を出すとは…

だがチャンス！！

ーーー交渉、開始だ！

「…まさか、衛宮達が揃ってマスターになってるなんて、思わなかったんだ…学校に来なかったから、心配になって見に来ただけだよ…」

「…兄さん…」

「少なくとも…こちらにも敵対の意思はありません。

…見逃しては、いただけませんか？」

なるほどね…嘘は言ってないな。

士郎の親友って話しだし…

「どうして慎二が…桜がマスターに…？」

と、俺が口を開く前に士郎が質問をしていた。

すると…慎二が、ぽつぽつと話はじめた。

…聖杯戦争への、参加理由を。

「…間桐の家は、今は寂れたとはいえ魔術の名門…それが参加して、そんなに不思議かい？
…桜は魔術師だ…僕は知識しかない落ちこぼれ以下だけどね。
家の爺さんが、桜を無理やりマスターにしたんだ…僕には、何もできなかった…
…だけど、桜には…危険な真似をさせたくなくて…ライダーのマスター権を、譲ってもらって…代わりに、僕が戦おう、って、ね…」

…妹のため、か…わからない話じゃないな…

「それで…ここに来たのは、衛宮達の無事の確認と…聖杯戦争の期間中、桜を匿って貰いたかったんだ。
…士郎が、魔術師ってことは、爺さんから聞いて知ってたからな…
はじめは、遠坂のところに頼もうとしたんだけど…家同士の契約で、それができないって聞いたから、ね…
しかも、昨日行ったら、教会が焼け跡になってたし…」

・・・あ
スマン、その犯人は俺だ。

「そうなの？桜…？」

「…はい…」

桜は、小さくなっている。
…ココは、いつの間にか志保の隣にいて、俺を見ている。

「（あれだよね？）」

…俺は、黙って首を縦に振った。

…志保・凛・士郎・セイバーが俺をじっと見ている。

…何を言いたいのかは、わかるさ…

「慎二、桜…その教会を焼いた犯人は俺だ。」

…一応、言っておくか…

「「え？」」

あ、この台詞が言えるかもな…

よし…

「君達が当てを失い、この家に最後の望みを賭けなければならなくなった責任は、俺にある。」

…この場にいる全員の視線、注意が俺に向く。

「…だが、俺は謝らない。」

「（ちょ！？チョチョン！？）」

…ココ、その突っ込みは俺くらいしかわからんぞ…

それはともかく…

「何故なら、その選択が間違っていたとは到底思えないからな…

…に、しても君らは運が良い…」

「「へ？」」

「…」

「今回の聖杯戦争…実はもう、七割方終わってるんだよ…」

…あとは、このライダーと…
イリヤさえ説得できれば、何の問題も無く終了できそうな状況だからな…

…後、外道神父とココが教えてくれたイレギュラー一騎。

「ど、どういうことですか？」

「イレギュラーは多い、監督役がルール違反する…とてもじゃないが戦っても意味が無い…
…しかも、聖杯自体にも問題ありな状況だからな…全サーヴァント&マスターに呼びかけて、絶賛中断中なのだよ。」

…脅迫、ハッタリのオンパレードだったけどな。

「で、後は君達ライダー組と、アインツベルンのバーサーカー組…で、どうしても戦闘が避けられなさそうな外道な監督役。
アインツベルンは交渉の余地ありだから、後交渉しなきゃならなかったのは君達だけだったんだ。」

…こうしてみると…ほとんど終わってるな…聖杯戦争。

「で？受けてくれるか？停戦協定。」

ま、ほとんど確認でしかないな…

「…選択肢が無いではないですか…サクラ、シンジ…受けましょう。

」

発言したのはライダー。

「先輩達と…戦わなくて済むんですね…はい、わかりました。」

「ははは…確かに、運が良かったみたいだね…ありがたく、受けさせて貰うよ…」

続いて桜、慎二…

「本当に、このまま終わるんじゃないかしら…聖杯戦争。」

「…良かった…桜や慎二とは戦いたくないからな…」

凛、士郎…

「あくまで、聖杯が歪んでいた場合、ということをお忘れなく…ですが、争わずに済むのなら、それが一番なのでしょうね…」

セイバー…

「…クロウがいてくれて、良かったよ…

きっと、クロウがいなかったら…戦うことになってたと思う。」

そして、志保…

「（今のところ、順調だね…でも、言ったと思うけど…油断はしないでね？

…まだ、ＲＰＧで言うラスボスと裏ボスが暗躍してる可能性があるんだから。）」

最後に、ココ…
まぁ、俺以外には何言ってるかわからんだろうがね…

「戦闘ではほとんど囮専門なんだ…これで、口が回らなかったらいる意味が無い。
…ま、ミッションコンプリートってことで。」

…後は、イリヤの説得さえ成功させれば…

…けれど、イリヤの説得は…士郎と、志保がやらなければならない事。
…俺にできるのは、ここまで…かな…

…否、まだ、あった…

ーーー外道と蟲…か…

外道はともかく…蟲の相手は…俺、だな…
普通なら、役には立たないけど…こと蟲相手なら…

ーーー俺は、天敵だ。

…問題は、桜なんだよな…
どうしたものかねぇ…

“第十話／「人の趣味を馬鹿にしてはいけません。」”（後書き）

いろいろありましたが…
執筆、再開です！！

…まぁ、今までワードを使用していたのがメモ帳になった所為か長さがちょっと把握できていませんが…

お読みになってくださる皆様に、感謝を！

第二回　「ラジオトーク！ｉｎ“俺いろ”！！」

サヤ（以下サ）「サヤと！」

アカ（以下ア）「アカの！」

サ＆ア「「ラジオトーク！ｉｎ“俺いろ”！！」」

ーーー１５００００ヒット＆１０００００ユニーク突破大・感・謝！

特別編ーーー

（ＢＧＭ・エレキ・〇・チョコボ）

ツルギ（以下ツ）「コメンテーター（解説）のツルギです。以下、作者からのコメントです。

『皆様！この駄文をお読みくださり、本当にありがとうございます！！

パソコンの不調に泣かされながらもどうにか復活できました。

とはいえ今まで使っていたソフトではないため、更新にはやはり時間がかかってしまいますが…

それはともかく、お読みくださった皆様、感想を書いてくださった皆様、これからもよろしくお願いします！！』

…だとさ。」

ア「更新どころか執筆も不可能な状況で、ユニークとアクセスがどんどんと伸びている事実に相当焦っていたな…アイツ。」

サ「アハハ…そ、それはともかく！！今回はお便りも届いていることですし！！」

ア「そうだな！今回はそれに応えてみよう！！」

ツ「その前に！ここで、俺の能力の一つを公開したいと思う。」

サ「…あれ、ですか？」

ツ「俺は、本来ＤＣＤモドキのオリ主な訳で…他の世界を覗いたり、行ったり来たりとできるんだよ。」

ア「便利な能力だよな…どこでも○アにもしも○ックスを混ぜたようなモノだし。」

ツ「…まぁな…ま、それはともかく、この能力を使えば平行世界も覗ける。お便りの内容によっては、これを使うぞ、と。」

サ＆ア「「それじゃぁいってみよう！！」」

（ＢＧＭ・ウクレ・○・チョコボ）

サ「まずはこの人！“死の爪”さんからのリクエスト！『シホのアーチャー版もちょっと見てみたい気が…』」

ア「地味に難題だな！？」

ツ「まぁなんとかなるさ。ようは女アーチャーが呼び出された世界を観測すれば良い。」

サ「できますか？」

ツ「やってみるかな…＜９・３・１・Ｅｎｔｅｒ＞」

＜Ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ＞

サ「わざわざっ！？」

ツ「…変、身！！」

＜Ｃｏｎｐｌｅｔｅ＞

ア「何故に！？」

ツ「…変身してないと…能力使えないからな…」

サ「地味～に不便だったんですね…」

ア「能力ＤＣＤモドキで、外見はΔモドキって…」

ツ「言うな、俺はこのパチっぽさが気に入っているんだ。…それはともかく、やるぞ？＜Ｗ・Ｏ・Ｒ・Ｌ・Ｄ・Ｅｎｔｅｒ＞」

＜キュイン！＞

ーーーどこかの世界ーーー

ーーーｓｉｄｅ遠坂　凛

「ああもう、邪魔だ、このお！」

まったく！何がどうなってんのよ！？
これ以上なく魔力も宝石も持ってかれて、何も現れなかった挙句にドアが開かないなんて！？

ゴガシャッ！！

「…まったく、これはまた、ずいぶんと無茶苦茶なマスターに引き当てられたモノだな。」

扉を蹴破った私に、いきなり尊大な態度で声がかけられた。

ーーーそこにいたのは、少女だった。
真っ白な髪を逆立たせ、鉛のような瞳と褐色の肌を持つ少女。
真っ黒な軽鎧に、所々にベルトが巻きつけられた黒いレザー？のズボン。
腰に引っ掛けられた、少しくたびれた黒いハット、金属で強化されたゴツイブーツ。
そして、足元までありそうなかなり厚手の真紅と深紅のコート。

…そんな、ちぐはぐな格好の少女だった。

そんな少女が、天井に大穴の開いた…ほぼ全壊したリビングで、ソファーにふんぞり返っていた。

「…呆けられても、困るのだが？」

呆然としている私に、あきれた顔で声をかけてくるコイツ。

…多分、コイツが私のサーヴァント。

「確認だけど…アンタが私のサーヴァント？」

そう思って、確認をしようとした…が。

「はぁ…そうでなければ、君は今、すでに死んでいるのではないか？それとも何か？ボケているのか？戯けなのか？」

コイツは、本気であきれたような表情で、人の神経を逆撫でしてくれる台詞を言ってきやがった。

…落ち着け、私…まだ切れるタイミングじゃない…

「そ、それも、そう、ね…じゃぁ、アンタが、私のサーヴァント、ね…」

必死で、落ち着きながら確認をした。

「この状況から考えるに、そうなのだろうな…」

すると、コイツはヤレヤレ、といった風に立ち上がってこちらを見る。

背は…おそらく私より少し高い。

「…わかっているなら…仮にもマスターに対してその口の利き方はないんじゃないかしら？」

「…自分で“仮”と認めるか？それはともかく…いきなり上空１００ｍに召喚され、そのフォローもなければ、機嫌も悪くなって当然だと思うが？」

少し、自分の立場ってやつをわからせてやろうとしたら、見事なカウンターが返ってきた。

…確かに、私なら切れる。

「うぐ！？わ、悪かったわよ…ま、まぁいいわ…アンタは、何のサーヴァントなの？」

微妙に私の方が旗色が悪かったため、少々強引に話を変えた。

…でも、本当に何のサーヴァント？

…妙に、服も現代的なのよね…

「…アーチャー。どうやらアーチャーのクラスに割り当てられたようだ。」

微妙にあきれながら、コイツはアーチャーと名乗った。

（アーチャー、か…外したなぁ…

最優のセイバーを呼ぼうとしてたのに…

あれだけの宝石も使ったのに…」

「…悪かったな、アーチャーで…ふん…どうせアーチャーでは派手

さに欠けるさ…珍しく呼ばれたと思ったらこれか…」

…あ…途中から声に出てたみたい…

拗ねちゃった…

…ぶつぶつ言ってるけど…コイツ、こうしてみると…

（…かわいい？）

「（ビクゥッ！）な、なんだ！？怖気が走ったぞ！？今何か不埒なことを考えなかったか！？」

一瞬、脳裏をよぎった瞬間、アーチャーは毛づくろい中の猫の背中をつついた時のような反応を見せ、バックステップを踏んだ。

…ますます、かわいい…

そういえば…

「別に？それはともかく、ごめん。

…呼び出したのはこっちなのに、文句言っちゃって…ところで、アンタなんでそんな男言葉なの？」

そう、実は最初から気になってた。

…せっかくかわいいのに、なんでこんな男言葉？

「ん？ああ…己（オレ）は基本戦場にいたからな…女として振舞うと、男どもが欲望の対象としてよってきたからな…女を封印しただけの話だ。」

オレってあんた…

見ると、かなりの美少女なのよね…なんていうか、凛々しさの裏に

溢れる可愛さ、って感じの…

「そう？でもその封印、もう解いたら？ここではそんな獣なんていないだろうし、いたとしてもサーヴァントに喧嘩売れる馬鹿なんていないでしょ？」

こんな美少女が、こんな可愛げのない話し方なんて、世界の損失よね♪

「断る。…いないとも限らん。」

頑固ね…

「あのね…アンタって、そんなに弱いわけ？」

「…戯け、仮に己が弱いとすると、その弱者しか呼べなかったお前は自動的に弱者となるぞ。」

「な…私が弱い…ですって！？」

「自分で言ったことだろう。」

「ふ、ふふふふふ…ずいぶん反抗的なサーヴァントね…」

「自身で弱者を自認するなら、そのまま聖杯戦争を辞退するか、そこの地下室にでも篭っていろ。
己の戦場に足手まといはいらん、お前が引きこもっている間にでもケリをつけて来よう。」

…も、もう許さない…

「アンタ…自分の立場って奴がわかってないのね…」

私のこの手が光って唸る！！自分の立場を、自覚させなさいって！！！！

「って待てお前！？まさか令呪を！？」

「＜私の言うことを、聞けぇーーーーーー！！！！！！＞」

・・・あ。

ちょっと後悔した…確か、令呪ってこういう広く長くっていう指示はあんまり効果が無いんじゃ…

「…一言、言わせろ…戯け。」

案の定、言葉も態度も変化なし。

…可哀想なモノを見る目で責めてきた。

「…ふん、アンタが反抗的なのが悪いんじゃない…」

「そうかも知れないが、あえて言わせろ…戯け。」

「さっきから戯け戯けって…連呼するな…ていうかその口癖、改めなさい…」

実際、私自身馬鹿だとは思うけど…

「…わかった。」

半ば自棄で言っただけの言葉なのに、アーチャーは渋い顔で了承した。
…なんで？

「…急に素直になったわね…どうして？」

気になったので訊いてみた。

「…本来、あの手の令呪はあまり効果は無い…が、お前のマスターとしての素質が桁外れだったようだ。
…お前の言葉に、強い強制力を感じる。…逆らう方が手間だ。」

…へぇ？
怪我の功名？

「へぇ？じゃぁさっきの令呪は無駄ってわけじゃなかったのね？」

「…そちらからすれば、な…前言を撤回しよう、お前は弱者ではない。」

…よし、コイツを素直にした、と思おう。
だったら…

「そう♪じゃあ早速…口調を改めなさい♪」

初心に帰ってみよう。

「…うぅ…」

あ、コイツ口を利かないつもりだ。

「返事は？」

「うぅ…わかった…けど、素に戻るまでだよ…これ以上は断固として断る！」

ふぅん？うんうん♪可愛いじゃない♪

「なんで？答えなさい♪」

この娘、まだ何か隠してるし、訊いちゃおうっと♪

「ぅ…く…っ…ぁ…私は、“あの人”以外に…女として見られても…うれしくない…というか、嫌…」

ぁ…あっちゃぁ…地雷踏んだ…

そっか、好きな人の一人位いても不思議じゃないか…

アーチャーは、泣き出しそうな顔で、私の質問に答えた。

…な、なんて罪悪感…

「え、と…ごめん…あ、そ、そうだ…訊き忘れていたんだけど…貴女の真名は？」

罪悪感に潰されそうだったので、無理やり話を変えた。

「…無い。」

…が、予想の遥か上空を往く答えが返ってきた。

「…は?ちょ、無いってどういうことよ!?」

「そもそも私は、この時代には“存在”しない英霊だからね…まず語られるべき伝承を持たない。」

まてよ…そういえば、この娘…近代的な格好だし…

「ひょっとして…未来の英雄、ってこと?」

「正解、もう一つ、“己”という英雄は、本来は男性。故にまず“私”は呼ばれない。」

「…は?」

男性!?

…あ、平行世界!?

そうか、この娘、大体の世界で“男性”として生を受けて英雄に至るんだ。

女性として生まれた場合、英雄に至ることが少ない…または皆無ってことなのかしら?

「女性である“私”が呼ばれることは無いとはいえないけれど、“己”を指す名を語ることはできないんじゃない?

…それに、数ある“私”の中でも、“この私”はさらに外れた存在だから…」

「外れた?」

「…途方も無い奇跡と、運命の物語の、バッドエンドの果てにしか、私はいない。
…女性である“私”が、途方も無い奇跡と、運命の出会いを果たし、久遠の別れを経験し…再会を願い、再会できなかった…」

…あ…“あの人”って…

「泡沫の夢を夢見たまま…理想と幻想と妄想に溺れた、馬鹿な小娘の成れの果て…それが、“この私”。」

…この娘が、聖杯に望むものって…

「…勝ちましょう。」

「…ぇ？」

あ、これが素、ね…可愛いわ。
それはともかく…

「勝って、アンタを置いてったどうしようもない馬鹿を引っ張り出してやりましょう！」

女の怒りは、半端じゃないんだから！！
聖杯でも、なんでも使ってやるわよ！！

「フフッ…気持ちだけ、受け取っておくよ。」

あ、あれ？
乗り気じゃない？なんで？

と思っていたら、考えが読めたのか、アーチャーは口を開いた。

「きっと…この世界に“私”が呼ばれたってことは、“あの人”はこの世界に現れる…ううん、呼ぶ方法もちゃんとある。…無理だったとしても、聖杯を使ったら、“あの人”に会う資格も、なくしちゃうから…私は、聖杯に望むモノはないよ。」

強い意志を秘めた笑顔で、彼女はそう言った。

「話を戻そうか?私の英雄としての真名はないけれど…“私”の名前は…私が、名乗っていた名前は…」

誇らしそうに、どこか、寂しそうに…

「定めという名の、霧の中でも…志を、保つ者…」

それでいて、懐かしそうに、名乗った…

……

ーーー超時空ラジオーーー

＜キュイン!＞

ツ「…以上、どこかの世界でした。…しっかし、予想外の場所につながったな…」

サ&ア「「ってそこで切るなぁっ!!?」」

ツ「…や、単純にタイムアウトだから。」

ア「一番重要なタイミングで…まったく…」

（ＢＧＭ・日差しの○で）

サ「仕方がないので、次にいきましょうか…“ＡＩＮＯＯ”さんからのお便りです『当然擬人化するよね？』。」

ア「…したな。」

サ「…しちゃいましたね。」

ツ「…したようだな。」

ア「しかも、クロウの相棒って…羨ましい…」

サ「ところで…あの変身能力ってなんなんですか？」

ツ「ん～…詳しくは、そのうちクロウが鑑定するだろうから、ヒントだけ。
　ＦＦには、一種の“変身”をする技？があったよな。…以上だ。」

ア「…あ～…そういうことか。」

サ「ふぇえ！？わかったんですか！？」

ア「伊達にクロウの親友はやってないさ。

…仕方が無いから、私からのヒント、“６・９”だ。」

サ「うぅ…私もゲームやるんでした…」

ツ「ともかく、次いくぞ？」

（ＢＧＭ・笑顔に〇まれて）

ア「次は“まぐ”さんから、だな…『ココの台詞を赤い弓兵が聞いていたなら、どう思ったのかが気になります』。」

ツ「ごめん、俺に回答の権限がないぞ…」

サ「えぇぇぇぇ～！？」

ツ「ぎりぎりの回答をするならば…『この物語は、基本的に御都合主義で出来ている。さらに、侑斗はアーチャーに燃えた。』ってことで。」

ア「…仕方が無いな…」

サ「でも、それだけじゃぁ回答になってません！！」

ツ「…そういえば…最後の最後で、ミミック以外のサーヴァントに、何かが起きる…らしいぜ？…これでいいか？」

ア「クロウの奴…いろんな意味で、フラグを立てたり折ったりを繰り返してるからな…何が起きることやら…」

（ＢＧＭ・二人の〇間）

サ「それじゃぁ、最後！“ｆｉｅ”さんより！『戯け…』ですね？」

ア「これは、私が回答するぞ！
　実際に、これはクロウの口癖なんだ。
　アイツは、無意識下であいった微妙な毒を吐くことが多いが、実際は所謂“軽口”なことが多いんだ。」

ツ「最近の小中高で聞く“シネー”やらなんやらと同義か？」

ア「かもな…ある程度は本気で言っているかもしれないが…基本、意訳すると“俺の話を聞けや”とか“アホか”って意味になるかな？」

サ「ま、お兄ちゃんって結構溜め込んじゃう人ですからね…日常で少しずつ吐き出しているんですよ、ストレス。」

ア「あのＶＳランサーの時ですら、“切れて”はいないからな。
　…日常の中では、吐き出させてやって欲しいな…アイツが本気で“切れる”と、マジでヤヴァイんだ…」

サ「性格が反転しますからねぇ…」

ア「それはともかく、多少は見逃してやってほしい、というのが私からの意見だ。
　一応、あれでも一度矯正した結果なんだ…昔は“お前…頭悪い

だろ”とか“お前…自分の頭の中身を探して来い”とか平気で言う奴だったんだ。」

サ「そういえば…アカさんが初対面で言われたことって…」

ア「“地図とコンパスでも買った方が良いんじゃない？”ってイイ笑顔で言われたぞ…病室間違えたくらいで。」

ツ「それでよく親友になんかなったな…俺なら殴るぞ…」

ア「ハハハ…実際に殴って、アイツの傷がひらいてな…その後、謝りに行ったのが付き合いの始まりだったんだ。
…この話はもう良いだろう？こんな所かな…」

（ＢＧＭ・ア○ラクシア）

サ「以上で、お便りはなくなりましたよ？」

ア「…の、ようだな…で？なんで変身解除しないんだ？ツルギ。」

ツ「ん？あぁ…忘れてた＜ーーーキュウン＞…そういや、前回言い忘れていたが…クロウの貧乳フェチ説についてだが…」

サ＆ア「「忘れてたぁっ！！」」

ツ「実際は、“巨乳が苦手”なだけだそうだ。」

サ「あ…そうだったんですか？でもなんで…」

ツ「なんでも、中学時代に“巨乳”で“百合”な“ヤンデレ”入った“後輩”に刺されたらしいな…」

ア「…中二の夏、だったな…」

サ「そういえば、入院してましたね…そういえば、あの時はなんで刺されたんでしたっけ？」

ア「…ｏｒｚ」

サ「アカさん？」

ア「…ツルギの言った内容に、“私が受け取った女子からのラブレター”というキーワードを合わせてみれば…何が起きたかわかるだろう？」

サ「うあ…それで、家にいきなりやってきた大人の夫婦が土下座を…」

ツ「（人）」

サ「な、なに合掌してるんですか！？」

ツ「なんとなくな…どっちも不憫だな…と。」

ア「うぅ…」

ツ「それはともかく、今回はここまで、な？」

サ「そうですね…では！これからも本編での疑問や！」

ア「はぁ…裏話が知りたい！などがあったら！」

サ&ア「「感想に、一言添えてお願いします！！」」

ツ「こんなＩＦが見たい！等でも答えていくつもりだ！」

ツ&サ&ア「「これからもよろしく！！」」

サ「お願いします♪」

（あ、そういやクロウは髪が長いほうが好みって話を聞いたな…）
（ナニィ！？）
（胸が控えめなほうが好みで、髪が長い…ってアカさんじゃないですか！？）
（／／／／／）

“第十一話／「知らない罪・知りすぎる罠。」”

――現状高校生の士郎よりも年上だな、確実に。

“第十一話／「知らない罪・知りすぎる罠。」”

――sideクロウ

ライダー組とも停戦協定に成功したし…
どうにか、これで…俺の仕事の大半は終わったかな…

…思えば、ハッタリ・脅迫のオンパレードだったけど…結果オーライ…かな？

セイバー：なし崩し
アーチャー：マスターの説得&なし崩し
ランサー：勝者？の特権による命令
ライダー：数の暴力
キャスター：同上＋脅迫
アサシン：キャスターに付いてきた

…バーサーカーは、これから…

…今気が付いたが…俺、超暗躍してるな…
まともな戦闘は、ランサーとの一回だけか…

まぁ、ココの言っている裏ボス・ラスボスがこの世界に実在するな

ら…

後一回は、俺が戦闘する必要があるんだよな…

…裏ボスは、どうやら存在するみたいだしな。

「それにしても驚きました…定霧さんがサーヴァントだったなんて…

言われてから、初めてステータスが視えました。」

…目の前で、こんなことをいっている少女…

間桐　桜…彼女に、巣くっているモノ。

“観察”して、驚いたぜ…体内に、尋常ではない蟲がいる。

――マキリ　ゾウケン…だったか…

今は…下手に手を出せない…

どうにかする手段はあるが…

気が付かれて、逃げられたら厄介だ。

なにより…この子を乗っ取られたりしたら、目も当てられない…

だから、今は…

（…ごめん。）

…機を窺うしかない。

糞…どうする…？

どうやって…俺の宝具を…

「…クロウ？難しい顔して、どうかしたの？」

そんなことを考えていたら、志保に声をかけられた。

っと…やべ、自然体自然体…

「ん？あ、ああ…これで、残すはバーサーカー組だけだな…と。
それより、さっきの桜の質問というか疑問の答えだが…俺には、スキル“一般人”ってモノがあってな？
効果は、自分の気配を一般人のモノにするって能力なんだが…以前、アサシンの前を素通りし、キャスターさえも誤魔化したことがあるくらいだ。
だから、基本的には俺がサーヴァントだって気が付く筈が無いんだ。
…悪かったな？驚かして。」

誤魔化しついでに種明かし。
…蟲のことは、今はどうしようもない…隙を窺うしかないな。

「…あ、本当だ…何かスキル欄に“一般人”って出てきた…」
「…そういえば、アンタ…自力でキャスターの領域に侵入した上に交渉してきたんだっけ…」
「…とことん、英霊らしからぬ能力ですね…」
「クロウ…やっぱり、何者だったのさ…」
「暗殺者と魔術師を…って…とんでもないサーヴァントだな…」
「は、はは…気が付かなくて当然だったわけですか…」
「…反則じみてますね、貴方の能力は…」
「（…元・自称一般人は伊達じゃない、と…）」

…と、思い思いの反応。
誰がどれかは置いとくとして、ココ…元・自称って…反論できないんだが…俺にどうしろと？

「ま、いいや…それより、志保…士郎もだけど…」

…いいかげんに、教えておかないとな…

アノ件を。

「何？」
「何だ？」

…よし、覚悟はできた。

「言っておくが、イリヤの説得は、お前らがやるんだからな？
…この一件だけは俺が手を出す訳にはいかないんだ。
故に、バーサーカー組の説得は頑張ってくれ。」

――ピシッ

場が、凍った。
ってか石化した。

…ま、確かに爆弾発言だったけどさ。

「（…マジ？）」

一番最初に反応を返してきたのはココ。

「勿論…超・マジだ。」

…それに返事をする俺、そのまま耳を塞ぐ。
ココも、それに習って耳を翼で覆う。

――時は動き出す。

「「「え？え？え…えぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！？」」」

「「な!?…は?な…えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!!!!?」」
「…な!?しょ、正気ですかミミック!?」

そして振動する居間。

「「なんでさっ!?」」
「あ、アンタ士郎達を殺す気!?」
「何を考えているのですかミミック!?よりにもよって一番危険な相手をシロウ達に!」
「い、いくらなんでも無茶苦茶だ!」
「そうです!!先輩達をそんな危険な目にっ!!」

そして詰め寄ってくるマスター！ｓ&セイバー。
ま、こうなるよね…

「落ち着きなさいシンジ、サクラ…彼が、考え無しにそんなことを言い出す人物なはずがないでしょう…
で、なければここまで見事に停戦協定を成立できるはずがありません。」

…だが、一人だけ、冷静な奴がいた。
ライダーは、どうやら叫ぶ前に人の話を聞いてくれそうだ。
…今まで、叫ばれてばっかりだったからな…俺。
ちょっと感動しちまったよ…

「…ま、そうだな…とりあえず話を聞いてくれないか?
じゃ、ないと説明しようがないだろう…」

「う…わかった。」
「そ、そうだね。」

「仕方ないわね…くだらない理由じゃないでしょうね？」
「……聞くだけは聞きましょう。」
「そ、そうですね…」
「う…わかったよ…」
「…それではどうぞ。」

…とりあえず話を聞く姿勢になってくれたので、話すことにしよう。
…サンキュー、ライダー…

「…話すぞ？
イリヤ…イリヤスフィール・フォン・アインツベルンの説得を、衛宮兄妹がやらなければいけない理由…それは…」

「それは…？」

「…彼女の父親が、衛宮　切嗣だからであり、彼女の来日の理由が彼を探し出すことだったから…だよ。」

探し出してどうするか…までは知らないけれど…な

「！？イリヤが…！？」
「親父の娘！？」
「ってことは…士郎達の義妹って訳！？」
「な…では彼女が…アイリスフィールの娘！？」
「アインツベルン…？それって…」
「始まりの御三家の一角だ…それが、衛宮の義妹！？」
「（…クロウ？ボクはそのこと…教えてないよ？何で知っているのさ？）」

…ココの疑問にも、答えておくか…

「何故俺がこんなことを知っているか？
…以前、俺はイリヤに対して“物真似師の意地”…俺の宝具を使ったろう？
あの時に、イリヤの記憶を一瞬視てしまってね…」

切嗣の声も、そこで覚えた。
一一一予想外だった能力もあって、視えてしまったんだよな…

「“物真似師の意地”？確かに使っていたけど…どういうこと？」

一一一あれの能力は…

「“他人の肉体の完全コピー”…これが俺の宝具の能力。
…相手の脳まで、コピーしちまうんだよ…」

…勿論、一瞬のことだけどな…
俺が、相手の思考までトレースし続ければ話は違うが…
“相手の頭脳”にある記憶を、俺が“コピー”した状態で、相手が取り出すと…自動的に、俺も“思い出してしまう”訳だ。
勿論、俺が“自身の記憶”を取り出そうとしたり、“自身の精神”で話したりすれば、“脳”は俺のモノに戻る。

…多分、こんな理屈なんじゃないかと思う。
流石に、いくら俺自身の能力とはいえ眼に映らない存在を把握しきるのは不可能だ。
こういうモノはステータス画面上のことしかわからない。

「…で、一瞬とはいえ…彼女の思い出を覗いちまったって訳…」

前回、ランサーに対して使用した時も、“俺”の思考に入る一瞬のタイムラグで記憶を覗いてしまったし。
…ま、そのおかげでバゼットの存在に気が付いたんだが…

「これはもう良いとして…こちらの陣営に士郎・志保がいる限り…彼女が説得に応じる訳が無い。
…彼女は、士郎と志保に…強烈な殺意があるからな…」

まぁいい、話を続けよう。

「え…？どういうこと？」
「俺達に…殺意？」

…悲しいことに、な…

「詳しいところまではちょっとわからない上に言いたかないが…彼女は、アインツベルンで、切嗣の帰りを待ち続けた。
…ところが、帰ってこなかった…しかも、日本で養子まで取っていた。
…彼女からすれば、切嗣は自分を捨てた…士郎と志保は、自分の居場所を奪った相手…ってことになっちまうんだろうな…」

そこにきて、この聖杯戦争だ…
殺す理由まで、与えられちまってる。

「そんな…」

絶句。
…この場の皆の状況を一言で言い表すならば、これしかない。

…実際には関係の無い面子までも、な…

「…だから、彼女を説得できるとしたら…士郎と志保…お前らだけだ。

俺に言えるのは、ここまで…ただ、個人的には…」

俺自身、関係の無いことかもしれん。

…踏み込んでいい領域を越えてしまっている。

けれど…

「個人的には…助けてやって欲しい…彼女のことを。

…他ならない、お前達の手で…彼女の、義弟達の手で、な…」

それができるのは…お前達しかいないからな…

「うん…わかった…頑張ってみるよ…どうすればいいか…まだ、よくわからないけど。」

「俺達が…やらなきゃならないんだな…」

やる気に、なってくれたようだな…頼むぜ、マスター…

「…ん？今何か変じゃなかった？クロウ？今…義弟達って言ったかしら？どう見たって彼女の方が年下じゃない？」

「確かに…ミミック、間違えていますよ？」

っと…凛&セイバーが、突然そんなことを言い出した。

…まぁ仕方ないかな…俺も結構驚いたし。

「…彼女、あれで士郎よりも年上だぞ？確か、俺と同い年…いや、

ギリ一つ下か？」

観察の結果、彼女は十八年は生きてるし。
下手したら俺と同い年かもしれん。

「…は？」

「現状高校生の士郎よりも年上だな、確実に。」

志保は言わずもがなだな。
見た目士郎より年下だし…

「…クロウ？気のせいじゃなければ…さっきからあえて私の年齢に触れてないよね？」

…？志保が、急にそんなことを聞いてきたが…
ん？眼が…据わってる！？

「ねえ…クロウ？私の年…何歳だと思ってた？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ
とかいう音が聞こえる気がする…

「い、いや！さ、流石にそんなに下には見てないぞ？俺の妹だって中三でも小三にしか見えなかったし！！
士郎や凛の反応からして、士郎の一つか二つ下かな？と…」

なんか…複雑そうな顔してるけど…地雷だったのか？

「…私、士郎と同い年…

そう外れてないから喜ぶべきか、当てて貰えなくて悲しむべきか…一番判断に困るよ…」

う…スマン…

「なぁ…衛宮？落ち込む暇、もうなさそうだぞ？」

どうしたものか、と思っていたら、慎二がそんなことを言い出した。

「…そろそろ出ないと、遅刻するんじゃないかい？」

…あ～…登校時間…

今日は、学校に行く気らしいしな…

「「「「あ。」」」」

どうやら全員忘れていたようだ。

少し焦ったように凛が口を開いた。

「そ、そうね…じゃぁ行きましょうか…」

そういって、いそいそと部屋を出た。

「あ、私もカバン取りに行かないと！」

「しまった！俺、まだ着替えてない！！」

…おおわらわだな…

「…桜、僕達は玄関で待ってようか…」

「そうですね…」

…間桐兄妹は、先に玄関で待つつもりらしい。
ライダーと共に部屋を出て行った。

部屋の中は、俺・ココ・セイバー。
…今のうちに、打ち合わせでもしておくか。

「…マスター達は学校に行くようだが…セイバーはココと留守番な。」

「な!?何故ですかミミック!」

…わかってないのか?コイツ…

「何故ってお前…霊体化できないから、だが?」

至極当然の話だと思うのだが?
絶対に騒ぎになるからな…セイバーつれて歩いたりしたら。

「…くっ……仕方ありませんね…マスター達の警護は任せますが…」

どうやら、渋々とだが納得してくれたようだ。

「代わりに、マスター達の帰る場所を守ってくれ。
…むこうで何かあったら、ココに連絡を入れるから。」

「ココに、ですか?」

「ほら…これだよ、“チョコボよせ”のマテリア…昨日出たろ?

これを俺が“装備”すれば、ココが俺に寄ってくる…本人曰く、
“なんかいかなきゃいけない気がする”らしい。
…で、何かあったら、これを装備すれば…」

…ココが、俺の方へ来ようとする、というわけだ。
昨晩、気になったので確認しておいて良かったな…
それに、ココ自身もその気になれば…

「そういう事ですか…わかりました、が…いざとなったら令呪を使って貰いましょう…
頼みますよ?ココ。」

「（任せてよ!それに、いざとなったら乗っけて走るから!!）」

…人を乗せて走れるだろうし、な。

「ミミック?ココは何と?」

「任せろ、ってさ。
…もう一つ、ランサー組に伝言頼んでいいか?」

ランサー達に頼んでおきたいことがある。
…まぁ、バゼットの体調しだいだが。

「ランサー…?なんでしょうか。」

「ああ、外道…監督役の行方を追って欲しいな、とね…
まぁ余裕があれば、だがな。」

…起きてこないところを見ると、まだ辛そうだがな。

流石に仮死状態からの蘇生…即日復活とはいかなかったようだな。

「…わかりました、後ほど伝えておきましょう。」

…どうにかして、ポーションの生成をしないとな…
あれは確か…何種類かのハーブ類から作るんだったか？
…昔何かの本で見たはずなんだが…思い出せないんだよな…
多分、ハーブは揃ってると思うんだが…これを使うのはちょっと気が進まないが。
…俺の趣味の産物だし…

「クロウ？もう出るけど…」

っと…どうやら、全員用意は出来たようだな。

「わかった、じゃあ後ろに憑いて行く。」

…そういって、俺は霊体化。
そのまま、志保の後ろに回る。

「へ？…ってそっか、霊体化…わかった、じゃあ行こう。
セイバーは…」

「この家を守っています。
…シロウ、何かあったら迷わずに令呪を使用するようにしてください。」

「ああ、わかった。
…あ、机の上、弁当置いておくから、昼にでも食べてくれ。
ランサー達の分もあるから、後で届けておいてくれるか？」

「わかりました。
…気を付けてください。」

…一瞬、志保は何がなんだかわからない、というような表情になった後、納得したのかセイバーに確認。
セイバーは士郎に注意。
士郎はセイバーに弁当のことを教えていた。

凛は…この場にいないな。
外でライダー組と話でもしてるのか？

「ああ、行って来る。」

…そして、家の外へ。

家の外では、やはり間桐兄妹と凛が、何事か話していた様子。

「ごめん、待たせた。
じゃあ行こうか。」

その三人に声をかける志保。
…ライダーは、慎二の後ろに霊体で立っている。

「先輩？戸締りは大丈夫ですか？」

「ああ…と言っても、ランサー達も家にいるからそこまで戸締りする必要もないけどな。」

「…そういえば、いたんだっけ…ランサー。

マスターの顔も見てない上、さっきもいなかったから忘れてたよ。」

上から桜・士郎・慎二。

…まあ、仕方ないとはいえ…影が薄いなあ…空気にならないよう、気をつけてやる必要があるかもな。

『…ミミック？何故、セイバーの姿が見えないのでしょうか？』

…と、本人達が聞いたら微妙な空気が流れそうなことを考えていたら霊体状態のライダーに声をかけられた。

…会話、できるんだ…まあいいか。

『ああ、この家…拠点の防衛を任せてある。
…こっちは、そこのアーチャーを含めて三騎もいるからな。』

…そういや、昨日一日顔を見なかった気がするな…アーチャー。
屋根の上で見張りをしてたんだっけか？
今は凛の後ろでなにやら考え込んでいるが。

『…そうですか…ところで、貴方は“戦力”で良いのでしょうか？
失礼ですが、どうにも貴方からは強者の気配を感じません。』

あ～…確かに、それは問題かもな。
コイツから見れば、俺はどこにでもいる一般人がサーヴァントやってるだけ、だろうし。

『ん…一応、耐久のステータスにAが付いている。
まあ、実際俺は誰にも勝てない最弱のサーヴァントであると同時

に、セイバーだろうがバーサーカーだろうが足止め可能な“最強の囮役”ってところかな。
一応、殆ど相打ちだがランサーも撃破したしな。
…二度と出来ないだろうけど。』

…実際、チート武器とチート回復薬の組み合わせでなんとかなっただけだしな…
ブラッドランスの性能を、ランサーが知らなかったから当てられたってだけ。

…物真似師の意地も、直後にエーテルなりエリクサーなり飲めたからあんだけ全力で使えた訳で…
もう、どっちも一つしかない上、魔力供給がほぼ無い現状では使用は控えないといけない。
…エリクサーは、すでに使用する事が決定してるしな…

一応、小次郎相手だったら多少はなんとかなるかな?って状況だな。

…まあ、そんな状況でも…俺は“宝具”を、一回は全力で使うことが決定している。
…“知った”責任があるしな。

『…そうですか。』

どうやら、ライダーはこの話題から興味を失ったようだ。

…本当は、コイツには話すべきなのかもしれないが…
どこから、蟲に察知されるかわからない…
“知りすぎる罠”か…ままならないな…

「じゃ、行きましょ？遅刻は嫌だし。」

と、気が付いたら凛が一人で歩き始めていた。

「あ！？ま、待ってよ遠坂！」

志保が慌ててそれを追う。

…それに習って、全員が小走りで凛を追った。

……登校中、特に会話らしい会話は無かった。

時折、志保と凛が軽く話したり桜や慎二が士郎に声をかけたりはしていたが。

『…』

『…』

『…』

…サーヴァントの間には、完全に会話なんぞなかったがな。

…そういや、ココ…あの手紙、渡してくれたかな？

ーーーｓｉｄｅセイバー

ーーー“お留守番と手紙”ーーー

さて…シロウ達が帰ってくるまで何をしていますか…

やはり、魔力の温存のため、睡眠でしょうか？
…いや、この家の守護を任されている以上、寝る訳にはいきませんね…

＜～♪＞

おや？
気が付いたら、ココの姿が見えません…

＜♪っ♪♪、♪♪♪、♪っ♪っ♪～＞

「ってさっきからなんですか？この楽しげな鼻歌は…」

部屋の外から聞こえてきますね…

＜♪っ♪♪、♪っ♪っ♪～・♪っ♪♪、♪っ♪っ♪～＞

部屋の外…廊下へ出てみると、奥の曲がり角に黄色い尻尾が見えた。
そちらから聞こえてきているということは…この鼻歌はココ？

＜♪っ♪♪、♪♪♪、♪っ♪っ♪～＞

と、鼻歌と共に歩いていってしまった。

「待ちなさいココ、どこへ行こうというのですか？」

…追わなければ。
まったく…いざという時の連絡役が離れては意味が無いではありませんか！

そう思い、追ってみたところ…ココは縁側で、空を見上げていました。

＜♪っ♪♪、♪っ♪っ♪～・♪っ♪♪、♪っ♪っ♪～＞

日の光を浴びながら、気持ち良さそうに鼻歌を歌っていました。

…昨日の、シホ達の気持ちもわかる気がしますね…可愛らしい姿です。

「ココ…勝手に離れられては困ります。
貴女は緊急時の連絡役でもあるのですよ？」

…しかし、ここはきちんと言っておかねば…

「クェ？
ク、クェェ…」

困りました…何と言っているか、わかりません。

…おそらくは謝罪…でしょうか？

シュン、と頭を下げているところを見ると、反省はしているようですね。

「わかればいいのです。
…ところで、先ほどの歌は？
って、私では貴女の言葉がわかりませんね…ミミックが帰宅したら、訊くとしましょう。」

「クェ？クェ～…」

…これは、苦笑…でしょうか？

眼を視れば、ある程度はそこに籠められた感情が読めますね…

＜♪っ♪♪、♪♪♪、♪っ♪っ♪～＞

と、またココは歌い始めました。

…私は、その隣に腰掛け、ココのように空を見上げます。

「…平和、ですね…」

危うく、聖杯戦争中だ、ということすら忘れそうになるほどにのどかな空気…

…ミミックの言い分では、この聖杯戦争は既に破綻している。

叶うことの無い願い…歪んだ聖杯…

かつて、キリツグが破壊を命じた聖杯…

結果、破壊された街…破壊された、シロウの、シホの人生…

彼の言葉が正しいのなら…アイリスフィール…貴女は、何のために…

思い出すのは、かつて守ると誓い、傷つけ続けたもう一人のマスター…

貴女は、何のために傷つき、身を削ったのだというのか？

私は…認めない。

ミミックの言い分を。

…皆は彼の言葉を信じた。

だが…私は…私自身の願いのため…否、アイリスフィールのためにも…

…認めたくない、だけだ…

少なくとも…イリヤスフィール…アイリスフィールの娘が、彼の言葉を肯定するまでは…

それまでは、彼の言葉を疑おう…

そして…もし…真実ならば…

その時は…

貴方達に…殺されても…文句は言えませんね…シロウ…

…どのようにして、償えばいいのだろう…

シロウの、シホの人生を奪った罪を…

「…自身の国も、守れなかった愚か者が…平和に生きた者達の時間までも、奪った…か…」

…私は…どうすればいい…？

やはり、私は…王になど、なるべきでは…

「クェ！！」

コンコン

…？

ココに、突かれた。

その嘴には、手紙が咥えられていた。

「ココ？これは…私に、ですか？」

「クェ。」

ココは、コクン、と首を縦に振った。

…どうやら、私宛らしい…なんだろうか？

私は、手紙を受け取り、開いた。

そこには、こんなことが書かれていた。

『セイバーへ。

なにやら悩んでいる様子だったので、この手紙を書いておく。

…きっと、俺がもたらした情報が原因だろうからな…

知らないという罪、知りすぎる罠…お前は、今、きっとその両方に苦しんでる。

…まぁ、外れてたら痛すぎるしハズすぎるので、見なかったことにして焼いてくれ。

…こんなことを、俺が書いているのはココに言われたからなんだ。

…ココは、さ…俺が、助けられなかった…見殺しにした女の子が、何故かチョコボとして、記憶を持ったまま転生した存在。

教会の地下で、聖杯戦争の被害を受け続けた少女の、成れの果てなんだ。

…俺は、ココを助けられなかった。

悔しくて、悲しくて…ひたすら、謝ったよ…

そしたらさ…

『助けたことを、後悔しないで』って、思いっきり怒られた。

『じゃないと、助かった皆が、かわいそうだ』ってな…

自分を責めるのもいいだろう。

…けど、度が過ぎると、逆に相手を傷つけるし、失礼だ。

…まぁ、なにが言いたいか、というと…

人に、心の中で謝って、自身を責め続ける前に、一度、相手と腹を割って話し合え、と。

…お前の場合は、士郎と志保だな…

…多分、ココとおんなじことを言うと思うが。

自分を責めるくらいだったら、士郎と、志保…二人と、きちんと話し合って…

自分の、“本当の罪”を確認した上で…

全てのことを終えてから…改めて、お前の罪を数えれば良い。

…ま、お前に何時までも凹まれてたんじゃこっちが困るからな…

自身を責めるのも程々にな？

…昨晩、士郎に相談されちまったよ…

（こんな手紙を書いた理由の一つは、士郎に頼まれたってのもある。）

…志保も、口には出さなくても心配してるだろうからな。

――実年齢、わからんけど…年長者が、年下に心配させるものじゃないぞ…お互いに。

ま、頑張ろうや…少なくとも、マスター達を守ること…これが俺達の仕事だろう？

『 by ミミック：定霧　久郎 』

…ミミック…

「これを、彼が…？」

「クェ！」

…どうやら、悩んでいるのはバレバレだったようですね…

…本当の罪、ですか…

今の私には、わかりそうもありませんね…

ですが…感謝します、ミミック。

…自身のすべきことを、再確認できました。

…一度、シロウと話しましょう。

その上で…

「私の罪を…数えましょう。」

「クェフッ!?」

自分の、これからすべきことを呟いただけですが…何故か、ココが咽ましたね…

――sideクロウ

…ん?なんだろう…

俺、余計な事をしたような気が…

…そういや、ライダーの真名はなんなのやら…

アーチャー・セイバーもわからんがな…

セイバーが、生前王様だったってのはわかってるけどな…

昨日、ココが“騎士王”って言ってたし。

ん~…やっぱり、ココに真名教えて貰っておくか…?

でも、余計なことを知ると妙な先入観が働きそうで…

…だがなぁ…やっぱり、教わっておくかな?

ここからは、俺には交渉の必要もなさそうだしな…

いや?でもココ曰く、ギルとかいう英雄がラスボス役として存在する…とかなんとか…

見事に口を滑らせてくれたからな…

…ギル…ギルガメス？
…でもなけりゃギルガメッシュ？

…確かに、偉大な王だろうけど…
あれって、語られるような宝具なんか持ってたか？

どっちかっていうと、森のエンキドのほうが強そうだが…
エンキドがバーサーカーで召喚されたら洒落にならなさそうだな。

ギルガメッシュ…まさか、冥界の王のほうじゃねぇだろうな…だったら、素の能力がとんでもないことになるな…

ともかく、宝具…まさか…ウルクの城壁？
国が余の宝具だ…とかいって使ってきたら…やばいな…かっこよすぎる…

ＦＦ的な奴は…あまりにも格好良い最後を魅せるアイツは…
…いやいやいや…無いだろ、無い…ラスボスってキャラじゃない…

…と、どうでもいい？事を考えていたら、学校に着いたようだ。

そのまま校門を通過…って…なんだ！？
空気が…甘ったるい？

「…ねぇ…慎二？この結界…貴方の仕業？」

一人驚愕していたら、凛が慎二に声をかけていた。

「…ああ、そうさ。

この結界は…僕の指示で、ライダーが張った。」

…どうやら、この甘ったるい空気の正体は、ライダーの張った結界が原因らしい。

「結界!?この学校にか!?」

「…確かに、空気が何かベタっとしてるけど…」

…どうやら、志保は多少は感知していたらしい。

何のための結界なんだ?

…調べてみるか?いや…本人いるし、訊いたほうが早いな。

等と考えていたら、凛が慎二に詰め寄った。

「アンタ!!何考えてるのよ!!

…この結界、発動したら、中にいる全員が融解・吸収される代物じゃない!!」

「「…え?」」

…どうやら、思ったよりも厄介な代物だったらしい。

桜は…知っていたのか?全然驚いてない。

…慎二が、少々慌てて説明をしだした。凛のプレッシャーが豪い事に…そりゃ怖いって…

「ちょ、ま、待ってくれ!!勿論、使うつもりなんか毛頭ないよ!!

この学校に、他のマスターが潜んでいないかどうかを調べるために張ったんだ!!

あぶり出しのつもりで…それに、いざ戦闘になったときにも、優位に働くし、ね…」

ふむ？嘘は言ってないな。
眼に嘘が見えない。

…ま、あのお人よし兄妹の友人が、そうそうそんな外道な行動に出るはずもないか？

『…で？それだけって訳じゃないんだろ？ライダー。』

ただ、何か隠してる。
ってなわけで、ライダーに訊いて見よう。

『…ええ、リンに対する牽制でもあったのですが…無駄になりましたね。』

…なるほどね。そりゃこの場じゃ言えないわな…
言ったら…

「…そう、そういうこと…まぁ良いわ…実際、被害があった訳でもないし…」

…凛が、絶対に切れる。

ま、被害も出てな…って…ん？待てよ…？
確か…俺が召喚された日って…士郎がランサーに襲われた日でもあって…
ランサーを追って、アーチャー組が士郎＆セイバーと遭遇…

あれ…？何でここにアーチャー組が出てくるんだ…？
士郎は、学校でランサーに刺されたって言ってたし…

ふむ？おかしいな…あの時点では、別に同盟も何も無かったはず…

…あ、そういや、アーチャーはランサーと戦ってたんだっけ？

で、学校に残ってた士郎がそれを目撃…ランサー、目撃者の口封じ…

んん？なんで生きているんだ！？士郎…

…アーチャーに、ちょっと訊いてみるか…

『なあ、アーチャー？いくつか訊きたい事があるんだが？』

『…なんだ。』

…うん？何かコイツも考え込んでたようだな…セイバーといいコイツといい…

…ま、いっか…俺にどうこうできる問題でもないだろ…

『ああ、まず一つ目…なんで、お前がランサーと戦ったんだ？この学校で…

いや、そりゃサーヴァント同士が戦闘するのはわかるんだ。

…ただ、何故にこんなとこで？』

とりあえず、疑問は潰しておこう。

『…この学校に仕掛けられた結界を、凛が調べていた結果だ。

結界を除去しようとしていたところを、ランサーと遭遇したのでな。』

…マテや…

つまり、ランサーとの戦闘のそもそもの原因って…

ライダーの結界かよ…

うわぁ…これは気づかなきゃよかった…

『…じゃぁ、二つ目…士郎がそれを目撃、ランサーに口封じされたのはわかった…

…何故に士郎が生きてるんだ？』

気を取り直して質問。

ある意味、一番の謎だ。

『…フン…何、ただ、通りすがりのお節介がいただけの話だ。』

だが、この質問には明確な解答をくれなかった。

…どうやら話したくないらしい。

ただ…どこか嬉しそうだったがな。

多分、だが…凛が士郎を助けたんだろうな。

…その際、何があったかは知らんが…士郎が持ってた宝石が、凛の物だったんだろうな…

……あん？

宝石…？あの上質な宝石…？若干魔力が篭ってた…？

…士郎、恩人がわかったぞ…ただ、俺の口からは言えん。

仮に気が付いても、口には出さないでくれ…

…お前の親友が、死ぬかもしれん…

士郎の治療＝宝石を使用
士郎の怪我の原因→聖杯戦争に巻き込まれた
巻き込んだ？→凛、学校でサーヴァント戦を展開
巻き込んだ→責任を感じ？士郎を治療＝宝石を使用

…ここまではいい。
だが…

凛が学校にいた原因＝サーヴァント戦の原因＝衛宮兄妹が聖杯戦争に巻き込まれた原因
凛が学校にいた原因→ライダーの結界
ライダーの結界→慎二が指示

ってことになると…なぁ？

このことは…胸の内にしまっておこう…（汗）

『…ミミック？皆、行ってしまいますよ。』

…地味に重大な事実に気が付いてしまった俺をおいて、皆さんはとっとと移動していたようだ。

『…悪い、ちょっと知りすぎる罠って奴に掛かってた…』

『罠…？』

『いや、気にしないでいい…行こうか。』

…これ以上考え込んでても意味が無いしな。

そうして、俺は少々慌てて志保の後を追ったんだが…
途中、女子生徒と一瞬眼があった気が…気の所為か？
なんというか、不思議と周囲を和ませそうな女の子だったが…俺、霊体化してるよな…？
いや待て…ライダーのことも目で追ってなかったか？彼女…まさか…俺達、視えてる…？

――――まぁいろいろあったけど…どうにか俺達は学校に到着した訳だが…

なんというか、こう…聖杯戦争と直接関係無いところで、俺達が疲弊する羽目になるなんてな…

…とは、俺・アーチャー・ライダーの共通見解となったよ…帰宅後の、な…

“第十一話／「知らない罪・知りすぎる罠。」”（後書き）

時間もかかりましたが…なんとか更新できました。
若干短いですが…なんとか形にはなりました。

執筆に時間がかかった理由ですか？
…リアルが…（泣）

？「しゃーないじゃん。自教に通ってるんだしな。」
侑斗「…そういうことは黙っておこうぜ舞人よ…」
舞人「どーもこちら隣の晩御飯。桜井舞人です。」
侑斗「…え～と…事情がわからないと思うので軽く説明を…
自分、実はネット環境が無い…訳じゃないんですが…接続できるＰＣを持ってないのですよ。」
舞「んで、俺の家で投稿してる訳だ。とまぁ…現在隣で鼻息荒くしてる侑斗君よ…」
侑「うるさい黙れ髭を剃っておこうよ舞人。
　ってか単なる鼻炎っすから。」
舞「まぁ、比喩だ比喩。んで…俺と皆さんに言うべきことがあるんじゃないか？？」
侑「え～…わかったから自分のページに帰ってくださいっての…」
舞「わかったから、ライダーキックとかパンチ構えんな。それじゃ、こっちの小説も是非見てください。ではでは～。」

…それはともかく、お読みになってくださっている皆様、本当にありがとうございます！！

“第十二話／「ダンボール／依頼／想い／考察」”

――な、何故私がこんな目に…

――…知るか、文句は凛に言え！

――静かにしてください、二人とも。

“第十二話／「ダンボール／依頼／想い／考察」”

――ｓｉｄｅクロウ

学校に入り、今は一時間目が終わったタイミング。

…つまりは授業の中休みって訳だ。

生徒が、次の授業の準備をしたり友人と話をしたりする時間…

俺は…

――ダンボールに、入っていた…教室の後方で。

何故にこんなことになっているか、というと…

――約一時間前――

俺達は、若干先行してしまった志保達に追いついた。

『…そういや、ライダーはどうするんだ？』

『私はシンジの後ろにいるつもりです。
サクラの後ろでは、他のサーヴァントやマスターに警戒させてしまいます…とはいえ、現状ではあまり意味がありませんが。
…それにどちらか、と言えばシンジの方が不安ですし。』

なるほどね？
…まあ、何があるかわからんしな。

…しかしコイツ、見た目…ってか服装がちとアレだけど普通に良い奴だな…

「おはよう衛宮兄妹、間桐兄妹、…って何故遠坂がいる…」

っと、マスター達が級友に声をかけられていた。

「おはよう一成。」
「おはよう一成…ってまた被った…」
「ああ、おはよう柳洞。今日は珍しく兄妹でまとめたね？」
「おはようございます、柳洞先輩。」

それに挨拶を返す四人。
志保は士郎と台詞が被ったのを気にしているようだった。

そして…

「おはよう柳洞君？朝からずいぶんな挨拶ね？」

…猫を被った凛。
…やはり、学校では被っているんだな、アレ…

「何故に貴様がここに、というか衛宮と一緒に登校している！
ええい士郎、前にも言ったであろう！遠坂は女狐だと！」
「ずいぶんな評価じゃない柳洞君。
間桐の家と遠坂家は古くから交流があるの。そこの家の長男の友人達と私が一緒に登校するのがそんなに不思議かしら？」
「な…なんということだ…それは真実か間桐！？」
「あ、ああ…」
「なんという…ええい衛宮！悪影響を受ける前に遠坂から離れろ！」
「あ、悪影響って…た、多分大丈夫…だよ？」
「本当にずいぶんなこと言ってくれるわね…って志保？なんで疑問形なのかしら？」
「いや、今朝なんか遠坂のうっかり癖が伝染してたし…」
「あ～確かに…」
「何！？遠坂、貴様衛宮になんということを！！」
「な、なんでそこで肯定するのよ士郎！…ってあ…」
「士郎！？何故遠坂が士郎を呼び捨てにしているのだ！？
…は！？そういえばつい先ほども衛宮を“志保”と…」

そしてはじまる舌戦。
どうやらこの柳洞一成という生徒、凛の不倶戴天の敵らしいな…

普段はどうだか知らないが、今回は凛の旗色が悪いな。
…ま、自滅っぽいが。

「それは私も訊きたいな…遠坂女史。」
「まったくだよ、遠坂…今朝は先生の手前と初対面の人がいたから我慢してたけど、しっかり話して貰うわよ！」
「何時の間に衛宮と仲良くなってるんだよ遠坂！」
「あ…その、私も、気になります…」

「遠坂先輩!?何時の間に先輩を呼び捨てにするほど仲良くなってるんですか!?」

そこに現れる四人の女子生徒。
それに桜を含めた五人は凛に詰め寄った。
内一人は今朝も見た顔だった…確か、美綴　綾子…だっけか？
それに、眼鏡をかけたどことなくクールでソリッドな雰囲気を持つ生徒、健康的に焼けた…和服が似合いそうな生徒と…
ついさっき、俺と一瞬目が会った気がするなんというか“ほにゃっ”とした空気を放つ生徒…ってまずい!?

『アーチャー!ライダー!こっちへこい!!』
『な!?なんですかミミック!?』
『な、何だ!?』

彼女の注意が凛に向いている隙に物陰にダッシュ。
ライダー、アーチャーも戸惑いながらもついて来た。

『…どうやら、間に合ったか…』

…彼女は、俺達を気にせず凛に詰め寄っていた。

『なんだと言うのですかミミック？』
『貴様、何を警戒している。』

アーチャー達には、俺が何を気にしていたかはわからなかったようだ。
…本気で危なかったな…

『…あそこの女子生徒…さっき、俺とライダーが視えていたっぽい

んだよ…』

一応、教えておこう。

…ってか、結構非常事態だし。

『な!?…それは本当ですか?』

『…ああ、一瞬俺と目が合った…気のせいだったとしても、ライダーのことを目で追っていたぞ?』

『霊視能力だと?』

物陰で話し合う三人。

…この姿が視えていたら大惨事だな…

『…偶然、かもしれないが…一応、警戒しておいて損は無いだろ…』

俺はそれだけ言うと、彼女達の方を見た。。

…いまだに、凛は詰め寄られ…って逃げた。

それを追う眼鏡・色黒・美綴…(しかたないだろ、まだ名前わからないんだから)

溜息を吐き、教室へと移動する桜。

そして…志保に声をかけるあの女子。

…会話に、聞き耳を立ててみた。

…ライダー達も、俺の真似をしている。

耳を澄ますと、会話がきこえてきた。

(じゃあ、志保ちゃん達の家に遠坂さんが?)

(うん…その…ごめん…)

（あ！その…いいよ…そ、それよりちょっと気になることがあるんだけど…）
（何？）
（えっと、その…さっき、校門のところで見たんだけど…黒いコートと帽子を被った大人の人が一緒にいなかった？）
！？や、やっぱり視えてたか…
そんなことを訊かれた志保は、一瞬かなり驚いた表情を見せたが、どうにか平静を装っている。
そして、俺のほうへ視線を向けた。
一瞬実体化してアイコンタクト！！…頼む！！誤魔化してくれ！！
俺の見間違いじゃなければ、志保はコクンと首を縦に動かしていた。
（え～…っと、そんな“人”は一緒じゃなかったはずだけど…）
（え？じゃ、じゃああの人は？）
（え～と…その…ほら？一成に聞いたんだけど…三枝さんって、幽霊とかが視えるんだっけ？）
（え？えと…うん…そうみたいだけど…）
（じゃあ、きっとそれじゃないかと…）
…志保、振っておいてアレだがそれは無茶じゃないか？
（え？そ、そうかな…？）
（き、きっとそうだよ！）
通じるのかよ！？
つい、その場で手首をスナップさせてしまった。

（でも…だとすると、あの人って…？）
（う！？そ、その…あ！私の父さんかもしれない！昔は、よくコート着てたし！！）
…だから無茶だっての！
（そっか…志保ちゃんのお父さんかぁ…なら良かった、怖い人じゃなくて。）
信じるの！？
＜キン…コーン＞
（あ！？チャイムが鳴っちゃった…急がなきゃ。）
（あ、うん…またね！？）
そして移動する彼女…
マイペースというかなんというか…
彼女が移動したのを見送ってから、志保の後ろに移動。
志保に聞こえるように、俺はこう呟いた。
『…彼女が天然で、助かった…』
「…そうだね。」
『…この場においては同感です。』
『…ああ。』
「志保！俺達も急がないと藤ねえが叫ぶ！！」
息を吐いていたら、士郎が志保に声をかけた。

「え？あ！急がなきゃ！」

そしてそのまま、志保達は自分の教室へと早歩きで移動した。

アーチャーは、凛の許へ…

ーーーそうして、今ーーー

…授業中は良かったが…

授業が終わると同時に、今朝の四人が志保達の教室に入ってきたんだよ。

慌てた俺は、ライダーに隠れるように指示して隠れた訳だ。

…教室の後方に転がってた空のダンボールの中に。（ライダーは掃除用具入れに飛び込んだのを目撃した。）

…今思ったが、霊体なんだから窓の外に出てれば良かっただろうか…？

あの四人は士郎に詰め寄って？いた。

何で学校休んでたんだーとか

何故学校に連絡を入れなかったーとか

心配したんだよーとか

あの時はありがとうーとか…

そんな声が聞えてくる。

ふむ…士郎、結構学校で人気があるのかな？良くわからんが。

と、その時、俺が隠れたダンボールに危機が迫っていた。

「む？誰だ、こんなところにダンボールを放り出しておくなんて…」

やべっ！？まだ彼女はこの教室にいるのに！！

この声は…一成だったか？

…糞、覚悟を決めるか…

「待つでござるよ柳洞殿。

こういった場所に置いてある微妙に浮いたダンボールは、たとえ目に付いたとしても放って置くのがマナーでござる。」

…と思っていたら、謎の助け舟が出た。

今時ござる？とも思うが、助かる！名も知らぬ少年！！

「そ、そういうものなのか後藤？」

「そうでござる。」

間髪入れずに断言する後藤（？）君。

「そ、そうだよ一成。」

「む、衛宮もそういうのならきっとそういうものなのだろう…」

それに便乗する志保。

それで納得する一成。

＜キンコーン＞

そしてチャイムが鳴った。

…どうやら、彼女達は自身の教室に帰っていったようだ。

しかし…助かった俺が言うのもなんだが…これでいいのか？

「…だが、ここに置いていては邪魔になる。
端に寄せておこう。」

ヒョイッ

＜！＞
Σｏｒｚ

いきなり、持ち上げられたダンボール。

…結構焦ったぞ、ちょうど気を抜いた瞬間だったから。

彼女達がいないようなので、そこまで警戒はしていないが…
お？ライダーが出てきた。

『…ギリギリでしたね…』

『ああ…そういやアーチャーは大丈夫かね？
…さっきの声を聞く限り、彼女達と同じ教室っぽいが。』

『大丈夫、と思うしかないですね…』

…しっかし…これは疲れるな…ハァ…

―――sideセイバー

―――依頼と疑問点―――

自分が、今後するべきことを自覚した後…
ミミックからの依頼を思い出し、ココを連れてランサー達が使用している部屋へと向かう。

＜コンコン＞
「ランサー?今、部屋に入っても大丈夫でしょうか?」

扉をノックし、中にいるであろうランサーに声をかける。
すると、ランサーが扉を開けた。
そしてランサーのマスター…バゼットは返事を返した。

「セイバーですか…?大丈夫ですが…なんでしょうか?」

彼女はベッドに腰掛け、左腕の調子を見ていたようだ。
私は、ミミックからの依頼を伝えることにした。

「ええ…貴女達に、ミミックからの依頼…伝言を伝えようと思いまして。」

「ミミックですか?…なんでしょうか…」

「アイツから依頼?」

どうやら、心当たりは無かった様子。
…何も話を通していないのですか、ミミック…

「ええ…なんでも、余裕があれば外道…監督役の行方を追って欲しい、と言っていました。
…バゼット、貴女の体は大丈夫なのですか？」

正直、仮死状態だった人間に依頼することではないと思いましたが…この二人が適任なのは事実。余裕があるようでしたらお願いしたいと思います。

「コトミネですか…追いたいのは山々なのですが…まだ、左腕が万全とは言えません。
…ランサーはどうですか？」

依頼を聞いたバゼットは、悔しそうな表情をして、言外に無理だと言っている。
そして、話を振られたランサーは…

「ああ…まだ全快って訳じゃねぇが…問題無い。
…バゼットさえ良ければあの似非神父を追いてぇよ。」

…と、やる気はあるようでした。
そして、そう言われたバゼットは少し考えた後、ランサーに指示を出した。

「そうですか…ではランサー、コトミネを追ってください。
…ただし、決して無理をしないようにしてください。奴の行方を追うのが目的ですから…」

「ああ、わかった…また偵察任務か、とも思うが…今回は仕方ねぇ…
…アイツからの依頼じゃ、断れねぇしな…」

と、少々思うところもあったようだが承諾した。

「そうですね…彼には恩がありますし…貴方に勝利したという話ですしね…」

…今、気になりましたが…彼はどうやってランサーに勝利したんでしょうか？
彼の話では、単騎ではどんな相手にも勝利できない、という話でしたが…

「すみません、ランサー。その件で気になったのですが、本当にミミックは貴方に勝利したのですか？
彼の言い分では、自分は時間稼ぎ以外できない、とのことですが…」

戦力にかかわる疑問だったので、早めに解消しようと思いランサーに質問してみた。
すると、少々苦い表情をしていたが回答してくれた。
…少々、予想外の内容を。

「…アイツ自身の能力だと、おそらくそれで正しいんだろうが…
あの時は完全にアイツの戦術にはまっちまったからな…」

「戦術…ですか？」

「ああ、アイツの能力は“他人の能力の模写”ってとこなんだろうが…武器性能は真似できねぇ。

ただ…アイツは俺の槍の能力（ゲイボルク）よりも下手したら厄介な槍を持ってやがったんだ。」

な!?

かの魔槍よりも厄介な魔槍…?

つまり、ランサーはその武器性能の差で敗北したということだろうか?

「確か…削り取る命血の槍（ブラッドランス）っつってたか?

必殺力は俺の槍の方が遥かに上だが…あの槍は別の意味で反則だったぜ…

なんせ、少し掠っただけで体力を全快時の十六分の一削り取っちまうんだからな…

つまり、こちらの防御力に係わらず、十六回当たればアウトって訳だ。」

…なんだ!?その槍は!?

つまり、その能力に気が付かなかったランサーがその槍に掠ってしまい、それが原因での敗北ということか…

「…俺も、最後には真名解放したが…直後に呪いを解除するアイテムと完全回復薬使われて終了だ。

もう一度やればまず間違いなく負けないだろうが…まだ、何か隠し持ってやがる。アイツは、まさにイレギュラーだぜ…

なにより、戦略の立て方が巧い。正直二度と敵には回したくねぇな。」

…かのアイルランドの光の御子にここまで言わせるとは…

本当に、彼は反則じみている。

…彼が敵でなくて、良かった…と思うべきだろうか…

…疑問は解決したが…別の疑問が生まれてしまいました…
彼の“幻想の道具欄”には、一体何が入っているのだろう…

――sideクロウ

…？なんだ…？
家を出てからこれで妙な気配を感じるのは二度目…
俺、何かやったかねぇ…？

…っと…それはともかく…
今、俺はいろんな意味でピンチである。

なぜなら…

『…すみませんミミック。咄嗟だったのです…』

…ダンボールの中に、ライダーと一緒に詰まってるからだ。
何故か、というと…
二時限目の終了と“ほぼ”同時に例の女子達がこの教室に現れたんだよ…
なんでチャイムが鳴り終わるより早いんだよ！？
と思いながらも、俺は志保が一瞬蹴り上げてくれた例のダンボールに飛び込んだんだよ。
…そしたら、それと同じタイミングでライダーも潜り込んできた…って訳だ。
で、今さっきの台詞が出てきた、という訳…俺は誰に説明してるんだ？

ってか近い!!狭い!!!いくら大きめのダンボールでも、大柄な俺と長身のライダーじゃいっぱいいっぱいだ!?外にお互いにはみ出せないから余計に密着しないとって地味にキツイ!!!
体勢が体勢だから目を開けられんし!!!!!

『…あの…すみませんが若干膝を伸ばして貰えますか?背中側がはみ出そうです。』
『…了解した…』

…は、早くこの教室から出てくれよ!?
色々と精神的にもキツイんだからな!!

ってか霊体同士だと普通に触れられるのな!?初めて知ったわ!!俺か!?俺が特殊なのか!?何故か霊体化してても俺の方からは物をすり抜けられないし!!

『…ライダー、今思ったんだが…お前は床抜けられないのか?俺はうまくいかないんだが…』
『…そういえば、その手がありましたね…ですが、今は不可能です。』
『…何故。』
『…貴方が、私の下にいるからです。』

…シット…そういうことかい…
ってかやっぱり俺が変なのか…
そもそも壁抜けの感覚がよくわからんしな…ってそれはどうでもいいんだが…

『そうかい…ま、仕方ないか…ハァ…』
『っ!?あ、あまり強く息を吐かないでください…!』
『あ、悪＜ドガン!＞いぃ!?』

と、少々悪いこと?したなと思ったので謝ろうとしたら、いきなりダンボールに衝撃が走った。
そして頭の上から声が聞えてきた…

「志保ちゃん?いきなりダンボール蹴ったりして…どうかしたの?」
「え?別に?なんでもないよ…ね?」
「いやなんで疑問形?」

…どうやら、犯人は志保のようだ。

「そのダンボール…放っておくのがマナーだったのでは?」
「そ、それは…なんていうか、目につき過ぎると、機関銃で撃たれるぞ?ってことで…」

いや待て、お前がこれに他人の視線集中させないでくれよ志保!?
ってかそんなゲーム昔やったな!?
たしかメタ…

「まあ、流石に機関銃はないから…包丁…とか?」
「いやとか?とか訊かれても…」

…志保!?それは９９９９ダメージ確定の一撃必殺アイテムだぞ!?投げたり人に刺してはいけません!!

「そ、そんなことより＜キンコーン＞…チャイム、鳴ったよ?戻ったほうがいいんじゃない?」

「う…そうだね…じゃあ衛宮？次も来るから…逃げないでよ？」
「そうだぞ衛宮！逃げたらひどいからな！！」
「あ、待ってよ皆…あ、また後でね志保ちゃん？衛宮くん？」
「ではまたな？こら蒔の字、廊下はあまり走るものではないぞ？」

…どうやら行ったようだ。
チャイムに助けられたな…
皆がガタガタと席に着く音が聞える中、ダンボールが持ち上げられた。

「…（クロウのえっち…ボソッ）」

志保の視線と言葉が痛い！？

『ちょ…俺の所為か？今のは俺が悪いのか！？』

今のはライダーが潜り込んできたのがそもそもの問題点だろうが！？
ってライダーはライダーで定位置に戻ってるし！？

志保は何も言わず、ダンボールを畳み始めた。
ってかそれ畳むなよ！？隠れる場所が無くなるだろうが！？

『志保！？』

「…そもそも、こんなのがあったから…（ブツブツ…）」

志保は、何かをブツブツ言いながらダンボールを片付けた。
そして、俺の方を向き、小声で話した。

「（…無理して、教室にいなくていいから…屋上にでも出てて。

…どうせ、お昼にはそっちに行くから。）」

…いかにも“私、不機嫌です”といった表情でそんなことを告げられたので…

『…了解したよマスター。』

…素直に、俺は教室を出た。

女性がこんな表情の時は、素直に聞いたほうが良い。

…俺の人生経験的に。

『ライダー、そんな訳なのでこの場は任す。

…じゃあ気を付けろよ。』

『わかりました、貴方も油断しないでください。』

と、この場を離れる前にライダーに軽く声をかけ、そのまま教室の外へと出た。

…その際、一瞬志保を見たが…

何かを言いたそうな…寂しそうな表情で俺を見ていた…

それを見て、一瞬、何か…棘が刺さったような感覚を感じた。

それが何なのか…いまいち良くわからなかった。

ただ、少々…この感覚はいつかどこかで感じたことがあるような気がした。

俺が“生きて”いた頃…どこかで…

――ｓｉｄｅ志保

クロウが教室を出て行った。
そして、今は授業中…

はぁ…
さっきは、なんでクロウが隠れているダンボールを蹴ったりしたんだろう…
その後も、なんでか胸がモヤモヤしてて…教室を出てて、なんて言っちゃったし…

ふ、と教室を見渡す。
眼に魔力を流せば、霊体化してても視える…クロウに関してはその必要もないけど…
視界に入るのはぼんやり透けた紫の綺麗な髪…長髪で、セクシーな女性…ライダー。

私とは、完全に勝負にもならないほどのスタイル…顔を隠しているけれど、なんとなく、凄い美人だ、っていうのはわかる。
服装はともかく、常識のあるサーヴァント。
朝の様子からも、クロウからかなりの好評価を受けてるのが分かる。

…さっき、微妙にいちゃいちゃしてたような…いや、あれは緊急事態だし、お互いに“そういう”意図は…無い…はず。

私は…どうしちゃったんだろう…
クロウが、ライダーとかと話をしているのを見ると、胸がモヤモヤする…
それに、姿が見えないと落ち着かない…

もしかして…恋…？

逢ってから、まだ日も経ってない人に…？

…そもそも、私は…クロウのことを、あまり知らない。
それなのに、私が…クロウに恋をする要素なんか――
――“我が名に誓い、君を守り抜こう…この第二の命尽きるまで！！”

「ッ／／／」

…あった、かも…
あんなこと、真顔で言われたの、初めてだったからなぁ…
うぅ…意識してるのは事実なのかな…？

でも…

＜キン…コーン＞
「じゃあ授業はここまで！号令を。」
「起立！」

ガタガタガタッ！

考え込んでいる間に結構時間が経っていたみたいで…チャイムが鳴り、授業が終了。
一成の号令で、皆が起立。
…危うく聞き逃す所だった。

「礼！」

…そして礼。

先生が教室を去り、バラバラと皆が動く。
そして…

「さ、て、と…今度こそ本当のことを話して貰おうか衛宮？」

…現れる綾子。
詰め寄られる士郎。
慎二とライダーは逃走済み。一成は…いない…どこに消えた？

「う…だから…今朝から言って…」
「だ、か、ら！！まだ絶対に何か隠してるでしょ！」
「そ、そんなことは…」

…綾子も朝から頑張るよね…
ずっとこの調子で士郎に詰め寄ってる。
さっきまではあの陸上部三人娘も一緒だったけど…この時間は来てないね？
まぁトイレとかだと思うけどさ…

でも、どれだけ頑張ってもらっても、今回の件だけは話してあげられないんだよね…
ごめんね綾子…

その恋は応援したいんだけど…って…
そうだよ！恋愛の先輩がここにいるじゃん！？
二年近く士郎を一途に想い続けている乙女が！

士郎から視線を逸らすことも出来るし、相談してみよう…

「ねぇ綾子？ちょっといい…かな？」

「志保？どうかしたの？」
「うん…ちょっと相談したいことがあって…」
「相談？志保が？珍しいね…わかったよ。」

綾子に声をかけ、相談したいことがあると言ったら快く応じてくれた。

「ここじゃちょっとアレだから…」
「ん、わかったよ。」

内容が内容なので、綾子を連れて教室を出る。
そして、人気の無い場所へ移動。

そこで…

「で？相談って何？」
「うん…その…」

うわ…今気が付いたけど話づらいなぁ…

「本当に珍しいね？志保が言いよどむなんて…そんなに難しいことなの？」

言いよどんでる内に、綾子に心配されるくらい、難しい問題と思われた。

…実際結構難しいんだけどね…

「う…うん…そうかも…（スゥ…ハァ…）うん、ごめん、またせた…」

「本当に大丈夫？っていうかアンタが手間取る問題に私が力を貸せるとは思えないんだけど…」
「私じゃ綾子位しか相談できる相手を思いつかないよ…」
「そうなの？」
「うん…だって…内容が…恋愛相談、だし…」
「へぇ…恋愛相だ…って、えええええええ！？」

恋愛相談
その言葉を言った後…綾子はその言葉を理解するのに一瞬かかり、理解すると同時に絶叫。

…流石に、それは失礼なんじゃ…

「そんなに…驚くこと…なの？」
「だって志保だよ！？あの男を異性として全然見ない志保が恋愛相談！？夢！？違うの！？」

…そんな風に見られてたんだ、私…

「夢じゃないよ、残念だけどね？」

ちょっとむっとしたので言葉が刺々しくなっていた。
…まぁいいや…

「ご、ごめん…そんな怒らないでよ志保…」
「もう…別にいいけどさ…似合わないって自覚はあるし…」
「ごめんってば…で？どんな内容よ…」
「ふぅ…それが…」

何はともあれ話を聞いてくれそうなので、話してみた…

クロウを見ていると感じる感覚…
そばにいないと落ち着かないとか…
他の女性と話してるとモヤモヤするとか…
…そもそも恋愛というのが良くわからないとか…

「う～…ん…そういうこと、か…」

話を終えた後、綾子は真面目な顔で考え込んでいた。
そして、答えがでたのか綾子は口を開いた。

「多分、なんだけど…志保は定霧さんのことを意識してるのは間違いないよ。」

あう…やっぱり…そう、なんだ…／／／

「ただ…志保の場合、男の人を“男性”…つまり異性として見たことがなかったんじゃない？
そこに、初めて異性として意識できる人が出来たから…だから、若干暴走気味になってるんだと思うけど…
一度、じっくりとその…定霧さんのことを見極めてみることを勧めるかな…どんな人か、とか本当に自分が彼のことを好きなのか、とか…」

さらに、綾子は私にそう言った。
…そっか…私の場合、確かに今まで“異性”を意識したことって無いや…

だから、余計に意識しちゃってる、と…

言われて、納得したよ…
胸に、ストンと落ちた感じがする。

綾子に聞いて、正解だったな…ありがとう、綾子…
それにしても…凄い説得力だね…もしかして…？

「なんか凄く感情が篭ってるけど…もしかして、体験談だったりするの？」

対・士郎の…
と思ったことを訊いてみた。
すると、綾子は若干顔を赤くして答えてくれた。

「あ、あはは…もう志保にはばれてるから言うけど…私も、最初は衛宮のことが好きなのかどうか、自分に自信がもてなくてね…
最初はただ意識してただけだったんだろうけど…アイツのこと、観察してるうちに夢中になってたよ。
ってそれはともかく！！ちゃんと自分の想いに折り合いつけなよ？モヤモヤしたままって、かなりストレス溜まるから。」

なるほどね…そういう理由だったんだ…
ありがたい経験談も頂けたところで、そろそろ教室に戻らないと…

「そうだね…ありがとう、綾子…
もうそろそろ教室に戻ろ？次の授業があるし。」
「あ…そうだね。
…に、しても…志保に恋愛相談される日がくるとはねぇ…」
「あはは…それは私も思うよ…」

…まあ、いろいろあるけど…ちゃんと、自分と向かい合っていこう。
さしあたって、まずは…

…クロウのこと、ちゃんと知りたいな…
昔、何やってたとか…さ、知りたいことは、いろいろあるからね？
だから…

「後で…覚悟しといてよ？クロウ…」

――sideクロウ

…？
またか？
また何か妙な感覚が…まさか死亡フラグ！？
俺…明日の朝日拝めるのか！？

『…なにやってんだろ、俺…』

志保に教室から追い出され、屋上で空を見上げていた俺。
一人で一時間以上する事が無いと、馬鹿なことが脳裏を過ぎる。

とはいえ、昼休みまで後一時限ある。
暇だなぁ…

…俺が高校に通っていた頃は…こんなにゆったりと暇な時間はすご

してなかったな…

あの頃はいろいろゴタゴタしてたからな…

こんな風に、ボーっとしてるといらんこと思い出すな…

そういや、中学・高校に通っていたころは、クラスに一人はいたなぁ…“異世界にいきたい”とか戯けたことほざく奴が…

リリカルがどうとか葱がどうとか…“特殊能力”を持ってその世界に行って、このキャラを助けたいとかこのキャラをボコにしたいとか…

…今思ったが、俺の状況もアイツらが言っていた状況なのか？

一応、この世界もゲームやらなんやらで似たような世界が“俺の世界”で観測出来たらしいし。

ファンタジーには違いないし…に、してもダークな世界だがね…元は十八禁だったらしいな、ココ曰く。

特殊能力あるし…正直そんなに強くないけど。

そもそも、魔術師達はどっちかというと悪役サイドっていう時点で既に奴らの“逝”きたい世界とは違うんだろうけどな…

ただ、アイツらに、今なら言える。

…まず、家族を、大事にしろよ…

…はぁ…

暇だ…

うっかり中・高のクラスメイトの顔を思い出して問いかけてしまうくらい暇だ…

『…デンライナーでも、空を走らないかなぁ…』

ああ…そういや、超・電王3見逃したな…Wの劇場版も夏に公開予定だったのに…
ああ!?ドラゴンナイトのDVDも買ってない!?
Wもエクトリーム見逃したし…ってか最終話まで見てねぇよ…

欝だ…アイテムリストの中に、昭和全部と平成ライダーはDCDまでのDVD&CDが入ってたのが救いか…
今度見よ…あ、士郎も巻き込むかな…アイツ、結構好きそうだし。

そういやドラゴンナイトで思ったが…この聖杯戦争の成り立ちって、“龍騎”っぽいんだよな…

仮面ライダー＝魔術師
サーヴァント＝ミラーモンスター
令呪＝デッキ
宝具＝カード（ファイナルベント）

優勝者の願いが叶う＝聖杯入手
バトルロワイアル＝バトルロワイアル（サバイバル）

実は、ゲームマスターの願いを叶えるための戦い＝始まりの御三家（恐らく、アインツベルンが主?）の願望?

…おおう…なんとなく考えただけだが、結構ピッタリとはまるなぁ…
…俺なんか、どうせカニが関の山だろうなぁ…

丁度いいや、暇つぶしにサーヴァントを仮面ライダーに当てはめてよ…

セイバーは…うん、“龍騎”。マスターが半人前だし、本人は強いし。

アーチャー…“ライア”？なんとなくだけど…ん？何故か“タイガ”が脳裏をよぎったぞ？全然違うよなぁ？

ランサーは…保留。良いのが思いつかない…“ナイト”？

ライダー…“ファム”？白い翼が似合いそうだ。

キャスター…そうだな…“インペラー”？アサシン連れてるし…“王蛇”とか“オルタナティブ”とかもありか？ルール違反っぷりが。

アサシン…本来ならキャモ…じゃなくて“ベルデ”なんだろうけど…

バーサーカー…“ガイ”。鉄板。

で、ギルなんとかは“オーディン”か？

…意外に面白いな…俺？カニ（シザース）、でもなけりゃカメレオン（ベルデ）。能力的にさ。

…この理屈だと、もう一人くらい敵で出てくることになるな…ダークなセイバー（リュウガ）が…

…勘弁してくれ…

『…何をそんなに嫌そうな顔をしてるんですか。』

『傍から見ると、ただの就職浪人だぞ。』

…などと考えていたら、後ろから声をかけられた。

ライダーとアーチャーか。

『ああ、ちょっと洒落にならない想像ってか妄想をしてしまっただけだ。

…ってかお前ら、どこからいた？そしてマスターはほっといて良いのか？』

振り向きながら返事をする。
そこには、やっぱり二人がいた。

『ええ、先にここに行くように指示されましたので。』
『こちらも同じだ。…お前がデンライナー？がどうのと言った時からここにいたぞ。』

おおう…独り言聞かれてた…
ま、良いや…

『…忘れろ、単なる独り言だ。
＜キン…コーン…＞
…っと…チャイムが鳴ったってことは、マスター達が来るな…』

…その場で待機、そして…

＜ガチャ…ギ、ギィ…＞

…扉が開く。
そして…

「はぁ…今日はえらい目に遭った…」
「お疲れ、士郎…」
「アンタの所為で、私まで散々な目に遭ったじゃない！」
「遠坂のは絶対に自業自と「なんか言った！？」イエ、ナンデモ…」
「お疲れ様です、先輩？遠坂先輩も、先輩や兄さんにあたらないでください！」

…賑やかだねぇ…
志保も、機嫌が直ってる…な。

それを見て、この屋上へと通じる扉を、実体化しながら閉じる俺。

「…流石に暇だったぞ、志保…」

若干苦笑しながら志保に声をかける。
…周りに人もいないしね。

それを見て、アーチャー、ライダーも実体化。
そうしないと、いちいち会話が難しいし。

「…ごめん、クロウ…」

シュンとする志保。
いや責めてる訳じゃないんだが…

「いや冗談。
ぼーっとしてただけだし。」

「はいはいそれは良いから！とりあえず、お昼にしましょ？」

パンパンと手を叩き、弁当を広げる凛。

「そうですね。」

それに続く桜。

「あぅ…わかった。」

…と志保。

慎二・士郎は黙って席に着く。
広がる弁当。

思い思い弁当を食べ始めるマスター達。

食べてる内に、士郎がふ、と気が付く。
…大の大人三人が突っ立ってるという事実に。

「…今気が付いたんだけど…アーチャー達はいいのか？飯…」

「忘れてないか？…基本的に俺達サーヴァントには飯は不要だぞ。」
「…そういうことだ。」

…ま、確かにやること無いけどな。

「そうか？
…けど気になるぞ…」

と、事情は理解しても、納得してないようだ。

「確かに…クロウ？一緒に食べる？」

食事に誘う志保。
だが…ねぇ？どう見ても一人分だしなぁ？
それを一緒に食べるのはどうかと思うぞ…
仕方が無い、ここは…

「ま、手持ち無沙汰だな…俺達。

…ってな訳だ、マスター達が気になるらしいのでご一緒するぞライダー、アーチャー。」

「しかしミミック…そこまで量が…」

…俺の宝具の中身を利用するとしよう。

「ま、生憎と料理は出ないが…果物くらいなら包丁ごとあるのだよご両人…＜シャン！＞っと…ほれ。」

そう言いながら、“幻想の道具欄”からリンゴと果物ナイフを取り出す。

…単なるリンゴだぞ？

士郎達の隣に座り、ショリショリと皮を剥く。

「い、今のは…？」

それを見て、呆然としている慎二・桜・ライダー…代表して、桜が俺に質問する。

そういや、こいつ等は俺の宝具を見たことなかったっけか？

「…こんなことに宝具を使うサーヴァントがいるなんてね…」

さらに呆れる凛。

いいじゃん、使い勝手良いんだから…

「は…？宝…具…？」

呆然とする慎二。

まあ確かに、こんなにあっさり宝具を使う奴はいないんだろうけどさ…
軽く説明だけしてやるか。

「…“幻想の道具欄”、ま、簡単に言うなら便利な倉庫だ…
そしてこれは単なるリンゴとナイフ。
…宝具ったって戦闘用じゃないモノだな…っと志保、借りるぞ。」

話しながら、弁当の蓋の上に切ったリンゴを並べる。
そしてライダーに渡す。

「え…あ、ありがとうございます。」

一瞬、呆けた後それを受け取るライダー。
それを見て、俺は次のリンゴを取り出し、アーチャーに投げ渡す。

「お前も食ってろ。
…志保達も食うか？」

何か、志保から妙なプレッシャーを感じるので、さらにリンゴを出しながら話を振る。

「え？あ…うん…」
「あ、じゃあ貰えるか？」
「…まぁ頂くわ。」
「私も良いんですか？」
「貰えるなら貰うよ。」

「了解っと。」

すると、一瞬驚いた後、マスター達は肯定。
俺は黙々と全員分のリンゴを剥く。

それが全員に行き渡った後、自分の分のリンゴを齧ろうとしたら…
いきなり、ギギィと屋上へ通じる扉が開く。

他の生徒が来たか?と俺達は霊体化してやり過ごそうとした、が…

「何ぃ!?」
「くっ!?またですか!!」
「ぬ!?ええぃ急げ貴様等!!」

…そこにいたのは…ってか来たのは…

「やっと見つけたよ遠坂!って衛宮も一緒!?桜まで!」
「待てよ美綴…ってなんでまた一緒にいるんだよ!?」
「…私達が御一緒しても…構わないな?衛宮。」

例の四人。
あの女生徒がまだいないが…扉の奥から(待ってよ~…)とか聞えているのですぐに来る!!

まず実態化で手のリンゴを投げる。
俺達は霊体化で扉の上部に全力で移動、実態化してリンゴをキャッチ。

「し、志保、ちゃん…わ、わたしも、一緒、に…ふぅ…お昼、食べても良い…?」

…そして現れる件の女生徒。

ギリギリセーフ！！

ってかなんとかしとけよ凛！！クラスメイトだろ！？

俺達はコンクリートの上にうつ伏せになっている。

…うっかり、視界に入らないように。

だけどそのまま実体の俺達。

何故かって？リンゴが食えないからだ

リンゴを齧りながら、俺達は…

（な、何故私がこんな目に…）

（…知るか、文句は凛に言え！）

（静かにしてください、二人とも。）

などと小声で愚痴ってた。

本当に頼むから、凛…放課後までにはなんとかしといてくれよ…

…あ、そうだ…放課後には校門で、車で待ってるかなぁ…はぁ…

一一一今度から、学校裏の雑木林にでも待機してよう、と思った一日。

…アーチャーもライダーも、結構精神的に疲弊してたしな…

俺も、もう正直勘弁して欲しいと思ったよ…

…もう、やだ…

“第十三話／「イリヤ再び…そして、王金の影。」”（前書き）

今回、後半Ｚｅｒｏのネタバレがあります。
ご注意下さい。

“第十三話／「イリヤ再び…そして、王金の影。」”

――衛宮、それはきっと所謂“燃え”ってヤツだと思うよ。

“第十三話／「イリヤ再び…そして、王金の影。」”

――ｓｉｄｅクロウ

あれから時は流れ…放課後になった。
俺は実体化して、校門の前で待機している。
アーチャーやライダーは…知らん、自力でなんとかしてるだろ。
しっかし…今日は本当に疲れた…
空を眺め、ぼうっとしている内に、俺に声がかけられた。

「クロウ？ここにいたんだ…待った？」

…志保だ。
そちらに視線を動かすと、志保、士郎、凛、霊体状態のアーチャー（物陰に隠れている）がいた。
…って桜と慎二がいないな？

「いや別に待ってはいないな。
…ところで、間桐兄妹はどうした？」

ちょっと気になったので、返事をしつつ質問。
すると、士郎が回答をくれた。

「ああ、桜と慎二は先に帰ったけど…ここを通らなかったのか？」

…？なんだ、俺が気が付かなかっただけか？
いや、俺がここに到着する前に通ったのかもな…

「いや見てないな…まあいいや、ライダーも一緒みたいだし心配はいらないか。
それより、いつまでもここに突っ立ってもアレだし、帰ろうぜ？」

「ん、そうだね…帰ろう。」

そして帰り道。
ちょっと駄弁りながら帰宅。

「それにしても…美綴、なんであんなに食い下がったんだろうな…なんでもないって言ってるのに…」

士郎は愚痴り…

『クッ…』

アーチャーは鼻で笑い…

「はぁ…綾子、頑張れ…」

志保は溜息…

「士郎、アンタ…はぁ…」

凛は呆れ…

「…それ、ただ単に士郎が色々と顔に出やすいってだけの話じゃないのか？」

俺はそれに突っ込みをいれ…

まぁこんな感じで道を歩く。

…そして途中の交差点で、士郎が急にこんな事を言い出した。

「あ、そうだ…食材、買いに行っておかないとすぐに切れそうだったんだ…

志保、俺はこのまま買い物に行ってくる。」

と。

まあ、確かにいきなり人数増えたしな…

「そう？お金はあるの？」

「ああ、ちゃんと持ってるよ。

じゃあ、商店街こっちだし、俺は行くぞ。」

などと考えている内に、士郎は歩いて…って待て！？

「ちょ「待ちなさい士郎！アンタ、まさか一人で行動するつもり！？」…まあいいけどさ…」

言いたいことを凛に言われてしまった…

…まあいいや。

「う…まだ日も出てるし、大丈夫だろ…」

「セイバーに怒られるわよ…？」

…ふう、助け舟出すか…

「…俺が、士郎に付いていけば大丈夫だろ？

こっちには“もう一人”いる訳だし。」

アーチャーの方を見ながら、俺はそう言った。

ま、昼間だし大丈夫だろ…

「…そうだね、じゃあ先に家に戻ってるから…寄り道はしないでよ？

行こう、遠坂。」

「え？あ、ちょ…」

若干、苦い顔をして志保は了承してくれたが…

…凛の手を引っ張ってツカツカと歩いていった。

「…志保、何か機嫌悪くなかったか？」

「あんな志保初めて見た…なんかあったのかな？」

男二人、呆然とそれを見送った。

「…買い物じゃなかったのか？」

「ああ、そうだな…行こう。」

そして、俺と士郎は商店街に向かって歩き出す。

途中、士郎が俺に話しかけてきた。

「なあクロウ?お前が朝に言ってた…仮面ライダー…だっけ?って、面白かったのか?」

…ほう?そちらからその話題を振ってくるとは…

「少なくとも、俺にとってはな。
…見るか?仮面ライダー。」

ちょうどいいから、引きずり込もう…
コッチへコイ…なんてな。

「へ?いや、“そっち”でしか放映してないんだろ?」

「大丈夫!!何故ならＤＶＤが“リスト”に入ってたんだ、プレーヤーもな。
よし、帰ったら見るか?」

「マジか!?じゃあ見る、むしろ見せてくれ!」

よし!ナイス食いつき!

「勿論だ!」

どこから見せようかな…やはり昭和ライダーからか?

クウガから見せてもいいけどな…
ああ、でもＤＣＤの前にＢＬＡＣＫとＲＸ、アマゾンは最低でも知ってて貰わないと…
劇場版の前に昭和の知識を少しは入れないとな…
ああ、そういえば昭和ライダーの紹介映像があったな…最悪、それでも…

などと考えている内に、商店街に到着。
買い物を済ませる。

そして、今は公園にて小休止。
…食材だけなのに、結構な量になったな…

「…なあ、士郎…ちょっと買いすぎじゃねえか？」
「…今日、色々と安かったから、つい…」

まあ、俺は問題なく持てるけど…
ちょっと面倒だぞ…？

って…そうだ！

「士郎、今、周りに人はいないな？」
「？ああ、見えないけど…」

よし、今のうちに…

「士郎、この食材は“俺の物”、ＯＫ？」

士郎に、強い視線で訴える。

“ヨコセ”って。

「ん？あ、ああ…」

持ち主から譲渡された、これでこの食材は俺の“所有物”。

つまり…

「“幻想の道具欄”…収納っと。」

“幻想の道具欄”に収納可能なのだよ。

ちゃんと、譲渡されれば。

「…は？あ、ああ！？そうか、そういえば保存も出来るって言ってたっけ…

反則的に便利だな…それ。」

と、士郎は驚愕。

ま、少し所有権云々が面倒だが確かに便利だ。

「よし、帰るか？」

「そうだな。って、どうせならこっちもしまってくれれば良かったのに…」

と、士郎の手にはタイヤキ。

そういや、さっき買ってたっけ…

「いや、お前が持ってたんじゃ無理だろ…」

「それもそうか…んじゃぁ…」

「…真昼間から何やってるの？お兄ちゃん達…」

「「!?」」

いきなり、真後ろから声をかけられる。
急いで振り向くとそこには…

「こんにちは、お兄ちゃん?」

銀色の髪、紅い瞳の少女…

「イ、イリヤ!?」

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンがいた。
い、いつの間に接近していたんだ!?全然気が付かなかった…

「むぅ…レディの名前を勝手に略しちゃだめでしょ?
まぁ、お兄ちゃんだから許してあげるけど…」

と、士郎の発言に苦言を呈しながら、優雅に（?）ベンチに腰掛けるイリヤ。

その間に、俺は周囲を見渡すが…バーサーカーの姿は無い。
連れてきてないのか?

「あ、ごめん…でも、君も俺のこと名前で呼んでないからお相子…
ってことでいいか?」

む?士郎が予想外の台詞を…
コイツ、意外に女に慣れてるのか?

「…そうかもね？でも、私、まだお兄ちゃんの名前を聞いてないんだけど？」

「あ、それもそうか…俺の名前は衛宮　士郎だ。」

「エミヤシロ？変な名前ね？」

うわ…すさまじいイントネーション。

それじゃ…

「それじゃ“笑み社”だ…衛宮、ここで切って士郎…で、士郎が名前だ。」

そうそうそれそれ…

「シロウ？じゃあ、シロウって呼ぶね？私もイリヤでいいからね♪」

て、さっきから俺が空気…まぁいいか…

「ああ…って、イリヤが、なんでこんなところにいるんだ？まさか戦いに…」

「何言ってるの？お日様が出ている内は、戦っちゃ駄目なんだよ？それに、私は今バーサーカーを連れてきてないし。

今日はシロウやお姉ちゃんとお話したかっただけよ、お姉ちゃんいないけど…」

お姉ちゃんってのは…志保かな？

まぁ、そういうことならこの場は士郎に任せようかな…

ということで、俺は士郎の後ろに移動。
そして、二人の様子を伺う。

兄妹…姉弟か？の会話を盗み聞きってのもどうかと思うし。
若干離れた位置で缶コーヒー飲みながら二人の様子を伺う俺。

…

あ、イリヤが驚いてる。
“姉さん”とでも言ったか？イリヤがえらい勢いで俺の方を向いたし。
いや、別の話題か？なんかイリヤの視線が妙に優しいし…

…

む、タイヤキ食べだした。
美味そうに食べてるなぁ…
後で買い足しておかないと、セイバーが怖いな…志保も。
士郎曰く、志保の大好物って話だし。

…

ふむ？なんか考え込んでる。
あ、士郎に額くっつけた。
何やってるんだ？

…っと、立ち上がった。
帰るのかな？

士郎に手を振ってるし。

そしてイリヤが振り返って、歩き出して…って、あ!?訊いておかないといけないことがあったんだ!

「ちょ、ちょっと待ってくれイリヤスフィール!
訊いておかなきゃならんことがあるんだ!」

急いで呼び止める。
すると、イリヤは振り返ってくれた。

「なにかしら?元・自称一般人のジェントルメン?」

そっちかい!?
士郎が話したのはそっちだったのか!?
ったく…そういうことは基本的に黙っておこうぜ士郎…

「う…長いからミミックでいい…ついでにジェントルメンなんてがらじゃない。
訊いておきたいのは、聖杯についてなんだが…ここ何回かの内に、聖杯が汚染されるようなことはおこらなかったか?」

まあ本題に移ろう。
正直、アインツベルンが知らないと対処のしようがないんだが…

「!?どういうこと?汚染って…」

…イリヤは、気が付いていなかった…でも、当たり前か?

「ああ、実は、先日大聖杯を見てきたんだが…」

とりあえず、俺が見てきた内容とセイバーの見たモノ、士郎と志保が受けたモノを、複合して少し話した。

聖杯の現状…なにかが中に“いる”。
前回の顛末…何が起きたか。
イレギュラー…俺も含めて、起きている異常。

これらを話した…後、一時停戦についても。

「…聖杯が…そんなことに?…いや…でも…
…わかったわ、今はわからないけど、少し調べてみる。
アインツベルンにとっても、汚染された聖杯は嫌だしね…シロウに免じて、調べてあげるわ。
…結果が出るまでは、私も戦うのはやめておくわ。」

と、どうやら調査はしてくれるようだ。
ふぅ、良かった…士郎に会話を任せていたのが良かったのか?

「他になにかあるかしら?無いのなら、私はもう行くけど?」

イリヤは、最後の確認とばかりにそんな言葉を告げた。
後は…

「いや、俺からは特には…」

無い、そう言いかけて思い出す。
――ココの言葉を。

――“Ｆａｔｅ”には、三つの物語があって、その中でイリヤさ

んが生き残るのは一つだけ…
――ラスボスとして、ギル様…八騎目のサーヴァントが…
――イリヤさんの心臓が…

!?そうだ!!やべぇ!!
既に外れてるとはいえ、“元”になってる世界の情報だ。
なにも無い訳が無い!
いないかもしれないけれど、注意はしておかないといけないな…

「…そういえば、既に結構イレギュラーは出てるからな…もしかしたら、イレギュラーなサーヴァントがもう一体位いるかもしれない。
気をつけておいた方が良いぞ?監督役の外道似非神父も絶賛逃亡中だしな…」

“いる”とは、現時点では断言できないが…このくらいの注意はしておくことにしよう。
件の“ギルなんちゃら”は、“ラスボス”らしいしな…バーサーカーでも対処しきれない可能性がある。

…やっぱり、今晩にでもココに詳しい話を聞いておこう。
余計な先入観がどうこうとか言ってる場合じゃなかった。

俺の真面目な表情を見てか、イリヤは一瞬目を細めてから返事を返してきた。

「…そうね、アナタみたいに、とんでもない能力持ちが出てこないとも限らないわね…一応、警戒だけはしておくわ。
…それじゃあね?バーサーカーが起きちゃうから。」

「ああ、気をつけろよ?」

「ええ、じゃぁ、今度はお兄ちゃんのほうから来てね？」

「ああ、志保も連れてくよ。」

「またね、シロウ？楽しみにしてるから！」

そう言って、イリヤは立ち去っていく。
その後姿に、士郎は…

「ああ、またな“姉さん”！！」

そう、声をかけた。

すると、一瞬彼女は立ち止まり、また歩き出した。

―――『うん！』

…そんな声が、聞えた気がした。
彼女は少々慌てているようだ、首が赤くなってるし、手足が、ちょっとバタバタしてる。

なんか、その姿が可愛らしくて…微笑ましかった。

「だってよ？士郎？」

ふ、と士郎をみると…少し、顔が赤くなってた。
なんていうか、初々しいねえ…

「あ、ああ…」

なんか、ぼうっとしてるな…
う～ん…コイツ、若干ロリッ気があるのか？
いや、イリヤは俺と殆ど同い年…あれ？この場合どうなるんだ？

ま、いいか？俺にはそこまで関係ないし。
ってかそろそろ帰らないとな…日が傾いてるよ。

「しろ～く～ん？そろそろ帰らないとセイバーあたりが怖いぞ～？
後、タイヤキ買い足さないと志保も怖いな…」

と、前半はのほほんと、後半はマジ声で言ったところ、士郎は再起動。

「！？あ、ああ…い、急ごう！！まずはタイヤキを…！」

再起動するなり、走り出してしまった。

…若いねぇ…

「おいおい、待てっての！」

俺は、走り出した士郎を追いかける。

ったく…なんつうか、手のかかる弟が出来た気分だね…ん？だとすると、志保は妹か？

――side志保

キュピーン！

「ッ！？」

な、何！？

今、何か…妙にくすぐったい感覚が…

嫌じゃないんだけど…嫌じゃないんだけど…！

「どうかしましたか？シホ。」

「う、うん…なんていうか、嫌じゃない…むしろ嬉しいんだけど…」

「？」

「…早々に訂正しないと、好ましくないような状況になりそうな…

そんな感覚が…」

「どんな感覚よ、それ…」

「妹とか思われたんじゃない？」

「ってか、アンタは何者なのよ！？」

「久郎が帰ってきたら説明するよ♪」

「ふぅ…ん？」

久郎…ねぇ？

本当に、一体、どこの、どなた、なの、かなぁ？

―――ｓｉｄｅクロウ

…さて、やっと家に着いたか…
ん？向こうから歩いてくるのは…慎二と桜？
慎二は、手に大荷物を持っているな…？

「あれ？慎二に桜…どうしたんだ？その大荷物…」

と、首をかしげていると、士郎が二人に質問していた。
まぁ気になるしな。

「ん？士郎か…これは桜の着替えその他諸々だよ…今日から、ここで世話になるんだから。」

慎二はそんなことを言うけど…あれ？そんな話になってたっけ？

あ、そういやここで匿ってとかなんとか言ってたっけ…
士郎も、そこに行き着いたのか納得したようだ。

「そうか…今開けるから入ってくれ。」

そう言って、玄関を開ける士郎。

「えっと…お世話になります、先輩。」

丁寧にお辞儀をする桜。

「ああ…って言っても、桜はもうここの家族も同然だからな…あんまり畏まるなよ。」

と、かる～く言い返す士郎。

それを聞いた桜は顔が真っ赤だ…が…士郎は、それに一切気が付いていない…

…ああ、ようやくわかった。

何故志保や凛が溜息を吐き、呆れていたか…

…鈍感なんだな、士郎…

俺が言えた事じゃないけどな…

親友に、人生最後に言われた言葉が“この鈍感野郎！”だった俺が、な…

等と考えている内に、士郎と慎二は家に入っていた。

桜は…まだ赤くなったまま固まってるよ…

俺は、桜の肩を叩く。

「わきゃぅ！？な、なんですか！？」

驚く桜を意図的に無視し、告げる。

「…士郎、もう行っちまったぞ？

…それと、敵は強大だからな…茨の道だろうが、諦めたらそこで試合終了…らしいから。」

そして、そのまま俺も家に入る。

「え？ちょ？ど、どういう意味ですか！？」

後ろから声が聞えるが…
俺に、これ以上言える事は無い。

自覚ありの鈍感男が、言えることなんて…

後ろの桜を無視して、家に上がる、そしてそのまま居間へ…

「あ、おかえり相棒？」

…そこには、金色のショートヘアーに金色の瞳、若干ボーイッシュな少女が…
テーブルに、セイバー・志保・凛・バゼットと共に着いて、茶を飲んでいた。

…

……

……

……は？

「お帰り、クロウ…で、これはどういうことなのかな？
この娘はいったいどこのどなた？」

呆然と突っ立っているのは俺だけじゃなくて、隣で士郎が硬直してるが…

そんな俺に、顔に青筋浮かべながらイイ笑顔で質問してくる志保。

「クロウが帰ってから話す、としか言わないんだけどな？この娘。」

呆然としてたら、段々とプレッシャーが増していく。

そして気が付く。

…プレッシャーを放っているのは志保で…

平然としているのは、“少女”だけで…

凛は、顔は平然としてるが、手に持つ湯飲みがガタガタ震えていて…

セイバーは、必死で志保を視界に入れないようにしながら、俺に“なんとかしろ！？”とアイコンタクトを送っていて…

バゼットは…青い顔で、俺に助けを求めている。

そして慎二が、部屋の隅で膝を抱えていた…あ、震えてる。

さらに後ろから来た桜が、士郎の背に隠れた。

「え～…と…だな…その返事の前に、その娘に、質問してもいい…かな？」

「…まあ、いいよ…？」

ヤヴァイ…ゴゴゴって聞えてきた…

「…何故に、ってかいつの間に“トランス”したんだよ！？てか使いこなせるのか相棒！？」

「うん？ついさっき…かな？

なんとか制御できるようになったよ～」

…そういうことかい。
で、トランスした状態ではまだ皆さんに紹介してなかったからなぁ…
「で？一体どういうことなのか、いい加減説明が欲しいんだけどな？」
状況がようやく理解できたが…
志保の放つこのプレッシャーの正体がわからない…
が、皆のためにもいい加減なんとかしないと…
「あ～…コイツは、皆…バゼットはいなかったけど、ちゃんと一度は紹介してるぞ？
…相棒、いいかげんに説明しようぜ…」
「ま、相棒がそう言うなら…
改めて、始めまして？ココです♪」
そう、ココ…
この女の子はココだ。
ってか、昨晩俺はこの姿のココに出会ってるし。
だが…それを聞いた皆は…
「「「「「「へ？」」」」」」
「？」
バゼット以外、呆然とした。
ただセイバーは…いち早く正気に返り、口を開いた。

「…確かに、先ほどからココの姿が見えませんが…一体どういうことなのですか？」

あ、そういやセイバーはココと一緒にいたんだっけ？

まあ、説明しておくか…

「ココの固有能力なんだよ…“トランス”って名付けた。
そいつ、基本はチョコボなんだが…サーヴァント風に説明すると…」

固有スキル：“トランス”（A）

肉体・能力を変化させるスキル。
激しい感情と共に、自身の魂を開放させる。
正確には魂の姿を映し出す能力。
本来は、魂の開放であるが故、自身の能力を増加させる。

ココの場合、肉体はチョコボの物だが、その魂は人間のモノ。
故に人間に変化可能。
ただし、ココは自分を“チョコボである”とも認めているため、
“チョコボとして”トランスすることも出来る。
その場合、大人チョコボになるらしい。

発動条件は、彼女の場合は“心の底から、自身の肉体の変化を望み、その感情が爆発した時に”オートで発動する。

「…って訳だ。
…だが、何故に今人間形態なんだよ…」

昨晩、人間からチョコボに戻った後に鑑定したけど…こんな結果が出た。
説明していて、自分で気になる点が…

そう、“激しい感情の爆発”が条件なんだよな…
昨晩は“鳥類の姿が悔しかった”のと“俺を泣かせたのが悔しかった”らしく、それが爆発したから発動した。
で、“今は鳥で良かったのに”と思った瞬間、元に戻った。

っていうのが俺の見解なんだが…
今回は何故に？

と気になったので、ココに質問。
すると、ココは返事をしてくれた。

「…別に、相棒には関係無いよ。
（ボクだって、一応…ブツブツ…）」

…が、前半は志保をガン見、後半は殆ど聞えなかった。

一体何が…

「コ、ココ…だったんだ…
その、よろしく？」

ガン見されてた志保は、若干引きながらもココに挨拶をした。

「…よろしくね、志保？
（…色々と、ね…ボソッ）」

ココは、それに返事。
…だが、なぜだろう…この二人の会話は、胃にクル物があるな…

そう、この感覚は…ああ、サヤとアカの会話を傍から見たような…

「「クロウ（相棒）？今何か妙なこと考えなかった？」」

「…いや、別に…」

…うん、胸にしまっておこう。

「ふぅ…ま、挨拶は済んだし、ボクは引っ込むよ…
＜パァッ＞…クェ♪（ね？）」

などと思っていたら、ココはトランスを解除し、子チョコボに戻った。
本当に、一体なんだったんだ？

「ま、まぁいいや…士郎、とりあえず、食材を冷蔵庫に移そうぜ…」

と、固まったままの士郎を再起動させながら、＜シャン＞という音と光と共に、今日買った食材を取り出す。

「あ、ああ…あ、そうだ志保、これお土産…皆で食べててくれ。」

「あ、うん…あ♪タイヤキだ…」

再起動した士郎は、手に持ってたタイヤキを志保に渡し、俺と共に取り出した食材を運ぶ。

「あ、あの…先輩？私は、どの部屋を使えば…」
「ああ…好きな所使っていいぞ？…今は遠坂やバゼットが一部使ってるけど。」
「わかりました…兄さん、行きましょう…いつまで固まってるつもりですか？」
「う…わ、わかったよ…」

などという会話もあったが、俺は士郎と共に冷蔵庫に仕舞い続ける。

後ろから「ん～♪」と、志保のご機嫌な声が聞えた。
…本当に好きなんだな…タイヤキ。
さらに「おおっ！？こ、これは…♪」という声…どうやらセイバーも気に入ったらしいな。
ま、タイヤキは俺も結構好きだしな…

などと思っている内に片付けも終わり、俺達はテーブルに着く。

すると、ココが俺の膝の上に移動。
…気に入ってるのか？そういや、良く近所の猫が乗ってきてたような…？

セイバーと志保は幸せそうにタイヤキをほうばっている。
凛は、その二人を見つめ、何か…そう、まるで昼寝中の子猫を見ているような妙に優しい表情をしている。
バゼットは…お茶を飲んでいる。
…そういえば…

「…なぁ、バゼット？起きてて大丈夫なのか？」

ちょっと気になったので、訊いてみる。

「え、ええ…普通にしている分には問題ありません。
…起きてきたのは、貴方に報告があったからです。」

？報告？

「…今、ランサーにコトミネを追ってもらっています。
…今のところは、情報もありませんが…」

ああ…それか。

まぁ、調べて貰っておいて損は無い。

それに、“元”外道のサーヴァントだしな、適任だろう。

「そうか…助かる。
何かわかったら教えてくれるか？色々と考えなければならないし。
」

「ええ…すみません、夕食時に声をかけて頂けますか？
今は、少々眠りたいので…」

と、どうやらこのことを伝えたかったが故に起きだしてきていたらしい。

…妙に義理堅い奴だな…

「了解したよ。
…おやすみ、バゼット。」

「ッ…お、おやすみなさい…」

そう言って、バゼットは部屋に戻っていった。

…さて、と…

まずは今日あったことを話すか…

「ところで士郎…今日、イリヤとはどんな話をしていたんだ?空気を読んで会話には加わらなかったんだが。」

…士郎が、な(酷)

「ちょ!?」

「…へ?し、士郎イリヤに会ったの!?」

「…そういえばクロウの幸運値って、異常に低かったような…」

「な!?ど、どういうことですか!?」

即座に詰め寄る志保とセイバー。

凛は俺を睨んでいる…俺の所為じゃねぇよ。

「あ、ああ…買い物の途中で会ったんだよ…

家?の場所を聞いてきたのと…」

「俺が最後に聖杯について調査を頼んで別れた…が、その前に、結構話し込んでたろ?」

俺はともかく、志保には教えてやれよ…

「う…いや、ほとんど世間話だぞ?日本の気候がどうとか、タイヤキが美味いとか…」

「ううー私も姉さんと話したかった…」
「…危険は無かったのですね？ミミック…」
「ああ、それは問題ない、あっちも戦意完全に無かったし。」
「…ま、むこうも真昼間っからどうこうする気も無い、か…」

「何の話ですか？」

と、そこに現れる桜・慎二・ライダー（実体）…

「ん？士郎が義姉と仲良く会話してたって話。」

「な！？ど、どういう話ですか先輩！？」

と、即座に桜は士郎に詰め寄る。

「（相棒…今のわざと？）」
「なんのことやら…と、それより一度退いてくれないか？動きたいんだが。」
「（？わかった。）」

一度ココに退いて貰い、テレビに向かう。
そしてＤＶＤプレーヤーを“幻想の道具欄”から取り出し、テレビに接続する。

「…？クロウ、何やってるの？」

そうこうしていると志保に声をかけられる。

「ん？ああ…士郎と約束してたからな…仮面ライダーを一緒に見ようと…ね、っと…

よし、接続完了。
士郎?どれ見る?」

返事をしつつ接続。
そして、一度テーブルの前にＤＶＤを全部出す。
昭和・平成・劇場版…元祖からＤＣＤまでをずらっと並べた。

「…け、結構あるんだな…」

「ま、そりゃぁ俺の世界の一大タイトルだからな…」

なんせ海外でも“カメンライダー”で通じてしまうくらいだしな。

「ＤＶＤ…持ってたんだ…」

ん?志保が驚いてる。

「仮面ライダー…ですか…興味がありますね…」

お、ライダーも気になるか?

「…アンタって、もしかして…オタクってヤツなわけ?」

む…凛にそんな事を言われたが…
どうなんだろうか?

ソラで全部、フォームチェンジ含めて暗唱出来るが…
俺の場合、確かに、平成から入って、後に昭和も全部見たけど…

「う～ん…これくらいなら、結構いるしなぁ…
いやでも…うん、まぁ否定はしない。」

ま、オタク予備軍ってのが正しいかもな？

「ま、そんなことはいいとして、どれから見る？
この第一作目から順々に見てもいいし、こっちの平成シリーズから入っても良いし…因みに俺は後者な。」

ま、俺みたいな勧め方を“邪道”っていってくる人もいるけど…
楽しく見れれば良いじゃんってのが俺の理論な。

「…どう違うの？」

と、志保がちょっと質問してきた。
うむ、かる～く解説するかな。

「こっちの昭和シリーズは…これ全部で一つの物語なんだ。
この“仮面ライダー”から始まって“ＢＬＡＣＫ　ＲＸ”までの、長いヒーローサーガだな。
…で、この“クウガ”からのを平成シリーズと呼ぶんだが…これはそれぞれ独立した物語。
ただ、この“ディケイド”だけはちょっと違うけどな…」

「そうなんだ…どうする士郎？私はこの平成シリーズからでいいかな、って思うんだけど…」

「？ちょっと待ってください、ではこのＺＯ、Ｊ、真はどちらなのですか？」

と、質問をしてくるのはライダー。
微妙にいいところを訊いてくるな…

「ああ、それは劇場版作品…テレビでは放映されなかった作品。
それらも独立してて、大体二時間程度でまとまってるな…一応、
分類では昭和扱いだ。」

ま、特にＺＯには仮面ライダーの基本が二時間に凝縮されている名
作だと個人的に思ってるな。

「…その辺は、また今度でいいか…じゃあ、この“クウガ”からで。
」

ま、妥当かね？

「了解っと…じゃ、流すぞ？」

「…私はいいわ、興味無いし。
部屋に戻ってるわ…あ、今日は私が夕食作るから、寛いでて良い
わよ？」

そう言って、凛は自室に戻っていった。
ま、女子高生にはあんまり興味ない分野だろうからな…

「…興味無い人は付き合わなくていいぞ？」

俺の視線は慎二と桜を向く。
さっきから黙ってるけど？

「え？あ、先輩の興味がある物ですし、どんな物か興味もあります

し…」

「右に同じ…ま、面白ければ士郎と後で盛り上がってもいいしね。」

…っていうことなので、ＤＶＤをセットし、再生っと…

ＤＶＤメニューから、再生…よし、始まった。

そして、鑑賞開始。

一一一一時間半後

「か、格好良い…！」

「こ、この胸にこみ上げてくる感覚は…何？」

「いい、これはイイ…！」

「け、結構馬鹿に出来ないね…ついでに衛宮、それはきっと所謂“燃え”ってヤツだと思うよ。」

「わ、先輩の眼が輝いてます…ライダーもなんかお肌がつやつやしだしました！？」

…好評、だな…

まぁ、久しぶりに見ると、こう…胸に何かがこみ上げてくる。

「…アンタ達、ずっと見てたの？」

と、そこに来たのは凛。

…あ～…晩飯作るって言ってたっけか…

「ああ、この手のは見だすと止まらなくなるモノなんだ…飯か？」

俺は台所を指差しながら確認する。

凛は、士郎達を見て、軽く溜息を吐きながら首を縦に振った。

「ええ…に、しても…皆、なんか…子供返り起こしてない？
そんなに面白いの…ってごめん、忘れて…アンタに訊くと長そうだし…」

…地味に失礼なヤツだね…俺は“馬鹿に”されなきゃそこまで語らんぞ？

「…まぁいい。
人間、偶には童心に返るのも重要だぞ？自分が子供だったことを忘れると、碌な大人にならん。」

そう言いながら、俺はココを横にどかす（また膝に乗ってた）。
そして、そのまま立ち上がり、居間を後にする。

「（どうしたの？）」
「？どこ行くのよアンタ。」

途中、ココと凛に呼び止められるが…
さっき、俺は結構重要なことを忘れていたことに気が付いたんだよ。

「…ちょっと、電話だ。
キャスターに、現状伝えておこうと思ってな。…思い返すと、ランサーとの同盟以降連絡取ってないんだよ…」

ちょっとヤヴァイレベルのイージーミス…
ま、基本的には問題無い…無いよな…無い…かなぁ…無いといいなぁ…

「…とっとと連絡取りなさい“戯け”。」

…それはあれか？俺の口癖に対するあてつけか？
今回は反論できないし、する気も無いが…

「…了解。」

とりあえず、電話電話…っと…

居間を後にし、廊下の電話を使い、柳洞寺に電話を掛ける。

…数回のコールの後、ガチャッという音、そして…

『――はい、柳洞ですが…』

む、この声は一成ではないか？
さて…どうする、か…

よし、ここは…
コホン！

「『あ～一成君？ごめ～ん、藤村だけど、葛木先生に代わって貰えるかなぁ？』」

…藤村さんの声を借りよう。
ま、こういう時は仕方ないよな？

『――藤村先生でしたか、わかりました、少々お待ちください…』

そう言って、音が遠ざかる。

…少々待つ。
そして…

『――お待たせしました、葛木です。』

なかなかに渋い男性の声…なるほど、コイツが葛木か？

「…まずはすまないな、騙すような真似をして…俺はミミックのサーヴァント…キャスターから聞いてないか？」

まずは、先にネタバラし。
…ってか、これでキャスターが自分のマスターに黙ってたりしたら、今からバイクで殴りに行く。

『――なるほど、お前がそうか…なんの用だ？』

…良かった、流石に話はしてたか…

ま、用件だけ伝えておくか…

「ああ、キャスターに伝言を頼みたい。
一つ目、“八騎の停戦に成功した”。
二つ目、“さらなるイレギュラーに注意”。
三つ目、“アインツベルンが調査中”。
四つ目、“監督役が逃亡中。なお、監督役は外道につき注意、イレギュラーを従えている可能性アリ”。
五つ目、“ランサーが監督役を追跡中”。
…以上だ。」

『―――…わかった、伝えておこう。用件は以上か？』

…他には…無い…よな？

「ああ…他には無い…はずだ。
そちらからは何かあるか？」

『―――…いや、無いな…では。』

そう言って、電話を切る葛木。

…寡黙な男だなぁ…

と、居間に戻ろうと振り向いたところ、足元にココがいた。

…何時の間に…

「（話は終わった？）」

「ああ…何か用か？」

そう訊くと、ココは首を縦に振り、口を開いた。

「（うん…今日、気が付いた事なんだけど…
相棒、余計な知識を入れると、先入観が～とか言って“Ｆａｔｅ”のことを聞かなかったでしょ？）」

…そのことか…でも、聞いておかなきゃまずいよな～と思って、この後聞こうとしてたんだが…

「（…まぁ、あの慎二の様子を見るに、言ってることもわかるんだけど…

…で、ボクなりに考察をしてたんだけど…いるかどうかわからないって思ってたけど、ラスボス…八騎目…この場合は零騎目？
…間違いなく、いるってことに気が付いちゃって…）」

ってナニィ！？
マジか！？ってかなんで…？

「ど、どういうことだ？」

「（…教会の地下に、ボク達は繋がれてたよね？…あれって、英霊の現界のために生命力を絞り取り続けるためだったんだよ。
…つまり、少なくとも…“前回”の聖杯戦争から生き残ってるサーヴァントが存在するってことになるんだよ…）」

…そういうこと、か…
なるほど、ね…アレが何のためだったのかは、気にはなってたんだけど…そういうことだったのか…

「…そっか…ってことは…一度、セイバーに確認をしてみよう。
この世界の、前回の聖杯戦争の証人だ…何が生き残ってるか、が特定できるかもしれない。」

…ココの知ってるサーヴァントなのか、どうなのか…まだ、確定情報じゃ無いからな…

「（…そうだね…ボクが“知ってる”英霊って、まだ決まった訳じゃないからね…）」

…クッ…はぁ…しゃぁないなぁ…

「クロ～ウ？夕食出来たわよ～？」

と、溜息を吐いていたら、声が掛かった。

…出来たらしい。

「…了解！ちょっとバゼット呼んでくる！

ココは、先に居間に行っててくれ、俺もすぐ行く。」

「（ん、わかった。）」

俺は、そのままバゼットを起こしに行く。

廊下を歩き…着いた、この部屋だ。

「お～いバゼット！夕食出来たぞ？」

呼びかける。

…部屋の中から、声が聞える。

「…わかりました、すぐに行きます。」

…よし、じゃあ俺も行くか。

…

……

……

居間で、食卓に着き、少ししたらバゼットが着た。

献立は…中華だな。

ワンタンのスープやらチンジャオロースーやらが並んでる。
全員が席に着いたところで…『いただきます。』
皆が思い思いに食べ始める。
俺も口に運んで…
「…美味いな。」
うん、美味い。
…美味い料理を食っている訳だが…
セイバー：黙々と、淡々と箸を進めている…だが、早い。
士郎：真面目な顔で、一口口に含む度に考え込んで…「美味い…これはどうやってるんだ？」…なるほど、味付けに想いを馳せているんだな…
志保：時折「むむ…」とか「…よし、これなら…」とか呟いてる。
これも士郎と同じだろうか？
慎二：「へえ、美味いじゃん…」と一言言った後「頑張れ桜。」と桜の肩を叩いた。
桜：「うぅ…学園のアイドルとか優等生は料理が苦手なのがお約束じゃないですか！？」とうちひしがれている。…個人的に激しく異議ありなんだが…
ライダー：…無言で食べてるな。
バゼット：淡々と、しかし高速で食べている…そんなに早く食べると消化に悪いぞ…特に、今回結構油強いし…
ココ（子チョコボ）：「～♪」ご機嫌でワンタンスープ飲んでる…
凛：勝ち誇ったり顔を赤くしたり挑戦的な表情したり和んだりと忙しい。

…何故だ？地味にカオスだぞ…？
普通は、こう…もっと和気藹々とだな…

そうこう考え込んでいる内に皆が食べ終わる。
そして志保と凛が後片付けをしている。
俺は、それが終わるのを待っているわけだが…

「じゃあ、僕はそろそろ御暇するよ…」

と、慎二が急にそんなことを言い出した。
…帰るのか？

「あれ…慎二は家に帰るのか？」

俺が口を開く前に士郎が先に質問していた。

「ああ…家の爺さんが、ちょっとね…
放ってくと、何かやらかしそうだしさ。」

…アノ蟲野郎かい…
桜に寄生してるんだよな…
すまん…その内なんとかするから…それまで、変なことをさせないでくれ…

「そうか…気を付けろよ？」

「ははは…でも、現状全サーヴァントが停戦中だろ？後は爺さんくらいしか怖いのいないさ。」

いや、それは…

「ううん…監督役が逃走中だから、そっちも警戒してよ？」

と、言おうとしたことを、台所から出てきた志保に言われてしまった。

…ま、いい…か？とりあえず注意を促そう。

「ああ…なんか、高確率でイレギュラーがいるっぽいからな…やばかったら逃げろよ？」

「…わかったよ。
それじゃあまた明日な？」

「ええ、危険を感じたら、逃走します…それでは。
…あ、あの…また今度、見せてくださいね…仮面ライダー。」

そう言って、ライダーは霊体化し、慎二は家を後にした。

一応、注意だけは出来たし…何も無いと良いんだが…

…に、しても…ライダー、よほど気にいったんだな…四話分見ただけなのに。

ライダー組が家を後にした後、片づけを終えた二人が台所を出てきた。

ちょうどいいから、今のうちに情報を手に入れよう。

「時にセイバー…ちょっと質問なんだが…“前回”の聖杯戦争のサーヴァントの情報をくれないか？
…一騎、生き残っていまだに現界してるっぽいんだよ。」

「な!?ど、どういうことですか!?」
「クロウ!?どういうこと!?」

即座に反応を返すセイバーと凛。
士郎、志保、桜も呆然としている…
バゼットは怪訝な顔をしているな…

「ああ…さっき、言われて気が付いたんだが…」

とりあえず、ココの正体と考察の結果を“Ｆａｔｅ”について以外を伝える。
すると…

「そう、そういうこと…
可能性は高いわね…綺礼のヤツが、前回の聖杯戦争に参加してたかはともかく…」

と、凛が呟いた…
それを聞いたセイバーが、口を開く…ある意味予想の範囲内で、それでいて爆弾発言を。

「キレイ…コトミネ…?
!?思い出しました!!その名前を、前回の聖杯戦争中に何度か耳にしています!!」

やっぱりか…!

「セイバー!?それはどこで!?」

「…キリツグの口から、です…キリツグは、彼を最後まで“障害”として認識していたようでしたが…」

「エミヤ・キリツグ…前回の聖杯戦争の覇者ですか…
私も、コトミネの口から何度かこの名前を聞いています。」

…一気にきな臭くなってきたな…
セイバーは切嗣氏から、バゼットは言峰からそれぞれお互いの名前を聞いている…

「…いろいろ言いたいこともあるけど…まずはクロウの質問に答えて貰っていいかしらセイバー？
…どうやら、本気で前回の英霊が生き残ってるみたいだしね…」

と、凛は話を元に戻してくれた。
…なので、俺は改めてセイバーに質問をする。

「そういう訳だ…前回のサーヴァントの情報を教えてくれ、セイバー。」

すると一度うつむいた後、顔を上げて口を開いた。

「…わかりました…あの時は…」

セイバーの語りで、“前回”の情報が手に入った。
その情報に、俺の知識を追加して整理すると…

セイバー：今、目の前にいる彼女。

最後まで生き残り、その手で聖杯を破壊している。

ランサー：真名はディルムッド・オディナ…“麗しのダーマッド”だな…

破魔の槍（ゲイ・ジャルグ）と必滅の魔槍（ゲイ・ボウ）を操る気高き騎士。

…相対した女性を魅了する魔の黒子の持ち主…だったな…

彼の人生に、こんなものが無ければ後の悲劇は起こらなかっただろうに…

その最後は、男の醜い嫉妬によってその生涯を終えた。

彼は途中で、セイバーの目の前で令呪によって自害している。

アーチャー：正体不明。

黄金の鎧を着て、自身を“王”と呼ぶ自信家。

宝具を湯水のように使い、その正体を突き止めるに至らなかった。

セイバーは、コイツの消滅は目撃していない。

最後まで生き残っていたらしい…

ライダー：“征服王イスカンダル”…所謂“アレクサンダー大王”。

圧倒的なカリスマを、宝具にまで昇華させた“王の軍勢”（アイオニオン・ヘタイロイ）を切り札とする豪漢。

かの軍勢そのものが宝…なんて熱い…

彼の伝承は、まさに“征服王”を名乗るにふさわしいだろうな…

毒を恐れず平気で飲み干して高熱で死に掛けたり、砂漠で“皆が苦しんでる中で自分だけ飲めるか”とかいって水を捨てるナイス馬鹿。

…実は“ウホッ”な趣味“も”あったとかいう話だな…

彼の持つ戦車をセイバーが“宝具”で吹き飛ばしたが、

その後は不明。

キャスター：“ジル・ド・レェ”…確か、百年戦争の…フランス元帥だったっけか？

かのジャンヌ・ダルクと肩を並べた…とかいう説もあるな…協力していたのは間違いない。

確か、詐欺師まがいの錬金術師に誑かされた結果、黒魔術に没頭…精神が吹っ飛んだ…だっけ？

完全に発狂した存在として現界。セイバーをジャンヌ・ダルクと勘違いし、傍迷惑な行為を繰り返したらしい。

…すまん、なんの情報も無かったら勘違いされてもしょうが無いかもしれんぞ…と思ってしまった。

宝具は“プレラーティーの呪術書”？…あれ？そんなのあったっけ？なんでも、海魔を呼び出したらしいが…

…海魔…？もしかして“ルルイエ異本”か？なんだってそんな物持ってんのさ…

あ、そういやフランソワ・プレラーティと交流があったとかなんとか…

行き過ぎた行為から全サーヴァントの討伐対象となり、ランサー・セイバー・ライダーの三騎によって討伐されたそうだ。

アサシン：“ハサン・サッバーハ”…アサシンのサーヴァントは、本来コイツしか呼ばれないらしいな。

通称“暗殺教団”の教祖…だっけ？その歴代教祖のいずれかが召喚されるらしい。

この時はいくつもの固体に分裂する能力を持ったハサンが召喚されたそうだ。

で、酒の席に乱入してきたところ（そもそも何やってるんだおのれ等は…）を…

杯を壊されキレたライダーに“ぷちっ”と全滅させられ

たそうだ…なんとまぁ…

バーサーカー：セイバーは、かなり辛そうに語ってくれたが…

真名は“サー・ランスロット”…湖の騎士、か…

完璧なる騎士と呼ばれ、あらゆる伝承を見ても最高ランクの騎士だろう。

己の栄光のためでは無く、友や王のために戦い抜いた気高き騎士。

その息子、ガラハッドは「世界で最も偉大な騎士」と称された。

日本では“裏切りの騎士”の名が先行してしまい、碌な扱いを受けていないが…

個人的には、真に最高の騎士だったと思っている。

その行い、人望によって、円卓の騎士の半数は彼の王よりも彼に付いたそうだ。

晩年はその親友、ガウェインの多くの騎士の死、果ては王の死に責任を感じ出家…

自身の意思で食を断って生を終えたそうだ。かのギネヴィアとは、二度と生きて逢うことはなかった…

漆黒の鎧に身を包まれて召喚され、その能力は“己の正体を隠す”“手に触れた物を己の宝具とする”…

これらは、宝具相当の能力だったそうだ…俺の“物真似師の意地”と同系統か？

最終宝具は“無毀なる湖光”（アロンダイト）。

セイバーとの一騎打ちの末、消滅…

「…でいいのか？途中で勝手に解説いれたけど…」

と、整理が終わったところで、確認を取る…が…

「え、ええ…（感謝します、彼の事を、理解していてくれて…ボソッ）」
「本当に詳しいんだな…クロウ…」
「…本当に、ね…」
「確かに、前に“神話関係はそれなりに”って言ってたけど…どうでもいいとこまで知ってるのね…」
「所謂、雑学…ですか？」

…セイバー、なんとなくだけど、お前の正体がわかったよ。
…まぁ、言いたくないなら別にいいけどな…

まぁいい。
問題は…

「…まぁな…それよりも…この中から、生き残っている可能性があるのは…
“ライダー”、“アサシン”…そして本命の“アーチャー”だな。」

まぁ、まず間違いなく“アーチャー”だろうけどな。

「…よりにもよって、“アーチャー”ですか…」
「セイバーは置いといて、唯一真名不明、か…湯水のように宝具を使うって…どういう意味？」

そう、真名も能力もいまいちよくわからないヤツなんだよな…

「言葉の通りです…奴は魔剣、神剣、魔槍…黄金の空を飛ぶ船、戦斧、鎌…あらゆるモノを持ち出すのです。

それ故に、正体が特定出来なかった…」

ふ～む…どういうことだ？

「（やっぱり…人類最古の英雄王…ギルガメッシュ…か。）」

と、考え込んでいたら、ココがそう呟いた。

…ギルガメッシュ！？

いやいやいや…どういうことだ？

「相棒？どういうことだ？」

「？ココが、何と？」

「どうしたのクロウ？」

ココにどういうことか確認しようとしたら、志保とセイバーに不思議がられた。

…そういや、俺以外にはチョコボの言葉なんかわからないんだっけ…

「ああ…なんか、ココには心当たりがあるらしくてな…

で？どういうことだよ…仮にソイツだったとして、宝具を湯水のように使える理由が説明できないだろ？」

とりあえず、どういうことか、を訊こうとした。

「（ギルガメッシュの伝承には、こんな一文があったでしょ？“世界の全てを手中に収めた”って。

…つまり、神話や伝承における“宝”も全て、一度は手中に収めたことがある。

正確には、その“元”となったモノを、だけど…）」

…げ!?そっちかよ!?
なんという反則…
つまり、ソイツは…ほぼ全ての英雄の天敵じゃないか…

「クロウ?ど、どうしたの…そんな青い顔して…ココはなんて言ったの!?」
「ちょ、ちょっと…本当にどうしたの!?そんなにヤバイ奴な訳!?」

どうやら、俺の顔から血の気が引いていたらしい。
…当たり前だ。
本当にその能力だとすると…俺じゃぁ、“足止めすら出来ない”ことになる。
武器の引き出しが多く、しかもそれが当人の能力によらないモノってことは、“真似すら出来ない”…

「ああ…最悪だ…まいったな…俺でも、足止め不可能な名前が出てきちまった…
それに、大概の英雄の天敵でもある…」

「な!?あ、貴方で“足止め不可能”だと!?」
「嘘…どんな化け物よ…」

どうやら、俺の表情には、今…まったく余裕が無くなっているらしく、凛やバゼットが驚愕している。

俺は、その名を言おうとして、口を開く。

「古代…人類最古の英雄王…ギ<ドサドサドサッ!!>ルってなん

だ！？」

その名を言おうとして、いきなり庭のほうから何かが落下した音が聞えた。

急いで、俺とセイバーが武装し、庭に飛び出す。

そこには…武装したアーチャーと…

「…くっ…保護を…求める…わ…」

息も絶え絶え、ローブがぼろぼろのキャスターと…

「不覚…！」

地に膝を付き、満身創痍の小次郎…

「く…っ…」

そして、全身から血を流す男性…声からすると、葛木…

この三人が、いた…

一体何があったんだ！？陣地に篭ったキャスターが、ここまで…

「キャスター！？小次郎！？それに葛木！？一体何があった！？」

「！？キャスターだと！？」

「クロウ！一体何が…って葛木先生！？」

「それに…サーヴァント！？」

「ちょっと…一体どういうことよ…」

俺が、キャスターに駆け寄るまでの短い時間に、士郎・志保・凛が飛び出してきた。
とりあえず、キャスターを助け起こし、何があったかを訊く。
すると…息も絶え絶えに、キャスターは、こう言った…
「金、色の…サー、ヴァントに…襲撃…された、のよ…
ア、ナタに…注意、受けてなかったら…全滅…して、た…わね…」
そう言って、キャスターは気絶した…
「おい!?しっかりしろ!!…気絶、か…
アーチャー!コイツら運ぶの手伝え!!」
俺は、そのままキャスターを抱き上げ、アーチャーに指示を出す。
アーチャーは無言で葛木を担ぎ上げて部屋の中へ移動する。
小次郎は、セイバーに肩を貸されていた。
一度、三人を部屋に運び込む…そして、応急手当を行いながら、脳裏をある不安が過ぎった。
…ライダーは、無事だろうか?
――こうして、イレギュラーが動き出した。
それは、圧倒的な力で…
俺達を、押しつぶそうとしていた…

“第十三話／「イリヤ再び…そして、王金の影。」”（後書き）

実は、一応…一週間ほど前には前話書きあがってたんですが…

舞人と予定が合わず、更新が遅れました。

…これより、（ある意味）クライマックスです。

これからも、更新頑張ります！！

読んでくださっている皆様に、本当に感謝です！

・ｚｅｒｏにて、自分を“王”と呼んでいるのは確認できたのですが…“英雄王”と自称するシーンを発見できませんでした（見逃しただけかもしれませんが）。

よって、訂正させていただきます。

アロン様、ご指摘感謝します。

“第十四話／「遠い日の想い。」”（前書き）

今回、少々オリ設定が出ます。

…そしてご都合全開です。

“第十四話／「遠い日の想い。」”

――僕が、そうしたかったから。

“第十四話／「遠い日の想い。」”

――ｓｉｄｅクロウ

俺達は、突然庭に降ってきたキャスター組の手当てをしていた。

キャスターは、気絶していたが…すぐに眼を覚まし、志保に手当てを受けている。

葛木は、士郎と桜が手当てをしている。

小次郎は…まぁ軽く手当てを受けたあと、俺に質問をされている。

「…で、実際何が起こったんだ小次郎…」

「…突然の事でな…金色の鎧を着た男が現れたと思ったらいきなり剣や槍が雨あられと降ってきたのだ。

キャスターが異常を察知してすぐに出てきたが…あの剣雨は異常な力が込められていてな…

瞬きする間に、我らは満身創痍…キャスターが強制転移を行い、逃走した、という訳だ。」

…そうか…

って待て…？

「…？確かお前…あの山門っていう“土地”に括られてなかったっけか？」

キャスターが、以前そんなことを言ってたような…？

「…令呪を使用し、拠り代を移したようだな。
どうやら、今の主はそこの葛木の懐にある山門の“鍵”のようだ。」

…令呪って、そんな真似も出来るのか…
に、してもあの山門に、鍵なんかあったのか…？

「…意外になんでも良いんだな、お前の拠り代…」

と、思ったことをそのまま口に出したら…

「そんな訳無いでしょ…」

心底、疲れた声でキャスターが否定した。

「貴方からの伝言を聞いた直後から、逃走を念頭に置いて、あの土地に溜め込んだ魔力をその鍵に可能な限り込めておいたのよ…
いざとなったら持ち逃げ可能なように、ね…で、その作業中にあのサーヴァントが襲撃してきたの。
…アサシンを捨て駒にしても良かったのだけど…あのまま、倒させるのが癪だったから、その鍵に拠り代を移して連れてきたのよ…
あの山門と違って、そこまでキチンとした存在じゃないから、その鍵に込めた魔力が尽きたらそれまで、の一時しのぎよ。」

…そして、説明をしてくれたが…
なるほどね？要は、あの“土地”の魔力を一時的に“土地の物”に移して、“拠り代”として誤認させている…
または、充電式バッテリーとでも思えば良いのか…？

…でも、それって…

「…ちゃんと、魔力さえ込め続ければ、自由に移動可能なんだから元より便利になっていないか？それ…
なんで、最初からそうしなかったんだ？」

と、言おうとしたら士郎に言われた。
まぁ確かに桜と慎二の“偽臣の書”とおんなじようなモノなんじゃ…？

「…あまり効率はよくないのよ、それ…
それに、その“鍵”が破壊されたら一巻の終わりよ？
定期的に、あの土地に戻らなければならないでしょうし…
第一、門番が行動する必要は無いでしょう…？」

…充電に帰る必要がある上、エネルギー効率がよろしくない。
さらに破壊されればアウト、か…

確かに、“門番”にはそもそも行動する必要は無いな…
そう考えると、確かに“そう”する必要は無かったんだな…

納得したよ、俺は。

「…まぁ、無事だったから良しとしよう。

それはともかく、ソイツ…何か言ってたか？」

…今は少しでも情報が欲しい。

「…王がどうの、と言っていたように思うが…何分いきなりでな…」

「私は、即座に転移に入ったから…」

…特に、有益な情報は無し、か…

と、そこでいきなり…

＜ピピピ…ピピピ…＞

…携帯電話？

「…兄さんから？」

どうやら、桜のものらしい。

…って…このタイミングで電話って…

「…嫌な予感しかしないが、早く出たらどうだ？」

「…はい、…兄さん？どうしたんですか？

…え！？イレギュラー！？襲われてるんですか！！？」

やっぱりかよ！？

「…はい、今…冬木大橋方面に逃走中、セイバー達に援軍を頼む！

？大丈夫なんですか！？…兄さん？兄さん！！

…切れ、ました…ど、どうしよう…に、兄さんが…」

…状況は最悪…ってか…

「大橋だな！？セイバー！行くぞ！！」
「わかりました！！」
「私も行くわ！アーチャー！！」
「了解した、マスター。」
って…士郎・セイバー、凛・アーチャー組が部屋を飛び出そうとする。

「私達も！クロウ！！」

そして、志保もそれに続こうとする、が…

「…本気、か？志保、士郎…それに凛…」

俺はそれを、止めた…

「え…？どう、いう…意味…？」

志保は、信じられないモノを見るような目で、俺を見る。
士郎達も、足を止めて振り返った。
その視線を見据え、俺は口を開く。

「…俺達が行って、何になる？
…“俺達は、足手まといだ”ぞ…？」

相手の身体能力とスキルしか真似できない物真似師。
…半人前の魔術師二人…それと魔術師一人。

サーヴァント二騎相手に圧勝するような相手に役に立つか、と言われれば、微妙だ…足手まといにしか、ならないようにも思う。

「…っ！」

俺の言葉を聞いて、士郎は目を見開き、志保は唇を噛む。

…どうする…？

少し考えた後、志保は、カッと目を見開き、俺に対して、強い口調で断言した。

…その想いを。

「それでも…それでも！！私は！慎二を…友達を、助ける！！
クロウが止めても、一人でも！！助けを求めてる友達を、見捨てたりしない！！」

そう言いきり、志保は部屋を飛び出した。

「俺も…俺もだ！！
行くぞ！！セイバー！！！」

「はい、マスター！
…私は、貴方を見損なっていたようですね…」

士郎も、それに続き…
セイバーは、小声で俺に一言告げてから士郎を追い…

「はん！だったらアンタはそこで腐ってなさい！！
臆病風に吹かれたヤツに用は無いわ！行くわよアーチャー！！」

「…」

凛は、俺を鼻で笑い…

アーチャーは、何も言わずそれに従う。
五人が飛び出た居間に、静寂が訪れる…
その中で、俺は…
眼を閉じ、あいつらの決意を、受け止めた。
…紛れも無い、本気だった。
勢いじゃ、無く…自分の意思で走り出した。
「ミミック、貴方は「バゼット、相棒！家の守り…任せるぜ？」…行くのですね？」
佇む俺に、バゼットが何かを言おうとしたが、それを遮り、指示を出す。
当たり前だろ…？
――この俺が…
「当たり前だろ…ったく…人の話を、最後まで聞かない連中だぜ…せめて、奴の真名くらい聞いてから飛び出せっての…」
頭をガリガリと掻きながら、少々愚痴る。
ちゃんと、最後まで聞いてからにしても、遅くは無いだろうに、って…
――あの、漢気溢れるお人よしを…
「じゃあ頼むぜ！！」

俺は、そう言い残し、部屋を飛び出る。
そして、そのまま家を飛び出て、志保の姿を追う。

―――俺の、たった一人のマスターを…

「“幻想の道具欄”！！」

服装を、ライダー装備に変更し、跳躍、そしてバイク…ハヤブサ改を取り出してそのまま乗る。
エンジンを回し、一気にフルスロットル！！
エンジンは好調！！冷えてない…！イケル！！

―――一度でも、手を組んだ相手を…

「おぉおおおおおお！！」

一気に加速し、前を走る志保達に追いつき、一度追い抜き、フルブレーキ。
ドリフトしながら、全員の前に停止。

―――友の為に、突っ走る連中を…！！

「…乗れ！！志保！！こっちのほうが、断然速い！！」

志保に、いつぞやのロングコートとヘルメットを投げ渡しながら言う。

「クロウ！？行かないんじゃ…」

「―――見捨てる訳、無いだろうが！！」

全員は、一瞬呆然として…
志保は深い笑顔を浮かべ、コートを着る、そしてヘルメットを被る…

「ごめん！疑った！！」

そして、若干涙声でそう言いながら、こちらに駆け寄る。

「お前らも！バイクの運転は出来るか？」

俺は、セイバーや士郎に声を掛ける。

「え、ええ…騎乗のスキルならありますが…」
「…これでも、英霊なのでな。」

応えたのは、セイバー、アーチャー。

「だったら、乗れ！！貸してやる！！」

俺は、一度バイクを飛び降り、セイバーの前に立つ。
そのまま両手を、俺の両サイドに突き出す。
シャン、という音と共に現れる、二台のバイク。

オフロードバイク・ＸＲ改と…
サイドカーに改造した大型車・ＣＢ１３００ＳＢ改。

俺の持つ、全てのバイクがここに並んだ。

「好きに使え！！こっちのデカイ方は結構扱いが難しいけどな！！！
それと、次からは最後までちゃんと話を聞け！！」

呆然としているセイバーを無視し、ハヤブサに飛び乗る。

「感謝します！！
シロウ！リン！こちらの側車付きに！！アーチャーはそちらの軽装備のモノを使用して下さい！！
…ミミック！先ほどの発言は撤回します！！」

セイバーは、正気に返ったのかテキパキと指示を出す…

そして、後ろから聞える謝罪の言葉。
…気にしてないってのに。

「ええ、じゃあこの側車に乗るわ…
クロウ！さっきはゴメン！」
「ああ、わかった！！俺は後ろだな？
…クロウ、悪かった！！」

さらに聞える、二人の声。
…ったく…

「気にしてねぇ！！
とっとと行くぞ！！」

若干の照れ隠しも含め、大声を出し、アクセルを吹かす。

「クロウ！？ところで、場所はわかってるの！？」

…志保が、後ろに乗りながら俺に質問をする。
…まだ、若干の涙声で。

「方角はわかってる！！」

それに気が付かない振りをしながら、返事をする。

「それに、あくまで“大橋方面”って話だろうが！！」

言いながら、前輪ブレーキを強く握りこむ。

「しっかり？つかまってろ…」

「うん！！」

志保に、しっかりつかまっているように指示しながら車体を左に傾ける。

志保が、俺にしっかりと抱きついたのを確認して、声を張り上げた。

「行くぜ！！

そして最初に言っておく！！」

声を張り上げながら、ギアをローに入れる。

そのまま俺は、前輪をロックしたままアクセルを全開にし、クラッチを放す。

＜ギャギャギャギャギャ！！！＞

急激に動力が伝わった後輪はスリップを起こし、その場で車体は回転！！

これは所謂マックスターン！！

そして、車体が進行方向を向いたとき、前輪のロックを解除！！そ

れと同時に、叫ぶ…

「コイツは…か～な～り、速い！！」

解き放たれた車体は、一気にウィリーしながら加速する。
全力全開！！俺のテンションも回転数と共にヤヴァイことになってるが…今は丁度いい！！

…このバイクを、素面でフルスロットルなんか、出来るか！！

全体重を前方に掛け、ウィリーを押さえ、雄叫びを上げた…

「オォォォォォォォォォォォォォォォ！！！」

「え？え！？
き、きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！？」

俺の雄叫びを後ろに抜き去り、一気に時速３００ｋｍを超える！！
後ろで、志保が悲鳴をあげてるけど…相手してる余裕なんか無い！！！

「行くぜ行くぜ行くぜ行くぜぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

「いやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！？」

夜の街に、エンジン音と男の雄叫び、そして少女の悲鳴が鳴り響き、黒い影が疾走した…

その後方から、二台のバイクも追走していたが…

「な!?志、志保…大丈夫かしら…?」
「そういう俺達も、既に結構な速度出てると思うんだけどぉぉぉぉおおお!?」
「くっ!?追いつけない!!」
「…どれほどのチューンを施したのだ、アイツは…」
等という会話があったとかなかったとか…

―――side慎二

―――時は、少し遡る。

僕は、衛宮の家を後にした後、自宅へと歩いていく。

…ライダーは、霊体化してるため、殆ど一人と同じだね。

歩きながら、空を見上げる。
そして、ふ、と思う…

桜を、士郎の家に預けてきた…僕にとって、最も信頼のおける友人の家。
そして…僕の、初恋の人の家。

そして…ほぼ全サーヴァントもいる、ある意味最も安全な場所。
…完全に予想外だったなぁ…まぁ、好都合だったけどね。

…あの、ミミックっていうサーヴァントが、僕にとっては微妙に好ましくないけど…
まぁ、信用は出来るね…衛宮が信頼してる時点で、疑う理由はないんだけど…

…衛宮、完全に恋する乙女の眼だったよ…
少しショックだけどさ…まぁ、幸せになってくれればそれが一番だ。
衛宮は、僕にとって…人生を変えてくれた恩人だ。

思い返すは、あの…八年ほど前の記憶…

僕は、海外から帰国し、いつの間にか出来てた義妹…桜と、仲は良好とは言えなかった。
あのころの僕は、実家が魔術師の家計だったことから、妙なプライドを持っていた。
自分は特別なんだ、ってさ…
だから、義理の妹…桜に対しても、キツク当たってた。
多分、あのまま行ってたら、僕は…今頃、桜のことを…

そんな僕だったけど…あの日、僕は公園で遊んでたんだ。
そして…ボールを無くした。
一応探したんだけど…見つからなくて、イライラしてたんだ。

一一一『どうしかしたのか?』

そんな時…赤い髪の、子供…当時の衛宮が声を掛けてきた。
その時僕は、イライラしながら怒鳴ったんだ、ボールが無いんだよって…

一一一『じゃぁ、一緒に探そう。』

衛宮は、そう言って…さも当然、とばかりに探してくれた。

僕は、余計なことはするなよ！って叫んで…
当時の僕は、同情されたんだ、って思って、衛宮に当たって…
どうせなら都合よく使ってやろうって思って…
むこうの方を探すって言って…
…そのまま、帰ったんだ。

そうしたら、急に大雨が降ったんだ。
僕は…その時は気にならなかったんだけど…
時間が経つにつれて、段々心配になってきたんだ。
あの馬鹿は、ちゃんと帰ったよな？って…

段々と、心配が強くなって…夜になっても、眠れなかった。
…気が付いたら、僕は…傘をさして、家を抜け出して…

あの公園に、走ってた。

――『ぁ…見つけた、よ？』

もう、いるわけないって思ってた…けど、そこには…
頭の先から、下までずぶ濡れの泥だらけになって…あの“馬鹿”が、
立っていた。

その手には、僕が無くしたボールが握られてて…
僕を見かけるなり、そのボールを、渡してきた。

――『もう、無くさないようにな？』

そう言って、アイツは歩いていった。
僕は、その後姿に向かって、大声で叫んだんだよ。
なんでここまでしたんだよ、って。

―――『…私が、そうしたかったから。』

アイツは、振り返りながら…綺麗な笑顔を見せてくれた。
全身泥だらけで、薄汚れていたけれど…僕には、とても綺麗に見えた。
…何よりも…誰よりも…

アイツは、呆然としてる僕を放って、立ち去った。

それから、僕は…気が付いたら、あの公園に足を運んでいて…
あの、赤い髪を捜してた。

でも、なかなか逢えなくて…一週間くらい経ったかな?
あの赤い髪を見つけたんだ。

…でも、そいつはあの“馬鹿”じゃなくて、もっとぶっきらぼうな男だったけど。
話を聞いてみたら、“馬鹿”の兄だっていうから…

アイツはどうしたんだ?って、僕は訊いたんだ。
そしたら、アイツは風邪引いて寝込んでるっていうじゃないか…

なんだか、もの凄く悪い事をした気分になって…
見舞いに行かせてもらったんだ。

寝込んでたアイツは、僕に向かって、笑いながらこう言ったんだ。

―――『君、優しいんだね…?』

ってさ…
自分が優しいなんて、これっぽっちも思ってなくて…
その笑顔が、なんだか…もの凄く、眩しくて…

気が付いたら、泣いていたんだよ。
優しいのは、お前だろうって…

なんか、その日から…世界が、変わって見えるようになった。
…気持ちに、ゆとりが出来たんだろうね…

赤い髪の兄妹と、友になって…
本当に、友人って呼べる人が出来て…
僕は、嬉しかったんだ。

ある日…マキリの魔術を、僕じゃなくて…桜に受け継がせようとしている事を知った。
最初は憤慨したさ。“なんで僕じゃないんだ”って。

でも、その魔術が…どんなモノかと知って…
桜に、何が…何を、されているのかを、知って…

あの、衛宮の言葉が、脳裏を過ぎって…

“僕は、優しいんだ…”
“桜を、助けよう…”
“僕は、兄さんだから…！”

って、思考が展開したんだ。

…思えば、アイツの言葉が、僕自身を変えていたんだろうね…

それから、僕は、桜にしてやれることは、全部してきたって思ってる。

…衛宮達に、胸を張って…“友人”だって言えるように、さ…

そんな時に起きた、この…聖杯戦争。

爺さんは、桜にサーヴァント…ライダーを召喚させた。

でも…危険な戦いは、僕がやるって、そう言って…

半ば強引に令呪を譲渡して貰って、参加した。

桜には、反対されたけど…

その時は、これしかないって思ったんだ。

聖杯が手に入れば…桜を助けられるって。

あの蟲爺から…開放してやれるって…

…まぁ、あのミミックのおかげで、そもそも戦う必要すら無くなったんだけどね。

…でも…このままじゃぁ桜を開放してやれない…

どうすればいいんだろうか…

「…ハァ…ままならないなぁ…」

溜息を吐き、一度その思考を止めた時…いきなり、声が掛けられた。

「そこの雑種…後ろにいる女を差し出すがいい、そうすれば、命だ

けは助けてやろう…」

!?

いきなり、尊大な言葉が掛けられた。

声のした方を見たら、そこには…

金色の髪を逆立てた、白い服の男がいた…

まさか…イレギュラー!?

高確率で存在しているって話だったけど…

本当にいたのか…!

「…ライダー…まずいね…」

正面から受けるプレッシャー…

足が震えるけれど、それを無視してライダーに声を掛ける。

「…ええ、そのようですねシンジ…」

ライダーは実体化しながら、構えを取る。

それを見たあの男は顔を歪め…

さらに高圧的な態度を取った。

「王の言葉を無視しただけではなく、我の慈悲を無下にするとは…」

その表情には、怒りしかなかった。

そして…その格好が黄金の鎧に変化した。

「万死に値する!」

一一一瞬間、僕はライダーに引かれ、飛びのいていた。
そして気が付く、それまで、僕がいた場所には…圧倒的な死の香りを放つ、黒い魔剣が突き立っていた。

「シンジ！逃走します！！」

その直後、ライダーは…僕のことを抱えたまま自分の首を打ち抜いた。

そして、空中に血の魔方陣が形成される。

直後、僕は空を舞っていた。
…正確には、僕を抱えたライダーが、天馬に乗って…だけど。

「逃がすと思うか！！」

だが、息を吐く暇も無く、あの黄金の男の声が聞えた。

何故？と思い、振り向く…すると、そこには…

一一一黄金の船が、空を飛んでいた。

「なんて非常識！！？」
「くっ！？シンジ！！どうしますか！？」

あのライダーが焦っている。

どうする！？

＜ビュゴウ！！＞

「うわぁ！？」

考える暇も無く、後ろから飛来する赤い閃光。

…一瞬見えたのは、金色の剣だった。

宝具！？

いったい、アイツは何個宝具を持っているんだ！？

どうする！？このままじゃぁ、いずれ打ち落とされる！！

…そうだ！！

「ライダー！！可能な限り回避しながら、大橋方面に移動してくれ！！」

「了解しました！！」

偽臣の書を握り、指示を出す。

そして、ポケットから携帯を取り出し、クイックコールを掛ける。

ボタンが見えなかったけど…

桜にかかるはずだ！！

何回かのコールの後、電話に出る…

『――はい…兄さん？どうしたんですか？』

「桜か！！イレギュラーが出た！！」

『――…え！？イレギュラー！？襲われてるんですか！！？』

桜の、驚く声を聞きながら、急いで用件を伝える。

「ああ！！今、ライダーの天馬で大橋の方向に向かってる！！セイバー達に援軍を頼んでくれ！！」

『ーーー…はい、今…冬木大橋方面に逃走中、セイバー達に援軍を頼む！？大丈夫なんですか！？…兄さ＜ビュン！＞

「しまった！？」

用件を、ある程度言い終えたタイミングで、携帯を落としてしまった。

…まぁいい！後は！！

「聞いてたなライダー！！僕たちがやるべきことは、セイバー達の到着まで逃げ続けることだ！！」

「わかりました！！

…頑張ってください！！！“騎英の手綱（ベルレフォーン）”！！」

ライダーに、やるべきことを伝える。

すると、ライダーは天馬に対して、辛そうに指示を出しながら、その宝具の真名を開放した。

ーーーside志保

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

「いやぁぁぁ

クロウのバイクの後ろに乗って、慎二達のところへと急ぐ。

…暴力的な加速、G、風…

そう、今、私達は風になっている…

クロウは、カーブの度に雄叫びを上げる。

…そして、殆ど減速しないまま曲がりきる。

…しっかりつかまってろ、って言われて…

運転しにくいかな?とも思いながらも力いっぱい抱きついた。

その瞬間は、ちょっと恥ずかしかったけど…

…そんな気持ちは、発進と共に、吹っ飛んだ…

絶対違うって!!バイクは普通こんな運転絶対にしないって!?

たまにブレーキ使うかと思ったらロック、わざとスリップさせて曲がるって何!?

全力で体重移動を行うのは良くわかるよ!?けど、その時の筋肉のバンプアップがもの凄いしっ!?

レザーのスーツがギチギチいってるよぅ!!!?前に、異常だって自分で言ってたけど、ここまでだったの!!?

って…「きゃぁぁぁ

「ッ！？金色の船！？」

空に、派手な金色の船と…

「ペガサス！？」

純白の、天馬が空を舞っていた。

多分、アレは…ライダーと、例の“アーチャー（？）”だろう。

追いついた！

そう思った次の瞬間…

ペガサスが、急降下を始めた。

…見ると、翼に槍？が突き立っている。

打ち落とされた！？

金色の船が、それを追って着陸態勢にはいってる。

「クロウ！！」

「わかってる！！行くぜ行くぜ行くぜ行くぜぇぇぇぇぇえええええ！！！！！」

＜ブォン！ブォン！ブォォォォオオオオオオオン！！！！！！＞

急いで！

そう言う前に、クロウは結構吹っ飛んだ叫びを上げながらアクセルを回していた。

さらに加速する車体。
一瞬、メーターを見た、その表示は…＜３９６ｋｍ／ｈ＞…しかも、まだ速度が上がっていく…

ギネス物だよ…
あまりに、吹っ飛んだその速度に、そんなことを思ってしまった。

ってか、そんな速度出したこと無いんじゃなかったの…？
あくまで“スペック上は”って…

＜シュイィィィィン！！＞
「えぇぇぇって…やべ、ブレーキ焼きついたかも…」

いきなり、甲高い音が鳴り響く。
何！？と思ったら、クロウがそんなことを小声で呟いた…

――やべ、ブレーキ焼きついたかも…
――やべ、ブレーキ焼きついたかも…
――やべ、ブレーキ焼きついたかも…
――やべ、ブレーキ焼きついたかも…

しっかり、耳に入ってしまったその言葉が頭の中で反響する。

・フェード現象。
　ブレーキのパッドが高熱により変質。
制動能力がなくなってしまう危険な現象である。

教習所なんかでは、“絶対に”こうならないようにしよう、っていう指導を受けます。

普通は、自動車に起こる現象で、ディスクブレーキのバイクには、基本的には起こりません。
排熱効率が非常に高いからですが…

それでも無茶苦茶な運転を行うと、発生してしまう可能性があるので気をつけましょう。

…へ？

「…ま、なんとかなるか…？」

私が呆然としている間に、そんな事を呟いているクロウ。

クロウはあろうことかアクセルを回していた。

「な…なんとかなるかぁぁぁぁぁぁああああああっ！！！！！！？」

思わず絶叫…
「大丈夫だ、一応考えはあるって！
俺は、風になる！いや…風を…振り切るぜ！！」
だが、クロウはそんなことを言って、ますます加速していく。

「いいいゃぁぁぁぁぁぁ

！」

…私は、最早マジ泣きでした。
私の人生で、恐怖を感じてマジ泣きしたのは、これが初めてでした。
…後で、叩いていいよね？クロウ…（泣）

――後できいたけど、このとき…クロウはテンションその他諸々いろんなモノが吹っ飛んでて、正気じゃなかったらしい。
…“俺自身、よくこけなかったなぁ…って、思ってる”って、語ってた…
P，S…その時は、問答無用で叩きました。涙目で。

――side慎二

「うぁぁぁぁあああああ！？」
「クゥッ！！！？」

ドシャ…と、地面に叩きつけられる天馬。
そのまま、送還され、消えていく…

ここは…丁度、大橋が眼と鼻の先…
川沿いの広場…か…

「ふん…なかなかに逃げたな？
…だが、終わりだ…」

そこに降り立つ、金色の男…

もう、逃げられない…
だけど…だけど!!

「まだ…終わりじゃないだろ…?ライダー!!」

痛む体に鞭打ち、無理やり立ち上がりながらライダーを見る。
すると、ライダーも起き上がりながら返事をする。

「ええ…
シンジ…私が時間を稼ぎます…そのうちに、逃げてください…」

ライダーは、そんなことを言うが…

「逃がすと思うか?蛇。」

黄金の男に、僕達を…片方でも逃がす気は無さそうだ。

その背後には…無数の剣や槍…斧の柄が見えている。

まさか…アレが全部宝具だっていうのか!?

「…死ね。
今我は機嫌が悪い…」

驚いている内に、その無数の武器が、その刃をこちらに向けていた…
そして、その右手を掲げ…

「一一一“王の財宝(ゲート・オブ・バビロン)”」

＜パチン＞

指を、鳴らした…
そして飛来する無数の宝具…

＜ギャイン！！ギャン！ギィン！！ギギギン！！！＞

そのまま、僕達を貫くか、と思っていた宝具は、僕の眼前で弾かれていた。

「…いい度胸してるな、坊主！
てめぇが死にそうって時に、眼を閉じないなんてな！！」

そして、そんな声が聞えた。
その声のした方向へ顔をむけると…

「よう…テメェらがライダー組か？
一応、セイバーに同盟を組んだって聞いてるぜ？」

獣を思わせる、赤い槍を持った男がいた。
そして、その足元にはいくつもの武器…さっきまで、僕を貫こうとしていた宝具が転がっていた。

「まさか…ランサー…？」

今のところ、顔を見ていなかったサーヴァントのことを思い出す。
僕達が、同盟を組んだ時点で既にあの家にいたはずなのに、顔を見なかったサーヴァント…

「おう。
…言峰のヤロウを追っていたつもりが…変なヤツを見つけちまったな…」

ランサーは、黄金の男に向き直る。

そのまま、彼は僕達にこう告げた。

「しっかりしろライダー！ミミックの奴から聞いてるかも知れねぇが…サーヴァントが、一人でも脱落するとやべぇんだ…
助太刀するぜ。」

槍を構えながら、そう言うランサー。

「…感謝します。
シンジ…下がってください。」

ライダーも、僕の前に出て、鎖付きの短剣を構えた。

「しかし…彼は宝具を無数に扱います…勝機はありますか？」

しかし、ライダーの口から出てくるのは、そんな弱気な発言。
ランサーは、若干険しい声でそれに返す。

「さぁな…だが…やるしかねぇだろ…！」
「そうです…ねっ！！」

そして、そんな掛け合いの直後、ライダーは短剣を投擲。
ランサーも疾風のように駆け出した。

「ふん！
狗と蛇が群れたところで、この我に勝てるとでも思ったか？
――その思い上がり、死を持って償え。“王の財宝”！！」

＜ドン！ドン！ドン！！＞
それを迎撃するように放たれる魔弾の雨…

「ハッ！！中るかよ！！」

それを回避し…時に弾き、突き進むランサー。

「…ッ！これは…中ったら、終わりですね…！！」

距離をとりながら…短剣を投げ続けるライダー…

「ちょこまかと！
王が死ねと言ったら自害するのが礼儀であろう！！」

そんな二人に、滅茶苦茶なことを言いながら魔弾を放ち続ける男。

僕は…動けなかった。
これが、英雄の戦い…

真紅の残光を残す魔弾…
それを掻い潜る、蒼い疾風…
ジャラジャラと音を立てて、黄金の男に迫る鎖…

僕は、魅入っていた…
覚悟はしていたつもりだった…

けれど…これが、英雄の戦い…
足が、動かなかった。

「入ったぜ！！」

気が付いた時には、ランサーがあの男の目の前に…
懐に入っていた。

そして、即座に槍を突き出そうとしていた。

いける！

そう思った。
あの男を倒せるって。

「フン！
“天の鎖”よ！！」

＜ジャラララララララ！！＞

「なにぃ！？」
「ッ！？」

しかし…あの男が右手を上げた瞬間…
どこからともなく鎖が飛来、その鎖は、ライダーとランサーを縛り上げ、拘束していた。

「フン…王の鎧に傷を付けようなどと…
まぁ良い…これで終いだ。」

そして…黄金の男は、後ろの揺らめきから…
一振りの捻れた剣と、鎌のような…不可思議な武器を取り出した。

「カラドボルグだと!?」
「ッ!?ハルペー!?」

どうやら、ランサー、ライダーに縁のある宝具らしく、二人が驚愕していた。

「な、なんなんだよ!?
なんで宝具をそんなに大量に持っているんだよ!?」

混乱が、僕達を覆う。
気が付いたら、僕は叫んでいた。

だが、混乱の極致にいる僕に向けられたのは侮蔑の視線。

「黙れ雑種、誰が話すことを許可したか!!」

…怒号。
僕は…足が竦んでいた。

赤い瞳に睨まれて、動けなくなっていた。

「では…死ね。」

「チィッ!?動けねぇ!!」
「クッ!?シンジ!逃げてください!!」

男が放つ殺気が膨れ上がり、その手に持つ二つの宝具が二人を貫くため、刃先を向ける。

そして…

＜ブォオオン！！！！＞

（ォォォォォォォォォォォォォォォォ！！」

「！？なんだ！？」

（ァァァァァァァァアアアアアアアアア！！？」

それが、二人を今まさに貫かんとした時、聞えてくるエンジン音。

そして雄叫びと…悲鳴！？

その場にいた、全員がその声のする方へと顔をむける。

「リアル！！ライダー！！！キィィィィィック！！！！！！」

「いいやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！？」

すると…雄叫びと共に超高速で飛来する黒尽くめのライダースーツの男。

…と、抱きかかえられたまま、悲鳴を上げる赤いコートの女の子…て衛宮！？

「な、なん＜どばきぃっ！！！＞ぐぉぉぉぉぉぉおおっ！！？」

そのまま、男は右足を若干畳み、左足を突き出した体勢のまま、あの黄金の男に衝突。

…その蹴りは、ちょうど、胸の中央を捕らえていた。

「ォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！」

「ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！？」

＜ズザザザザザザザザザザザザ！！！！！＞
「ぬぉぉぉぉぉぉおおおおおおおおおおおお！！！！！？」

その跳び蹴りの勢いは凄まじく、持ちこたえた黄金の男を押し出す。
地面のタイルを削りながら、徐々に減速する…

「プラス！！相棒に食らった…“チョコボキック！！”＜ズガン！＞」

そして、その黒い男は、畳んでいた右足に、黄色の…オーラ？を纏い、突き出した。
すると、その黄色い残光は…四方向に伸びた、まるで、あの…衛宮の家で見たチョコボの足のような形に。

＜ドッボーン！！！＞

その勢いで、黄金の男を川の中に突き飛ばし、自身はそのまま後ろに跳ぶ。
そして、空中で一度バク転して着地した。

その男は…手に抱く少女…衛宮をそっと降ろし、シャン、という音と蒼い光を振り撒きながら、声を張り上げた。

「俺、参上！！」

その台詞を言い終える頃には、その服装が黒いコート姿に変わっていた。

「ってぇ～～…足が痺れる…」

が、直後に左足を抱えるようにうずくまる。
…場が、一瞬固まる。

「…じゃ、なぁぁぁい！！！？＜ぱかん！＞あれは考えって言わないぃ！＜ぽかぽかぽかっ！＞」

…が、即座に衛宮が男…ミミックの後頭部を叩く。
そのまま、まるで駄々っ子みたいなぽこぽこぱんちを放つ衛宮。

…なんか、涙声な気が…

「ちょ！？
お、落ち着け志保！！結果オーライだ！？空中での姿勢制御にはちゃんと自信が…「そういう問題でも無いぃ！！」
わ、悪かったって…それより、大丈夫かライダー！ランサー！！慎二！！！」

「はっ！？こんなことしてる場合じゃない！！大丈夫か慎二！！？」

それを宥めながら、鎖で縛られたままのライダーとランサーに駆け寄る。
衛宮は…僕に駆け寄ってきた。

「あ、ああ…なんとか、今のところは…」

僕には、そう言う位しか出来なかった。

「見ての通りだ！！この鎖はなんなんだ！？」

向こうでは、ミミックが例の鎖を睨んでいた。

そして…

「“天の鎖”エルキドゥ…神縛りの鎖だ!!
神と縁があればあるほど、この鎖の強度が上がる仕組みだ!!
…つまり…＜シャン!＞神と縁なんかまったく無い俺にとっては、
単なる頑丈な鎖!!」

右手に、妙にデカイ剣…斬馬刀?を出現させ、振りかぶる。

「っせぇのぉ!!」
＜ガギィン!!＞

それを振り下ろし、ランサーを拘束していた鎖を断つ。

「もう一丁!!」
＜ギャギィン!!＞

さらに、その勢いをそのままに、ライダーを拘束する鎖を断ち切った。

「ック…助かったぜミミック!」
「感謝します…ところで、貴方はそんな大剣を所有していたのですか!?」

「ふぅ…まぁ、何故か、ね…やっぱアホみたいに重いなこれ…
クラウドって、こんなものを平気な顔してぶん回してたのかよ…
そっちはどうだ!志保!!」

そんな会話をしながらも、こちらの心配をしているミミック。

「大丈夫みたい！！
慎二、立てる？」

へ？
言われて気が付いた。
どうやら、いつのまにか…へたり込んでいたらしい。

「は、はは…情けないな…」

そう呟きながら、僕は立ち上がろうとした。
…けど、膝が笑って、巧く立てなかった。

「肩、貸すよ。」

そんな僕を見かねてか、肩を貸してくれた衛宮。
…本当に、情けないなぁ…僕は…

「はは…ごめん、衛宮…」

肩を貸してもらいながら、僕は立ち上がる。
ああ…助かったんだな…って、思って…
『一一一許さんぞ、貴様ら…！』

「ッ衛宮！！＜ドン！！＞」
そんな声が聞えた瞬間…
反射的に、衛宮を突き飛ばしていた。

＜ドン！ドン！ドン！

！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！＞

「なにぃっ！？」

「グッ！！」

「クゥッ！！？」

「慎二！！？」

そして、降り注ぐ赤い魔弾の雨…

ミミックは、ライダーの前に立ち、その大剣を盾にするように構えた。

ランサーは、その後ろから、何度か魔弾を弾き…

ライダーは、二人に守られるように蹲っていた。

衛宮は、僕の後ろに、倒れている…無傷で。

…僕は、衛宮の前に立っていた。

『…王の鎧に傷を付けるのみならず、足蹴にしたなぁっ！！！』

川の中から、膨大な殺気を放つ金色の男。

「く…そ、がぁ…！」

ミミックは、その手に持つ大剣が半ばから砕かれ、膝を付いていた。

「チィッ…！！」

ランサーは、再び槍を構える…

「シンジ！？」

ライダーは…僕の方に、駆け寄ってくる。

「慎…二？」

衛宮は…何が起きたかわからない、という声で…
僕の名前を呼んでいた。

腹を、黒い…剣が…貫いて、いた…
そのまま…僕は、倒れた。

一気に、僕の体から…力が抜けていく…
ポケットに入れていた、偽臣の書も、燃えている…

「慎二…？慎二！！」

視界が霞む中…僕の体を揺らし、声を掛けてくれている…衛宮。

「衛…宮…？大、丈…夫、かい？」

衛宮が、本当に無事だったかが心配で…
そんなことを、呟いた…

「馬鹿！！？なんで…なんでこんな…！」

衛宮の、泣きそうな声が聞える…

ああ…僕は…唯一惚れた女の子を、泣かせちゃったんだなぁ…

「本、当…に…情けない、なぁ…僕、は…」
「シンジ！！しっかりしてください！！！」

ああ…この声は、ライダーかな…？

もう…目も、殆ど見えないや…

これは、もう…駄目だなぁ…

だったら、せめて…伝えて、置こう…

「ライ、ダー…？
頼み、が…あるん、だ…」
「シンジ！？何ですか！！」

頼む、相手は…オマエと…

「その、前に…ミミック…いる、かい…？」
「…なんだ！？」

ああ、聞えてるんだね…
だったら…話は、早い…

「ライ、ダー…さく、ら、を…守って…くれ…」

ああ…出来れば、この台詞は…士郎に、言いたかったなぁ…

「ミ、ミック…！！衛宮を…ゴフッ！？…守りぬけよ！！
絶対、に…！！」

…衛宮は、きっと…アンタのことを、好きなんだ…
だから…守って欲しい…

「勿論です！シンジ！！死んではなりません！！！貴方は、サクラの…！！」
「言われなくても、な…！」

二人の声が、聞えた…

ああ…少しは、安心、出来る、かなぁ…

「慎二！！何で！！！？何で私を…！！！！！！？」

…そういえば…なんで、かなぁ…
って…答えは、簡単だよね…？

「…簡単、な、こと…だよ…衛宮…」

だって、僕は…
あの日から、ずっと君の事が…

「－－－僕が、そうしたかったから。」

－－－慎二ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

“第十四話／「遠い日の想い。」”（後書き）

この物語は当然フィクションです。
登場人物の行動を真似しないでください。

…いや、クロウ君の運転のことですけどね。

・誤字修正？
実際のスペルが不安定なんですよねぇ…

ウルフガイさん、すみませんがｆａｔｅ本編にて
“ペルレフォーン”になっていたので、今回はそちらを採用します。

第三回・ラジオトーク！ｉｎ“俺いろ”！！プラスアンケート

サヤ（以下サ）「サヤと！」

アカ（以下ア）「アカの！」

サ＆ア「「ラジオトーク！ｉｎ“俺いろ”！！」」

――第三回・ラジオトーク！ｉｎ“俺いろ”！！

（ＢＧＭ・クレイジーモーター○イクル）

サ「って、なんでこのタイミングでラジオトークなんですかっ！！」

ア「絶対にタイミングを間違えていると思うんだがなぁっ！！」

ツルギ（以下ツ）「落ち着け二人ともっ！？
なにやら、今回から、少々のオリ設定が出てしまったことや、ご都合がえらいことになってしまったから、それの言い訳？も兼ねていて…」

ア「それはそれこそ侑斗の仕事だろうがっ！！」

サ「なんで、それを私達がっ！！」

ツ「まぁまぁ…
それに、一応、今までのラジオトークみたいに、解説もやるんだから…」

ア「…ハァ…
仕方ない…か…始まってしまった以上は、ちゃんとやらないと…」

サ「ふぅ…仕方が無いです…
…ところで、なんで今回、この選曲なんですか？」

ツ「本編で、クロウがバイクで暴走してるから。」

ア「…そういえばそうだったな…
…？ところでサヤ？アイツのバイク…ハヤブサ改、少なくとも、私は乗ってるところを見たことがなかったんだが？」

サ「あぁ…アレですか…
確か、完成直後にサーキットでテスト走行して以来乗ってなかったんですよね…お兄ちゃん。」

ツ「何故に？折角の良いバイクなのに…」

サ「…理由は二つ…いや、三つありますね。
一つは、単純に自分が乗ってても怖かったから。
二つ目は、そもそも普段はＸＲかＣＢで十分だったから…つまり必要が無かったから。
で、最後に、アレ自体は結構気に入ってて、しかも修理が手間なんで、基本動かしたくなかったらしいです。」

ツ＆ア「意味無っ！？」

サ「…まぁ、本人曰く、ノリで作ったネタ車だったらしいですから…
それに、アレ、結構燃費が悪くて…なんせツインターボがどうとか…」

ツ「デ○モドゥスかよ!?
…まぁわかった、じゃあ、そろそろ解説に移ろうや…」

ア「ああ、わかった。」

（ＢＧＭ・変更無し）

サ「変わってない!?」

ア「…まぁ、まだバイクの話題だしなぁ…」

ツ「…ま、そういうことだ。」

ア「今回のお題は“クロウの運転技術”と“今回クロウが出した武器”、ついでに“『てきのわざ』について”…だな。」

サ「それに、“山門の鍵?”ですね。」

ツ「最初の奴は、お前らの方が詳しいだろ?」

サ「そうですね。
お兄ちゃんの運転技術は…“結構巧い”くらいでしたね。」

ア「ただ…ほら、アイツは…やたらと“運”が無くてだ…
基本、乗る度に毎回事故りそうになってしまうんだ…」

サ「私が後ろに乗ってる時はそうでもなかったんですが…
　それは置いといて、その所為で、“危機察知能力”がかなりついたんですよ、お兄ちゃん。」

ア「それに、あの反則じみた肉体から生み出される体重移動は、超重量の車体でも容易くコントロール可能なんだ。
　…で、危機察知能力が高いってことは…基本的に事故に巻き込まれなくなるってことでもある。」

ツ「そういや動体視力も半端じゃないよな…本編でランサーの槍を見切って真似てたくらいだし。」

サ「それらが組み合わさって…」

ツ「あの超高速の世界でもなんとか事故らずに済んだ、と…
　俺には真似できんな…」

ア「ライダー系オリ主が何を言ってるやら…」

サ「ジェットスライガー運転してる癖に…」

ツ「変身してなきゃ無理だっつうの!?
　皆様!!本編でのクロウのような運転は法律に思いっきり触れる上、異常に危険です!!!
　しかも周りに迷惑です!!!!絶対に真似しないでください…っつかするな!!!!!」

ア&サ（…する人はいないと思うけどなぁ…）

（ＢＧＭ・〇金の王）

ツ「次は“今回クロウが出した武器”だな？」

ア「“バスターソード”だろ？？の。」

サ「アカさんわかってたんですか？」

ア「まぁ、それは、なぁ？」

ツ「クラウド言ってたしな。
あの“天の鎖”は、神性が無い奴からすれば、単なる頑丈な鎖…
物理的に破壊は可能なんだよ。」

サ「あ…そういえば、“幻想の道具欄”に入ったモノって、宝具扱いになるんでしたっけ？」

ツ「一応な？
ま、宝具化したバスターソードならぶっ壊すくらいはなんとかなるだろ…クロウ、一般人（笑）だし。」

サ&ア（笑…ゴメン、否定できない…）

（ＢＧＭ・本命〇チョコボ）

ツ「…で、“てきのわざ”か…」

ア「なぁ…私の記憶が間違ってなければ、“てきのわざ”のマテリアでは“チョコボキック”はラーニングできないはずなんだが…」

サ「あれ？そうなんですか？」

ア「チョコボ関連だと…“チョコボックル”だけだったはずだ。」

ツ「正解。
…だがこの世界において、マテリアの性能はじつは少々変わっているんだ。」

サ&ア「？」

ツ「“世界のルールに縛られる”と言ったほうがいいか？
例えば、召喚マテリアなんだが…仮にオーディンを使用したとしよう。」

ア「ふむ？」

ツ「すると、“斬鉄剣”または“グングニルの槍”が発動する…と、本編ではクロウが説明したよな？」

サ「はい…」

ツ「だが…この世界では、“オーディン”が“サーヴァント”として“召喚”され、“宝具”を“真名開放”して去っていく。
…と、こうなる。」

ア&サ「はぃ！？」

ツ「クロウは“召喚マテリア”は鑑定してないだろ？なので効果がわかってないんだが…
まぁ、このように効果が変質するんだよ、この世界のマテリア。」

ア「じゃあ何か？クロウが取り込んだ“てきのわざ”も変質してるのか？」

ツ「ああ…効果は、“他人が放った、武装に頼らない固有技が自身に直撃した時、ラーニングする”に変わっている。
現状、ココが放った“チョコボキック”と“チョコボックル”をラーニングしてるな。」

サ「ちょ、ちょっと待ってください！！その理屈だと…小次郎さんの“燕返し”もラーニングできるんですか！？」

ツ「理論上は、な…ただし、食らった上で生き残らないと駄目だぞ？
まぁ、竹刀かなんかで打って貰えばラーニングするだろうな…」

サ「な、なんてチート…」

ツ「そうでもないぞ？ラーニングしたからって完全に使える訳じゃない。
…チョコボキックを見て貰えばわかるかもしれないが、多少の“アレンジ”がかかったりするんだ。
燕返しをラーニングしても…擬似的な“偽燕返し”になる可能性が高いな。」

ア「？」

ツ「多分、“多重次元屈折現象”は起こらないだろうね。
ＭＰ（魔力）消費して、二本の魔力による斬撃でも発生させて、それに自分の一撃を同時に放つ…みたいな形になるだろうな。」

ア「…あ、そういえば、“てきのわざ”でも、ＭＰの消費はあったんだっけか…」

ツ「そういうこと。
今回の“チョコボキック”だって、ＭＰ消費して、魔力で擬似的にチョコボの足を再現して放つ蹴り技になってるし。」

サ「じゃぁ、他人の技を魔力によって無理やり再現する…って認識でいいんですか？」

ツ「いいんじゃないか？それで。
ついでに言っておくと、クロウは魔力総量そんなに無いから結局乱発はできないぞ。」

（ＢＧＭ・疾風の剣〇）

ア「じゃぁ最後に…“山門の鍵？”だな…」

サ「それじゃ、一気に解説どうぞ！！」

ツ「一気にやるのか？まぁいいが…

今回、オリ＆御都合設定として登場した“山門の鍵”について…
あの山門にそもそも鍵なんか付いてんの？とお思いの方がほとんどだと思いますが…この世界においては、“付いていた”と仮定してください。
あの山門が、いつ建てられたのか？は…調べてもわかりませんでした。しかし、すくなくとも二百年前にはあったと思われます。
で、小次郎はあの“山門”というか“土地”を触媒に召喚されています…で、“門”というものに、“鍵”が付いていても、そこま

で不自然では無いと侑斗は考えました。
つまり、“鍵”もまた、触媒の一部だった、としてください。
ですが、そんな昔の“鍵”が、いまだに使用可能か?と考えると…正直微妙です、何度か交換されたことでしょう。
で、今回キャスターが持ち出したのは倉庫に転がってた古ぼけた鍵…交換された後の、古いほうの鍵です。
キャスターが、魔力を込めるのに使おうと考えるくらいには、年月を数えたシロモノだったのです。
そこに、“土地に込めた魔力”を移しておけば、拠り代にはなりえるのでは?という判断をしたわけです。
妄想乙!と言われてしまえばそれまでなんですが…流石に、“葛木さんの眼鏡”は…と思い用意した次第です。

…と、侑斗は言い訳してたな。
まぁ、完全なギャグとはいえ、いとも簡単にアノ眼鏡に拠り代を移せるキャスターなら可能なことかも知れんが。」

ア「正直、それで良いのかと言いたい。
…が、御都合は今に始まった事でも無いからなぁ…」

サ「まぁ、それなりにマトモ?な内容…でしたし、一応、納得してあげても…いい、かなぁ?」

ツ「…お前らってさ、結構侑斗に辛辣だよな。
まぁいいか…こんなところかな?」

(BGM・激突する○)

ツ「じゃ、そんな訳で今回は終了…」

サ&ア「待った！！」

ア「忘れてないか？本編でクロウがもう一つ、変な技を放っていることを！！」

サ「リアル・ライダーキックのことです！！
あれってどんな技なんですか？」

ア「黄金の鎧を着た英雄王をふっ飛ばしてるあれだ。」

ツ「あ～…そういや、解説無かったっけ…
しょうがない、軽く説明するか…
サーヴァントっぽく説明すると…

リアル・ライダーキック：対人攻撃　ランクＢ＋　レンジ？？？
最大補足・一人

時速４００ｋｍ近い速度で放たれた跳び蹴り。
バカバイク：ハヤブサ改のフルスロットルから発動した。
フルスピードで敵に“一直線に”突っ込み、その途中でバイクから跳ぶ。（その際に“幻想の道具欄”にバイクを収納。）
空中で姿勢を制御し、跳び蹴りの体勢に移行し、そのまま慣性の法則で突っ込んでいく。
時速４００ｋｍに近い速度で、１５０ｋｇを超える重量（クロウの体重＋志保の体重＋二人の装備品の重量の合計）の跳び蹴り。
その威力は…計算するとかなりの威力だったりする。

ただし、勿論凄まじい反力が足に掛かるので、流石のクロウも膝を曲げたりして多少は衝撃を逃がしたようだ。

…って感じ。
本当にバカな技だね…
因みに、一緒に跳んでる志保は魔力で全身を強化してたそうな…」

サ「い、一緒に跳んだ（飛んだ?）志保さん、流石に涙目ですね…」

ア「ク、クロウ…お前、何をやってるんだ…」

ツ「気が付いている人もいるかも知れないが、実はクロウ、召喚されてから今まで、テンションやら精神状態が結構不安定で、“落ち着いてる”場面より若干おかしい場面の方が多い可能性すらある。」

ア「今回は、完全に振り切ってたなぁ…」

ツ「だが、まだまだ戦いは続いている状態だからな…
とりあえず、今回はここまでで良いか?」

ア「ま、そうだな…」

サ「そうですね…それでは!今後も、疑問・質問・リクエスト等々がございましたら!!」

ア「このコーナーで受け付けます!!」

ツ「ってちょっと待て…なんか侑斗からメッセージが…」

サ「あ、あらら…先に言ってくださいよ…」

ツ「悪い悪い…読み上げるぞ?

『“俺いろ”をお読みくださっている皆様！いつもいつも本当にありがとうございます！！
いつも、ご指摘をしてくださる皆様も、本当に感謝しております！！

さて、今回は、そんな皆様にアンケートを行いたいと思います。
お題は“ギル様の今後”です。

今現在普通に我様やってますが…今後、彼を女性化させようか、という話もあるのです（ヒロインにはなりません）。
友人・舞人なんかは「そっちで行こうぜ」と強く申しておりますが…
正直、皆様の反応が気になるのです。

実際のところ、させてもさせなくても話は進められますが…元々のキャラ原案をくれたＪ・Ｂ氏のお話では女性化しておりました。
実際、そのほうがラスボス戦にすんなり入れます。なのでそっちのほうが楽といえば楽なのですが…

やっぱり気になるのです。
苦手な人は本当に苦手なジャンルですから。

なので、ここは皆様の意見を伺おうと思います。

賛成：英雄女王でも良いんじゃない？＝〇
反対：英雄王のままで行くべき！＝×

感想、ご意見の最後に〇ｏｒ×を付けていただけると幸いです。
ちなみに、なんの意見も入らなかった場合は英雄女王になります

（既に一票入っているため。）

期限は七月一日迄とさせていただきます。

皆様、ご協力をお願いいたします！！

Ｐ，Ｓアロン様、今現在ｚｅｒｏを読み返しておりますので、読み終わり次第返答をさせて頂きます。もう少々お待ちください。』

…だってさ。」

サ「…ＴＳですか…」

ア「苦手な人は、本当にとことん駄目なジャンルだしなぁ…」

ツ「ま、ちゃんと訊くだけマシと思ってやるか…

それじゃぁ、これからも“俺いろ”をよろしくおねがいします！！」

サ「それでは！！」

ツ&ア「また次回のラジオトークで！！」

サ「お会いしましょう♪」

（そういや、クロウがライダーマニアなのはよ～くわかったんだけどさ、お前らはどうなの？）
（ぅ！？ぅぅ…お兄ちゃんの影響で…）
（しっかりと全作品観てしまった…）
（ふぅん？…あ、そういや超電王３は？クロウ、そっちじゃ死んでるけど…）
（観たぞ？）
（観ましたよ？）
（というか、いまさら観ないというのも、なぁ？）
（ＤＶＤも、出るたびに買って、お兄ちゃんの部屋の棚に入れてますし…）
（そうか…）

“第十五話／「辿り着く者、そして…」”（前書き）

ご都合全開！

…ご注意を。

あ、それとアンケートの結果をあとがきで発表します。

“第十五話／「辿り着く者、そして…」”

一一一体は、剣で、出来て、いるっ！！

“第十五話／「辿り着く者、そして…」”

一一一ｓｉｄｅクロウ

「慎二！？慎二！！」

志保の悲痛な声が、夜の街に響く…

志保の目の前には、倒れ、意識を失った慎二。
アイツは…志保を庇って、黒い剣に刺された。
魔剣の作用なのか、あまり血は出ていない、が…

糞…！！

志保を守れ…？
バカヤロウ…お前に言われなくてもそうするっての…！！
それに、テメエが…泣かせてどうすんだよ…！

「…死なせてなんか、やらねぇ！」

そう言いながら、砕けたバスターソードを投げ捨てる。
そして痛む身体に鞭を打ち、慎二の方へと走る。

「クロウ！慎二が…」
「わかってる！！退け、志保…」

志保を押しのけ、慎二の前に膝を付く。
そして…突き立っている剣を鑑定する。

「ミミック、シンジは…」
「…少し、黙ってくれ。」

いろんなモノをすっ飛ばし、“能力”だけを全力で鑑定…

＜ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！＞

「チィッ！！」

＜ギャン！ギャン！ガギィ！ギャイン！！＞

…だが、俺達を吹き飛ばそうと降り注ぐ魔弾。
ランサーが、俺の後ろで弾いてくれている。

「悪い！ランサー！！後五秒で良い！！そのまま頼む！！！」
「ッ軽く言いやがって！！ライダーもやれ！！！」
「…了解しました。」

そして、ランサーとライダーの協力により、鑑定する時間を稼いで

貰う。

…そして、五秒。

銘とか、その辺は鑑定しなかったが…
だが、能力はわかった。

…傷が癒えない呪いが掛かっている。

これなら…！！

「フッ！」

慎二の腹に刺さった剣を引き抜き、放り投げる。

そして、幻想の道具欄から、“じゅうじか”と“ポーション”を取り出す。
“じゅうじか”を傷口に押し当てる…黒い煙のようなモノが、立ち昇って消えた。
それを確認し、口の中に“ポーション”を無理やり流し込む。

…俺が持っている回復薬は、これで完全に品切れ。
後は“エリクサー”と“エーテル”が一つずつしかない。
それに、エリクサーに関しては、もう…使う先が確定している…

それはともかく…よし、息はある。
間に合ったか…

「クロウ…慎二は！？」
「…ギリギリ、生きてる。

スマン、これ以上は余裕が無い！！慎二を担いで逃げろ！！」

志保の質問に答え、そのまま指示を出す。

…これ以上は、守れない。

「でも！？」

「さっきも言ったろ！“足手まとい”だ！！

…俺も、弾除け位にしか、ならない…早く、逃げろ！！

…むしろ、お前が逃げてくれれば…令呪で、逃げられる！！」

納得できないのか、反論をしようとする志保。

それを遮り、睨みながら指示を出す。

「…ッ

ごめん、クロウ…っ！」

志保は、唇を噛み、一瞬俯いて…

慎二を抱え、走り出した。

しかし…

『一一一逃がさん！！！』

「っ！？」

「くそ…っ！！」

それを認めない、とばかりに降り注ぐ魔弾。

俺は、志保の盾になろうと、立ちふさがる。

「ミミック！？」

「くっ！？」

ランサー達も、手が塞がっている。
…とてもじゃないが、間に合わないだろう。

俺も、“宝具”を出す時間は無い。

目の前に迫る魔弾を見つめ…俺は…
（…止められるかなぁ…）
全身に力を込め、少しでも肉体を硬くして…
（ここまで…か？）
…覚悟を、決めた。
せめて、後ろの二人を、護ろうと…

そして…赤い残光を残す魔弾が…迫って…

「――“熾天覆う七つの円冠（ロー・アイアス）”！！」

――突如として現れた、七つの花弁に防がれた…

呆然とする俺達に、後ろから声がかかる。

「“足手まとい”が先行してどうする…世話を焼かせるな。」

振り向いた先にいたのは、バイクのヘッドライトに照らされた人影…

右手を前に突き出した姿勢の、赤い外套を身に纏う騎士…

――アーチャー

そして…

「大丈夫ですか！シホ、ミミック！」

駆け寄ってくる青と銀の鎧の騎士…

―――セイバー

「間に合った!!大丈夫か志保!!」

それを追う赤い髪の少年…

―――士郎

「ったく…これ、どういう状況よ…!!」

そして、赤い服の少女…

―――凛

…来て、くれたのか…!

「…結構、遅れたな?」

喜びを感じつつも、憎まれ口を叩く俺。
駆け寄ってきた全員は、苦笑しながら反論した。

「貴方のモノとは性能が違い過ぎます!!」
「同感だ。」
「志保、アンタ大丈夫…って慎二!?」
「志保!?一体何が…」

…マスター二人は、途中で慎二に気が付き、志保に詰め寄っていた

が。

「…和気藹々としてる状況じゃない…セイバー、アーチャー…
来たばっかで悪いが…逃走を進言させてもらう。」

場の空気が緩みかけたが、まだ状況は続いている…
相変わらず、絶体絶命って状況が、な…

川を睨みながら、そんなことを言う俺に、凛が反論した。

「…セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー…それにミミックが揃っている、この状況で?
このまま倒せないの?」

「気は進まないが、ミミックに賛成だ…」
「一度、体勢を立て直さなければ…」

だが、それを否定するのはランサーとライダー。
そして…

「一一一誰が、逃げることを許可したか…!」

川の中から、あの金色のサーヴァントが上がってきた。
全身ずぶ濡れで、鎧も胸の中心部にチョコボの足跡のような窪みがついている。
その姿に“威厳”は無いが…異常なまでの“威圧”を感じる。

「やはり貴様か…“アーチャー”!!」

そして、その姿にいち早く反応したのはセイバー…

「…久しいな、セイバー…本来ならば、この場で婚姻を結びたいところだが…
　このような姿では、流石に興が乗らぬ…！！
　我が再会を冒涜した罪は重いぞ、雑種！！」

やはり顔見知りらしく、反応する“英雄王”。
だが、再会がどうのよりも、俺を睨んでくる…
鎧を傷つけられ、逆鱗に触れた、ってところだろう…

奴の後ろの空間が歪み、無数の宝具が顔を出す…

「な、何よ、あれ…
　アレ、全部宝具だっての…？」

その数とプレッシャーに驚愕する凛。

「くっ…宝具の数は相変わらず、か…」

そして、額に汗を浮かべるセイバー。

…気持ちはわかる。
はっきり言おう、“反則だ”と…

…そうだ、そういえば、まだアイツの“真名”をばらしてない…
一応、教えておくか…

「そういや、まだ…話の途中だったよな…？
　…アイツの真名は…古代メソポタミアの…」

「ほう…？貴様、我の名を知りながら足蹴にしたというのか…？
その度胸に免じ、我が名を告げるまで存在を許してやろう。」

俺の言葉を遮るように、奴が言葉を紡ぐ。

…まぁいい、若干の時間的猶予が貰えたとでも思おう。

「…都市国家、ウルクに実在したとされる王…
人類最古の王…ギルガメッシュ…だろう？

…嘗て、その王は世界の全てを手中に収めたという…
お前の、その大量の宝具も…その時代の宝…
つまり、ありとあらゆる宝具の“原典”を所持しているってこと…か？」

…ココが言っていた情報だと、つまりはこういうことだろう。

「な…何よ、ソレ…反則じゃない…」
「チッ…そういうことかよ…」
「ハルペーを所持していたのは、そういう訳、でしたか…」

凛は驚愕し、ライダーとランサーは納得したようだ。

…クーフーリンにカラドボルグ…こういう風に、英雄の“天敵”と言える宝具をカウンターで出せるっていうのはそれだけで反則だ。

「フン…ソレを知りながら我を足蹴にした罪…死を持って償え…
――“王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）”」

空間の歪みから射出される宝具。

それは赤い残光を残す魔弾となり、俺達に降り注ぐ。

「ッ！！“投影、開始（トレース・オン）”！！」

…ソレに、最も早く反応したのはアーチャー。
俺達の前に、岩の塊のような斧剣…バーサーカーの剣が突き立って、盾になっていた。

「…贋作者（フェイカー）だと…！」

ヤツの呟きと共に魔弾の雨は止む。
ギルガメッシュはアーチャーを睨む。

「…」

アーチャーは無言。
その表情は、覚悟を決めた漢の表情だった。

この斧剣を“創り出した”のはコイツだ…
この斧剣は…贋作…？

「アー…チャー？アンタ…」

呆然とする凛…
何故だ…？
今まで、アーチャーの能力を知らなかったのか…？

サーヴァント達が驚くのはわかるが…何故、マスターであるお前が…？

そう思っていたが、その驚愕の理由を、すぐに知ることとなる。

「“トレース・オン”…？」

「士郎と同じ、詠唱…！？それに、今のは…投影魔術！？」

士郎が呟き、志保が驚愕の声をあげる。

「アーチャー…普通、魔術師の詠唱は個人個人のモノよ…
それに、この精度の投影魔術を使える人間は…私の知る限り、士郎と志保しか存在しない！！」

…何！？
じゃぁ、コイツは…コイツの正体は…？

全員がアーチャーの方を向いた。
すると…アーチャーは呟き始める。

…俺は、自然と…コイツを、“観察”していた。

「―――Ｉ ａｍ ｔｈｅ ｂｏｎｅ ｏｆ ｍｙ ｓｗｏｒｄ.」
―――身体は剣で出来ている

何だ今のは…！？
脳裏に、言葉が…響く？

「消えうせろ贋作者！！」

ギルガメッシュは、先ほどまで俺に放っていた殺気の矛先をアーチャーに変え、魔弾を放つ。

しかし…アーチャーは、再び右手を前に突き出す…そして…

「――“熾天覆う七つの円冠（ロー・アイアス）”。」

そう呟き、眼前に花のような“盾”を生み出した。

そして魔弾を受けきりながら宣言する。

「…凛、今はそんなことを気にしている場合ではあるまい…セイバー、ヤツを倒すぞ！」

ヤツを倒す。

その一言が、俺達を動かした。

「わかりました…守りは任せます！！」

セイバーは、不可視の剣を構えて突き進み…

「志保、士郎…凛、慎二を護れ。俺が、お前達の盾になる！」

俺は、再びマスター達の前に立ち…

「っ…あ～もうっ！！後で全部話しなさいよ！！」

凛は、手を輝かせながら慎二の横に膝を付き…

「…ああ！

“同調、開始（トレース・オン）”！！」

士郎は、魔術回路を起動して…

「わかった…けど、簡単な盾なら剣で応用できる!!やるよ、士郎!!クロウ、良ければ使って!!!

“投影、開始”!!」

志保は、士郎と共に、剣を“投影”して、俺達の前に盾のように突き立てる…

「クッ!嬢ちゃん達を護るくらいは…」

「今の私達でも、可能ですか…」

ランサーとライダーは、俺の横に立ち、マスター達を護る姿勢になった。

そして…

「付け上がるな雑種!!!」

ギルガメッシュは、赤い…削岩機のような…剣?を取り出し、セイバーを迎え撃った。

――side out

それは、魔弾という名の暴風雨の中の戦い。

赤い残光を放つ魔弾は、絶えず降り注ぎ、その場にいる者を屠ろう

とする。

されど、その魔弾は赤い騎士の持つ花弁によって防がれ…
赤い魔槍を振るう騎士と鎖を振るう女性によって弾かれる。
さらに、自分の周囲に突き立つ贋作剣を打ちつけ、魔弾をあらぬ方向に逸らす男の姿もあった。

彼らに護られる少年少女は…
赤い服の少女は指先から、黒い呪弾を放ち…
赤い髪の兄妹は自身の眼前の男の周囲に、贋作の剣を生み出し続ける。

魔弾を放つ金色の英雄は、銀色の騎士と打ち合いを続ける。
…剣士としての技量は、銀色の騎士に軍配が上がる。
しかし、常に降り注ぐ魔弾が、その差を埋め、金色の英雄を優位に立たせている。

されど、この拮抗はいつまでも続くものではないだろう。
赤い騎士の持つ盾は、徐々にその花弁を減らしている。
鎖を振るう女性も、徐々に動きが悪くなっていく…
槍を振るう騎士は、それを庇うように動き、少しづつだが傷を負う。
赤い髪の兄妹の生み出す贋作剣の精度と、その速度が少しづつ落ちている。
…故に、それを振るう男が、魔弾を逸らしきれず徐々に傷を負う。

このままでは、間違いなく、金色の英雄の勝利が訪れる。

どれほど打ち合ったのだろうか…？

一際大きな魔弾が、銀色の騎士を襲う。
銀色の騎士はそれを避け、金色の英雄と距離を取る。

「くっ…！このままでは…」

銀色の騎士は自身の不利を悟り、額に汗を浮かべる。
それを見た金色の英雄は、不適な笑みを浮かべる。

「…仕方がありませんね…こうなれば…！」

そして、銀色の騎士は…その手に持つ、不可視の剣を開放する。

「風よ…吼え上がれ！！」

周囲に吹き荒れる暴風…“風王結界（インビジブル・エア）”の開放は、一度きりの飛び道具となり、金色の英雄を襲う。

「フン！！この程度！！！」

…しかし、暴風の鉄槌は、金色の英雄には届かない。
その眼前に出現した盾に防がれた。

しかし、銀色の騎士はその手に持つ、金色の輝きを放つ剣を構える。
そして…

「“約束された（エクス）”ーーー」

その、真名を開放しようと、振りかぶる…
それを見た金色の英雄は、その手に持つ…削岩機のような剣を構え…

「“天地乖離す（エヌマ）”――」

剣は赤い暴風を放ち、その力を解放しようとする…

「駄目だセイバー!?その剣には…!!」

その様子を見ていた、黒い男は…その手に持つ贋作剣を投げ捨てながら叫んだ。

しかし、二人は止まらない…

二人の剣は…

「――“勝利の剣（カリバー）”!!」

「――――“開闢の星（エリシュ）”!!」

その力を解放した…

金色の剣…“約束された勝利の剣”は、星に鍛えられしその力を解き放ち、極光の斬撃を放つ。

それを迎え撃つは“天地乖離す開闢の星”…赤い暴風のような、力の奔流…その力は…

瞬間的に、ぶつかり合って拮抗する…

「チィッ!――――Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ．」

それを見た瞬間、赤い騎士は自身の内面に埋没する。

最早、魔力の残りも少ない身だが…自身の持つ最強の盾を再び取り

出すために…

「“物真似師の意地（プライド・オブ・ミミック）”！！」

先ほど、贋作剣を投げ捨てた男は、その姿を、赤い騎士と同じものに変える。

…その色は、黒いが…色以外の差異は無い。

ぶつかり合っていた赤い力の奔流は…

極光を飲み込み、銀色の騎士を襲う。

「ーーー“熾天覆う七つの円冠（ロー・アイアス）”！！」

その直前で、“四枚”の花弁が盾となり、銀色の騎士を護る…

しかし、その盾も、すぐに花弁が散っていく。

「『ーーーＩ ａｍ ｔｈｅ ｂｏｎｅ ｏｆ ｍｙ ｓｗｏｒｄ.』」

盾が砕け散る前に、黒い“騎士”は、赤い騎士の“真似”をする…

そして…

「『ーーー“熾天覆う七つの円冠（ロー・アイアス）”！！』」

赤い騎士の盾が砕け散ると同時に出現する“三枚”の花弁…

黒い男…“物真似師”の能力は、他の英雄の“固有能力”を“真似”する…

しかし、赤い騎士以上に、魔力は残されていなかった。

盾自体は生み出されたが…
三枚の花弁は、力の奔流に飲まれ散っていく。

そして…力の奔流が治まった時…そこには…

「そん…な…」

全身に、多少の傷が付いた姿で膝を付く銀色の騎士がいた…
どうやら、二人がかりで張った盾は、かろうじて彼女を護る役目は果たしたようだ…

しかし、その代償は相応に重かったようだ。

「くっ…」
「ちっ…」

魔力を使い果たしたのか、膝を付く赤い騎士と黒い男…

「セイバー!?クロウ!!アーチャー!!」

それを見た、赤い髪の少女は悲鳴を上げる。

「ふむ?星が鍛えた聖剣とやらの威力を見誤っていたか…
贋作者共の盾が無ければ危うくセイバーを殺してしまうところだったな?
どうやら、貴様らにも存在の価値はあったようだな…」

対する、金色の英雄は万全の体制で佇む。

圧倒的…今の状況を表すに最も適切な言葉だろう。

敗北…金色の英雄以外全員の、脳裏を過ぎる。

護りを担当していた赤い騎士は、魔力を使いきり…
最大の攻撃手であった銀色の騎士も、最大の攻撃を破られた上、魔力を使い切った。

さらに、少年達を護っていた黒い男も魔力と体力を使い切り、膝を付き…
赤い魔槍を振るっていた騎士も、満身創痍…
鎖を振るう女性は、既に戦闘の続行は不可能だろう…

「フン…予定が狂ったが…
セイバー、お前は王である我の物となれ。」

「く…っ！」

つかつかと…金色の英雄は、銀色の騎士に歩み寄っていく。

だが…
「セイバーを…物とか、言うな！！」
その歩みに立ち塞がる少年…

銀色の騎士の主人たる彼は、己の従者を護るため、金色の英雄に立ち塞がる。

「“ーーーＩ ａｍ ｔｈｅ ｂｏｎｅ ｏｆ ｍｙ ｓｗｏｒｄ.

”！！」

一一一体は剣で出来ている…

赤い騎士の呪文を…“己を象徴する”言葉を呟き…
そして…その手に握られる黄金の剣…

銀色の騎士の持つ剣に良く似た…黄金の剣。

「シロウ！？それは…私の…！？」

…嘗て失われた黄金の剣…
王の選定の剣…“勝利すべき黄金の剣”

彼は…己の従者の記憶…そして、赤い騎士の背中から…学び取っていた。
己の力を…己の、存在を…

「オォォォォオオオ！！」

その剣が完成したと同時に走り出し、金色の英雄に切りかかる少年。

「止めろ小僧！！お前じゃ無理だ！！」

それを静止する槍の騎士の声…
しかし、少年は止まらない…

「雑種…貴様も贋作者か。
そんなに贋作が好きならば、真作を見せてやる！！」

相対する金色の英雄は、自身の後ろの空間から一振りの剣を取り出す。

その剣は…“似ていた”。

黄金の剣に…

何故なら、その剣は…“原典”

王の選定の剣の…“原典”

そして振るわれる剣…

二つの剣は打ち合うが…

ギィン、という甲高い音と共に両断される黄金の剣…

その斬撃は、そのまま少年を襲い、彼の胸を切り裂く。

「シロウ！！」

銀色の騎士は、己の主人の名を叫び…

金色の英雄は、彼を蹴り飛ばし、銀色の騎士の目の前に転がす。

「フン…真作の輝きを知れ、贋作者。」

そう言いながら、再び歩み始める金色の英雄。

そして…

「――Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ．」
――体は剣で出来ている。
赤い騎士の声が、朗々と響く…
「何っ？」
「Ｓｔｅｅｌ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｏｄｙ，　ａｎｄ　ｆｉｒｅ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｌｏｏｄ．」
血潮は鉄で　心は硝子。
金色の英雄が、赤い騎士の姿を認める。
「Ｉ　ｈａｖｅ　ｃｒｅａｔｅｄ　ｏｖｅｒ　ａ　ｔｈｏｕｓａｎｄ　ｂｌａｄｅｓ．」
幾たびの戦場を越えて不敗。
彼は、瞳を閉じて膝を付き…
「Ｕｎｋｎｏｗｎ　ｔｏ　Ｄｅａｔｈ．　Ｎｏｒ　ｋｎｏｗｎ　ｔｏ　Ｌｉｆｅ．」
ただの一度も敗走はなく、ただの一度も理解されない。
その右手を胸に当てていた…
「Ｈａｖｅ　ｗｉｔｈｓｔｏｏｄ　ｐａｉｎ　ｔｏ　ｃｒｅａｔｅ　ｍａｎｙ　ｗｅａｐｏｎｓ．」
彼の者は常に独り　剣の丘で勝利に酔う。
「貴様っ！？何故魔力が回復している！？」

魔力を使い果たしたはずの赤い騎士は、何故かその魔力をほぼ全快していた。

「Ｙｅｔ，ｔｈｏｓｅ ｈａｎｄｓ ｗｉｌｌ ｎｅｖｅｒ ｈｏｌｄ ａｎｙｔｈｉｎｇ.」

故に、その生涯に意味はなく。

金色の英雄の質問を無視し、言葉を紡ぎ続ける赤い騎士。

その足元には、空のビンが一つ転がっていた…

金色の英雄が知る由も無いがそのビンの中身は“幻想の道具”…

“エーテル”と呼ばれる魔力回復薬。

嘗て、魔力切れを起こした物真似師の魔力を全快にした、回復薬。

赤い騎士の真横で、してやったり、といった笑みを浮かべる黒い男。

そして…

「アーチャー!!＜切り札を切りなさい!!＞」

彼の主人の令呪による命令…

赤い騎士は、それに応えるように、最後の一文を告げる…

己の宝具を、解放した…！

「Ｓｏ ａｓ Ｉ ｐｒａｙ，ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ ｂｌａｄｅ ｗｏｒｋｓ.」

その体は、きっと剣で出来ていた。

瞬間、熱を持たない赤い炎が走る。

赤い炎が走り抜けた先に、彼の世界があった…

どこまでも続く、砂塵吹き荒む荒野…

天に浮かぶ、軋む歯車…

そして、打ち捨てられたように荒野に突き立つ無数の剣、剣、剣…！

「う、そ…固有…結界？」

命令した、彼の主人はその光景を見て呆然と呟く。

固有結界…“リアリティ・マーブル”

術者の心象風景を展開し、現実を侵食する大禁呪。
魔術師の到達点とされる、“最も魔法に近い魔術”

この、無数の剣の突き立つ荒野は…赤い騎士の心象世界。

彼の真名は…“エミヤ”
ただ、己を剣とした男の、辿り着いた一つの到達点…

ここは、生涯を剣とした男の唯一の武器…

“無限の剣製（アンリミテッド・ブレイド・ワークス）”

その主は告げる…

「選手交代だ、セイバー…」

静かに、だが力強く…

「贋作者ァァァア！！」

金色の英雄は、激昂し、叫ぶ…

何故なら、ここにあるものは全てが贋作…

全ての原典（オリジナル）を所有する彼にとって、容認できる世界ではないのだから…

されど、彼の怒りを受けながらも、静かに流し、さらに告げる…

「確かに、ここにある物は全てが贋作…

だが、それがどうした？贋作が真作に勝てない等という道理がどこにある？」

「贋作者…！！真作が存在する以上、贋作の存在など認めん！！」

静かに告げる赤い騎士。

それに更に激昂する金色の英雄。

「真贋入り混じってこその現世だと思うのだがな…

まぁ良い、そうまで言うのならば試してみるか？その真作を持って贋作を砕くが良い…

…その真作を、贋作に堕して見せよう、往くぞ英雄王！恐れずして、掛かって来い！！」

「調子に乗るな贋作者ァァァァァァァ！！」

そして始まる無限の剣舞（アンリミテッド・ブレイド・ダンス）…

金色の英雄が放つ魔弾を、赤い騎士の世界は迎撃する。

無尽蔵の武具を、無限の剣が迎え撃つ…！！

真作（オリジナル）を迎え撃つ贋作（レプリカ）…

真作（オリジナル）と相殺する、贋作（レプリカ）…

赤い騎士は、己の世界を駆け抜け、金色の英雄に迫る。

金色の英雄は、赤い騎士を迎え撃つ…

金色の英雄が、魔剣を取り出すのなら、赤い騎士はまったく同じ物を荒野より引き抜き、叩きつける。

金色の英雄が己の蔵より宝を取り出す必要があるのなら、赤い騎士は“既に在る”物を引き抜くだけ…

その、僅かな時間差が全てを分ける。

…贋作が、真作を砕く。

その姿を、見つめる者達がいる。

「アイツ…これが、アイツの…世界…？

こんな…寂しい場所が…？」

…赤い騎士の主は、呆然と呟く。
その瞳に、涙を浮かべながら…

「…体は、剣で…」

その荒野を見つめ、ソレを“理解”していく赤い髪の少女。
…そこには、己の“到達点”があったから…

「…セイギノミカタ…か…アーチャー…いや…“シロウ”…」

同じように“理解”を深めていく、赤い髪の少女の従者…物真似師。
彼は腰に付けていた帽子を眼深に被り、その表情を隠している…

「これが…アイツの宝具か…
随分と、辛気臭い場所だぜ…」

赤い槍を地に突き刺した青い騎士は、どこか嫌そうに呟いて…

「…」

紫の女性は、ただ無言で膝を付く…

「これは…一体…
それより、シロウ…！！」

銀色の騎士は、驚愕しながらも己の主人へと近づいて…

「…無限の…剣製…」

彼女の主人は、無限の剣に魅入る…

己の怪我すらも忘れて…

ただ、赤い騎士は駆け抜ける…
金色の英雄に肉薄し、その身を断とうと…

金色の英雄は、彼に押され徐々に後退する…

…このまま押し切れば、彼の勝利であろう。
金色の英雄の絶対優位は崩れたのだ。

…ただ、一点を除いて…！

「頭に乗るな贋作者ァァァァァァァ！！！！」

金色の英雄は、己の持つ宝を…一気に、一点に目掛け射出する。

「なにっ！？」

赤い騎士は、同量の武具でそれを迎撃する…

…だが、そのために、彼は足を止めた…止めてしまった。

その隙を突き、金色の英雄は一気に後退する。
…友の名を与えた鎖によって。

「この下らぬ世界ごと消し飛ぶがいい！！」

そして、その手には…あの、赤い削岩機の如き剣…世界を切り裂く魔剣…

乖離剣・エア…唯一、この“世界”に存在しない…“出来ない”剣が握られていた。

そして、乖離剣は唸りを上げる…この“世界”を切り裂くために。

「“天地乖離す（エヌマ）”――！！！」

赤い騎士は、その様を見て…咄嗟に対抗する術を模索する…しかし、金色の英雄の放ち続ける魔弾が、それを阻む…

「う…ぉおおおおおおあああああ！！！！」

今まさに、乖離剣の力が解き放たれる時…一人の少年が、駆け出す…

「なっ！？小僧、貴様何を…！！」

「シロウ！？」

先ほど、その身を切られた少年は、赤い騎士と銀色の騎士の驚愕を無視し、赤い騎士の前に立つ…

「志保！？待て…っ！！」

それは、少年の妹も同じで、己の従者の制止を聞かず、赤い騎士の前に立つ…！！

「――“開闢の星（エリシュ）”！！！」

その瞬間、解き放たれる力の奔流…

それは、全てを飲み込もうとして…

「――I am the bone of my sword.！！！」

「――体は、剣で、出来て、いるっ！！！」

「「――“全て遠き理想郷（アヴァロン）”！！！」」

――二人の手に生み出された“鞘”に、防がれた。

「！？それは…聖剣の鞘！？何故、そこに…！！」

…嘗て、失われた…聖剣の鞘は…時を越え、今、その主の眼前に現れた。

「「アアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」」

」

…何故か、それは…二つ、存在したが。

二人の魔力を食らい、鞘は…赤い力の奔流を防ぎきっている。

そして、しばし呆然とした銀色の騎士は、己の主人の下へと走る…

その手に、“聖剣”を握り締め…

「シロウ！！！」

銀色の騎士は、己の主人の眼前に存在する“鞘”に、“聖剣”を収める。

…その瞬間。

“聖剣”は…長き時を越え…“鞘”に収まった…

そして“聖剣”より放たれる光は…

赤い力の奔流を、押し返した…！！

「な、なにぃ！！！？ぐ、ぐぉぉぉぉ……」

金色の英雄は…その奔流に押し流される…

その余波で…赤い騎士の“世界”も消え…元の川沿いの公園に戻る。

力の奔流が過ぎ去った時…
金色の英雄は、健在だった…

左手に、盾の持ち手を持って…
黄金の鎧の胸部と左腕部が砕け散り、憤怒の表情を浮かべながら…

「ぐ…ヌゥ…！！
今は貴様らが強い…！！」

そして、苦悶の声を漏らした上で…

その場から、離れた…

－－－ｓｉｄｅクロウ

ヤツは、どうやら逃げ去ったようだ…

この状況で、逃げ去るギルガメッシュを追おう、と言うヤツは存在しないだろう…

志保と、士郎の取り出した“宝具”によってヤツを追い払えたが…

この場で、戦闘が可能なサーヴァントは…かろうじて、ランサー位だな…

「クッハァ…キッツ…」

その場で、膝を付く俺…

…魔力、殆ど空になっちまったなぁ…

ＭＰで表示すると…

俺の最大値が大体１００として…現状は１１ってとこだな…

チョコボキックで消費が３。

物真似師の意地＋熾天覆う七つの円冠（花弁三枚）で８５ってところか…？

で、俺の場合残量が一桁に入ると粒子化して散る、と…

…霊体化しとくか…

そう思い、霊体化しようとして…

＜ドサドサッ…＞

「シロウ！？シホ！！」

…志保と、士郎が倒れた。

「っ…志保！！」

急いで、俺は志保に駆け寄る。

そして、様子を確認すると…

「すぅ…すぅ…」

…これは…

「寝てるのかよ…心配させやがって…」

ただ寝てるだけだった。
…いや、これは気絶と言ったほうが良いのか？
…どっちでも構わないか。
「…シロウも、同じようですね…」
と、気が抜けたところに、セイバーの呟きが聞えた。
…士郎もか…って…
「士郎…さっき切られたような…」
こう…ザックリと。
「…治ってますね…おそらく、“鞘”の能力でしょう…」
と、どうやら治っている様子。
…あの“鞘”は、どうやら相当な力を持っているようだ。
…エクスカリバーの鞘、か…所有者を不老不死にしたりといった伝承があるな。
一瞬だったが、あれは…“本物”だった。
どういうことだ？
…それに…志保が出したほうは…“何か”が違ったような…？
「シロウ…貴方が、私の…鞘だったのですね…」

まぁいいや…

…それより、やっぱり…

お前…“アーサー王”だったんだな？

…ま、“サー・ランスロット”の一件で予想は付いてたが…

…に、しても…

「アーチャー…アンタ…」

「…」

…俺の視界の端で、凛に詰め寄られるアーチャー。

…正体云々だったら、あっちのほうが衝撃的だったな…

…あの“世界”を“鑑定”しちまったからなぁ…

ま、何はともあれ、一人も欠けずに生き延びた、が…

「お～い、凛！アーチャーが気になるのはよ～くわかるが…

慎二、はやく病院に連れてってやらんとまずいぞ？

…とりあえず、帰ろうぜ？俺も、もう回復薬は完全に使い切ったからな？」

…慎二は、とりあえずは治ってるが…内臓関係が不安だ。

早く病院につれてってやらないと不味いし…

「俺も…魔力切れ、だ…悪いんだが、霊体化させて貰うぜ？

…ま、バイクとかは回収しとくが…車出しとく、後はよろ～…電

話も付いてるから…」

…なるべく、消費を抑えないと、な…
ってな訳で、俺のバイクや折れたバスターソード、空のビン（エーテル）を回収しつつ、車を出しておく。

…騎乗のスキルがあるなら、ライダーかセイバーで運転可能だろ…
後はアーチャーも使えるんじゃないか？
完全に定員オーバーだろうけど…正直、シラネ…

「っちょ！？ってアンタ…殆ど魔力が…大丈夫なわけ！？」

と、俺の行動を見た凛が、俺の魔力が一桁寸前なのに気が付いたらしく、心配そうな表情を浮かべる。

…魔力切れなのは、俺だけじゃないんだがな…

「…存在する位なら、霊体化で、という条件で…後、二日ってところかねぇ…？
実体化だと…一日くらいかな…ま、俺よりもセイバーの方が不味そうだがね。」

そう言い残し、俺は霊体化する。

…俺の場合、魔力…あえてＭＰで言うが、一桁になると一気に減るらしい。
…だから、前回のバーサーカー戦で粒子化しかけたんだが…（召喚された当初は全快じゃなかったようだ）

…“幻想の道具欄”の中身の食材を食べれば…ＭＰにして２～３は

回復出来るだろうから、もうちょっとはなんとかなるか？

はぁ…たった一度の戦闘でここまでやられるとは…
強すぎだろ、ギルガメッシュ…

霊体化した俺に向かって、凛がなにやら叫んでいたが…
ライダーに宥められ、どうやら落ち着いたらしく、俺が出した車に
慎二や志保、士郎を運び込んだ。
…ランサーも、しっかり働かされていたが…皆を車に運び込んだ後、
跳び去った。

…どうやら、運転手はライダーらしい。
俺は霊体化したまま、車の上に乗り、寝そべった。

少しして、走り出す車…この進行方向は…新都側だな…
病院に向かうんだろう。

――そうして、英雄王ギルガメッシュとの戦いは終わった。
…一応、誰も欠けずに切り抜けたが…

代償が重かった…

セイバー：魔力切れ、行動が制限される…このままでは消滅は免れ
ない。
アーチャー：真名が判明…プラス、魔力を大分消費…ま、コイツは
大した事じゃないが…令呪を一つ消費。
ランサー：ダメージ大。

ライダー：ダメージ大、プラス慎二が重体。
キャスター：拠点を失い、ダメージ中。
アサシン：同上。

俺：魔力ほぼ空。回復薬全消費。体力消費…これはどうでもいいや。

…コイツは、ヤバイな…はぁ…

“第十五話／「辿り着く者、そして…」”（後書き）

まず…はじめに言い訳させてください。
“ギル様の火力はサーヴァント五体分＋αなんです！”

まぁそれはともかく…アンケート結果発表！

結果は…“英雄女王、降臨決定！”

感想をくださった皆様！
そしてアンケートに協力してくださった（。Д。）様！
本当にありがとうございます！

“熾天覆う七つの円冠”
“熾天覆う七つの円環”

…自分的には“冠”の方を採用させていただきます。
ご了承を。

“第十六話／「…後悔を振り切って。」”（前書き）

お久しぶりです！

復活！

まさか一話書き上げるのにここまで時間がかかるとは…

今回は…十五禁ですね。

…多分（汗）

“第十六話／「…後悔を振り切って。」”

――“その体は、いつか剣になっていた。”

“第十六話／「…後悔を振り切って。」”

――ｓｉｄｅ志保

――そこは、無数の剣の打ち捨てられた丘…

無限の剣の廃棄場…

そんな風にすら思える場所に、私はいた…

虚空に軋む無数の歯車…

それは、火の粉を撒き散らして回転を続け…

吹き荒む赤い砂塵…

それは、刃の間をただ空しく通り抜けていた…

そんな、何も無い…ただ剣と、天に軋む歯車だけがある丘で…

私は立っていた…

――ここは…間違いない…あの、赤い騎士…アーチャーの“セカイ”

そして…いつか、“私達”が辿り着く場所…

―――無限の剣製…アンリミテッド・ブレイド・ワークス…

心象風景…私の心にある世界…
そして、士郎の中にもある世界…

…士郎の魔術を見て…
そしてアーチャーの魔術を見て、流石に異常性に気が付いた。

…“同じ”なのだ。
“エミヤシホ”の心象風景と、“エミヤシロウ”の心象風景が。

…つまり、“起源”とする物が同じ…
…いくら私が半人前以下のへっぽこ魔術使いでも、これが異常だって事はわかる。

でも…この異常の示す解答…
多分、“コレ”なんだろう…

そうなんでしょう？

「英霊、エミヤ…ううん、“私達の到達点”…」

そう…眼前で、私に背を向けて佇む赤い背中に声をかけた。

―――“私”は“士郎”で、“士郎”は“私”…
それが、私の解答…

…以前、切嗣に訊いた事がある。
“何故、私を引き取ったの？”って…

そうしたら…

『うん…実はね？士郎を見つけたあの日…志保はいきなり、空から降ってきて、士郎の上に折り重なったんだよ。
…で、なんか、運命っていうのかな…感じちゃってね。』

って…
勿論、私はソレを信じてはいなかったけど…

だって、あの火災の中で、私を抱き上げてくれた…切嗣の笑顔を、ちゃんと覚えていたから。

…だけど、切嗣はそれを“知らなくて”。
…けれど、その光景を…士郎は知っていた…

…多分、私は…

「私は…平行世界の…“士郎が女だったら…”そんな世界の“エミヤ”なんでしょ？」

理由はわからないけれど…私は、世界を超えてしまった…クロウ風に言うと、“イレギュラー”な存在。

…そう、私は結論を出した。

そして…アーチャーの正体は…“英霊に至った、衛宮士郎”。

…あの世界を見れば、理解が出来た…

そして、この“世界”は…私の中にもあった。

だったら…この答えは、きっと間違っていないのだろう。

…目の前の背中は、何も言わない。

ただ、佇んで…

――I am the bone of my sword.

Steel is my body, and fire is my blood.

I have created over a thousand blades.

Unknown to Death. Nor known to Life.

Have withstood pain to create many weapons.

Yet, those hands will never hold anything.

So as I pray, unlimited blade works.

そう…呟いた…
意味は、わかる…
だから…私は…

「――体は剣で出来ている。」

“私”を象徴する詩を紡ごうとして…

「血潮は鉄で『…お前は、正確にはオレではない…お前には、もう一つ…到達点がある…』…え？」

――遮られた。
どういう意味か、を訊こうとして…

“――体は剣で出来ている。”

――突然、女性の声が響いた。

“血潮は鉄で　心は硝子。”

――それは、どこか寂しそうで…

“幾たびの戦場を彷徨い歩く。”

――まるで、涙を堪える様な声だった…

“ただの一度も瞳を逸らさず、”

――そして、その声は…どこか私に似ていて…

“ただの一度も正視出来ない。”

――どこまでも、響くような声だった。

“夢見る愚者は久遠に独り　剣の道で孤独に嘆く。”

――その声は、私の後ろから響いてきていた。

“故に、生涯は意味を失くし。”

――私は、振り向いた…

“その体は、いつか剣になっていた。”

――振り向いた先は、“違う世界”だった…

世界を区切る炎は燻り…

この世界を、煙で霞ませ…

天の歯車は、所々欠け、がきん、がきんと音をたて…

ひらひら、ぱらぱらと火花を散らせ…

打ち捨てられた剣は、墓標のようで…
ただ、それでも刃を天に向け、二本の列となり…
それらは――永久に続く、剣の道を成していた。

その道に…“彼女”は佇んでいた。

――限りなく、白に近い銀色の髪を尖らせて…
浅黒い肌を、真紅のコートで隠した女性…

真紅のコートは、時折吹き荒む風にはためき…
真っ黒な、ズボンとブーツを覗かせていた。

その右手に、くたびれた黒い帽子を持った彼女は…
ただ、私に背を向けていた…

彼女の持つ、帽子は…“どこかで見た”帽子だった…
そのコートも…何度か“着た”物によく似ていた。

――そう、それは…私のサーヴァントの持ち物…

「貴女は…まさか…？」

驚いて、声をかけようとして…

『…こちらは、駄目だ…』

…彼女の言葉に、遮られた。

『ここは…“ｕｎ－ｆｉｎｉｓ　ｂｌａｄｅ　ｒｏａｄ”は間違った場所…

“ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｂｌａｄｅ　ｗｏｒｋｓ”が、歪んだ場所だ…』

ゆっくりと振り返りながら紡がれる言葉を、聞き逃してはならないと思った。

――そう、心の底から、思った。

『後悔を残す、選択はするな…』

振り返った、彼女の顔は…やはり、どこか私に似ていた…

『でないと…大事なモノを全部失くして…』

…その表情には、深い後悔が浮かんでいた。

『この…終焉（オワリ）無き剣の道に迷い込む事になる。』

彼女は、今にも泣きそうな顔で…私に“警告”を発していた。

『…今なら、まだ間に合う筈だ…』

そう言いながら…彼女は、右手に持つ帽子を被る…

サイズが合っていない為か…顔が隠れる。

『さぁ…早く眼を覚ませ…手遅れになる前に…』

――直後、世界が急激に薄れてゆく。

“ユメ”が…覚める…

『お前は、己（オレ）には…己のような、戯けになるな…』

――待って…！まだ、訊きたいことが…！！

『そして出来るなら…彼に…“ありがとう”と…伝えてくれ…』

――ユメから覚める瞬間…私は、“彼女”の顔を見た。
…黒い帽子に阻まれた表情はわからなかった。
けれど…その頬に…一筋の、光が見えた…

…
……
……
……
……
……
……
……
……
……
……
……
……
……
……
……
……
……

「…ん……」

…ここは…？

ユメから覚めた私が眼にしたのは…
…見慣れた、私の部屋だった。

時刻は…９：２１…
…随分、長く眠っていたのか…

…？セイバーがいないな…
そう思った瞬間、声が掛かった。

「…起きたんだ、志保…」

声のした方を向くと…そこには、白いローブ姿の女の子…
人間状態のココが、座っていた。

「ココ…？私は、なんでここに…？」

…私の記憶は、無我夢中で…投影魔術を行ったところで、途切れている。

そして…あのユメを見た。

…途中経過が、全然わからない…

「…ふぅ…軽く、状況だけ説明してあげるよ…」

私の混乱を察したのか、ココは、若干難しい顔で説明をしてくれた。

――あの後の遠坂達の説明によると…

・宝具の投影を行った私と士郎は、気絶。
・慎二の様態が思わしくない為、一度病院へと向かった。
・慎二を入院させた後、衛宮邸に帰宅（ここまで、クロウの車をライダーが運転したらしい）。
・気絶…というか爆睡していた私と士郎は、それぞれのサーヴァントによって部屋に運ばれた。
・セイバーは、今度ばかりは士郎の横で睡眠（今も眠ったままだそうだ）。
・現状、葛木先生とキャスターが離れの一室を使用中。
・アサシンは、家の門番をしてくれているらしい。
・ランサーは、流石にダメージが溜まっているらしく、療養中だそうだ。
・遠坂は、今から三十分前に起き出したらしく、起きたら居間に来るように伝言を残していった。
・アーチャーは、ココは姿を見ていないらしい。
・ライダーは、桜の傍にいるらしい。

「…と、こんな感じ。」

ふぅ、と息を吐きながら言葉を句切った。

そっか…って…ちょっと待って!?

「ねぇ…クロウは…？クロウはどうなったの…!?」

今の説明に、クロウの事が含まれてなかった…
どういうことか、とココに詰め寄ろうとしたら…

「…相棒なら、後ろにいるでしょ…魔力が殆ど無い状態で霊体化してるから影が薄いかもしれないけど…」

と、若干呆れながら言われてしまった。

…言われて、振り返ると…

『……』

帽子で顔を隠し、コートを毛布代わりにして、霊体化したまま眠ってる…物凄く薄くなってるクロウがいた。

…その姿には…存在感が、まったく感じられなくて…
…まるで、死んでいるようにさえ感じてしまった。

「ク…ロウ？大丈、夫…なの…？」

その姿を見て…思わず呟いていた…

「…正直、ヤバイよ…本人曰く、このままだと、三日間存在出来るかどうか…だってさ。
…少なくとも、戦闘は不可能だって…」

その呟きが聞えたのか、ココが答えてくれた。

その、あまりの状況に、一気に…自分の血の気が引いたのを感じた。

「う…そ…」

「…嘘なんか吐いて、どうするってのさ…
…どうにかしたいんなら、早く凛さんの所に行ってよ。
一応、なんとかする方法を考えてくれたみたいだし…（ボソッ…
ま、想像は付くんだけど、ね…）」

ココが…何故か、心底微妙な表情で私を見つめながらそう言った。
…最後、小声で呟いていた、一応、聞えたけど…
そんなことより、なんとかなるの!?

「ほ、本当!?助けられるの!?」

「さぁね!ボクがそんなこと知るわけないでしょ!!良いからとっとと行って来い!!
ボクはこれでもかなり気が立ってるんだ!!」

ココに詳しく聞こうとしたら…結構な剣幕で怒られた。
…そして気が付いた…ココの眼には、涙が溜まっていて…今にも、泣き出しそうだった。

そうだよね…ココは、クロウの事を大事に想っている。
…ちょっと見れば、それくらいは気が付く。

…それに…この、人間状態を維持してる段階で、相当…“何かしらの感情”が爆発してる状態っていう証明…
“トランス”は、何かしらの強い感情が無ければ発動しないって、クロウが言ってたし、ね…

「ボロボロで帰って来て!!今にも消えそうな状態で!!!心配ば

っかりかけて！！！！」

ココは、泣きそうな声で叫んでいた…

「…そう…だな…ゴメンな、相棒…」

すると…後ろから、若干くぐもった声が聞えてきた。

振り向くと…さっきの体勢のまま、クロウが実体化していた。

「っクロウ！？」

「久郎…」

どうやら、起こしてしまったようだ。

クロウは、その体勢のまま、少しだけ話してくれた…

「…心配かけた、ってのは…素直にゴメン。

…けど、後悔はしてねぇ…それと…志保？気にすんな。

…こんな状況だけど…一応、ベターな結果だ。

…それに、俺はまだなんとかなりそうなんだろ？

どうにか出来るのはお前なんだし…責任がどうのって思ってるなら、凛の話を聞いて…どうするか、お前が決めてくれ。」

その声色には、少しの後悔も無くて…どこか、聞いているこっちを安心させてくれるような話し方だった。

「…基本的に、お前の“結論”に従うさ。

…ま、あんまりな内容だと…その手の令呪を使って貰うことになるかも知れないけど、な…」

そうとだけ言って…クロウは、また霊体化して、眠ってしまったよ

うだ。

「…だってさ、早く行ったら？時間切れになるかもしれないし、さ…
…ボクは、セイバーさんの様子を看て…それから行くから。」

ココは、何か“やれやれ”とでも言いそうな表情で部屋を出て行った。

…私も、行こう…

……

……

……

……

「…着たわね…」

居間に着いた私の目の前には…遠坂が待ち構えていた。
士郎も、私より早く起きていたようで定位置に着いていた。

「起きたのか、志保…」
「待ってたわよ。
さて…二人とも、自分のサーヴァントの状態、ココから聞いたわよね？」

士郎が、私に声をかけてくるが、それを遮るように遠坂が確認の言葉をかけてくる。

…私達は、ただ首を縦に振った。

そうしたら、遠坂は厳しい表情で口を開いた。

「そう…なら、あの二人をどうするか…アンタ達に選んで貰うことになるわ。
…昨晩、アーチャーとキャスターの二人に相談した結果…一応、どうにかする手段に検討がついたわ。」

「本当か！？」

…遠坂は、ちゃんと解決法を作ってくれていたようだ。
それを聞き、士郎は歓喜の声を上げた。
けど、私は…

「遠坂…“一応”って…？」

遠坂の一言が気になった。
…何か、とても重要な内容が含まれているような気がして…

なので、遠坂に質問をしてみた。
すると…難しい顔をしながら…遠坂は口を開いた。

「…ふぅ…志保は気が付いたのね…？
…その方法に、結構な問題があって、ね…」

「「問題…？」」

怪訝な顔をした士郎…多分、私も同じだろうけど。
そんな表情をした私達に…“手段”を教えてくれた…

「…アンタ達の魔術回路を…それぞれのサーヴァントに移植するの

よ。」

そう…心底嫌そうな表情で。

「魔術回路を…？」

「移植…？」

その意味を問おうとして…遠坂は、説明を始めてくれた。

「…本来、サーヴァントには自力で魔力を生成できるだけの…“魔力炉心”とでも言えば良いのかしら？

…まぁ、そんな器官を持っているの。

どう考えても、サーヴァントのほうがマスターである私達よりも魔力が多いじゃない？

…私達の魔力は、その“炉”に火を灯すのに使用されるの。」

…つまり、それって…

「…エンジンの、スパークプラグに電気を流す…ってこと？」

「…まぁ、そんなかんじね…

で、アンタ達の魔術回路を直接…その“炉”と直結させれば、自力で魔力が生成できるようになるわ。」

…なるほど、ね…

発電に必要な起電力を、発生させるための器官を内臓するのか…

それに、納得しかけて…

直後に言われた言葉に、衝撃を受けることになった。

「…ただし…アンタ達は、魔術師としては“終わる”けど、ね…
下手すれば、体に深刻な障害も残りかねないわ。」

そう…深刻な顔で言われた…

「遠坂…それって…」
「…どういう、意味…？」

「…アーチャーに聞いたわよ…アンタ達の魔術回路は…固有結界“無限の剣製”に特化したモノ…
それが欠けるってことは、アンタ達の“世界”は、顕現できなくなる…
つまり、魔術師の到達点を失うってコト…
しかも…アンタ達の魔術回路は…神経“が”魔術回路になってるところがあるらしいわ…
それを無くすってことは…体が、動かなくなる可能性も否定できないわ。」

私達にむけて告げられた内容は…
とても衝撃的で…

…とても、残酷なモノだった…

「…どう？それでも…やる？」

確認を取ってくる遠坂に…私達は、何も言えなかった…

一一一魔術を、失う…

それは…この“身”に残る…切嗣との絆…思い出。

それを、捨て去るということ…
その内容に…
私は…即座に、返事を出来なかった…

――ｓｉｄｅココ

…志保の部屋を出たボクは、セイバーの眠る士郎の部屋に来ていた。
…よく、眠っている。
…状況は、芳しくない。
現状は…ちょうど、“原作”での…ライダー戦の直後のような状態…
“レアルタ・ヌア”では、この後…セイバーに士郎の魔術回路を移植して、なんとかなったけど…
“ミミック”…久郎は、どうなんだろう…？
こんな状況になってしまうと…不安が、頭から離れてくれない。
…それに、何か…重要な見落としをしている気がする。

「…セイバー、起きてるんだろう？」

…と、突然部屋を区切る襖が開き、実体化した久郎が入ってきた。

「って何起きてるのさ相棒！？眠ってないと…」
「わかってるさ…言うこと言ったら、戻る…」

突然のことに驚き…久郎に部屋に戻るように促したけど…
どうやら、セイバーに何かしらの用事があるらしい。

「セイバー…このままじゃ…俺は“まず”消滅の回避は不可能っぽいし…
一応、お前に言っておきたいことがあってな…」

…まるで、自分の事は諦めたかのように、眠ったままのセイバーに話しかけていた。

「前に、手紙で伝えたコトなんだが…ちゃんと、士郎と話し合ったか？
…まぁ、そんな暇は今の今まで無かったんだけどさ…
…“ある意味で”丁度良い機会かもしれないし…この後、士郎がどんな“決意”をしてくるかわからんけど…
とりあえず、士郎と一度、話し合え…せめて、後悔は無いように、な？」

そう言い残し…久郎は部屋を出ていこうとして…

「…ミミック…貴方は、諦めたのですか？」

…セイバーに、呼び止められた。
見ると、セイバーは上半身を起こして、久郎の背中を見据えていた。

「ん…諦めた、のとはちょっと違うかな…？
ただ…天秤が、妙な方向に傾いたってだけだ。」

呼び止められた久郎は…そんなことを言っていた。

天秤…？
妙な方向…？

「どういう意味ですか？」

ボクが口を開く前に、セイバーが久郎に質問をしていた。

「…ま、俺も、これでも…サーヴァントだし、な…“英霊”って奴らしくしてみようかねぇ、ってだけ。」

そう、軽〜く言って、部屋を出ようとして…

「貴方は…シホやリンを…信じていないのですか…？」

…再び、セイバーに呼び止められた。
すると、今度は振り向いて…

「…そうじゃない。
…客観的に考えてみて、俺はお前達とは“存在”が違いすぎて、凛の当てが“絶対に外れる”って予想が立ったんだよ。」

…そう、真面目な表情で告げた。
そしてそのまま…

「二度も三度も、他のサーヴァントの“真似”をすれば、体の構造の違いくらい理解するさ。
…お前の場合…体内の…魔力炉心？を起動させれば自力で魔力が作れるかもしれないけど…

―――俺に、そんなモノは無い。
…一応、魔力タンクのようなモノと、魔術回路っぽいナニカは存在するけど、さ…
供給は受けられても、自分で生み出す能力は無いんだよ…
…まぁ、凛の話を聞いて、志保がどういった結論を出すかにも寄るし…
ただ“言いそびれ”んのは御免だ、と思って来ただけだ。」
と、言うだけ言って今度こそ部屋を後にした。
…ボクは、というと…
―――自分の持ってた、不安感の正体を知った…
“レアルタ・ヌア”の方法じゃ、駄目…!?
どう…しよう…!?
「あぁ…そんな訳で相棒。
…今の情報、凛に伝えといてくれるか?
完璧に言い忘れてたんだ…本気で“ソレ”を当てにしてるかも知れないし…」
と、直後、部屋の外からそんな声が聞えてきた。
「っ…もう…バカ!!」
それを聞いた瞬間、ボクは部屋を飛び出していた。
目指すは居間…三人のマスター達のいる場所へ…!!

ーーーとりあえず、久郎！後で蹴り飛ばす！！！

ーーーｓｉｄｅ志保

「…で？決まったかしら…？」

考え込んでいた私達に…遠坂が確認を取ってくる。

…士郎は、目を硬く閉じて…何かの決意を固めようとしていた。

ーーー私は…

…思い返す。

クロウを召喚してからの事を。

…彼の、姿を…

今日までの日々を。

…クロウの、言葉を…

ーーー私は…

ーーーーー私は…！

その時…

「ちょっと待ったぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

…突然、居間にココが乱入してきた。

「「「ココ！？」」」

突然乱入してきたココに、私達は驚いて…

「…凛さん！！どういう、方法を、思いついたの！？」

いきなり、遠坂に詰め寄った。

遠坂は、眼を丸くして…

若干、テンパりながら答えた。

「え！？…ふ、二人の魔術回路を、それぞれのサーヴァントに「移植するの！？」…え、ええ…」

…ただ、ココはその答えを知っていたかのように言葉を紡ぐ。

一体、どうしたのだろうか？相当焦っているようだけど…

「他は！？」

「へ！？ほ、他って…」

「他の方法は無いのかって訊いてるの！！」

かなりの剣幕で詰め寄り続けるココ。

「お、落ち着けって…どうしたんだよココ！？」

…そんなココを、士郎が宥めようとして…

「――その方法じゃ、久郎は助からないんだよ!!」

――ココの叫びに、その場にいた私達は…完全に固まった。

…え?

「あの、バカ…体に、魔力炉心なんか無いって言ってたんだよぅ…」

弱弱しく…ココは、遠坂の肩をつかんだまま、呟いた…

「ちょ、ど、どういうこと!?」

一番早く遠坂は復活して、ココに話を聞いていた…

「久郎は…自力で、魔力を生み出す能力が無いんだって、さ…
あの、大バカ…完全に、失念してたらしいんだ…
どうにか、ならないかなぁ…?」

ココは、そう言って…遠坂の肩から手を離し、その場に座り込んだ。

「遠坂…それじゃあ、アイツは…」

士郎が、遠坂に声をかける…
私は…何も、言えないでいて…

「っ…マズイわね…それは予想外…っちゃ~…しまった…アイツがイレギュラーだっての完全に忘れてた…
他には何か言ってた?」

「ううん…若干、諦めが入ってたみたいだけど…」

「……！？」

「……！……」

――目の前の会話を、ただ呆然と聞いているだけだった…

目の前が、真っ白になっていく感覚…

真っ白になった世界は…

…終焉無き剣の道に変化して…

――そこで、“彼女”の背中が見えた…

“彼女”は、ただ、佇んでいたけど…

振り返って、口を開いた。

――『諦める気か？』

その口調は、どこか厳しく…

まるで、私を責め立てるかのようだった。

…悔しかった。

だって…目の前にいる人物は…

…“彼女”は…

“彼女”こそが…

――“諦めた”先に存在する、後悔の結晶――――！

「――諦めるわけ、ない！！！！！」

…気が付いた時には、叫んでいた。

そして…

“――体は剣で出来ている”

“血潮は鉄で　心は硝子”

“幾たびの戦場を越えて不敗”

“ただ一度の敗走も無く、”

“ただ一度の勝利も無し”

“担い手はここに孤り”

“剣の丘で鉄を鍛つ”

“ならば、我が生涯に意味は不要ず”

“この体は、無限の剣で出来ていた”

―――“道”は、“丘”になっていた…

空は朝焼け…金色の夜明け。
そこは荒野…無限の剣が、その切先を天に向けて林立し…
それ以外には何も無く…ただ、時折砂塵を振り撒く風が吹く…

そこにはきっと、全てがあって…
そしてきっと、何も無い。

故に、その名は…

“ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｂｌａｄｅ　ｗｏｒｋｓ”

体が剣で出来ていた女の…
いつか辿り着く刃の世界。

その世界が…そこにあった…

その世界を見た瞬間…“彼女”は、微笑んで…
―――『ああ、それでいい…』
そう…呟いていた…そんな、気がした…

―――『遠坂に訊くといい…キーワードは…“――――――――”』

「し、志保!?」

はっ、と我に返った時には…
私の眼の前で眼を丸くした三人の姿…

さっきのは…一体…？

「私は…今…？」

呆然と、呟いた…
私の呟きを聞いて、遠坂達が答えてくれた。

「い、いや…それが…」
「呆然としてたと思ったら…」
「急に、“諦めるわけない”って叫んだんだけど…？」

あの光景は…
何だったんだろう…

「そう…」

一一一けれど、今は、良い…

今は…訊こう。
“彼女”の言った内容を…

「遠坂…質問、なんだけど…」

「ん…？どうしたのよ本当に…」

遠坂は困惑を隠そうともしていない。

けれど…それをあえて無視して、質問を続けた。

「この言葉を聞いて…どう思う？」

「…何…？」

…“彼女”は…こう言っていた…

――キーワードは…

「キーワードは…“魔術師”“ライン”“契約”…“接続”」

告げられたキーワードを、思い出しながら呟く。

それを、最初は困惑していたけれど…途中から、真剣な表情になっていった。

「次で、最後…“女”…どういう意味だか、わかる…？」

最後のキーワードを告げた時…

――遠坂は、いきなり顔を赤くして。

「え？あ…へ？

待って待って…あ、あ…あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？

そ、その手があったぁぁぁぁぁ！！！！！」

…と、叫んだ。

そして、真っ赤な顔のまま私に詰め寄った。

「…し、志保？な、なんでそんな事を言い出したのかしら？」

へ…？なんか、不味いことだったの…？
私には訳のわからない単語の羅列だったんだけど…

「い、いや、その…ユメを見たんだよ…」

結構な勢い…っていうか、妙なプレッシャーを感じたので、素直に答えることにした。
すると…遠坂は一度引いてくれた上で、確認をしてくる。

「…ユメ？」

「…それって…もしかして、あの“丘”のユメか？
…俺のユメには、“アイツ”が出てきたんだけど…」

…どうやら、士郎も似たようなユメを見たらしい。
…あの“剣製”を見た影響なんだろうけど…

「…多分、似たようなモノだと思う。
けど…私のユメには、また別の“結果”も出てきたけど、ね…」

「…どういうこと…？」

ほんの少しだけ話そうか…

「あの丘に…最初は“アーチャー”がいたんだけど…
もう一人の“エミヤ”と逢ったの、あの場所で…」

あの“丘”の…

「もう一人の…」
「…“エミヤ”？」

――あの、“道”の主のことを…

「あえて言うなら、“英霊シホ”ってところかな…“エミヤ　シホ”の成れの果て、だよ…
“諦め”と“後悔”の果てにある…ね。」

…きっと…彼女は、“ここ”で…後悔の残る選択をしたんだろう。
だから…きっと…

「彼女が、ね…“後悔はするな”…って言ってた。
そして…さっき言った単語を…“キーワード”を、遠坂に訊け、って言ってたから…」

…私にあんな警告をしたんだろう。

そんな話を聞いて、遠坂は…
相当難しい顔で、口を開いた。

「そう…そういう、ことか…
…に、しても…不思議なモノね…
士郎も、志保も…お互いの関係、もうわかってるんでしょ？」

遠坂のそんな言葉に、私と士郎は声を揃えた。
…思えば、士郎と言葉や考え方が被るのは…ある程度、仕方がなかったんだね…

「私は士郎で、士郎は私…」

「俺は志保で、志保は俺…」

「「だろう？“俺”／“私”…？」」

…だって…世界の違いはあれど…
“同一人物”だったんだから…

「…私のほうが、多分“イレギュラー”なんだと思うけど、ね…」

最後にそう繋げて、私達の解答を告げた。
…切嗣の言葉や…アーチャーの言葉…
それから、導いた答え…

…私自身がイレギュラーだからこそ…
“ミミック”という“イレギュラー”を引き当てたんだろう…

「…はぁ…二人とも、絶対に他の魔術師に見つからないようにしないと…
二人とも固有結界使い？志保にいたっては“魔法の体現者”！？
どうしろってのよ…」

話を聞いて、遠坂は溜息を吐いて、頭を抱えながらブツブツと呟き始めた…

…気持ちはわからなくはないんだけど…

「…ねぇ、それも確かに問題なのかもしれないけど、さ…
“その手”って何…？」

と、言おうとしていた事をココに言われてしまった。

…何か、方法があるのなら…早く、教えて欲しいんだけど…
そんな意思を込め、遠坂に視線を向けた。

「…そう、ね…今はそっちが先決か…
…確かに、“こっち”のほうが…方法としてはバランスが取れてる、けど…」

すると、遠坂は…何故か言い淀んだ。

「「遠坂？」」

その様子を見て…私と士郎は顔に疑問を浮かべる。
…士郎がそんな顔してるし、多分私も同じ顔してるだろうから。

「…はぁ…
……志保？その…えと…うぅ…」

すると…遠坂は、溜息を吐いた後、何故か顔を赤くしながらこちらをチラチラと見ている。

…なんでさ。

……？
ま、て、よ…？

魔術師…？
ライン…？
契約…？

…接続…？

……女……？

そして…遠坂のこの様子……

一一一瞬間、全てを理解した。

「～～～～～～～～～～！！！！！！！！！！！！！？」

一一一顔…いや全身から火が出たかと思うほど、体温が上がったのを感じた。

「気が付いたのね…そういうこと、よ…」

私の様子を見て、遠坂は察してくれた様子だった…

そして、肯定…

「そうすれば、ちゃんと…ラインを接続することも可能かも…」

と、遠坂は言ってるけど…

そう…なの…？

え？でも…あれ？ってことは私が…クロウと…？

ちょ、ま…え！？た、確かに私は女だし、クロウは男性……！？ぅ、あぅあぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！！？

わ、わわわわ、そん…ふぇぇぇぇえええ！？

「う、うわ!?志保!?ど、どうしたんだ!?」

「んん…?えっと…魔…師で…契…それに……続……女?
…ぁ…あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!?ま、まさかそういうこと!?
くぁぁ…ちょ、ちょっと考えれば思いつくようなことだったのに…」

一一一私の混乱を見た士郎が、心配してくれてるけど…
一一一ココは、察したらしい…

「…ど、どうする?志保…さ、流石に…無理強いは出来ないんだけど…」

私の様子を見て…遠坂は、顔が赤いまま…そんなことを言ってきた。

一一一考える。

…私に、“そっち”の経験や知識は皆無だ。

一一一考える。

…故に、満足させって違う!!!!?

一一一考える。

…で、出会ってから、一週間も経ってない。

―――考える。

…それでも私は…クロウのことが好き…？

―――考える。

…とりあえず…“大事な存在”なのは間違いなくて…

―――考える。

…もし、ここで…“その”方法を取らなかったら…

―――考える。

…私は…どう思う…？

―――考える。

……あぁ…そう、だね…

―――考える。

…そっか…そう、なんだ…

―――考える。

…私は、きっと…

―――考える。

…後悔、するんだろう、ね…

―――考えて…

…だったら…私は…

―――考えるのを、止めて…

「…遠坂…私は、どうやれば…“接続”できるの…？
やりかたを、教えて…？」

…遠坂に、“契約”の方法を、訊いた…

「…本気、みたい…ね…」

遠坂は…私の“結論”を聞いて…

「わかったわ…ここじゃ、なんだし…一度、私の部屋に行くわよ…
士郎はここで待っていなさい…いえ、セイバーとでも話してなさい。」

そう言い残して…

「行くわよ、志保…」

「…うん。」

士郎とココを残して…

二人で、遠坂の部屋に移動した…

―――ｓｉｄｅクロウ

…顔に帽子を被せて、ぼぅっとしていた。

…志保が凛に話を聞きに行って…一時間、ってところか？

…セイバーに思いついたことを伝えてから三十分以上経っているけど…

…戻ってこないな、志保…

…これから…どうするか…

…現状では、俺の魔力は一桁寸前。

…“宝具”を使えて、一回使って即座に消滅ってところだろうな…

…道具欄の“エリクサー”を使えば、とりあえずは解決するだろうけど…

…これは、出来ることならって言うか、アイツに使うことを自分の中で確定させてるし…

…仮に、俺が飲んでも…根本的な解決にならないし、な…

…だったら、確実に助けられる方に使いたい。

…本格的に手詰まりだな…

…俺の場合、自力で魔力を生成できないってのが大問題なんだよな…

…多少は、食事によって体内に取り込めるみたいだけど…

…ただ、存在するだけでも消費の方が大きい。

…あれ？マジで詰んでる？

凛が、どんな方法を提案してくるかにもよるし…志保が、どんな結論を持ってくるかにもよるんだが。

…俺、情けねぇ……

（セイバー？…少し、話せるか…？）

（シロウ？えぇ…私も、少しシロウと話をしたかったのです。）

と、隣の…士郎の部屋から話し声が聞えてきた。

…ふむ…やっぱり、勝手に聞いて良い内容じゃないよなぁ…？

そう思った俺は、起き上がって移動することにした。

ん～…確か、後二部屋は未使用の部屋があったはず…

そう考えながら、実体化して部屋を出た。

すると…

「ぁ…相棒？どうしたの？」

…ココが、部屋の入り口で立っていた。

ふむ…ちょうど良いや。

伝言頼もう。

「ああ…士郎とセイバーが、なにやら真面目な話をするみたいだったからな…この部屋にいると、嫌でも聞えるんだ。

…ってな訳で、空き部屋にでも移動しようと思ってね…

何度もすまないんだが、志保に伝えておいてくれるか？」

俺は、そうとだけ言って、再び霊体化した。

すると、ココは…

「…わかったけど、さ…」

と呟いていた。

それを確認して、俺は移動を開始した…

「…ボクには、さ…霊体化したサーヴァントは見えないし…これは単なる独り言だけど…」

すると、背中越しに声がかかる。

ふ、と俺は脚を止め…ココの言葉に耳を傾けた。

「…志保、本気みたいだから…覚悟しといてよ、久郎。」

…どういう意味だ…？

そう思って、振り返った時…ココは、既に反対側へと歩き出していた。

そして…

「…それと…後で蹴り飛ばすから…本気で、チョコボ足で。」

そう地味～に不吉なことを言い残して、立ち去った…

な、何故に…！？

ほんの少しの間、そこで立ち尽くして…

…若干、背筋に悪寒を感じて、俺は移動した。

そして…俺は、現在未使用の部屋に入った。

部屋にあるものは、備え付けてあるベッドが一つ…

あとは空っぽの本棚と、机が一つ…

まぁ、まるっきりモノの無い凛の部屋ってかんじかね？

違いは…窓はちっこいのが一つだけしかない上、開けても目の前は家の塀ってのと…

…部屋に、なぜか換気扇が付いているってこと…ついでに、若干狭

いか…？

ま、この家でも不人気ＮＯ，１間違い無しな部屋だね。
…だから未使用なんだろうけどさ…

まあいいや…

そう思って、俺は備え付けのベッドに寝転ぶ。
…そして、そのまま霊体化。

…どうでもいいけど、ちゃんとこの布団干したりしてるんだな…埃が全然出なかった。

そうして寝転んで…眼を閉じた。
サーヴァントになってから、“睡魔”に襲われなくなったけど…

寝ようと思えば寝られるみたいだし…
そう思って、眠りに落ちた。

……
……
……
……
……
……
……
……
……

……

＜ー ー ーキィ…＞

…ん?ドアが開いた…

扉を開ける音に眼が覚めて、部屋の入り口を見た。

そこには…やはり、というかなんというか…志保がいた。

なので、俺は実体化して志保に声をかける。

「志保…?結構、長かったな…?」

＜ー ー ーキィ…ガチャッ＞

志保は俯いたまま、ドアを閉めた…何故か、鍵まで…

鍵が閉まったのを確認して…志保はやっと返事をくれた。

「ぅ…うん…ちょっと、準備が…」

何か、挙動不審だな…?

今気が付いたけど、髪が湿ってるし…

「そ、そうか…?」

「う、うん…」

…

…

…な、何か言えって…

な、なんなんだ？なんか…妙なプレッシャーを感じるぞ…

「え、え～…とだな…凛と、話はしたんだろ？
…どうなったんだ？結局…」

とりあえず、色々なモノをスルーしつつ、本題に入ってみた。
すると…

「…っ…」

顔を伏せて、なんかモジモジしだした…
みると、耳まで赤くなってる…何故!?

俺、何か変なこと訊いたのか!?

「（すぅ…はぁ…）う…うん…そ、その…その前に…ちょっと、訊きたいことが…ある…ん…だけ…ど…（ごにょごにょ…）」

志保は、深呼吸してから顔を上げて、話しだしたが…だんだんと、ボリュームが小さくなっていった。
…だから、何故に!?

「な…なんだ？」

その雰囲気に若干気圧されつつ、志保に質問を促したが…
――正直、予想の遥か上空を往く内容だった。
――ついでに、俺の“黒歴史”を突っついてくれたよ…

「そ、その!?ク、クロウって、セ…えと…え、えっちぃことってしたことあるの!?」

…

……

……

「――――――は?」

「だ、だから…えと…女の人と、“そういう”ことってしたことあるの!?」

志保は、顔を真っ赤にしてそんなことを訊いてくるが…

俺は、珍しく…というか久しぶりに完全に硬直していた。

「…な、なぁ…志保…?な、何故に…今、そんな、内容を、訊かれてるの、か…な?
しょ、正直…今、訊かれなきゃならん…事…なの、か?」

必死で、言葉を紡ぐ俺。

――動揺が、止まらない…

「わ、私にとっては大問題なんだよ！！で…どう…なの…？」

――だけど、志保は質問を、止めない…

「な、何故、に…？」

――冷や汗も、止まらない…

「だ、だって…そ、それより答えてよ！？」

――志保の追及も、止まらない…

ど、どうするよ…俺…？

答えなきゃ、駄目…なのか…？

…志保の視線は、まっすぐ俺を向いている。

「…」

「…」

俺は、どうしたものかと無言。

志保は、答えを待って無言。

「…」

「…」

これが、俺の魔力と一体何の関係が…？

…謎すぎる…

「…」

「…」

しかし…俺の女性遍歴が本当に何の意味を持つんだ…？
…全っ然わからん…

「…」
「…（うるうる）」

ぬぉおっ！？なんか志保の目に涙が溜まってきた！？
く…くそう…答えなきゃ駄目か…

「だぁあああ！！わかったよ、答えるから！！！泣くなよもぅ…」

半ば自棄になっている俺…
自棄になって…俺の“黒歴史”の一つを公開した…

「…あるよ…一度だけ、な…」

…ああもう…出きれば“アイツ”と共に秘密にし続けたかったのに…

「え…あ…そ、そう…なん、だ…
え、と…いつ…くらいの、こと…？」

自分で訊いて何故落ち込む！？
本気で訳がわからん…

「…俺主観で…二週間前、だな…」

もう完全に自棄になり…

溜息吐きつつ白状する俺…

「ず、随分…最近、なんだね…？
お、お相手は…？」

ああ…もう…どうにでもなれ…

「ああ…何度か話に出したろ…俺の親友…“穂村　真朱”…通称“アカ”だよ…
先に言っておくが！お互いの合意があったとは言い難いことなんだ…」

「…どういう…意味…？」

「…二人揃って、おばさん…アカの母親に、酒飲まされたんだよ！！
二人揃って、完全に前後不覚になって…気が付いたら……人生最大の不覚だ…」

…眼が覚めた時…アイツの部屋で、抱き合ってましたさ…服？周囲に散乱してましたよ…は…ははっ……

未成年…お酒を飲んじゃ…いけません…酒に飲まれて…後悔するぞ……なんてな…

「完全に意識が覚醒した後は…二人して土下座合戦だったよ…
で…これがどうかしたか…？」

お互いにあの時は…
自分の所為だ～って言い合って…

…責任とるって言ったら、“そんな理由で付き合い方を変えたくない”って叩かれたけど、さ…
その後、二人で“黒歴史”認定して…それ以来触れないようにしてたのに…

「うん…そっか…そうなんだ…」

志保はなんか納得してる。
本当に何だったんだよ…今の質問…

「…ごめん、正直今の質問自体には意味、無いんだよ…」

軽く鬱入ってたら、志保にそんなこと言われた…
…って、無いんかい！？

「その、私の、感情の問題っていうか…」

俺、そのために黒歴史公開させられたのかよ…
俺はベッドの上から崩れ落ちて…

床の上でｏｒｚ…

ご～ん…とでも効果音が付きそうな体勢してたら…

かちゃかちゃという音がして…
すとん、という音が、目の前から聞えてきて…

――俺の視界に…ジーンズが一本、入ってきた。

…って…

「シ、シホサン？ナ、ナンディッティドンドコドン？」

「…ごめん、何言ってるかわかんない…」

＜ーーーぱさっ＞

…ｏｒｚの体勢のまま質問をしたが…

混乱のあまり…オンドゥル語になっていたようで志保には理解できなかったようだ。

そして…今度は、視界にシャツが…

「いやいやいや…な、なんのつもりだ…志保…」

状況が状況なだけに、顔を上げられずに質問をした。

い、一体なんの意味が！？

「…これが、私の答えだから…だよ…」

志保は、そんなことを言って…

先ほどまで俺が乗っていたベッドの方向へと歩いていって、腰掛けた…

…さっきの質問…

…この状況…

…そして…志保は俺の質問に答えてない…

―――待て…まさか…

「…クロウの、魔力タンク…それと、私の魔術回路を接続するの…
そうすれば…私から、クロウに魔力を供給できるようになる…から…」

―――ここまで聞けば…いくら俺でもどういうことだか理解できる。

「だから…その…えと…や、やさしくしてください…」

―――志保が、何をするつもりなのか…
そして、さっきの質問の意図も…理解できた…

「いや、落ち着け…それは流石にマズイだろう…
お、落ち着いて考え直せ!!」

俺は、体を微動だにさせず、わりかしマジになって志保に考え直すように促すが…

「私は…ちゃんと、考えて…ちゃんと、“結論”を持ってきたんだ!!

…クロウ…言ったよね?基本…私の“結論”に従うって…」

―――決意は、固いようだった…
…しかも、確かに自分が言ったことだ…

「やっぱり…私じゃ、駄目…?」

…答えられないでいると…志保の、涙声が聞えてきた。
…そういえば、結構気にしてるんだっけか…自分が“小さい”こと…

でも…そうじゃなくて…

「…そうじゃない…俺自身、お前は十分魅力的な女性だと思う。
ただ、自分をもっと大事にしろ、というか…その、だな…
…俺の消滅がどう、とか…“そんなこと”のために…“そういう
”ことをして欲しくないというかしたくないというか…」

なんといったものだろう…と考えていると…
一一一志保は、少し鋭い声で…

「クロウ…クロウってさ…その…真朱さん?に…“鈍感”って言わ
れたこと、あるでしょ…」

俺に、そう告げた。

…確かに、ある。
というかアイツに人生最後に言われた言葉がまさにそれだ。

「…いくらなんでも…女心に鈍すぎだよ…
言っておくけど、ね?…好きでもない相手に、こういうこと、し
ようなんて…絶対に思わない。
…というよりも、選択肢にすらあがらないよ。」

そう、告げられて…
一一一直後、嫌な予感がした。

「…女に、ここまで言わせて…もう…っ…知らない…ぐすっ…
そっちの都合なんか、考えてなんかやるもんか…!」

そして…若干、据わった声で“宣告”する。

「自分で言ったことなんだから…自己責任だ…
　――聖杯戦争第八のマスターの名において、第二の令呪を持って命ずる！！」

――令呪の使用を…

それを聞いた瞬間、俺は流石に飛び起きて、志保を制止しようとして…

「ま、待て志保！？」
「私は、後悔したくない！！
　＜――――クロウ！私を――――――

…その瞬間、俺は自分の肉体のコントロールを奪われた。

…その後のことは…ちょっと訊かない欲しい。

ただ…俺が肉体のコントロールを取り戻したのは、それから大体一時間後のことで…

部屋を出たのは…日が完全に傾いた後だった…

…俺って奴ぁぁぁぁぁぁぁあああああああ！！！！！！！？

…
……
……
……

「…」

かちゃかちゃ

「…」

かちゃっ…かちゃかちゃ

「…」

かたん

「シロウ…その…お、おかわりを…」

「あ、ああ…」

がたん！

「…先輩…わたしも、お願いしますね…？」

「う…あ、ああ…」

かちゃん

「…」

かたかた

「…あ…あのぅ…定霧さん？な、なんでこんなに空気が冷たいのかなぁ…とか訊いてみたり…」

がちゃん！

「…な、ナニモナイヨ藤ねぇ！？」

がたん

「ど、どうしたの志保！？別に志保には訊いてないんだけど…」

かたん…ころころ…

「「俺は…俺ってやつはぁ…！！」」

「ど、どうしたの定霧さん！？士郎まで！？」

「は、はははははは…そうかお前もか士郎…」

「は、はははははは…そういうクロウもか…」

「と、遠坂さん！？この二人どうしちゃったのよぅ！？物凄いことになってるわよ！？」

ことん

「…」

かたん

「…」

「はぅ…」

「タ、タイガ…で、出きれば訊かないでやって欲しいのですが…」

「ほ、ほんとに何があったのよう…志保は上の空だし遠坂さんは無言だし…桜ちゃんはなんか怖いし…

セイバーちゃんはこないだの勢いが無いし…なんか人が増えてるし…何故か葛木先生がここでご飯食べてるし…

士郎と定霧さんは壊れ気味だし…」

「士郎…さあ…俺達の罪を…数えようか…」

「そう、だな…極刑が…俺達のゴールだ…」

「落ち着いてください士郎、ミミック!?その台詞は今言ってはいけない気がします!?」

「「どうせ…俺なんて…」」

「それも駄目だと思います!?」

“第十六話／「…後悔を振り切って。」”（後書き）

さて、まずは…本気で言わせてください。

…マジで遅くなり、本当に申し訳ありません！！

…今月は、本気で時間が…取れなかったんです…

それはともかく、こんな鈍亀更新な侑斗ですが…見捨てないでやってください。

読んでくださっている皆様、これからも、応援、感想よろしくお願いします！！

それと…私事なんですが…ちょっと試験がありまして…

八月は更新できるか非常に怪しいのです…

次話の投稿は、気長にお待ち下さい。

おまけ？のステータス&プロフィール（前書き）

本編に登場してしまったシホアーチャーについての解説？のようなものです。

別に読む必要はないですが・・・

おまけ？のステータス&プロフィール

おまけ？

ネタステータス欄。

英霊エミヤ（♀）

“衛宮　志保”という存在が英霊に行き着いた場合の姿。
外見は“型月Ａ’ｓＶＯＬ５”を参考にして欲しい。…ハッキリ言って幼ｊ：少女である。
女である事を捨てたりはしていない。
スキルやステータスはエミヤ（♂）の場合と変化無し。

本編の志保の髪をそのまま伸ばして、“色”が変化すると大体こんなかんじになるかもしれない。

英霊シホ

“衛宮　志保”が行き着く可能性がある英霊。志保の精神に干渉してきたのは彼女。
ただし、本編に登場した彼女は在り方があまりに異質なため、“エミヤ”から分離しかけている。
この項においては“その”彼女について説明している。

“後悔”の先にある存在らしく、“バッドエンドの果てに存在している”らしいが…？

彼女が仮に聖杯戦争に参加するとしたら、その“後悔”を取り除くためだろう。

外見：髪は白に近い銀髪、長さは肩にかかるくらいで、なんというかトゲトゲしてる。
瞳は灰色、肌は浅黒い。
黒い軽鎧に、所々ベルトが巻きついた黒いズボン。
腰のベルトに引っ掛けた黒い少々くたびれた帽子。
金属板を打ち付けたゴツイブーツ。
そしてかなり厚手の真紅と深紅のコート…という微妙にちぐはぐな格好。

彼女の着ているコートは、防弾・防刃の特注品に、聖骸布を重ねた一級の概念武装。
戦闘時には着ていないと、体内から無限の剣が生えてきて、体を突き破る…

普段腰に引っ掛けている帽子は、彼女の後悔の証だとか…
稀にかぶっている姿が目撃される。

一人称は“己（オレ）”で、男のような話し方だが…
“素”だと普通に女の子である。

肉体的なピークは十九歳当時の肉体…
そのため、召喚される場合その姿となる。

因みに、男性経験は生涯ゼロだったそうだ。

なお、直接の死因は“壊れた幻想”を利用しての自殺らしい。
詳細が語られる日はくるのだろうか…？

クラス：？？？（アーチャー）
真名：シホ
性別：女性
属性：中立・中庸

身長：１６５ｃｍ
体重：５１ｋｇ
スリーサイズ：７４／５８／７４
イメージカラー：赤・黒

特技：ガラクタいじり、家事全般、バイクの運転
好きな物：家事全般、特撮ヒーロー（隠してるつもり）、タイヤキ
苦手なもの：黒光りする虫、ナンパ
天敵：イリヤ、ミミック、間桐　桜

能力値
・筋力：Ｅ＋
・魔力：Ａ
・耐久：Ｃ
・幸運：Ｅ
・俊敏：Ｃ・宝具：？？？

宝具

・“ｕｎ－ｆｉｎｉｓ　ｂｌａｄｅ　ｒｏａｄ”（アンフィニズ・ブレイド・ロード）
　ランクＥ－～Ａ＋　　レンジ？？？　　射程？？？　　最大補足？？？

“終焉無き剣の道”。
固有結界と呼ばれる禁呪。
…本来の固有結界が、“ある結末”を迎えた結果歪んでしまい発生した心象風景。
無限の剣が列を成し、一本の道を作り上げる。
基本的な性能は“無限の剣製”と大差は無いが、この世界には“防具”は登録されない。
投影された剣は、基本的に地面から切っ先を上に生えてくる。
戦闘時には、その刃を直接つかんで引き抜くなり、蹴り上げて空中で装備したりして使用する。
“無限の剣製”のように剣雨を降らせたりすることは出来ないが、“道”から外れた位置に移動すると、荒野から生える剣によって貫かれる（オート発動）。
因みに、並んでいる剣は、“彼女”が出会った順番に並んでいるらしい（大した意味は無い）。
利点は、若干魔力の消費が少ないことと、相手と自分の位置関係を固定できること（常に相手と一列に並んだ状態で発動する）。
そして…多人数を相手にした場合、敵一人を残して全滅させられる場合があること。

一一一体は剣で出来ている。

血潮は鉄で　心は硝子。

幾たびの戦場を彷徨い歩く。

ただの一度も瞳を逸らさず、ただの一度も正視出来ない。

夢見る愚者は久遠に独り　剣の道で孤独に嘆く。

故に、生涯は意味を失くし。

その体は、いつか剣になっていた。

・“ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｂｌａｄｅ　ｗｏｒｋｓ”（アンリミテッド・ブレイド・ワークス）

ランクＥ～Ａ＋＋　レンジ？？？　射程？？？　最大補足？？？

“無限の剣製”。

彼女の本来の固有結界。

“エミヤ　シロウ”の物と大差は無い。

ただし、剣が切っ先を上にして存在している。

“剣雨”というよりも“剣林”といったほうが正しいだろう。

…攻撃時は、相手の足元から生えてくることを考えると、殺傷力はこちらの方が上だろうか？

彼女が、己の後悔を振り切った時、この世界を取り戻すだろう。

保有スキル

千里眼・C

魔術・C－

心眼（偽）・B

“第十七話／「暗躍のM／計画は全力で見逃せ！」”（前書き）

二ヶ月少しぶりの投稿ですね……

“第十七話／「暗躍のM／計画は全力で見逃せ！」”

――貴方は、根っからの暗躍者ですね……

“第十七話／「暗躍のM／計画は全力で見逃せ！」”

――sideココ

夕食を終え、一度解散して……

葛木先生&キャスターさん、それにバゼットさんは藤ねえさんに挨拶だけして部屋を出て……

凛さんは食器を洗ってる。

この場にいるのはライダーさん・桜・志保・セイバーさん・士郎・久郎・藤ねえさん、そしてボク。

……さて……現状、どうにかこうにか魔力切れの危機を乗り越えたワケだけど……

「・・・」

「・・・」

……久郎と士郎が、思いっきりうなだれてるんだよね……

……ご飯が出来る前に、志保に訊いたけど、さ……

志保、令呪使ったみたいなんだよね……

で、自分の意思の外でヤっちゃったモノだから落ち込んでる、と。

士郎の方は知らないけど、ねぇ……？

仕方ないっちゃ仕方ないんだけど、さ……

「あのぅ……本当に何があったのよぅ……」

……藤ねえさんいるんだし、さ……

流石に、しゃんとしないとナニがあったか、バレるんじゃぁ……

「な、ナニモナイヨ藤ねぇ……

そ、そうだ！藤ねぇ？明日からの事なんだけど、さ……」

と、いいかげん気合いれるかな？と思っていたら、渦中の志保が声を上げた。

……前半、声が裏返ってたけど。

「ほ、本当？……で、何よ志保？」

「そ、その……私と士郎、しばらく学校休むから、って……」

疑惑の視線を受けながら、志保はそんなことを言い出した。

……それは当然のことだけど、さ？どうやって納得させるんだろう……？

「・・・」

……口の回る久郎はこの調子だし。

「へ？どういうこと？」

……と思ってたら既に会話は始まってたワケで……

ボクは今チョコボなワケで、会話に参加できないし……

ま、自力で何とかするのかな？

「ああ、うん……その、さ……藤ねぇは知ってた？切嗣に子供がいたってこと……

思いっきり外国の人だけど。」

「・・・へ！？切嗣さんに？子供！？し、知らないわよそんなの！？」

「ま、まぁいたみたいなんだよ。

……で、今、その切嗣の実の子供が冬木に来てるみたいで……」

……イリヤさんのことを持ち出すのね。

……ま、一番妥当かな？

と、思った瞬間……いきなり、耳を塞がれた。

「え……えぇぇぇ

それが止んだと同時に耳から手が離れる。
振り向くと……ボクの耳を塞いでくれていたのは久郎だったようだ。
どうやら、今回は察知していたようで、殆ど皆耳を塞いでいた。
……久郎は防げなかったようで、顔をしかめてるけど。

「～～藤ねぇ……近所迷惑だってば……
兎も角！その人……私達からすれば義姉さんが、切嗣探して態々冬木に来てるの。
……でも、切嗣は、もう……
そういうワケで、色々と結構厄介な事態になってるんだよ……」

志保は、少々涙目になりながら話を続ける。

「う……確かに厄介なことになりそう……」

「……で、明日からその……義姉さんの所に行って、色々と話さないといけなくて……
切嗣のこととか、私達のこととか……
それで、それが一段落付くまで学校を休もう、と……」

「まぁ……そういうことなら、仕方ない、か……
でも……それだったら私も……」

「藤ねぇは仕事でしょ……それに、一応招待されてるの私と士郎だし……
幸い、言葉の壁も無いみたいだし、安全が云々って言うなら、セイバーもクロウもいるし……
とりあえず、私達で話をしてからって方向じゃ……だめ、かな？」

「う……うぅん……そう、ねぇ……
ま、いいわ……けど、何かあるようならすぐに呼ぶのよ？状況によっては藤村組総出で援軍に行くからね？」

「うん、わかったよ藤ねぇ。」

……どうにかなったのかな？

それにしても……イメージしてたより、藤ねえさんって“大人”の人だなぁ……
前に久郎が言ってた、“妙なイメージ付けたくない”って言ってた意味がよ～くわかるよ。
もうちょっと“ガオンガオンガオ～ン”ってイメージがあったし。
実際に会わなきゃ解んないモノだね。

「さて、と……とりあえず私はもう帰るわね？
桜ちゃんは泊まってくのよね？」

「は、はい……今、家に人、いませんから……」

「間桐くん、通り魔に刺されたんだったわよね……皆、気を付けるのよ？
あ、それと定霧さん？ちょっと耳貸してください。」

「・・・なんでしょうか・・・」

？なんだろう……

久郎は、素直に藤ねえさんに耳を貸して…

（……志保、泣かせたりしたら藤村組が黙っちゃいませんから。
……勿論、私も。）

……藤ねえさんは、ぼそっとそう告げた。
うわ～お……バレてますやん……

それを聞いた久郎は、一気に表情を引き締めて……

「……わかってます。」

一言だけ、そう言い返した。

その表情を見て、藤ねえさんはニッコリと微笑んで……

「ならよろしい！」

そう言って、立ち上がった。

「それじゃ、私は帰るから！
志保～？“久郎”、逃がしちゃだめよ？」

そして、そう言い残して走り去った。

「ちょ！？藤ねぇ！？」

残された志保は……顔真っ赤だね、うん……

……とりあえず、ボクとしては微妙に面白くなくて……

「クェ！！（ていっ！！）」

＜ドゲシッ！！＞

「ぐはっ！？」

……昼頃の予告通り、全力で久郎を蹴り飛ばしておいた。

トランス（チョコボ成体）しなかっただけありがたく思っとけ！

－－－side士郎

ココがクロウを蹴り飛ばし、クロウが悶えている間にアサシンを除いた面々が居間に集結。

「・・・で？これからの行動予定は？」

全員が席に着いた直後、遠坂がそうきりだした。

とりあえず・・・色々思う事はあるけども、今後の行動予定を話し合おう。

「俺は、イリヤの所に行くべき……ってか、話をしにいくべきだと思うぞ。」

と、最初に意見を出したのはクロウ。

流石に復活が早いな・・・

「あそこまで強いなんて、ね……バーサーカーでも、ちょっとヤバそうだものね？

私の意見も同じ、皆は？」

と、それに早速同意する遠坂。

「ああ、俺もそう思う……放っておいたら、イリヤが危ない。」

俺は全面的に同意。

「と、言うより……反対しても、私は行くつもりだよ。」

これは志保。

他の皆は……無言の同意、ってところか？

それを見渡した遠坂が、手をぱん、と叩きながら口を開いた。

「じゃあ、まずはイリヤスフィールに会いに行く。これでいいとして……

全員でぞろぞろ動くのはやめたほうがいいわね……ランサーとか、流石にダメージが深いんじゃない？」

「ああ・・・流石に回復しきらねぇよ。

まあ、ミミックが回復薬持ってるってんなら問題無いんだがな？」

遠坂に話を振られたランサーは、同意しつつクロウに視線を送る。

すると、クロウはあ～……とでも言いそうな表情で口を開いた。

「昨日も言ったと思うが、使える回復薬の類は品切れだ。解毒薬とかの類はあるんだが……

イリヤの家？に行くメンバーと、この家に残るメンバーにわけな

いとな。」

その内容は“幻想の道具欄”の品切れを告げる物だった。
そういえば、クロウは教会で結構使ったって言ってたな……

「そうですね……私とランサーは居残り確定ですね。
……ですがミミック……貴方、何か隠してませんか？この期に及んで。」

と、バゼットがメンバー分けに賛成しつつ、クロウに質問をしていた。

「そういえばそうよね……この間から、何か隠してる気がするのよねぇ……
メンバー云々の前に、隠してる事を話して貰いたいんだけど？」

遠坂が、それに同調。
クロウが、何かを隠している？

「……」

俺がクロウの方へ視線を向けると、クロウはふっと視線を逸らした。
その様子を見たサーヴァント達が、口々にクロウへと質問をぶつけだした。

「貴方の事です、私達の知らない情報を何か隠しているのではないですか？」

「そういえば……貴方が言っていた、妙な方向に傾いた天秤、とや

らは何なのですか？」

「まぁ、ほんの一瞬の会話でサーヴァントの真名を言い当てるような存在だものね？」

「貴様、ここまで来て情報を隠す必要があるのか？」

「テメェの持ってる情報は、今までかなり重要な物ばかりだったからな……」

ライダー、セイバー、キャスター、アーチャー、ランサー……

五人に半分睨まれて、クロウは観念したように溜息を吐いて……

「クロウ……隠してることがあるなら、できれば話して欲しいんだけど……」

志保が、そう言ったのを機に口を開いた。

……渋々と。

「まぁ、この場に置いて俺しか知らないであろう情報が一つ……いや二つか？

それと、一部の面子が“言って欲しくない”であろう情報が一つ。

そして俺自身がやろうとしている事が一つ……って所かな、俺が隠してる事は。」

・・・結構あるな。

クロウが何かを隠してるという事を認めたので、遠坂が口を開く。

「多いわね……で？話すのよね？」

確認するようにそう言った遠坂。

そしてクロウは……

「殆ど断る。」

きっぱりと断言した。

――その瞬間、遠坂の気配が変わった。

「――どういうつもりかしら。」

腕に魔力を溜めながら、座った眼でクロウを射抜く遠坂。

普通ならばその迫力だけで口を割ってしまいそうなものだが、クロウは平然と言い返す。

「殆ど、と言った。

“俺しか知らないであろう情報”については、俺自身の宝具について。

“言って欲しくないであろう情報”については、俺は絶対に人には話さない。

セイバーの言ってる“天秤”は“俺自身がやろうとしている事”で、“言って欲しくないであろう情報”に直結するから話せない。

“宝具について”も、殆ど同じだ。」

どうやら、確固たる理由があって言えないらしい。

その口調は力強く、決して曲がらないだろう、と感じた。

「・・・それは、私が聞いても、なの？クロウ・・・」

志保が、クロウに尋ねたけど……
クロウは、ただ無言で首を縦に振っただけだった。

「なぁ、クロウ……それは、俺達に言うとどうなるんだ？
本当に、言ったら駄目なことなのか？」

それを見た志保が悲しそうに俯いた瞬間、俺は口を開いていた。
するとクロウは肯いて……

「……士郎、“言えない”と断言した理由は、言ったら全てがオジャンだから、だ。
ただ、もう一つ言わせて欲しい。
俺がやろうとしてる事は、お前たちの不利益になるようなことじゃない、って。

と言った。

「……どうしてそう断言できるのよ。」

それを聞いた遠坂が、訝しげな表情で尋ねる。

「……納得できないって表情だな。
ほんのさわりだけ話す。
……けど、“それ以上”は言わない。」

片目を瞑り、“わかったな？”とでも言いそうな視線を俺達全員に向けるクロウ。
そして、クロウは語り始めた……

「“俺の宝具”について、隠してることは二つ。
一つは“幻想の道具欄”の中身。もう一つは“俺の第三、第四の宝具”についてだ。」

「ちょっと待って!?クロウの宝具って“幻想の道具欄”と“物真似師の意地”だけじゃなかったの!?」

はじめから驚きの新情報、だな……
志保も聞いてなかったらしく、クロウに詰め寄った。

「ああ、今まで使う機会が無かっただけで、後二つある。
まあ落ち着け……話せない理由は、俺の計画の“切り札（ジョーカー）”だから、だ。」

それを宥めつつ、話せない理由を口にするクロウ。
志保は、宥められて渋々と座る。

そして続きを語りだす。

「“俺がやろうとしている事”は……そうだな、簡単に言うと……
うん、汚物は消毒だ～って所か？
いや？う～ん……台所のG退治？……大分違うな……まぁ、聖杯戦争をしっかり終わらせるためにはやらなきゃならないというか……
……内容に触れずに説明するのが難しいな……
この場にいる全員にとって、共通して不要な存在の処分？だからな……少なくとも、責められる謂れは無いと思う。」

だが、さっきまでと違って、何か煮え切らない発言。
それを見た遠坂が眉間に皺を作りながらクロウに質問。

「どういう意味よ、それ……」

「……この一件に関してだけは、内容に触れずに説明するのが不可能に近いな、少なくとも俺の言語能力だと。
信じてくれ、としか言えないな。」

が、クロウ自身が匙を投げた。
どうやらかなり複雑な内容らしい。

と、クロウの言葉を聞いた志保が、クロウをまっすぐ見つめてこう言った。

「クロウ……信じて、良いんだよね？」

そして、クロウは……

「ああ、信じてくれ。」

そう、まっすぐ、視線を逸らさずに断言した。
そして、一秒ほど見詰め合ってから、志保が口を開いた。

「……皆、クロウを信じて。
信じられないって言うなら、クロウを信じた、私を信じて。」

その眼には、一切の迷いを感じられなかった。
それを見た、俺は……

「わかった。俺は、クロウを信じる。」

一一一信じる事にした。

と、言うよりは、元々疑ってた訳じゃあないしな。

「……ミミック、貴方を信じましょう。
シロウと、シホの信頼……裏切るようなことがあれば切り捨てますが。」

すると、セイバーが信じると言って…

「ま、少なくとも自分のマスターを裏切るような男だったら、綱渡りな交渉なんかしなかったでしょうし、ね？
私と宗一郎様に不利益が無ければ、私は何も言わないわ。」

「キャスターがそう言うのなら、私も構わん。」

「……少なくとも、シンジを救っていただいた恩があります。
サクラさえ無事であるならば、私も何も言いません。」

「貴方は、根っからの暗躍者ですね……私自身、まだ貴方に恩を返してはいませんからね。
貴方を、信じましょう。」

「ま、テメェが嬢ちゃんを裏切るってんなら、俺の槍が今度こそテメェの心臓を打ち抜くだけだ。」

「……その、わたしも、信じていいと思います。
兄さん、助けていただいたみたいですし……」

皆が、口々にクロウを信じる、と言った。
それを見た遠坂は……

「……これで私だけ反対したら、完全に悪役じゃない……
もう……わかったわよ！志保、アンタを信じることにする。」

折れた。
結構あっさりと。
それを見たアーチャーが微妙にニヤニヤと笑っている。

「……妙な方向に話がそれたけど、さ。
メンバー分けの話に戻っていいか？」

すると、クロウが話の方向を戻す。
……微妙に照れているらしく、頬をかきつつ、視線を泳がせて。

その様子を見た志保が、くすり、と笑って……
ココが、クロウの脇腹あたりをつんつんと突いていた。

「ふふっ……そうだね、クロウ？
行くのが決定してるのが私と士郎、と、それぞれのサーヴァント。
で、残るのが確定してるのがバゼットとランサー……だよね？」

少しだけ微笑んだ後、志保がそう言った。
メンバー分けの話に入ったようだ。

俺も参加しよう。

「ああ、順当に行くと……アーチャーがこっちで、キャスターとアサシン、ライダーが残り、か？」

戦力的には、そう思うんだけど……
と、思ったことを口にした直後、クロウが口を挿んできた。

「いや、ライダーと桜には一緒に来て貰いたい。
……少し、考えがあるんだ。」

「どういうことよ？」

「……戦闘になるとは限らないからな。
一応“間桐”の人間、ってことで、な。“御三家”で会議しないとならん内容もあるんじゃないか？と思ってね。」

途中の遠坂の質問に答えるクロウ。

そういえば、桜の家って聖杯戦争を作った御三家の一角なんだっけか？
この間、イリヤに調査を依頼してたし……

「なるほどね。
確かに、必ず戦闘になるとも限らないし……桜はどうする？」

でも、遠坂の言うとおり、桜次第なんだよな……
そう思った瞬間。

「……行きます。
今は兄さんも入院中ですし、当主代理として役割を果たします。」

桜は、決意を込めた声で宣言した。

「じゃあ、イリヤの所に行くメンバーは俺とセイバー、志保とクロウ、遠坂とアーチャー、桜とライダー……でいいのか？」

とりあえず、決定したメンバーの確認。

「そうね、それで良いはずよ。
ミミック、アンタからはまだなんかある？」

遠坂は頷きつつクロウに確認をとる。

「いや、今の所は……あ、そうだ、キャスターとココ、ちょっと確認したいことがあるんで付き合ってくれ。」

すると、クロウは何かに気が付いた様子で、キャスターとココに声をかける。

「クェ？」
「？何かしら？」

声をかけられた当人達は首を傾げる。

「いや、ここじゃちょっとな……
道場でもいいか、確認したいだけだし。」

そう言って、クロウは立ち上がって部屋を出た。
ココは、首を傾げつつそれを追う。
キャスターはやれやれ、とでも言いそうな表情で立ち上がって……

「キャスター？内容によっては、私達にも教えてくれるかしら？」

遠坂に呼び止められた。

するとキャスターはニヤリと笑って一言。

「内容によっては、ね？」

そうとだけ言って、部屋を出た。

一体、何の確認なんだろう？

気にはなるけど、物によってはココなりキャスターが教えてくれるだろう、多分。

――ｓｉｄｅココ

クロウに声をかけられ、道場で話を聞いたんだけど……

――開いた口が塞がらなかった。

確認したいだけ、とか言いつつ、思いっきり久郎の計画をばらされたからだ。

久郎の二つの計画。

それが成功すれば、確かに全員の利益になる。

けど、さ・・・

「ク、クェェ……（よ、よくそんなの思いついたね……）」

「他人の能力にここまで頼った計画も珍しいわ……」

キャスターの呟きは真実。

よくもまあここまで人任せな計画を思いついたものだよ……

ボクかキャスターさん、どっちかが拒否したらアウトじゃんか、それ。

「いいだろ別に！ついさっき閃いただけの思いつきなんだし。
それに、片方は間違いなく俺単騎でも出来る計画なんだっての……」

まぁ実際、久郎の計画の内、前々から練ってたであろう方は一人で出来るんだろうけどさ……

「ク、クェ！クェェェ・・・（それでも、だよ！ってか、なんでそういうのを一人でやろうとするかなぁ・・・）」

正直、ボクにまで隠してたのが悲しいんですけど・・・

「う……スマン、ちょっと深刻に捉えすぎてたかもしれん……」

内容が内容だし……話したくないのも仕方ないんだけどさ……

「“そっち”は十分深刻よ。
私から見ても、ね……
とりあえず、私は協力するわ。」

キャスターさんがこう言う理由もよくわかる。
今のボクは女だし、ね……

――キャスターさん、想像してたよりずっと優しい女性だったし。

久郎の話の途中で、激怒して久郎に掴みかかったから――

――『どういうことよ、それは!!』

――『言ったままだ!!考えただけで腸が煮えくり返る!!!』

――『それで、なんで今の今まで何もしてないのよ!!!』

――『俺だって早くなんとかしたかったさ!!!だけど、確実性を高めるために我慢してんだよ!!!!』

――二人とも、物凄い剣幕だった。

久郎の怒りも凄かったけど、キャスターさんがあそこまで激情にかられるのが意外だった。

アレを見た後に、キャスターさんを魔女、とは言えないよ。

……キャスターさん、身内にはとても優しいってことがわかったし、ね。

しばらく言い合った後、久郎がキャスターさんに『魔術師だろ!今は割り切れ!!』って言ってようやく落ち着いた。

落ち着いた後にちゃんと何をどうするか、を語りあった。

んで、冒頭に至る、と……

久郎の計画は主に二つ。

一つは久郎の言うところの“思いつき”。

こっちは、ボクとキャスターのサポートが不可欠。

けれど……成功すれば、一気に今後が楽になる。

ってか、聖杯戦争終わるかも……

二つ目が、久郎がずっと考えてた計画。
こっちは、殆ど久郎一人で達成できる。

……寧ろ、他人に話せば話すほどに成功率が下がるだろう。
そういう計画だし。
ただし、ボクのサポートにより成功確立が跳ね上がる。

一つ目と合わせて、後の憂いを断つことが出来る。

「ああ、頼む。
お前も頼むぜ？相棒。」

ーーーと、考え込んでたら話が進んでた。

「クェ！（勿論！）」

とりあえず……意地でも成功させてみせる。

ーーー二つの計画を！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

―――次回予告！

「ええ……私も……大丈夫……です……大丈夫です……とも……」

―――『ＬＵＮＡ』

「バーサーカー！！なんで！？なんで令呪が効かないの！？」

「―――全投影、連続掃射（ソードバレル・フルオープン）……！！」

（恨むよあいぼ～う……）

「ク、ククククク……お前ら……頭悪いのか？

「何もかも……吹っ飛ばす！！！」

「う、嘘……それが、アンタが隠し持ってた宝具だっていうの！？」

―――『ＪＯＫＥＲ』

次回、第十八話

「暗躍のＭ／幻想の切り札。」

―――「頼むぜ、相棒……作戦通りに、な……」

“第十八話／「暗躍のM／幻想の切り札。」”（前書き）

今回降臨したこの人は……最早オリキャラですね……

“第十八話／「暗躍のM／幻想の切り札。」”

――――――やっと、だ。

“第十八話／「暗躍のM／幻想の切り札。」”

――side志保

早朝、私達は家の前……クロウの車の前に集まっていた。

あの後、戻ってきたココもキャスターも何も話してくれず、そのまま解散になって……

朝早くに義姉さん……イリヤの城に向かうことにしよう、と言って、それぞれ思い思いの時間を過ごした。

例えば、士郎とアーチャーが、縁側で月を見上げて語り合ってたり。

葛木先生が、玄関のアサシンと何やら話し込んでたり……

クロウが、キッチンでキャスターになにやら教えてたり……

ココ（子チョコボ）とライダーが居間で何か話してたり（ココは筆

談）……

ランサーとバゼットが、なにやら部屋で作戦会議していたり……

……私とセイバーが、遠坂と桜にイイエガオで弄り倒されたり……

うぅ……

……えぇ、根掘り葉掘り聞かれましたよ……

折角、押さえ込めてたのに……思い出し気絶という新しいジャンルを開拓しちゃったじゃないか……

気絶中に変な夢見たし……クロウが胸の大きな女の子に包丁で刺される夢。

……考えないようにしよう。

さっき訊いたら凄く遠い眼をして……

――『志保……ヤンデレって、怖いな……ガチって、もっと怖いんだな……』

って言ってたから。

それにしても、どうして人の“そういう”ことに踏み込んでくるかなぁ・・・この二人は。

ああいうのは、こう……大事な思い出として取っておきたいのに・・・

こっちとしては、告白じみたことをしたわけで……

しかも、大事なモノもあげちゃったし……

（うん、凄いカラダでした。）
――服の上からじゃわからないカラダッ！？すとっぷ！？

（うっかり、筋肉マニアになりそうね。）
――一切の無駄を省き、省いた上でさらに鍛えられた肉体ここここここら！！！？何考えてるの私！！！？

（あの逞しさは反そ）
――そして、そのシンボルは……マテ！？思い出すなってば！！！！？

（令呪使って、理性を奪ってからは激・・・）
――『そ、そんな……おおｋうわぁぁぁ

た二人に手刀を落とす。

「あぶなっ！？危ないじゃない志保。」

「きゃっ！？」

……が、避けられた。

しかも遠坂に至っては文句を言ってきた。

無言で追撃をかけようとして……

「ど、どうした志保？」

「な、なんでもない・・・」

クロウに声をかけられてやめた。

うぅ……半分はクロウの所為なのに……

「そ、そうか……体調悪いんなら無理すんなよ？」

そう言って、クロウは車の準備を進める。

うぅ……男の人って皆こうなのかなぁ……昨日も全然態度に変化無かったし……

ああ、でもしばらく落ち込んでたっけ、士郎も。

でも、あれって逆に失礼な気が……

（ニヤニヤ）

（にやにや）

って、この二人は……！

そっちがその気ならこっちにも考えがあるからね……？

「ねえ士郎？遠坂と桜のスリーサイズと体重知りたい？知りたいよね？じゃあ教えてあげる。」
「ブッ！！な、なに言い出すんだ志保！？俺は別に……」
「答えは聞いてない！遠坂は上からななじ「ごめん！？それ以上言わないで！！！！！！！！！！」」
……桜の体重はよ「もうからかいませんから許してください！？」
……」

クロウ曰く“しのせんこく”を使おうとしたら、二人が土下座する勢いで謝ってきたので勘弁してあげることにした。

「まったくもう……これからイリヤの城に行くっていうのに、くだらないことしないでよ。」
「「ごめんなさい。」」

ま、女としては使いたくない究極の禁じ手だけど、さ。
好きな人にスリーサイズと体重ばらすってのは。

「……うぅ、なんで志保さんがわたしの体重知ってるんですか……」
「私のまで……」

でもね？私はその絶望感は昨日味わったんだ・・・だって・・・

クロウに聞いたから。
その様子だと合ってるみたいだね？

……クロウ、私のスリーサイズも体重もきっかり把握してました。
クロウの特技らしい・・・一目で他人の身体のデータを把握するらしい。
物の鑑定の応用らしいけど、さ……

女の子に対してそれを使うのは勘弁して、と私は思います・・・

「よし、準備ＯＫっと。
お前ら、準備できたか？
昨日も一応言ったけど、貴重品の類や思い出の品とか、普段から身につけてるものがあるなら置いていくことを強く勧めるが。
……行き先、森ん中だし。」

と、そんなことを考えてたら準備が出来たらしく、クロウが私達に声をかけてくる。
そういえば、昨晩そんなことをわざわざ全員に言ってたね、クロウ……
ココが激しく首を縦に振って、キャスターまでもが同意してたのが印象的だったから覚えてる。

「あ、ああ……」
「うん、私は大丈夫よ？」
「わたしも、大丈夫です。」
「私は大丈夫、なん、だけ、ど……」

私達は準備が出来ているので返事をする。
よく見れば、桜と遠坂が着けてるリボンがいつものと違うあたり、その“忠告”はきいていたみたい。
私も、特に思い出の品とか身につけてる訳じゃないから問題無い、が……

私が思い出し気絶してる間、今度はセイバーが根掘り葉掘り聞かれてたみたいで……

「ええ……私も……大丈夫……です……大丈夫です……とも……」

……昨日の夕食時のクロウみたいな状態なんだよね……

「だ、大丈夫かセイバー？」

「ええ……ただ……何も訊かないでください……」

影を背負いながら、クロウの車の運転席に乗り込むセイバー。

「・・・安全運転で、な。」

それを見送り、クロウは霊体化した。

この車、乗車定員は五名みたいだしね？

私は、遠坂と桜をジト眼で見つつ、車に乗り込む。

すると……

「クェー！」

……なんか、ココがいた。

「……なんでさ。」

つい、そう呟いてしまった。

すると、後ろからクロウの声が聞えた。

『ああ、ココも連れてくことにしたんだ。

そいつ、結構役に立つし、な。』

……どうやら、クロウの指示らしい。

と、いうか……

「クロウ……こういうのは、さ、今度から先に言っといてね？驚くから。」

『……悪い、今度からなるべく先に言っておくことにするよ。』

なんだかんだで抜けてるんだよね、クロウ。

でも、だからこそもっと傍で支えたって何考えてるの私！？
コレが噂の腐ィルター！？あ～もうっ！！落ち着け私！！腐ィルターがかかりすぎると病む！！
クロウは巨乳とヤンデレは駄目なんだってば！！！！！
それに、これは抜けてるっていうよりもクロウの暗躍！！絶対何か狙ってる！！！
クロウ曰く、ココは“相棒”らしいし！！！

「あの……そこで止まられると私達が乗れないんだけど……」

と、若干思考が暴走しかけたところで後ろから声をかけられた。

「ご、ごめん……」

ぶんぶんと頭を振って、奥に移動。
ついでにココを抱き上げる。

全員が乗り込んだ（アーチャー、クロウ、ライダーは霊体化してる）ので、発進。
どうやら、セイバー自身が道を知ってるらしいので、特に案内は必要ないらしい。

……それにしても、この車……

「無駄に豪華な車だこと……あてつけかっての……」

隣で、遠坂が呟いているように、ちょっと見ただけでも凄く高いっていうのがわかる。

何て言うか……その、靴脱がなきゃいけない気分になるというかなんというか……

『……単純に、こんな車にでもしないと他の車に突撃喰らうからなんだけどな……』

どこからともなく、クロウの声が聞えてきた。

微妙に気になる内容なのでこっちからも聞いてみるかな?

「どういうこと?」

『ん?聞えてたか・・・

ほら、流石にこんな車に追突するような猛者はそういないだろ?って思ってなぁ・・・

俺って、基本運無いし。ステータスに直すとＥ－だし。

最初の車、買ったその日に大破したし。』

悲しい理由だった!?

『ついでに、それでも妹とか乗せるの不安だったから完全防弾、防火、防水に対衝撃と付けられる限界まで付けてみたんだよ。

そしたら、下手な装甲車より遥かに頑丈になったな。

工場の人に笑われたなぁ……“ＨＥＹ!大統領でも乗せる気か?

”って……』

クロウ……

『ああ、そういや銀行強盗とカーチェイスする羽目になったっけ……
あんときゃ焦ったなぁ……なんで日本でショットガン入手できんだよ、あいつら……』

「もういい！もういいから……」

色々と、泣けてくるから……

「どうしたの？志保。」

と、この車の真実を知ってちょっと悲しんでたら遠坂に声をかけられた。
どうやらクロウの声は私にしか聞えてなかったらしい。

「うん……クロウが、この車を買った理由を聞いてね……」

「どんな理由なんですか？こんな、態々外車にしなくたって良かったと思うんですけど……」

桜が聞いてきたので、答えるとしようか……
決して、クロウが当てつけとかそういう理由でこの車を選んだ訳じゃないって・・・

「うわ……なんか泣けてきた……」
「切実、だんたんだなぁ・・・」

「何がどうなったらそんな目に……」
「以前言っていた通り、壮絶な人生ですね……本当に一般人だったのですか？」

『・・・同情されると、余計にキツイんだが・・・』

クロウに聞いた内容をそのまま答えたら、車内に微妙な空気が流れた。
っていうか、クロウの幸運って、本当にＥ－だったんだろうか？
いくらなんでも振り切り過ぎでしょ……
ん？アーチャーが幸運Ｅだったはずだから……
自動的に私と士郎の幸運もＥになるのか！？

「……ねえ、クロウ？確か、クロウって私達のステータスも視れるよね？」

『ん？ああ、視れるけど……それがどうかしたか？』

少し気になるので訊いてみよう。

「クロウから視て、私と士郎の幸運ってやっぱりＥなの？アーチャーがＥだったし……」

『……いや、Ｅじゃないな……ってか知りたいのか？』

ん？Ｅじゃないの？
余計に気になるな……

「うん。
ほら、自分のことは把握したいし・・・」

『・・・志保と士郎の幸運は“Ｅ－”だな。
数値上は今の俺と大差無いぞ・・・』

う！？
ちょ！？い、嫌な予感しかしないよ！？

聞かなきゃ良かったかなぁ・・・

『俺の中で、“生前”よりも運は上昇してると思ってる。
多分サーヴァントになってから補正がかかったんじゃないか？
お前でＥ－だと、俺は下限ぶち破って－（マイナス）の域に入ってた気がするぞ……
まあ深く気にするな。占いと大差ないだろ、多分。』

多分って・・・
それに、それは慰めっていうより自虐ネタだよ、クロウ・・・

－－－（この時、私は知らなかったけど……そう遠くない未来に、クロウの生前の幸運は本当にマイナスの域に突入してたって事を後に知ることになる。）

「志保？なにさっきからブツブツ言って落ち込んでるの？
またクロウの奴がなんか言ってたの？」

と、ちょっとブルーになってたら遠坂に声をかけられた。

「ああ、うん……私の幸運のステータスを教えてもらったんだけど……
占いみたいなものだから気にするなって言われたとこ。」

「あ、そういやアイツは自分のスキルでステータス視れるんだっけ？
ちょっと面白そうね……私達のステータスってどうなってるかわかるか訊いてみてくれる？」

「そうですね・・・わたしのもお願いしていいですか？」

「クェ！」

その後、クロウにステータス視てもらってた事を教えたら、遠坂が占いみたいなものって言葉に反応したのか自分達のも訊いてみて、と言ってきた。
桜やココも気になるらしく尋ねてきた。

――この後、クロウが若干悪乗りしてこの場の全員分教えてくれたけど・・・結果は以下の通り。

私：Ｅ－（鈍感Ｂ↓Ｃ・乙女の感Ｄ・女の感Ｅ）
士郎：Ｅ－（鈍感Ｂ↓Ｃ・女難の相Ａ）
遠坂：Ｃ（黄金率－Ｃ・金運‐・乙女の感Ｄ）
桜：平均Ｄ＋＜Ｅ－～Ｂ＋の間で常に変動＞（乙女の感Ｂ）
ココ：Ｄ＋＋＋（乙女の感Ｅ）

なんか、よく視たら妙なスキルを持ってたらしく、それも教えてくれたけど……
それについて一騒動あった。

詳しく教えてくれたけど、こんな感じで・・・

鈍感Ｃ

・異性からの好意に気づき難くなる。
ランクＣだと直接告白でもされないと気が付かない。
人生経験及び指摘されることによりランクが下降する。
自覚することにより一時的に消滅する。
自分自身の、自分自身への評価が下がるたびにランクが上昇する。

乙女の感Ｅ・Ｄ・Ｂ

・自分が好意を持っている相手に対する直感。女性専用スキル。
好意を持っている相手の身に危険が起きたり、その相手が自分以外の異性に好意を持たれるとそれを察知できる。
ただし、このスキルが上昇し過ぎると相手と結ばれる確立が下降し、嫉妬深さが上がってヤンデレ化が進行する。
ランクＣ以上でスキル鈍感所持者との恋愛成就率が下落する。
ランクＡを超えるとスキル“ヤンデレ”（クロウ命名）に変化し、愛故に殺意を持ったりするようになる。
人生経験によりランクが下降する。
自分が好意を持つ相手が他の異性と仲良くすればするほどランクが上昇する。

女難の相Ａ

・読んで字の如く女難の相。男性専用スキル。
ランクＡだと修羅場に陥る確立が上昇し、肉体的または精神的ダメージを受ける。
スキル鈍感の所持により精神的ダメージは軽減可能。ただし修羅場発生確率が倍加する。
人生経験によりランクが下降する。

自分自身の、自分自身への評価が下がるたびにランクが上昇する。

この三つは、今後の人生により消滅する可能性が高いらしい。
（アーチャーが持っていないことから。）

女の感E
・女性専用スキル。
好意を持つ相手に不都合な事態の発生や等を察知する。
ランクの上昇により、意中の相手の危機に応じて自身のステータスを上昇させることが出来る…らしい。
ミミックの“人間観察A”、クロウの“鑑定士A＋”を持ってしても全容の解明は不可能らしく、謎に包まれたスキル。
恐らく、“乙女の感”の完全上位互換ではないか？とのこと。

黄金率－C
・身体的なバランスの事ではなく、人生においてどれだけお金が回るかを示す。
ランクCだと中堅会社の社長クラス・・・だが、反転しているため、一生お金に困り続ける能力に変化している。

金運-
・人生において、一時的にせよ大金を手に入れる確立を示すスキル。
宝くじの一等を当てるには、金運A以上が必要とされる。
本来、全ての人間が持っている基本スキルのため普通は表示されない。
だが、-（ハイフン）が付く、という異常事態のためクロウが察知できたようだ。
-（ハイフン）は絶対値が0を示す記号、即ち“絶対に”大金を手にする事がないことを示す。

クロウの説明によるとこうらしい。
説明の途中で桜が「どういうことですかっ！？」と絶叫したり士郎が「どういう意味だ……それ。」と呟いたり……
ココがうんうん、と納得したり……

金運と黄金率の説明を終えた途端に遠坂から殺気が噴出して、車内が一気に殺伐とした空気になったり……

その様子を察知したのか、クロウが『半ば冗談だったんだけどな……予想外の反応……』などと呟いていた。
・・・クロウ、後でどうなっても知らないからね？

そういえば、セイバーだけが微妙に関係なさげな顔して運転してたけど……

『セイバーに、何故かスキル：女の感Eが追加されてる。』

って言ってたっけ……
後で訊いてみよう。

もしかしたら、“アレ”が女の感の習得条件かもしれないし。
私とセイバーの共通項っていうと、今のところそれくらいしか思いつかないし。

・・・

「……ここからは徒歩ですね。結界がありますし。」

と、車内の殺伐とした空気に耐えていたら目的地に着いたらしく、車が停止した。

そして車から全員が降りたところでアーチャー、ライダー、クロウが実体化。
車を“幻想の道具欄”に収納して、クロウが声をかけてきた。

「さて、と。士郎、案内頼むぜ？」

声をかけられた士郎は軽く頷くと首を縦に振る。

「ああ、じゃあ行こう。」

そう言った士郎と、その隣を歩くセイバーを先頭に森へと足を踏み入れた、が……

「結界が……無い？」

セイバーが足を止め、そう呟いた。

「なんですって？」

それに最初に反応したのは遠坂。
それを聞いてアーチャーが表情を変え、森に足を踏み入れる。

「……確かに、結界が無くなっているな……
破られた、と見るべきか。」

アーチャーの言葉を聞いた瞬間、嫌な予感がした。

そして……

＜シャン！＞

――『ＬＵＮＡ』

真後ろから、“幻想の道具欄”のエフェクトが聞えると同時に、微妙に野太い男性の声が響く。

驚いて振り向いたら、そこにはあのオフロードバイクにまたがったライダー装備のクロウがいて、左手に一瞬だけ黄色い……ＵＳＢメモリ？が見えた。

「嫌な予感がする。
ちょっと先行してみる！士郎、簡単に方角を教えてくれ！！」

そう言いながらクロウはバイクのエンジンをかける。
その手には、もうあのメモリ？はなくなっていた。
・・・見間違いかな？

「あ、ああ……このまま真っ直ぐだけど……」

と、士郎が指差した瞬間、クロウのバイクは走り出していた。
――ああ、そういえばあのバイクはどんな悪路も走破できるようにしたって言ってたっけ・・・

じゃなくてっ！？

「ク、クロウ！？何でそこで一人で行っちゃうのさ！？」

急いで呼び止めるも、止まる気配を見せずに走り去るバイク。
ぽか～ん、としてたらまた真後ろから……
「ク、クェーーーーーー！！」
と、ココの叫びが聞え、また振り向くと……
「クェ！！」
ーーーなんか、一気に大きくなったココがいた。
黄色い体色とつぶらな瞳はそのままに、以前見たライダーの天馬に近いサイズになってました。
いつのまにか、あのローブはなくなってたけど。
そして、ココ（大）は桜の傍に行ったかと思ったら嘴でつんつんと桜をつつき。
「クェ。」
自分の背に乗れ、というような仕草をした。
「え？の、乗るんですか？」
と、桜が困惑していたら、ライダーが桜に告げる。
「昨日の内に話していたことです。
この中で、もっとも機動力の無いサクラを自分の背に乗せて足になる、とココが言っていました。
それよりも急ぎましょう、あの金色が襲撃しているとしたら、い

くらミミックでも足止めも出来ないと言っていましたし。
ではココ、お願いします。」

そう言って、ライダーは桜をココの背に乗せ、自分は走り出した。

――ライダー……あの金色って、ギルガメッシュのこと？

「くっ！シロウ！私も先行します！この森の内部は一応“前回”で把握しています！！」

そう言って、セイバーも武装して走り出す。

「アーチャー！」
「言われずとも！！」

遠坂が言い切る前に、アーチャーも駆け出す。

「――同調、開始（トレース・オン）！！行くぞ志保！！」
「Ａｎｆａｎｇ――置いてくわよ！？」
「クェ！」
「わわっ！？ココさんちょっと速いですよ！？」

と、状況についていききれない内に全員が走り出していた。

「ああ～っ！！もうっ！！！同調開始！！」

それを見て……半ば自棄になって魔術回路を起動させ、全身に魔力を走らせて全力疾走。

いろいろと文句は言いたいけど、今はそんな場合じゃない。

イリヤに危険が迫ってる可能性が高い。

今は……急ぐ！！

「■■■■ーーーーーー！！！！！」

森を走って数分……前方から聞える咆哮。

間違いない！バーサーカーの声だ！！

そう思い、足を速める。

すると、広場のような空間が前方に見え……その中には……

「■……■■■■ーーー！！！！！」

銀色の鎖に縛られたまま、全身を刃に貫かれたバーサーカー。

「バーサーカー！！なんで！？なんで令呪が効かないの！？」

その背に護られるような位置にいて、怯えた声を上げるイリヤ。

「くっ!?これは……」

そして、バーサーカーを護るように立ちながら、何かに驚愕したような表情を浮かべるセイバー。

「どういうことだ……?」

セイバーの隣で、若干、呆然とした様子のアーチャー。

「……?……!?」

私達の前で、驚愕が隠せないといった様子のライダー。

その先には……

「……フン、令呪による転移など、この我(われ)が認めん。」

一一一穢れ無き白金色の鎧。

「貴様……何者だ!?」

「む?セイバーか……」

一一一黄金の輝きを放つ金糸の長髪。

「まさか……貴様……」

「そして贋作者……」

――背後に浮かぶ、無数の宝。

「一体……どういうことですか？」

「蛇、か……」

――宝石のような輝きを放つ真紅の瞳。

「先ほど跳び蹴りをしてきおった男もいたな、そういえば……」

――そして、どっかで聞いた様な口調の……

「貴女、なんなの！？こんなに“持ってる”サーヴァントなんか知らない！なんなのよ！？」

「そこの騎士王達は察したようだが、な……」

――“女性”が、そこに立っていた。

「我はギルガメッシュ……英雄“女”王とでも呼ぶが良い……
許す、笑いたくば笑うがよい……」

――その女性は、心底疲れきったような口調で、半ば投げやりにそう答えた。

……へ？

私は、目の前の光景が信じられなかった。

「どうした？笑いたくば笑え、と言っておるのだぞ？
遠慮はいらん、さあ、笑え……」

目の前で自嘲の笑みを浮かべる美しい女性。

――彼女は、自分をギルガメッシュと名乗った。
――二日前、私達全員を圧倒したサーヴァントと、名乗った。

「あ、貴女が？あの英雄王？な、なんの冗談ですか？」

ああ、セイバーもテンパってる。

「……コトっ…！コっ…！！えええい！！忌々しい！！！」

何かを喋ろうとして、途中で“何か”に遮られている様子。
いや、本当に何があったのさ……以前の威厳というか威圧感が殆ど感じられないんだけど……

と、思っていたら凄まじい怒気を発してこちらを睨んできた。

「気は乗らぬ……気は乗らぬが……殺す！！
憎むのならば我ではなく今我に出会ってしまった己の不運とコトっ…！マっ…！！ええい！！！トチ狂った神父を憎め！！！」

訳のわからないことを言いながら背後の宝具をセイバー達や私達に向けてくる英雄女王（仮称）。

「くっ！？アーチャー！守りをお願いします！！ライダーは援護を！！シロウ達はイリヤスフィールを！！」

そう叫び、不可視の剣を構え全身するセイバー。

「――投影（トレース・オン）、開始。
ちっ、ミミックの奴はどこに行ったんだ！」

手元に夫婦剣を投影しつつ、クロウの不在を愚痴るアーチャー……ってそういえば！？

「クロウ！？そういえばクロウはどこ！？」

気配は……森の中！？どうして！？

ラインからクロウのいる方向を探ると、英雄女王を挟んで対面の森の中から存在を感じた。

「あの物真似師だったら先ほど吹き飛ばしたわ！！――“王の財宝”！！」

が、それを確かめる前に降り注ぐ魔弾。

「っ！投影、開始！！」

「志保！投影（トレース・オン）、開始！！」

それを、咄嗟に投影したバーサーカーの斧剣で防ぐ。

士郎が合わせてくれたおかげで、どうにか防げた。

正直、気になって仕方が無いけど――今はイリヤを助けないと！！

色々な思いを振り切って、今はイリヤを助けることに集中しよう。

そう決断して、構えをとって、イリヤの元に走り出した――

――ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

アインツベルンの森の中、魔弾の雨が降り注ぐ。

その魔弾の中を、銀色の鎧を纏う騎士が駆け抜ける。

対するは赤い削岩機のような“剣”を持ち、それを迎え撃つ女王。

「くっ！前回のダメージは残っていないようですね！！」

「フン、そういう貴様も魔力は十全のようだな！！

「――だが、今回は我に殺された方が貴様らの為だぞ！セイバー！！」

騎士は、前回の戦いで与えたダメージが消えていることに一言言いながら切りかかる。
女王は、騎士の魔力が満ちていることに反応しつつその剣閃を受け止める。

「――全投影、連続掃射（ソードバレル・フルオープン）……！！」

その間も降り注ぐ魔弾を、全てを把握できる位置に立ち、同量の剣弾を持って打ち落とし続ける赤い弓兵。
そして、それでも防ぎきれなかった魔弾は……

「投影、完了っ！！ライダー！！」
「ふっ…！！」

赤い髪の少女は、鎖に拘束された狂戦士の影に立ち、ただひたすらに剣の贋作を生み出し続ける。
前回の戦いで物真似師がやったように、赤い髪の少女が生み出す贋作を、紫の騎兵が投げつけて防ぐ。

そして、その狂戦士の影では……

「イリヤ！大丈夫か！？」

赤い髪の少年が、雪のような少女に駆け寄り、無事を確認する。

「シロウ……？なん、で……っ！？逃げなさい！！アレにはバーサーカーも歯が立たなかったの！！さっき、ミミックも吹き飛ばされ

ちゃってたし！！」

その姿を見て、少女は一瞬呆けた直後に叫ぶ。

逃げろ、と。

最強を誇る己の従者ですら歯が立たないのだから、と。

けれど、それを聞いた少年は怒りを浮かべて怒鳴る。

「ざっけんな！！イリヤを見捨てて逃げられるかよ！！」

見捨てられる訳が無い、と。

「っ…！士郎！早く手伝って！！私一人じゃ追いつかない！！」

それを横目に見つつ、赤い髪の少女は叫ぶ。

手が足りない、と。

「わかった！！……イリヤ！話は後！！とりあえず、今を切り抜けるのが先決だ！！

……に、してもクロウの奴！！吹っ飛んだって早く戻ってこいってての！！！」

「っ……バカ……」

少年は、己の妹を補佐するために傍らに立つ。

その姿をみた雪の少女は、泣き笑いのような表情を浮かべた。

そして、その姿を見て……

「まあ、言いたいことは解るけど、このままじゃジリ貧よ？

今回は、アーチャーの固有結界を支えるのは無理っぽいし……出来て、一、二分が限界よ。
どうする？」

これまで、殆ど発言していなかった赤い服の少女が発言。

……そう、今回は前回の一戦よりも状況が悪いと言ってもいい。
前回はいた槍兵もおらず、魔力を回復できる幻想の回復薬も無い。
さらには、その回復薬を持っていた物真似師も、この場から吹き飛ばされている……

前回はいなかった狂戦士がこの場にいるが……狂戦士は神縛りの鎖に縛られ、行動を封じられている状態。
戦力には出来ない。
しかも……

「ライダーのペガサスも、まだ怪我が治ってなくて……」

こちらの最大の攻撃、“約束された勝利の剣”に、状況次第では勝利するやもしれない攻撃……
“騎英の手綱”による突撃も、その要たる天馬が呼べず、使用不能……

王女の宝具、“王の財宝”に対する対抗手段、赤い弓兵の固有結界“無限の剣製”も、魔力の都合上ほぼ使用不能といってもいい。
使い手候補の兄妹も、魔力が足らず、結局は使用不能のようだ。

「このままじゃ前回の焼き増しになるわね……
せめて、ライダーとアーチャーが攻撃に専念できれば……
あ～もうっ！なんでこんな時にクロウがいないのよ！！勝手に先

行した挙句に戦線離脱って、洒落にならないのよ！！」

赤い服の少女は、その場で頭を抱えて唸り始める。

それを見た黄色の鳥が、まぁまぁ、とでも言いそうな態度で赤い服の少女の頭をぽんぽん、と叩く。

そして、その赤い少女が何かに気が付く。

――今、自分の頭を叩いたのは誰だ？

――黄色い巨鳥、チョコボ。

その大きさは騎兵の天馬と並ぶ。

以前聞いた内容だと……確か、人を乗せたまま物凄い速度で地を駆ける生物ではなかったか？

現に、今まさに少女を乗せているし……

「ねぇ、ココ？アンタ、後二人くらい乗せて走れそう？」

「クェ？クェェ……クェ。」

尋ねられた巨鳥は、首をかしげながらも少し考えて、その翼を赤い髪の兄妹に向けた。

「え？何？士郎と志保は？」

その直後に首を横に振る。

「無理？」

そして、今度は、赤い服の少女に向けて翼を向ける。

そのまま、その翼を雪の少女に向けた。

「遠坂先輩と、イリヤさんは？」

今度は首を縦に振り、顔を己の背に向ける。

「乗れる？」

「クェ！」

少女達の反応は正しかったらしく、巨鳥は一声鳴いて返事をした。

その返事を確認した赤い服の少女は……

「よし……ココ？私とイリヤスフィールを乗せなさい！！」

何かを思いついた表情で、巨鳥に指示を出した。

それを聞いた巨鳥は……

「クェェ……」

心底嫌そうに鳴いた。

ーーーここで、一つ、この巨鳥の相棒である物真似師が失念していたことがある。

この鳥……チョコボは、確かに人を乗せて走る事が出来るし、そういう目的で飼育されることもある生物である。

しかし……とある作品におけるメスのチョコボには、一つの習性が

ある。
一一一人を乗せるのを拒絶するのだ。
このチョコボは、確かに人間の魂が入っているが……人を乗せられる形態に“トランス”している場合、その本能が刺激されるらしく…
この時の鳴き声の意訳は、こうなる。
（恨むよあいぼ～う……）

一一一時は少し遡り、その相棒は……

「っつつ……派手に吹っ飛んだな……」

森の中、自分の身体が薙倒した枝や木を見つつ、呟いた。
一直線に薙倒されたソレは、自分が吹き飛ばされた勢いを示す。

「ひっさしぶりに吹っ飛ばされたけど……流石に痛ぇな。」

首を鳴らしながら、彼は立ち上がった。

一一一彼は、“生前”相当な回数自動車に撥ね飛ばされている。
それ故に、彼は空中での姿勢制御や受身、衝撃の分散に相当な自信があるのだが……

「わざとダメージ受けなきゃならんってのも、なかなかキツイもんだな、と。」

彼は、わざと殆ど受身を取らなかった。
己の“目的”のために。

「に、しても……予想外に早く“条件”を満たせそうだな。
わざわざ、相棒とアイツをつれてきて正解だったぜ。」

自分に付いた葉や小枝を払いながら、彼は呟く。

「……しかし、アイツの身に何が起きたんだろうな……何故に女になってたんだ？
アイツ……ステータスは変化してないみたいだったが……
令呪の縛りが見えたしな……？」

どうやら、彼にとっても予想外の事態は発生していたようだ。
若干疑問を浮かべるが……

＜ドドドドドドドン！！！＞

「っ！？急がねえとな……戦闘が始まってる。
頼むぜ、相棒……作戦通りに、な……」

聞えてきた魔弾の音に表情を引き締め、彼は走り出した。
己が作った、木々の隙間を……

――そして、時は交差する。

「走ってココ！！もっと速く！！！」
「コ！ク、クェェェエエエエ！！！！！？」
「「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」」

森の中を巨鳥の背に三人の少女が乗り、走っていた。

赤い服の少女の思いついた作戦はこうだ。

――『私達マスターが全力で戦線を離脱して、サーヴァント達の負担になるのを回避する。』

そのために、今……少女達は、巨鳥の背に乗っているのだ。

その作戦を聞いた巨鳥は、若干慌てて首を横に振ったが……

――『ただでさえアンタの相棒が役立たずっぷりを披露してんのよ？これ以上醜態を晒す気かしら？』

と、凄まじいプレッシャーを放ちながら言われ、目に涙を浮かべながら頷いた。

そして今……

「む？逃がさん！！」

女王に発見され、一気に魔弾を放たれる。

そして、降り注ぐ魔弾の雨を……

「回避！！」

「ク、クェェェエエエエエエエエ！！！！！」
「「いぃゃあああああああああああ！！！！！！！？」」

その走力をもって回避する。
……後ろ側に乗っている二人の少女からすれば堪ったものではないが。

逃走自体は成功していないが、女王の注意を逸らすことには成功。
それ故に……

「ハァアアッ！！」

剣の騎士が、女王に切り込むことができる。

「ッチィ！！」

女王もその対応をするが……

「ーーー投影、開始（ブレイド・オフ）！！」

弓兵が、弓を持つ余裕を生み出す。
それから放たれる矢がーーー

「クッ！贋作者か！？」

女王の体勢を崩す。
そして、剣が女王の首を狙って……

「“天の鎖”よ！！」
「くっ！外しましたか！」

振り下ろされる前に、神縛りの鎖が伸び、女王を引きよせ回避する。

女王は、そのまま距離を取ろうとして……

「っハッ！！」

「ぐっ！？貴様、物真似師！？」

――横から跳んできた黒コートの男に衝突、鎖から手を離し、地面に着地した。

「ミミック！？貴方は、今まで何をやっていたのですか！？」

その姿を見た騎士が声を上げるが……

「貴様！！一度ならず二度までも王を足蹴にするか！！」

「残念！これで三度目だ！！

……女王に対して、でいうなら二度目かもしれんが。」

女王の怒りの声に阻まれた。

女王の怒りを正面から受けた物真似師は、逆に彼女を挑発する。

すると、女王は目を細め……

「貴様……もう許さん！！今度こそ死ぬがいい！！“王の財宝”！！！」

魔弾を、物真似師に向けて放つ。

「貴様！出てきたかと思ったらすぐにそれかっ！？」

ソレを見た弓兵は、無数の武具を放ち、魔弾を迎撃するが……

＜ドガッ！！＞

「クロウっ！？」

彼は、魔弾の一つに“自分から”当たり、吹き飛ばされた。

そのまま、鎖で縛られた狂戦士の目の前に転がってきた。

その姿を見た彼の主は悲鳴をあげる。

「アンのバカ！？どこまで役立たずな訳！？」

赤い服の少女は、彼に悪態を吐く。

その場にいる、誰もが彼の行動を責めようとして……

「フン……ついに王の裁きを受ける気になったか。」

女王が、若干満足気に声を上げた瞬間……

「ーーーーーやっと、だ。」

ーーー彼の身体から、赤い“何か”が、炎のように噴出した。

「ク、ククククク……お前ら……頭悪いのか？
散々好き勝手言いやがって……この俺が、何の意味も無くダメージを受ける理由がねぇだろううが……」

そして、ゆらり、と……その“何か”が消えると同時に立ち上がる。
その目元は、帽子に隠れて伺うことができないが……
間違いなく、“ワラッテ”いた。

「ク、クロウ……？」

「クカカ……成る程な……これが“限界越えし激情の奔流（リミット・ブレイク）”か……
散々痛ぇ思いをしただけのことはありそうだな。」

クカカ、と……普段の彼からは想像もつかないような台詞を口走り、
ギョロリとその視線が女王を見据える。

「何もかも……吹っ飛ばす！！！」

そして、その左手を己の眼前に掲げた時……

ーーー眩い、金色の輝きが森を照らした。

「なっ！？」

「そ、それはっ！？何故貴様がその剣を！？」

彼の手に出現した剣。
それは、金色の輝きを放つ剣。

「う、嘘……それが、アンタが隠し持ってた宝具だっていうの！？」
「セイバーの剣と……同じ！？」

一一一騎士王が所有する、星が鍛えた聖剣と、同じ輝きを放つ剣。

彼は、周囲の驚愕を無視し、剣を持つ左手から力を抜き、自然に下ろして……

しゃん、という音と共に、右手に黒い“何か”を取り出して、己の胸の前に構えて……

一一一『ＪＯＫＥＲ』

その“何か”のスイッチを押した。

「クェエエエ！！！」
「きゃっ！？」
「ちょ、どうしたのよココ！？」

それにより響く電子音声に反応して声を張り上げる巨鳥。
巨鳥は、白い少女を振り落とす。

そして、物真似師は手に持つ“何か”が再び収納されると同時に、剣に右手を添える。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

そして、剣を深く握りこむ。

瞬間、剣から金色の輝きが解き放たれ、周囲を照らす。

「なっ！？正気か貴様！！そんな位置で使ったら……！！」

弓兵の制止の声が響くが、それを無視して深く、深く柄を握りこむ。

「クェエエエエ！！！！」

「きゃ！？バ、バカ！？止まりなさい！！！」

そして、その瞬間に黄色い巨鳥が走り出す。

――その背に、二人の少女を乗せたまま、“射線上”に向けて。

「なっ！？サクラーーーーーーー！！！」

それを目撃した騎兵が、己の主を救おうと駆け出して……

「くっ！？貴様！？“天地乖離す”――」

女王が、己の宝具を解放しようとして……

赤い髪の少女が、己の従者の凶行を止めようとして……

――制止は届かず、その剣は振りぬかれた。

左から、右への切り上げ。その一閃が走る瞬間、物真似師は己の最

終宝具の真名を開放した――！

「“約束された（エクス）――

――勝利の反故（カリバー）”！！」

「・・・は？」

それは誰の声だったのだろうか？
その呟きも、何もかも、極光の斬撃が飲み込んだ。

一一一人の、“魔女”としか形容できない格好をした女性が、森の方から魔力の余波を感じ……

「どうやら、計画が発動したようね……
さて、私も動くかしら……アサシン？宗一郎様に怪我一つでも負わせたら……解っているわね？」

そう、呟いた。
そして、その傍らに“何時の間にか”存在していた群青色の侍が呟く。

「ふむ……それは構わぬのだが、確か定霧の奴めの計画では、特に動く必要は無いのでは？」

そう、物真似師が気が付かぬ内に、“侍”は“計画”を聞いていた。
……他人に話すような、下種な趣味は持ち合わせていないが。

そして、自身が動く必要性を問われた“魔女”は……

「ええ、そうね……けれど、ね？
女の人生を狂わせるような存在を、この私が許すとでも思って？」

そうとだけ言い残し、その姿を消した。

その場に残された“侍”は呟く。

「花に集る害虫のような存在、否、正しく蟲だったか……確かに無粋よなぁ？」

その呟きは風に呑まれ消えてゆく。

風が止んだ時、その場には誰もいなかった。
まるで、そもそも存在さえしていなかったように……

“第十八話／「暗躍のM／幻想の切り札。」”（後書き）

※途中にあるクロウの“悪乗り”で語られたステータスは、英雄王の“慢心”みたいなもの、と考えてください。

“第十九話／「暗躍……の解答編。」”（前書き）

英雄女王と英雄王の関係は、記憶が繋がってる他人といった感覚です。
英雄王と英雄王子の関係みたいなもの、とイメージしていただければ……

“第十九話／「暗躍……の解答編。」”

――クロウ？とりあえず――――正座。

“第十九話／「暗躍……の解答編。」”

――out side

極光が収まり、光が収まった時、そこには……

「くっ……な、なんだ今のは……ん？」

巻き込まれたはず女王。

「っ……何……？ダメージが無い……なっ！？」

同様に、飲み込まれたはずの騎士。

「……クェ。」

自ら射線に飛び込んだ巨鳥。

「……？ちょっと熱かっただけ……って嘘っ！？」

巨鳥もろとも、飲み込まれた黒い髪の少女。

「ま、まぶし……ってえ？え？き、き、き……」

そして、青みがかった髪の少女が――

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！？」

――無傷で、存在していた。

「桜！大丈夫かってぶはっ！？」

「み、見るなバカ士郎っ！！！？」

――ただし、全裸で。

そもそも巨鳥は服を着ていなかったし、女王の手には削岩機じみた剣、騎士の手には不可視の剣がそれぞれ握られていたが。

それに一同が混乱した瞬間、今度は――

「あ――れ――――？」

「サクラッ？サクラーーーー！？」

――青みがかった髪の少女が倒れた。

「相棒！！」

「クェ！！」

その瞬間、巨鳥は己の相棒に向かって走り出し、物真似師はその手に薬とオレンジ色の鳥の尾を取り出した。

巨鳥が物真似師の元に辿り着くと同時に、物真似師は少女の胸にオレンジ色の鳥の尾を突き立てつつ、口に薬を一気に流しこんだ。
オレンジ色の鳥の尾が光になって消滅し、薬が空になった時……

「ケホッ！ケホッ……な、なんですか一体……」

倒れた少女はすぐに目を覚ました。
その様子を見て、物真似師はほっと息を吐いて……

「ふぅ……フェニックスの尾は無駄になった、か……ま、万が一があったしな。」

などと呟きながら帽子を目深に被りなおし、己の視界を塞いだ。

物真似師本人はなにやら安心した様子だが……

「――貴様、女王の衣を剥ぎ取るなどとは……万死に値する。」
「――ミミック、説明を要求します。」
「――で？これは一体全体どういうことなのかしら？定霧さん？」
「――説明を、していただけますよね？」
「はっ！？――これは、どういう、こと、です、か？」

――当然、女性陣の怒りからは逃げられない。

そして……

「うぅ……志保、何もここまで…「一一一クロウ？これはどういうことなのかな……？」…無視か。」

己の兄の顔面を思い切り殴り、ダウンさせた少女……

つまり、物真似師の主が額に青筋を浮かべて拳を握り締めていた。

……ダウンさせられた少年は、妹に抗議の声を上げながらも、黙殺されてうなだれた。

「勿論説明はする、が……セイバー、ついでにギルガメッシュ、自分の武装を再生させろ。

んで、桜と凛、それにココはこれでも着といてくれ。」

物真似師は“幻想の道具欄”から衣服の類を取り出し、それを少女達（と相棒）に渡しながら、サーヴァント達に武装を再生を勧める。

「む……ギルガメッシュ、今は休戦しましょう。」

「そうだなセイバー、今はこの無礼者の処刑が先だ。」

「……協力しましょう。」

「ったく……ああっ！？宝石も消し飛んでる……ふざけた理由だったら殺す……！」

「うぅ……先輩に見られた……」

衣服を消し飛ばされた四人の女性は抗議の声以前に、殺意を走らせながらとりあえず己の衣服を再生させたり着込んだりして……

巻き込まれなかった騎兵も、物真似師の処刑の執行を誓う。

「コラーーーー！！この駄鳥！！か弱いレディを振り落とすなんて

どういうつもりよ！！！」
「クェ！？＜パァッ＞ご、ごめんなさいイリヤさん！？流石にアレに巻き込むのが忍びなくって！？でもダチョウって言うな！！！」
「っ！？駄目な鳥を駄鳥って言って何が悪いのかしら？」
「それでもダチョウだけは受け入れられない！ボクはチョコボだ！！バカとかだったら甘んじて受けるけど、ダチョウだけは許せないんだ！！」

白い少女が、顔に怒りを滲ませながら巨鳥に文句をぶつける。
すると巨鳥はその身体から光を放ち、黄色い髪の少女に姿を変え（トランスし）、白い少女に謝罪する。
しかし、呼び方に納得がいかなかった“少女”は、その件に対して抗議する。
白い少女はその光景に一瞬驚くも、言葉が通じることに気が付きそのまま舌戦を繰り広げる。

「クロウ？とりあえず――――正座。」
「……はい。」

赤い髪の少女は、己の従者を正座させる。
物真似師は、己の主に逆らえずにその場に正座。

「なぁ、バーサーカー……俺達、忘れられてるのかな……」
「■■■……」

己の妹によってダウンさせられた少年は、隣で鎖に縛られたままの狂戦士に声をかける。
狂戦士は……微妙に情けない唸り声をあげ、ただ、瞳を閉じていた。

――その光景を見ていながら、ただ一人完全に巻き込まれていない青年……弓兵は、一言だけ呟いた。

――なんでさ。

と……ただ、その呟きは木々の葉のざわめきにかき消され、誰の耳にも入ることはなかった。

――sideクロウ

「・・・で？どういう遺言を残す気かしら？」

「クロウ？弁護はしないからね？むしろ判決を下すから。」

「……せめて、裁判くらいはやって欲しい。

そして凛、お前に関しては“不幸な事故”だった、としか……」

＜ドギュンドギュンダギュン！！＞
「ぐっ！？ごっ！？ぬあっ……」

「何か……言ったかしら？」

「……せめて、理由くらいは聞いてくれたって……」

現状、森の中で裁判が開かれている。

被告：俺
検察：凛、桜
被害者：凛、桜、セイバー、ギルガメッシュ（女）
傍聴席：士郎、バーサーカー、イリヤ、アーチャー
執行人：凛、桜、ライダー、セイバー、ギルガメッシュ（以下略）
裁判長：志保

（因みに、凛と桜は俺が持ってた灰色のシャツとジーンズを着ている。
セイバーはいつもの鎧姿。
ギルガメッシュは……いつぞやの金色の鎧、上半身は右手しか鎧がなく、黒いシャツ（ヘソ出し）姿だが。
……どうやら、前回の破損がまだ尾を引いているらしい。）

「判決、極刑……クロウ、来世でまた逢おうね……」

いきなり閉廷した！？

「待った！！異議あり！！！せめて証言くらいさせてあげてよ！？」

と思ったら、唯一の弁護人（弁護人：ココ人間形態）が異議を唱えてくれた。

「まぁ、それ位の慈悲はかけてあげましょうか。
では、早く、それでいて簡潔に事情を説明しなさい。
……内容によっては、優しく殺してあげないこともないですから。」

それに、一応反応してくれたのがライダー。
ただしマスクの上からでも相当な怒りが感じ取れる。

ってか、その言い分だと何言っても死刑かよ……

……まぁ、知った責任は果たせたし、一応悔いは少なくて済むかもなぁ……

「そういう訳だから、言い訳をどうぞ、クロウ。」

うぅ……志保が冷たい……

ふぅ……説明、頑張ってみようか。

「まずは……そうだな、昨日話にあがった“俺の計画”について説明しようか……
の、前に……桜、お前……身体に異常は無いか？」

一応確認をとらないとな。
俺の“観察”によると異常は無いはずなんだが……

「？そういえば……なんか、身体が軽いような気が……？」

どうやら、快調のようだ。
よかった……完全成功だ。

「……お前に巣くってた“害虫”は完全に駆除した。
俺が言えるのはそれだけだ。」

「え……っ？害虫……！まさかっ！？気が付いて……！！」

俺の言葉に桜は一瞬呆けたが、すぐに思い至ったようだ。

「一つだけ安心しろ……俺が喋ったのはココとキャスターだけ。
それ以外には一切ばらしていない。」

顔が青ざめたので、少しだけ安心させようと声を掛ける。

「ついでに、俺が飲ませたのは“エリクサー”……“幻想の道具欄”最強の回復アイテムだ。
お前の身体から“怪我”を取り除き、ついでに魔力を完全回復させてある。
・・・“蟲食い”も、治ってるはずだ。
まぁ、自分で確認しとけ、家に帰ってからな・・・」

多分、女性にとって“大切なもの”も再生してると思う。
まぁ、流石に“ソレ”を鑑定するのはデリカシーってもんが無さ過ぎる。いまさらだが。

「あ、あ・・・う、そ・・・え？じゃ、じゃあ・・・」

「ついでに言っとくが、深い内容は俺も、ココも、勿論キャスター

も墓通り越して輪廻の果てまで持ち込むつもりだ。
・・・もう、自由だ。」

“あんな”事、知ってる奴がいないに越したことはない。

「ちょっと、さっきから何を言ってるのよアンタ……
「う、うわぁぁぁぁぁぁあああん！！！ありがとう……ありがとう、ございます……ふ、ふぇぇ……」
って桜！？どうしたのよ……」

凛の言葉を遮るように、桜が泣き出して俺に抱きついてきた……
凛が混乱しているが……本人が理解してるんならそれでいいか。

「ま、今はいいけど……次からは士郎に抱きつけよ？」

ったく……一瞬身構えちまった。
やっぱり年下で胸のデカイ女子は鬼門だね、俺にとっては。

一一一瞬、刺されるかと思った。

「ミミック……貴方はまさか、桜の呪縛を……？」

と、馬鹿なことを考えていたらライダーに声を掛けられた。
やっぱり、ライダーは知ってたんだな……

「まぁ、な……気が付いてしまって、しかもどうにかする手段があったんだ。
だったら、動かなけりゃ男じゃない。
……皆への説明は頼む、俺が話すといらんことまで話しかねん……
……ってか聞き出されかねん。」

「……わかりました。
……ミミック、本当に……ありがとうございました。」

ライダーの声が、本当に嬉しそうだった。
ま、俺の仕事はこれで“ほぼ”完了っぽいな。

後は目の前の英雄女王との交渉、か……

「あの……話がつかめないんだけど……」

「ええ、では私から説明しましょう。
桜の身に起きていた事、そしてミミックがやったことを……」

凛の呟きにライダーが答え、俺の計画の説明をしてくれるようだ。

「まず、桜は“間桐”の人間ではなかった、というのは知っていましたか？」
「あ、うん……前に慎二から聞いてる。」
「魔術師の家系として、ほぼ涸れてしまっていた“間桐”の家に、とある魔術師の家から養子に出された……」

ライダーの質問に、志保と凛が答えている。

さて、この内容はともかく……ふ、と視線を泳がせる。

「……他家から養子に出されたサクラに、“間桐”六代前の当主が施した“教育”……貴女に想像できますか？リン。」
「え？そりゃ……大事な跡取り候補なんだから、しっかりと魔術を教えて……って……！？まさかっ！？」

視線の先には、士郎。
士郎と目が合ったので手招き。
「……“間桐”は蟲使い。サクラの身体に、蟲を埋め込んだのです。」
「そんなっ！？」
「一一一怨むわよ、お父様・・・！」
士郎が近づいてきたので、霊体化。
桜が一瞬投げ出されるが、すぐに士郎が抱きとめる。
「それ故に……サクラは、どこにいても“蟲”に……“間桐”に縛られていたのです。」
「じゃぁ……さっき言ってた“害虫駆除”って……」
それを確認し、少し離れて実体化。
士郎が非難の視線を浴びせてきたが、無視。
桜だって、そっちのほうが嬉しいだろう。
「ええ、おそらくあの剣は、桜に傷を付けずに体内に埋め込まれた蟲のみを消滅させたのでしょう。」
「なるほど、ね……クロウの奴が狙ってたのはそれ、か……」
「遠坂達はそれに巻き込まれた、と。」
桜、まだ気が付いてないな……ま、そのうち気が付くだろ。
それよりも、だ……
「でも、あの剣は一体……？」

「エクスカリ“パ”ーって言ってたわね……」
今最も重要視しないといけないのは……コイツだよなぁ？
――ギルガメッシュ。
後はコイツとの交渉さえ成立すれば、俺の仕事は完全に終わる。
「なあ、ギルガメッシュ？一つ聞いていいか？」
説明のほうはライダーに押し付けつつ、俺はさっきからずっと腕を組んだままだったギルガメッシュに声をかけた。
「む・・・？貴様にかける情けは最早持ち合わせてはおらんのだが。」
すると、かなり不機嫌な声で返事をしてきた。
？コイツ……もしかしなくても性格が丸くなってるのか？
以前なら間違いなく問答無用で宝具の雨を降らすと思ってたんだが。
「ちょっとアンタ……まだこっちの説明が終わっ「それは後で。どうせ俺の宝具についてだろ？」……まあいいわ。」
途中、凛が俺に何かを聞いてこようとしたが封殺しとく。
そんなん後でもできる。
今はこのギルガメッシュとの交渉が先だ。
「まぁ、いまさら俺がお前に情けをかけてもらえるとは思ってない。だがその上で訊こう。
――お前、令呪で縛られてるのか？」

コイツの姿を見た瞬間から気になっていた内容だが……もしかしたら、ここが突破口になるやもしれん。

俺の言葉を聞いたギルガメッシュは、フン、と鼻を鳴らしてから、心底疲れた口調で呟いた。

「……忌々しい。」

その様子から、間違いないと判断する。

俺の最後の大仕事だ。

――交渉、開始。

「それは肯定と取ろう。
そして、それはお前にとって心底気に入らない命令。
・・・どうだ？」

もう一つの確認。
これが合ってさえいれば交渉に入れるんだが……

「……」

ギルガメッシュは忌々しげに表情を歪めるだけだった。
……肯定、か。

「そうか、さて……お前、今のマスターに相当な不満がある。
お前の様子からこれは確定しているんだが……どうだ？そのマスターを見限る気は無いか？」

この言葉には、少々驚いたらしく表情が変わった。
そして、俺に対して口を開いた。

「……許す、話すがよい。」

その視線には、“虚偽は認めん”という意思がはっきり見えた。
これは……いける、な。

「そのマスターとの契約を完全に断ち切って、こちらに付く気はあるか？
まあ、その場合のマスターは……相棒！」

話の途中だが、ココを呼ぶ。

「……何？」

ココは、俺の傍まで来たものの、呼ばれた理由がわかってない様子。
オイオイ……昨日話しただろうに……

「計画その二、だ。」
「あ！そっか……」

「オイ、貴様ら……我に理解可能なように話さぬか。」

などと若干コントじみた受け答えをしていたら、ギルガメッシュに睨まれた。
やれやれ。

「悪い。

まあ、仮のマスターとしてこのココが候補に上がるんだが。」

「貴様……王を縛るつもりか？」

話した瞬間、ギルガメッシュの後方の空間が歪む。

「落ち着いてよ！？別に、ボクは貴女を縛れないし！！ってか令呪無いし！」

「そうだ落ち着け！仮に何か頼むとしても、他のサーヴァント殺すなってだけだ！！」

流石に焦る俺とココ。

急いで弁明。

昨日、俺がキャスターとココに確認をとったこと。

それは、ココの魔力の有無と、サーヴァントの契約について。

キャスターの説明によると、ココにはサーヴァント二騎くらいなら支えられる程度の魔力を感じる。

ただし、契約しても令呪は発生しないだろうとのことだった。（令呪に関してはルール上仕方が無い。）

ようは、ギルガメッシュを外道から引き離せればそれで良く、ついでに他のサーヴァントに手出さないように交渉しようって内容。

これが俺の第二計画。

「む……ふむ……

まあ良いだろう。

だがな雑種よ、我の契約は我の力を持ってしても解除できぬ。

……そういう令呪で、な。」

どうやら、コイツ的にはこっちからの“頼み”を聞く方が良いようだ。
本当に、コイツと外道の間に一体何が……？
しかし、何故自分で何とかしなかったかが不明だったが、それも令呪で制限されてたのか・・・
「相棒？」
「ギルさんギルさん、ここにキャスターさんの宝具、“破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）”があるのですが？」
「「「「「「「「「ぶっ！？」」」」」」」」」
だが、ぶっちゃけ関係無い。
「それ、キャスターの宝具なの！？なんでココが持ってるの！？」
「昨日借りたから♪」
そう、借りてきたから。
昨日のうちに、キャスターに借りておいた。
別に、アーチャーあたりに投影してもらっても良かったんだが……オリジナルのほうが確実だろう、と。
本当なら、キャスターにもついてきて貰いたかったんだけど……宗一郎の警護と、何かやっておくことがあるとか言って宝具を貸してくれた。
に、してもこれを持ち込むのは大変だった……
なんせ、俺が持ったまま霊体化するとこれだけ残って下に落っこち

るからな。

まず、家を出る段階でココのロープに仕込む。（俺、霊体化）

←

森についてから、俺が実体化、森の異常を感じた時点で俺がココのロープと一緒にナイフを受け取る。（ココ、トランス）

←

戦闘中は、俺のコートの内ポケットの中にしまっておく。

さっき、ココにロープを返すついでにナイフを仕込む。（俺が霊体化できないから）

←

今、ココが取り出した。（現在）

「む？それは……破戒の短剣か！」

ルールブレイカーを見たギルガメッシュが驚く。

まあ、コイツ自身が原典持っててもおかしくないが……使えないんだったら一緒だよな？

俺達が使ったところで、“狙ったもの”だけを解除って訳にはいかんだろうが、無差別解呪は出来るだろうし。

「ってなわけで、コレを使ってお前の令呪やら契約やらを…「やれ、我が命ずる、さあ早く！！」…のあっ！？」

と、説明しようとしたらいきなり凄い勢いで詰め寄られた。

どうやら本人的には、一刻も早く解除したいらしいな……

「相棒！――GO、だ。」
「了解！――“破戒すべき（ルール）――」
ココが、歪んだ短剣を構えてギルガメッシュの前に立つ。
そして……
「――全ての符（ブレイカー）！！」
それが、真名と共にギルガメッシュの胸の中心に突きたてられた。
――ココ、ちなみにその宝具は別に真名叫ばなくても良いんだぞ？常時発動タイプみたいだし。
そして、一瞬周囲を光が包み込む。
光が消えた時……
「ふ、ふふ……ふはははははは！！！！！」
高笑いするギルガメッシュがいた。
「成功……かな？」
ココが困惑の声を上げるが、それすらも高笑いにかき消される。
「お～い？英雄女王？」
「くくく……大儀であったぞ物真似師！！我の束縛を解き放ったことを末代まで誇るがよい！！！」
流石に話が進まないので声をかけたが……

えっらい上機嫌のギルガメッシュに褒められた。
それはいいんだけど……
「とりあえず、相棒、契約やっとけ。
やりかたはキャスターに聞いたろ？」
「あ～……うん、そうだね。」
とりあえず、マスターになっておけと相棒に指示をだす。
俺達の後ろで何人か呆然としてるのは放置の方向だが。
「えっと……ギルガメッシュさん？契約は……」
「む？おお！そうであったな、では汝（なれ）に褒美をとらせよう。この我に魔力を供給する、という大役を与えよう！」
ココがギルガメッシュに声をかけたら、ギルガメッシュは微笑みながらココに返事を返す。
一一一見る者を魅了する、微笑みで……平伏し、従わねば失礼って待て待て落ち着け……俺のマスターは志保一人だっての。
今のは一種の魔貌だぞ……アレが“カリスマ”ってことか？
「では……
一一一告げる、汝（なんじ）の身は我の下に、我が命運は汝の弓に……
聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら一一一」
などと考えていたら、ココが契約の呪文を唱えていた。

周囲に響く、その呪文……

「――我と共に歩もう。ならばこの命運、汝が弓に預けよう……！」

呪文を告げ、右手を差し出す。

その言葉を聞いたギルガメッシュが返事を返す。

凛、とした声で――

「っ！？……アーチャーの名に懸け誓いを受けよう！――我を御せると思うなよ？“ココ”よ。」

――告げながら、ギルガメッシュはココの手を取る。

その瞬間、契約は成った。

ん？さっきの呪文……なにか違和感が……？

「これから、よろしくね？ギルさん？」

「む……なれなれし過ぎやしないか？ココよ。」

二人は、握手したまま笑い合っている。

あれ？なんかいきなりフレンドリーというかなんというか……

「ミミック、状況についていけていないのは私だけでしょうか？」

「いや、俺もなんか状況がつかみきれないんだが……」

どうやら、違和感を感じているのは俺だけじゃなかったようだ。

セイバーに状況についていけていないと言われた。

振り向くと、どうやら全員が全員理解しきれていない様子。

――あ、桜が今俺と士郎が入れ替わってることに気が付いた。
顔真っ赤にして謝ってる。
士郎は士郎で顔が赤いな……
ん？なんかプレッシャー……ってセイバーか。
まあ今は勘弁してやれよ？

「あれ？みんなどうしたの？呆けた顔して……？」
「む？貴様ら、本当に阿呆のようだぞ？」

と、若干現実逃避していたらココ&ギルガメッシュに突っ込まれた。

「いや、お前らが異様なまでに仲良さげだったからな……」
「と、言うよりも貴女が素直に契約に応じたことに驚いているのですが。」

俺とセイバーが思っている“それ”を指摘した。
いくらなんでも、なぁ？

と、それを聞いたギルガメッシュがこう言った。

「セイバーよ、王が口に出した事を破る訳がないだろう？
ココについては……ただ、気に入っただけの話だ。
……どうしたセイバー？何を驚いている？」

その言葉を聞いて、セイバーが驚愕の表情を浮かべていた。
まるで、信じられないモノを見たような顔だった。

「あ、貴女がまともなことを言ったことに驚いているのです……」

ああ、そういや“ギルガメッシュ”との付き合い？は長いもんな、お前。
あの暴君っぷりを披露したんだろう、第四次でも。

「む？……そういえば、この身になってから思考が変化したやもしれんな。
まあ“我”であることには変わらん。深く気にするでない。」

セイバーの言葉に、一瞬考えたがすぐにあっけらかんと言い放った。
……まぁ、悪い変化じゃないからいい・・・か？

それよりも……

「ココが気に入った、というのは？」

こっちのほうが疑問だぞ？

「あの契約の場で、この我に向かって“共に歩もう”などと言い放つ胆力が気に入ったのだ。」

と、俺の質問にはあっさりと回答。

あ、それだ！さっき感じた違和感。
本来の呪文だと“我に従え！”の部分が“我と共に歩もう”になってたんだ。

視線をココに向けると……

「あ、あはは……なんか、こっちのほうがしっくりくるかなぁ、と

思って……アドリブ入れちゃった。」

ココは苦笑いしながらそんなことを言ってくる。

あ、アドリブってお前……

たまたまいい方向に転んだから良かった……

下手打ったら洒落にならんぞ。

「ま、まあいいや……ギルガメッシュは敵ではなくなった、ってことでいいのか？」

「我を言峰の呪縛から解き放った褒美だ、敵対はしないでやろう。貴様らの方から攻撃してくるというのなら……相手になるが、な？」

色々と思うことはあるが、敵じゃなくなったんならそれでいいや。

ただ……

「そこのバーサーカー、解いてやってくれよ。」

いつまでも縛られたまんまのバーサーカーが不憫すぎる。

俺の指摘を聞いて、ギルガメッシュはパチンと指を鳴らして……

＜ジャラララララララ……＞

「あっ！？バーサーカー！？」

バーサーカーを縛っていた鎖がしまわれ、バーサーカーが解放された。

解放されたバーサーカーは、そのまま霊体化したようだ。
これで一件落ちゃ……
「で？アンタのあの剣……“エクスカリパー”だっけ？それに“リミット・ブレイク”？
いいかげん説明してくれるのよね？」
「そうですね……確かに気になります。特にあの“エクスカリパー”とかいうふざけた名前の剣が。」
「クロウ？その……いいかげん、無視は酷いよ……」
「確かに……なんだったのですか？あの剣は。」
「ランクは高そうだったけどね？」
「でも……ちょっと熱いだけでしたよ？」
「見た目は……セイバーのと見分けが付かなかったんだよな……」
「……一瞬見ただけでは、私でも“エクスカリバー”だと思ったぞ。」
……く、じゃ、ない、か……
しゃぁない、説明するか……
・・・志保が涙眼になってるしな。
「わかったよ、説明するから。
……笑い死んでも責任持たんぞ？」
そう言って、俺は再びエクスカリパーを取り出して目の前の地面に突き立てた。
それから、この剣の説明をした。

“約束された勝利の反故（エクスカリバー）”

対域宝具・ランクＡ＋＋　レンジ・１～９９　最大捕捉・∞

エクスカリバーが星が鍛えた神造宝具ならば、この剣は別世界の人が生んだ幻想宝具。

エクスカリバーと同等の出力と、“防御無視”、“回避不可”、“特殊能力無効”の概念を持つ一種の概念武装。

同時に“手の中にある限り殺傷不可”の概念を持っているため、直接振るう限り生物に対しては基本的に“１ポイント”しかダメージが入らない。

尚“ＨＰ”と実際の耐久値は別問題。

因みに“ＨＰ”は、その存在の生命力を示す。

とはいえ、この剣はＨＰにだけダメージを与えるというわけではなく、しっかりと肉体的なダメージを“１ポイント”分与える。

しかし、生物以外には、エクスカリバーと同等の威力が防御無視で直撃するため、範囲内の“ＨＰを持たない存在”を消し飛ばす。

この剣の攻撃によってＨＰが０以下になった存在は、完全に消滅する。

真名解放による魔力消費が異常に少なく、クロウの魔力でも十回発動しても魔力切れはおこらないだろう（ＭＰに直すと８ポイント）。

生物に（基本的に）傷を付けず、その装備品のみを消し飛ばすこともできる極光の斬撃が、真名解放時の攻撃法となる。

本来は、直接斬りつけるのが正しい使用法で、この使用法はセイバーの“約束された勝利の剣”を見て編み出したアレンジ技。

この剣と同ランク以上の宝具の破壊は出来ない。

外見は“約束された勝利の剣”と全く同じで、見分けるには“鑑定士・A”以上またはアーチャーランクの刀剣鑑定能力が必要となる。

ちなみに“やくそくされたしょうりのほうぐ”と読む。

「ま、簡単に言うと……エクスカリバーのパチモノの極みだ。

因みに、俺が死ぬ瞬間にゲームをやっていたのは話したよな？

雷に感電するその瞬間、俺がまさに使用するつもりだったアイテムだ。」

俺のステータス欄に含まれてた時……思わず噴出したわ！

しかも、これ……別に俺じゃなくても使えるし……

あんまりにネタすぎて話すに話せなかったよ。

――まあ、その後、ココと出会って……

桜の状況を“視て”、この宝具の使い方に気が付いた。

このエクスカリパーは対“域”宝具。

つまり、マップ兵器。

範囲内に存在する全ての“生命”に等しくダメージを与えることができる。

――桜の体内に寄生する全ての蟲に、等しくダメージを与えられる。

「なんだ？この感覚は……その剣の名を聞いたら……叫ばなければならん気がする……！！何故だ！？」
「落ち着いてギルさん！？それは別世界からの電波だから！」
「アッハハハハハハハハ！？な、何それ！？よっわ～～～～！！おなかが、い、痛い…！アハハハハハハハハハ！！」
「イリヤ……なんか、その……一昨日あたりに聞いてたら爆笑してた自信があるけど……」
「その、パチモノの極みに桜が助けられたしな・・・大丈夫か？イリヤ。」
「あ～……なるほどね？身体を貫通して、体内の蟲のみを焼き払ったってこと、か……」
「……叫びたい、馬鹿にしているのかと叫びたい気分です……！！」
「落ち着けセイバー……しかし、よく見れば確かにあっさりと投影出来そうな剣だな……衛宮士郎や衛宮志保でも十分投影可能だな。」
「……あの蟲は、そこまで生命力がなかったのでしょうか？
それに、それだけでいけるような存在でしたら、もっと早く奇襲をかけるなどの方法もあったはずです。」

俺の宝具の説明を聞いた全員は……こんな反応。
大ウケしてんのはイリヤだけ。
そしてギルガメッシュは頭をかかえて何か叫んでる。
ココが言ってることだが、それは間違いなく六本腕のアイツっぽいな。

最強の剣じゃないのかー……ってな。

「ライダーの疑問も最もだな……“蟲”の最大“ＨＰ”は9だった

んだよ。」

恐らく、“本体”だろうね。

……心臓あたりにいた奴が最もＨＰが高かったし。

「あれ？それじゃあ除去しきれないんじゃ……」

「その通りだ志保。

だからこそ、俺のもう一つの宝具を発動させる必要があったんだよ。」

これの発動に手間取ってたんだよな……

「リミット・ブレイクとやらね？」

「ああ、この宝具は……」

“限界超えし激情の奔流（リミット・ブレイク）”

対人宝具・ランクＣ　レンジ・０　最大捕捉・一人

自身の限界を突破する。

発動条件は“一定期間内（一週間以内）に自身に合計で一定以上（自分の最大ＨＰの１，５倍）のダメージを受けた”場合に強制発動する。（発動後、カウントは０に戻る）

発動後の“最初の”攻撃の威力・出力が十倍になり、その攻撃に関しては魔力、体力を一切使用しない。

因みに、今回の内訳。

俺の最大ＨＰは１５００。故に受けなければならないダメージ総量は２２５０ポイント。
なお、０になっても即死するわけではなく、その間のダメージも蓄積する。

ＶＳランサー
・槍の猛攻：２６７
・刺し穿つ死棘の槍：１７００

家
・チョコボックル：５
・チョコボキック：２０

ＶＳギルガメッシュ（♂）
・流れ弾：５２
・熾天覆う七つの円冠でのむりやり防御：２０（魔力消費の方がデカイ）

家
・チョコボキック：２９

ＶＳギルガメッシュ（♀）
・宝具による吹き飛ばし：３２
・魔弾の直撃×１：２４８

合計：２３７３

現状のＨＰ：１０９１
※ゲームのように寝たからって全快はしない。

「これでダメージを倍化する必要があった、というわけだ。
もう二度と狙って発動は出来ないだろうがな。」

エリクサーを一回使ってるしな。

発動条件が厳しい代わりに、得られる効果がデカイ。
本来はＦＦ？の主人公達の必殺技なんだが……深くは気にしないことにした。

桜の“ＨＰ”が低すぎたり、蟲の“ＨＰ”が高かったりしたらアウトだったけど……
十分、蟲だけを消滅させられる範囲内ではあった。

――届かない分は、これで補正をかけられたからな。
最初は、『なんだこれ！？使えねぇ！！』って思ったもんだ。

なんせ、普通に考えたら死ぬからな、発動のためには。
その後に回復薬に気が付いたけど、さ。

発動に関しては、一週間って期限がネックだった。
あの、ランサーの“刺し穿つ死棘の槍”が無かったら無理だった。

ああ、十倍になってても１０ポイント程度じゃあ大したダメージじゃない。
せいぜい……うん、砂利道で転んだ程度か？痛みの度合い的には。
それが身体全体に引き伸ばされて入るわけだ。

一点に集中する訳じゃないから、実際は殆ど痛くない。
……桜の言葉どおりだとすると、ちょっと熱かっただけらしいし。

まあ、凛は後で全身に軽〜い倦怠感があるかもしれないが。
俺が１５００として、凛は１３００位みたいだしな。

ただ、直接桜に切りかかる必要があった。
その場合は、一匹一匹駆除することになるんだが……
セイバーの宝具（エクスカリバー）を視て、“アレ、真似すればいいんじゃね？”って思ってな。
俺の宝具（エクスカリバー）でも“似たような”攻撃はできるみたいだったからな。
……パチモノの極みだし。

――後は、周りに気付かれないように放つ必要があった。
うっかり蟲に察知されて、桜に何か仕掛ける可能性があったからな……
昨日、ココに相談する前は全員の知覚外からさっきの光線に巻き込むつもりだった。
……が、『だったら最初からボクに乗せておいて、それを放つ瞬間にそれに突っ込めばいいんじゃない？』って言われ、その方が確実か、ということになった訳だ。

実は今日、この森に入るって決まった時点でなんにせよ作戦は発動させるつもりだった。
たとえ、今日、この森にギルガメッシュが来ていなくても、な。

――その場合は、自分で自分に攻撃を仕掛けたり、ココに蹴り飛ばしてもらうつもりだった。
一応、“幻想の道具欄”の中にあるほのおのつえ（炎の杖）で自分を焼くなりすることもできたしな。

……それなりに、演技もできるつもりだし。
俺自身の計画の全容はこんなとこかな。

「……１×１０＝１０……なるほどね。」
「その為に態々攻撃を受けにいってたんだ……」
「ミミック、貴方は……」
「……サクラの為に、攻撃を……」
「ぅ……それを聞くと笑えない……」
「定霧さん……」
「個人的には、ボクのキックがしっかりとカウントされてるという事実に驚いたけどね。」

これを聞いた何人かが、微妙に感心やら感謝やらの視線を向けてきたが……

「これでいいか？もう説明することは無い。
そんなことよりも、だ……何故に女になってるんだよ、ギルガメッシュ。」

こそばゆいので、話をそらす。
エクスカリパー回収しつつ、ギルガメッシュに話をふる。

「まあ、確かに気になる、か。
どうなのさ、ギルガメッシュ？」

「露骨に話そらしたわね……ま、いっか。
気になってるのは事実だし。」

志保がそれに乗ってくれて、話がギルガメッシュの性別について、に移行する。

……が。

（クロウ、照れてるの？）

全員の視線がギルガメッシュに向いた瞬間、わざわざ人の耳元でそんなことをささやく志保。

（……うるせ！）

ったく……

くすくすと笑ってやがる。

まあいいや。

コレが凛あたりだったら、間違いなくからかわれるけど……

（……ありがとう、クロウ。

桜を、助けてくれて。）

そうささやいて、志保は離れた。

ったく……自分が照れてどうするんだっての。

耳が赤いぞ？志保。

「で？ギルさん、実際何があったの？」

「ふむ……我の身に何が起きたか、か……

……一言で言おう、『神父が狂った』とな。」

――などと、微ラブコメ？（自覚有り）をしていたらギルガメッシュが話し出していた。

彼……否、彼女の身に起きた事を聞いた時。

俺達が……相棒が“知らない”けれど“心当たりが有る”現象が発生していたことを知ることになった。

今回、ギルガメッシュがバーサーカーを襲撃した理由。

そして、何が性別（と性格）が変化している理由。

外道神父が“狂った”……

それを、順序立てて話してくれた――

（に、しても……元々女王ギルガメッシュだったらウルク“※・ギルガメッシュが実在したとされる都市国家”、滅ばなかったんじゃね？）

“第十九話／「暗躍……の解答編。」”（後書き）

長々休んでましたが……復活？しました。

自分の身に何があったかは……察してください……

ちなみに、ギル様が着てた白金の鎧に関しては戦乙女のイメージでお願いします。

（前回の戦闘で破損した金色の鎧が直っていないため。）

そして、クロウ君お役目終了のお知らせ。

エクスカリパー使いたくて書き始めたようなものですしね。

※ステータスが、更新されました。（前書き）

一～十九話までのネタバレになります。

※ステータスが、更新されました。

サーヴァント・ミミック

クラス：ミミック（物真似師）
マスター：衛宮　志保
真名：クロウ（定霧　久郎・サダギリ　クロウ）
性別：男
属性：混沌・中立

ステータス

ＨＰ：１５００

筋力：Ｃ＋
耐久：Ａ
魔力：Ｅ（クロウ基準でＭＰ：１００）
俊敏：Ｄ＋
幸運：Ｅ－（生前：－ＥＸ）
宝具：Ａ＋

クラススキル

人間観察・Ａ
　人物を観察し、その人物の全てを見極めるスキル。このランクだと、観察が終了した相手のステータスのみならず、その深層心理まで読み取れる。この観察にかかる時間は、対象の技量、精神構造によって変動する。

物真似・Ａ
　他人の動き、技能を真似するスキル。このランクだと、目視してから真似するまでのタイムラグがなく、相手の技を相手の技で迎撃可能。

固有スキル
猿真似・Ｂ（Ａ）
　他人の動きをそのまま鏡映しに真似するスキル。クラススキル：物真似との相乗効果により、タイムラグ無しで真似できるようになっている。

声帯模写・Ａ
　他人の声を完全に再現可能。

鑑定士・Ａ＋
　物の真価を鑑定するスキル。このランクだと発動前の宝具でも、眼に映ればその能力を把握できる。人物の鑑定には、かなりの時間を要する。

一般人・ＥＸ
　気配が一般人になる。サーヴァントと契約したマスターでもない限り、彼をサーヴァントと見破ることは不可能。

高速思考・？？？

常人では考えられない速度で思考を展開するスキルだが・・・？

交渉・Ｂ＋

他人との交渉能力のこと、他人との交渉を有利に進めるスキル。

意思疎通・Ｃ

意思を持つ生命との意思疎通が可能となるスキル。このランクだと、人語を理解している生物の“声”が聞こえるため、対話が成立する。

（鈍感・Ｃ）

異性からの好意に気づき難くなる。

ランクＣだと直接告白でもされないと気が付かない。

人生経験及び指摘されることによりランクが下降する。

自覚することにより一時的に消滅する。

自分自身の、自分自身への評価が下がるたびにランクが上昇する。

宝具

物真似師の意地（プライド・オブ・ミミック）

対人宝具・ランクＡ　レンジ・０　最大捕捉・１人

自分の耐久以外のステータスと姿を、目の前の他人と同じにする能力。発動中は相手の持つ固有スキルもコピーするが、その身にかかる加護はコピーできない。

ただし、相手の技術的、身体的な能力からくるモノであるならば、それが魔術、宝具であっても真似することが可能。

あくまで真似でしかないので、相手が取った行動しか真似（ロード）する事が出来ない。その範疇を越えると、範疇を越えた部分から解除される。

発動中は魔力が常に消費され続ける。
服装は、武装（コート）が変化して、相手のモノを外見だけ真似る。ただし性能、色は元のまま。

隠し能力として、コピーした相手の記憶を見ることが出来る。（相手の“脳”をも再現するため。）

幻想の道具欄（ファンタジック・アイテム・リスト）
対物宝具・ランクＣ　レンジ・－　最大捕捉・－
某ＦＦのアイテム欄の事。自身の所有物を９９種、９９個ずつを脳内に存在するステータス画面の中に保存しておける。
それらは光と音のエフェクトが発生するが、タイムラグ無しで取り出し・装備、収納が可能。
なお、使用には魔力等の消費はない。
“物真似師の意地”発動中は使用不能。（出して置いたものはそのまま使用可能）

なお、一度でも内部に保存したモノは、ランクＥ－相当の宝具となる隠し能力がある。さらに、一定の条件を満たしたモノはＦＦアイテムに変化する（例：純金製の針を入れる＝“金の針”に変化）。

限界超えし激情の奔流（リミット・ブレイク）
対人宝具・ランクＣ　レンジ・０　最大捕捉・一人
自身の限界を突破する。
発動条件は“一定期間内（一週間以内）に自身に合計で一定以上（自分の最大ＨＰの１，５倍）のダメージを受けた”場合に強制発動する。（発動後、カウントは０に戻る）
発動後の“最初の”攻撃の威力・出力が十倍になり、その攻撃に

関しては魔力、体力を一切使用しない。
発動時、一度身体から赤い光が噴出する。

約束された勝利の反故（エクスカリバー）
対域宝具・ランクＡ＋＋　レンジ・１～９９　最大捕捉・∞
最強の聖剣・・・のパチモノの極み。
エクスカリバーが星が鍛えた神造宝具ならば、この剣は別世界の人が生んだ幻想宝具。

エクスカリバー以上の出力と、“防御無視”、“回避不可”、“特殊能力無効”の概念を持つ一種の概念武装。
同時に“手の中にある限り殺傷不可”の概念を持っているため、直接振るう限り生物に対しては基本的に“１ポイント”しかダメージが入らない。

尚“ＨＰ”と実際の耐久値は別問題。
“ＨＰ”は、その存在の生命力を示す。
とはいえ、この剣はＨＰにだけダメージを与えるというわけではなく、しっかりと肉体的なダメージを“１ポイント”分与える。

しかし、生物以外には、エクスカリバーと同等の威力が防御無視で直撃するため、範囲内の“ＨＰを持たない存在”を消し飛ばす。
この剣の攻撃によってＨＰが０以下になった存在は、完全に消滅する。
真名解放による魔力消費が異常に少なく、クロウの魔力でも十回発動しても魔力切れはおこらないだろう（ＭＰに直すと８ポイント）。

生物に（基本的に）傷を付けず、その装備品のみを消し飛ばすこともできる極光の斬撃が、真名解放時の攻撃法となる。
本来は直接斬りつけるのが正しい使用法で、この使用法はセイバーの“約束された勝利の剣”を見て編み出したアレンジ技。
直接切りかかる場合は真名解放の必要は無く、魔力の消費もさらに減る。

この剣と同ランク以上の宝具は破壊できないようだ。

外見は“約束された勝利の剣”と全く同じで、見分けるには“鑑定士・A”以上またはアーチャーランクの刀剣鑑定能力が必要となる。
ちなみに“やくそくされたしょうりのほうぐ”と読む。

“ＨＰ”

クロウから見た生命力の概念。
全ての生命（動植物、魔物、幻想種問わず）が等しく持っている命を数値化したもの。

サーヴァントの“耐久”から、実際の“防御力”を引いたものと考えればいいだろうか？

クロウのＨＰが１５００、とあるが、この数値はそう高いわけでは無い。
むしろ、サーヴァントとしては低い部類。

例として、他の人物のＨＰはこうなる。

セイバー：２３００
ランサー：２１００
アーチャー：１５５０
ライダー：１８００
キャスター：１２００
アサシン：１４００
バーサーカー：８０００×１２

ギルガメッシュ（男・女）：２５００

ついでに……

間桐臓硯：９（本体）＋５×（身体を構成する蟲の数）

“第二十話／「妄想と現実と理想と……」”（前書き）

長々と更新できず、もうしわけありませんでした！！
スランプってましたがどうにかこうにか書きあがりました・・・

今回はギル様が女性になった訳と、ココの台詞を聞いた彼のお話。

“第二十話／「妄想と現実と理想と……」”

ーーーヒャッハーーーーー！！！

“第二十話／「妄想と現実と理想と……」”

ーーーｓｉｄｅ　ギルガメッシュ

「チッ……贋作者どもめ……！」

ーーーアレは、そうだな……我が貴様らに勝ちを譲り、一度引いたあの日に遡るのだが……

（……色々言いたいことはあるけど、まあいいわ……）

我は一度拠点……古びた館へと戻ったのだ。

（館……ギルさん、それって双子館の片割れ？）

む？ああ、たしかエーデルフェルトがどうの、と言っていた気がするな。

……教会が焼失してしまっておったからな。

（クロウ？もしかして……）
（もしかしなくても俺が焼いたからだろうな……）

まあいい。
話を続けるぞ？

＜ヒャッハーーーーー！！！ここってアレだよな！？キタコレ！！！＞
「？この声は……コトミネか？」

――館に戻った時、館の中から異常な声が聞えたのだ。
……声“は”間違いなくコトミネのモノだった。

（ちょっと待って……？綺礼が？ヒャッハー？）

――流石の我も異常性に気が付いてな……様子を伺ったのだが……

「いよっしゃ！背も伸びてる！俺オリ主じゃん！！俺の能力は……」
「コ、コトミネ……気でも触れたか？」

明らかに異常だったのでな……一応、声を掛けてやったのだ。

（……なんか、すっごいデジャビュなセリフな気が……）
（相棒？どうした？頭抱えて……）

……？どうしたココ？

（今は気にしないで……で？どうなったの？）

む……まあ良い。

声を掛けたのだが……

「は？何……って金ぴか！？それに言峰？ってまさか……俺マーボー神父になっとるーーーー！？」

――等と鏡を見て叫んでおったな。

コトミネがマーボー神父なのは今に始まったことでもないというのに……

（うわぁ……やっぱりか……）

（相棒？本当にどうしたんだよ？）

（後で話すよ……）

「キサマ……我に向かって金ぴ「マジかよ……俺のハーレムが……」……死にたいらしいな。」

――あろうことか、我を無視した挙句何事かブツブツ呟いて膝を付いておったな。

「こうなったら……ブツブツ……」

「……王の（ゲート・オブ）……」

腹が立っておったこともあって殺そうと思い、我の財を取り出そうとしたのだが……

「財（バビ）「＜ギルガメッシュよ、俺に従え！！＞」ナニィ！？」

――令呪で縛られたのだ。

この我が抵抗できない程の力で、な。

（オイ、待て……確か、そういう範囲が広い令呪って効き目が薄いんじゃなかったか？）
（……マスターの力量によってはそうでもないな。現に私は凛に逆らうのは骨が折れる状態だ。）

――圧倒的な魔力量だったな。
以前のコトミネからは想像も付かない程だったが……

「キサマ！？一体何を……」
「ギルガメッシュ……お前、性別を反転させる宝具を持っていないか？」
「ぐ……持って……いる……」

（あ～……テイレシアスの……絡み合った蛇とか？）
（テイレシアスって？）
（ギリシャ神話の預言者だ……）

――まあ、その原典だがな……

「ならば……＜それを使い、女となれ＞」
「なにっ！？ま、まて……ヌオオオオオ！？」

――こうして、我は女となった訳だ。

――ｓｉｄｅ士郎

「……そして、第三の令呪により、貴様ら“聖杯戦争の参加者を撃破し連れて来い”と命じられておったのだ。

連れて行けばどうなるか、などと……考えるまでも無かろう？我の財も幾つか奪われておるし、な。
あのような欲にまみれたモノの思うままになるのが我慢ならなかったのでな、せめて殺してやろうとしたが……」

「そこに俺達が契約破りの短剣を持って現れた訳、か。」

あれから、ギルガメッシュの説明を聞いた。

どうやら、言峰の身（精神？）に異常が発生したようだ。
……確かに、以前の言峰からは想像も付かない台詞だ。

「……性別を反転、ねぇ……まぁいいや。
で？相棒？気が付いた事を話して欲しいんだが？」

クロウは腕を組んで首をかしげていたが、ココに尋ねる。

――さっきから、ちょくちょくココは頭を抱えたり唸ったりと挙動不審だ。
ギルガメッシュの説明の途中からそんな様子だったし、確かに気になる。

クロウの言葉によってか、自然と全員の視線がココに集まる。
全員の視線に晒されたココは、なんとも微妙なモノを見たような表情で口を開いた。

「う～……ん……なんとも荒唐無稽な話になるけど……突っ込みは厳禁だよ？」

彼女はそう前振りして――

「――超高確率で、言峰神父の“中身”が入れ替わってる……でもなきゃ、乗っ取られてる。」

――そう、言った。

それを聞いて、最初に反応したのは遠坂。

「……どういう意味よ、それ。」

「どういう意味も、そのままの意味だよ……何者かが“憑依”してるね。

――それも、厄介なヤツが。」

遠坂の質問に、うんざりとした様子で答えるココ。

――厄介なヤツ？

「どういう意味だ、それ？」

俺が口を開こうとしたら、先にクロウが発言していた。

すると、ココは溜息を吐きながらクロウに向き直って――

「――“ボク達と同じ”。」

――そう、たった一言そう告げた。

「っ！？くっは……そういう事か。」

「それも九分九厘は“知ってる”、ね。」

それを聞いたクロウは、一瞬物凄く驚き、手を額に当てながら呟いた。
それに淡々を答えるココ。

「なぁ？どういう意味だ？その“同じ”って……」

こちらには状況が全然理解できないので、質問してみた。

“同じ”ってどういう意味だろう？

すると、クロウは帽子を脱ぎ、頭をかきながら答えてくれた。

「あ～……今まで明言してなかったけど……
俺が厳密にはこの世界の出身じゃないってのはわかるよな？」

「うん……“仮面ライダー”とか“えふえふ”？だっけ？とかの話からなんとなく。」

クロウの確認に真っ先に答えるのは志保。
確かに、クロウが俺達とは微妙に違う世界……平行世界の出身だっていうのは、その話題が出た時に察しがついたけど……

「それがどうかしたのか？クロウ。」

“それ”と“これ”がどう関係するんだろうか？

「相ぼ……ココも、恐らく俺と同じ世界の出身なんだよ。
……志保には間違いなく言ったよな？ココが元々人間で、その精神がチョコボに宿ってるって話。」

「え？あ……うん、確かに聞いたけど……」

……その話、俺は初耳だぞ。

確かに、昨日人間の姿を見た時には驚いたし、理解力が高いな～とは思ってたけど……

と、何人かが驚いているのをスルーして、クロウは言葉を続ける。

「――外道の身体に憑依してるヤツも、俺やココと同じ世界の出身だ、って話だよ。
そうだろ？相棒。」

「……厄介なことに、ね。」

……は？

ってことは……クロウやココの仲間って事になるのか？

「なるほどね？“同じ”って、そういう事か……
でも、何が厄介なのよ？同郷の人間とは敵対しにくいって事？」

と、少々驚いていたら、遠坂がクロウに質問していた。

「確かに……貴方と同郷となると、精々が貴方やココの能力が予想される程度のことなのでは？
そもそも、その人物が何故同郷だと？」

それに続くのはセイバー。

――確かに、言われてみればなんでそんな判断がついたんだ？

「クロウ？もしかして……まだ何か隠してるの？」

「いや、話して良いのか悪いのか……隠す気は無いんだが……」

志保に問い詰められたクロウは、珍しく歯にモノが挟まったような喋り方で考え込んだ。

いつもは結構キッパリとモノを言うのに？

「クロウ……」

……あ、志保が涙眼になった。

それを見たクロウは溜息を吐いてから語りだす。

「っあ～……

相棒もさっき言ったけど、あんまりに荒唐無稽な話なんだよな…

…それでも良いなら話すぞ。」

「当事者にも訳がわからない話だしねぇ……あ、やば……テンションが落ち＜パァッ＞……クェ……」

――あ、ココがチョコボに戻った。

トランスが解けたのか……

そういえば、あれってココの感情の爆発がどうのって言ってたっけ？

長続きするものでもないってことか……

「おぉい……俺一人で話せってか？」

「クックェェェ……」

苦笑しつつ、クロウはココを撫でてから全員に向き直る。

ココは、ギルガメッシュの元に歩いて行って……あ、持ち上げられた。
……ギルガメッシュの顔が、微妙に緩んでる。ココって、手触りいいもんな……
「さ、て、と、だ。
“ソイツ”が俺達と同郷だと相棒が気付いた理由からでいいか？」
と、クロウは俺達を一瞥してから、“気付いた理由”を話し出す。
「結論を先に言うと、“ソイツ”が、本来知りえない事を知っていたから……だろ？」
「クェ！」
「どういう意味？」
クロウの話に、志保は質問をする。
すると、クロウは2、3ココとアイコンタクトを取ってから話し出す。
「“ソイツ”は、ギルガメッシュの真名を一目で言い当てたんだろ？
……普通はありえない。
俺だって、色々と事前情報があった上、実物見てようやくだったってのに。」
……あ、確かに。
「それに、“ソイツ”は、自分……外道を“マーボー神父”と言った。

今に始まった事でもないって、さっきギルガメシュが言ってたけど……

外見だけで、人間の趣味趣向なんか普通わからんぞ。」

「それって、アンタが言っても説得力が……」

「俺は例外……じゃなくても、俺だって外見一発で鑑定なんぞ出来るかっての……」

……クロウがわからないんじゃ、普通は解らないな。

でも、だとすると……

「それだと、クロウの“世界”の人間は、ギルガメッシュや言峰の名前や趣味趣向を知ってた、って事になるぞ？」

って事になってしまうんじゃないか？

俺の質問に、クロウは若干答えにくそうに答える。

「……そう、なるな。

それが、ココが言ってた“厄介”に繋がるんだよ。」

クロウのその答えを聞いて、遠坂が声を上げる。

「どういう、意味よ？」

その言葉は、俺達……その場の全員の言いたい事だ。

全員の視線を受けて、クロウは語りだした。

「俺達の出身世界には、俺達の出身世界にしか無い物がある。

例えば……

――半人前の魔術師見習いと、剣の騎士が出会った、運命の夜の物語。

……それを綴った、“作品”とかな。」

――それを聞いた瞬間、理解した。

「まさか……それって!?」

それは、俺だけでもなかった。

志保が、クロウに詰め寄る。

「結構な有名作だったらしいぜ？

……内容、俺は知らんけどな。どうしても知りたければココに聞け。」

そう言いながら、志保の肩に手を置いた。

志保は落ち着いたけど……

クロウは、内容を知らない？

しかし、ココはその内容を知っていて……

“ソイツ”も内容を知っている……？

「クロウ？その“作品”……まさか、とは思うけど……

――この聖杯戦争の顛末が綴られてる、なんて言うつもりじゃ

ないでしょうね。」

と、少し考えていたら遠坂がクロウを睨みつけていた。

「な!?リン!?そんなことがありえるのですか!?」

遠坂の台詞に真っ先に反応したのがセイバー。

「さぁね?でも……無い、って断じることもできないのよね。うちのアーチャーみたいな“伝承を持たない英霊”がいる位だもの……

――コイツが英雄に至る道が、平行世界では語られていたとしても不自然じゃないわ。」

それに答える遠坂。

――確かに、可能性としてはゼロじゃない。

「?リンのアーチャーって、“伝承”を持っていないの?」

と、疑問の声を上げたのはイリヤ。

……そういえば、遠坂と志保、俺……後、ココ以外はアーチャーの真名知らないんだっけか?

「言われてみれば……アーチャーの真名だけが不明のままですね。」

「えっと……セイバーさんがアーサー王、ランサーさんがクーフーリン……

ライダーがメドゥーサでキャスターさんが王女メディア……

アサシンさんが佐々木小次郎で、バーサーカーがヘラクレス。

後はギルガメッシュさんとミミックの定霧さん、ですよね?先輩

？」

ライダーの呟きに、俺の隣でサーヴァントの真名を挙げていく桜。

「あ、ああ……」

しかし、アイツの真名は教えて良いのか？

……まいったな。

「――“エミヤ”。
それが私の真名だ。」

――桜達の疑問にあっさりと答えるアーチャー。

……いいのか？答えて。

「アーチャー！？」
「アンタ！？」

と、驚きの声を上げる志保と遠坂。

アーチャーは涼しい顔だが……

「“エミヤ”……？なんの冗談よ、それ……」

イリヤは表情が固まる。
信じられないようなモノを見たような顔で、アーチャーを見る。

「え……？もしかして……」

アーチャーを見た後、俺の顔を凝視する桜。
ライダーは……口元に手を当て、ブツブツと何かを呟いていた。

「衛宮　士郎が至る可能性のあった理想の残骸だ。
そんなことよりも、だ。
ミミック、凛の質問に答えろ。」

「ま、そうだな。
凛の質問の解答は……「待ちなさい！！」……んだよ。」

そんな皆の様子を無視して話を進めようとするアーチャーとクロウ。
そんなクロウの言葉を遮るイリヤ。
しかし、クロウは話をやめようとしない。

「アーチャーの……“シロウ”のことを聞きたいのは解るが、今は後回しにしろ。
で、凛の質問に対する解答は……多分ＹＥＳだな、とはいえ……
俺が暗躍しまくった所為もあって、既に当てにもできないんだよ、その“知識”。
まぁ、精々が“若干似たような世界”ってだけだろうな。」

イリヤの言葉を遮るように話を続けるクロウ。

遠坂の質問の解答はＹＥＳ
若干言いよどんだ理由は、クロウ自身がその“作品”を知らないからだろう。

クロウは、更に言葉を紡ぐ。

「俺やココが厄介って言ったのは、第一に俺と志保、ココ以外のサーヴァント及びマスターの手の内が知られてるから。
第二が……九分九厘説得不能だからだ。」

溜息を吐きながら話すクロウ。
……なるほど、確かに厄介……って、ん？

「待った、なんでクロウと志保、ココ“以外”なんだ？」

態々指定した理由がわからない。
クロウは兎も角……

「簡単な理由だ。
その“作品”において、“ミミック”も“衛宮　志保”も“ココ”存在しないんだよ。
イコール、その“作品”の知識があっても、俺達の知識までは無いってことだ。」

「え？」

クロウからの解答は意外なモノだった。
志保が間の抜けた声を上げるくらいには……

「どういうことよ？それ……」

「どうもこうも無い。
ようは、その“作品”の世界は、ここと似てるかも知れないけど、完全に別世界ってことだ。
……大体、その“作品の知識”が正しいかどうかなんか判断出来ないしな。

――いちいち気にする気にもならないし。」

遠坂の疑問に、解答を返すクロウ。

……？気にする気にもならない？

「なんで、気にならないの？」

と、ふと気になった事を訊こうとしたら志保が先に訊いていた。

「・・・なぁ、志保？お前は、自分が生きてる世界がゲームやなんかの世界だ、なんて言われて納得するか？

大体、半端な情報なんか仕入れても、妙な先入観が働くだけだぞ。

――師匠曰く、『真贋の鑑定に最も邪魔な物は先入観』だとさ、簡単に言えば落とし穴……地雷にしかならないし。」

すると、心底どうでも良さげに答えられた。

クロウの師匠って……鑑定士のお爺さんだっけ？

それにしても……確かに、そうかもしれないな。

さっきの“エクスカリパー”だって、先入観無しで見ればちゃんと“エクスカリバー”とは別物ってわかったし……

「納得は……確かに、出来ない、ね。」

「だろ？」

と、納得していたら志保もクロウの言葉に納得していた。

「まぁ、いいわ……で？説得不能な理由は？正直、綺礼以上に味方

にし難い人間がいるとは思えないんだけど？」

すると、今度は遠坂がクロウに質問していた。

確かに、第二の“厄介”の理由がわからない……

「あ～……ギルガメッシュ？“ソイツ”と、会話は成立したか？」

遠坂の質問に答えずに、ギルガメッシュに話を振るクロウ。

「む？いや……成立しなかったな。」

話を振られたギルガメッシュはココを抱きかかえたまま答えた。

ギルガメッシュの解答を聞いたクロウは溜息を吐きつつ言葉を紡ぐ。

「英雄女王の魔貌じみたカリスマがあってそれだぞ？

――それに、『ここが物語の世界だって勘違いしてる人間って、自分にとって都合のいい事しか考えない』……だろ？相棒。」

「……クェェ。」

ココは、クロウの言葉に若干恥ずかしそうに？首を縦に振った。

・・・？

「どういう意味だ？」

「相棒が、“ココ”になる前の話だけど……自分が物語の主人公だと勘違いして、好き勝手しようとしたらしい。

身内の恥だけど……多いんだよ、俺達の出身世界の男に、その傾向……」

俺の質問に、頭を抱えながら答えるクロウ。

「・・・は？」

その台詞に、間抜けな声を上げたのは誰だろう・・・？

「物語の世界に行って、無茶苦茶な能力持って、無双して、その世界を蹂躙して、その世界の思想やらをまるっと無視してＳＥＫＫＹＯＵかまし、挙句の果てにハーレム作りたいとかほざく奴……で、そういう妄想の王道らしいんだよ、“憑依”“転生”“召喚”ってさ……」

心底恥ずかしそうに言葉を紡ぐクロウ。

珍しく、顔が赤い……

「健全な男子が抱くヒーロー願望が歪みに歪んだ結果なんだが……妄想するだけだったら別にいいんだよ、誰かに迷惑かかる訳でもないし、ふと正気に帰った時に自分の言動に悶え苦しむだけだから。」

その台詞に、しみじみと頷くココ。

「その妄想を、ゲームやら小説やらに昇華できればいいんだよ。それは人を楽しませるし、大きな話になると国の経済回す歯車になるから。」

なんか、クロウの表情が若干疲れてきてるな……

「・・・で、そういうふうに発散もせずに現実と妄想の区別もつかなくなった奴って、稀に出るんだよ。

重大な事件起こしてからゲームの所為だとかアニメの所為だとかほざきやがるんだよ。

ボソッ（……おかげで、ゲーマーや特撮好きのイメージまで悪くなるし……）」

？今、一瞬物凄くやさぐれたような気が……

「で、ここで士郎君に質問です。
そんな、現実と妄想の区別がつかなくなりかけてるような奴が、十八禁ゲームの内容とそっくりの世界の人間に憑依しました。
しかも、なんか膨大な魔力まで手に入れました、さてどうなるでしょう？」

え？俺かよ？

この質問は……答えなきゃ駄目か？

ってか、多分……

「妄想に・・・溺れる？」

「はい正解。

・ハーレムがどうの言っていた……現実が見えてない。
・ギルガメッシュとすら会話する気が無い……完全に“人間”として見てない・・・つまりゲームのキャラ位にしか見てない。
・令呪をぽんぽん使う……つまりこの世界の常識が無い。
・サーヴァントやマスターを集めようとした……自分の“知ってるキャラクター”を集めようとした。
・性別反転させた……上と合わせて言わずもがな。
・なんか膨大な魔力を持っていた……加速する勘違い。

……正直、こんな痛いヤツとの会話、嫌だぞ、流石に……」

――この台詞を言い終えたクロウは、本気で疲れきった表情だった。

……うわぁ……

「しかも、向こうからすれば、俺の状況ってまさに……はぁ……以前の下らん想像が向こうからしたら現実とか……」

・・・確かに、クロウの状況って・・・見方によっては・・・

確かに、とてもじゃないけど、会話が成立するとは思えない……

「確かに、人を“人”として見ないようなヤツと手を取り合うなんて、こっちから願い下げね・・・」

遠坂は、心底嫌そうな表情で吐き捨てた。

うん、俺も同感だな。

「あの……クロウ?でもそれって、あくまで想像……だよね?」

と、志保がそんなことを言った。

それを聞いたクロウが返事を返す。

「・・・ああ、だからさっきから“九分九厘”って言ってるだろ。

言動から推測できた情報ってだけだ……けど……さっきの推測、自分で崩せないからな……

一応、実物見るまでは保留にしておくかなぁ……しかし……」

が、途中で考え込んでしまった。
自分で立てた仮説が崩せない……か。

「に、しても珍しいな？クロウがここまで言いよどむなんて。
普段はキッパリと、自信満々に断言するのに。」

ふ、と気になった事を声に出してみた。
すると、志保が俺に答えてくれた。

「そうでもないよ？
クロウ曰く、気を張ってない時……つまり、素の状態だと結構普通だと思うって。
今のクロウが素だよ？昨日もこんな感じだったし・・・
さっきまでは、考えることややろうとしてた事が多かったから気を張ってたんだろうしね。」

志保曰く、こっちが“素”らしい。
ってことは、召喚されてから、今の今まで俺達の前では気を張り続けてたのか……

桜を助けて、ギルガメッシュと同盟を結んで肩の荷が下りたからか？
やっと素に戻れたって事か。

「まあいいや、後回しにしよう。
初心に帰る事を勧めるぜ？士郎、志保？」

と、クロウの事を考えていたら話を振られた。

「「？」」

なんのことだろうか？
と俺と志保が顔に疑問を浮かべていると、おいおい、とでも言いそうな表情で話し出した。

「お前ら……そもそも、ここに来た理由忘れんなよ……
イリヤと話すんだろ？」

・・・あ、そういえば元々そういう話だった。

「？私と？」

イリヤが呆けてる。
それを見て、俺と志保は視線を合わせて……

「ああ、イリヤと話がしたかったんだ。」
「これからのこととか、今までのこととか、イリヤ……姉さんと、話がしたい。」

一一一話を、始めた。

それを見たクロウが、皆を少々離れた場所へと移動させる。
・・・助かる。

「何・・・かしら？」

イリヤの表情が、鋭くなる。

ここからは、俺達が頑張る番だ。

さあ、クロウじゃないけど……

――――対話、開始だ。

――sideクロウ

――頑張れよ、志保、士郎。

さて、“キョウダイ”の会話を盗み聞くのは流石にいかがなものかと思い、凛や桜の背を押してその場を少し離れたのだが……

「まぁ、確かにイリヤスフィールとの会話はあの二人に任せるって話だったしね。
――そんなことより、ちょっとさっき聞き捨てならない台詞が聞えた気がしたのだけど？」
「――十八禁ゲーム、って言いましたよね？」

この凛&桜が怖いんですが……
一瞬口を滑らせたのが不味かったか……

「さっきの台詞から察するに……その“ゲーム”の主人公って、士郎よね？」
「先輩が主役で、十八禁……相手は、ダレ、ですか？」

参ったな……
なんと言うべきか……

とはいえ、このまま黙ってても……なぁ？

仕方が無い、誤魔化そう。

「さぁ？選択肢によって結末が変わるタイプのゲームだったみたいだし……

まあ、ココに聞けば詳しいことも解るかもしれんが……

絵面が嫌過ぎるだろ・・・（筋肉質な）大男が（見た目チョコボとはいえ）少女に所謂エロゲの内容訊くって。

第一、そうまでして聞く価値ないだろ、現状。

殆ど俺の所為とはいえ、いろんな意味で“物語”からズレまくってるし。

さっきも言ったが落とし穴ってか地雷になりかねないし。

しかも最早サーヴァントの情報くらいしか役にたたんだろうし……

その情報にしたって、既に全員と顔合わせている上“人間性”についてはまったくアテにならないってかしたくないしな。

字面をモニター越しで見たのと、現実の人間性を一緒にするのは流石になぁ……」

正直、この話題から離れたい。

俺としても気分悪い話題だし。

「と、いう訳でこれ以上話す事は無い。」

という訳で無理やりぶった切る。

訊かれても答えられないしな……

「む……まあいっか、聞いてどうなる訳でも無し……」

「そうですね……定霧さんは内容知らないみたいですしね。」

どうにか矛を収めてくれたか……

そういや、さっきからセイバーが静かだな？
アーチャーは普段からあまり喋らんから別として。

ライダーは何時の間にか霊体化してるし、ギルガメッシュは……ココと戯れてるからほっとこう。
ってかお前ら話せるのな？

「アーチャー……貴方は、シロウが英雄に至った姿、という認識で良いのですか？」

と、不意にセイバーがアーチャーに話しかけた。

「間違ってはいないな。」

目を閉じたまま、淡々と答えるアーチャー。

その言葉を聞いて、桜が少し嬉しそうに話し出す。

「と、いう事は……先輩、夢が叶ったんですね♪
正義の味方を目指して、英雄になったんですから。」

あ～……そうか、まぁ普通はそう思っても仕方ないけど……

「・・・」

アーチャーは無言。
凛は、表情を陰らせる。

「……？アーチャー、一体どういう……」
「セイバー、察しろ……」
口を挟んで、この話題を逸らそうとした・・・
「構わん、どうせ、いずれ話さねばならん事だ。」
「・・・アーチャー。」
が、アーチャー自身に遮られた。
・・・本人が話すってんなら、俺は何も言う事はできないな。
アーチャーは淡々と話し始めた。
一一一己の生涯を。
「一一一どうなのだろうな？私の夢は……叶ったのだろうか？
・・・その答えは、まだ見つかってはいない。」
エミヤ　シロウの生涯……
“士郎”の夢は、正義の味方になること。
「どういう意味ですか？」
「私は……英雄等とは言いがたい存在なのだよ、間桐　桜。
一一一反英雄、と言った方が正しいだろうな。」
一一一だが・・・
「一一一何せ、最悪のテロリストとして絞首刑になった人間だから

な。」

あの剣の墓標を見て、報われた人生を送ったとは思いづらい。

「な!?」

「そんな!?」

“接続”の時、志保の心象世界“ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｂｌａｄｅ　ｗｏｒｋｓ”を見たが……

コイツの“無限の剣製”はあまりにも違いすぎる。

「何故ですか!?なんで先輩が……」

桜は半ば悲鳴のような声を上げた。

しかし、アーチャーは淡々と話を続ける。

「・・・十人を救うため、一人を見殺しにした。

・・・百人を助けるために、十人の人間をこの手にかけた。

・・・千人を護るため、百人を切り捨てた。

一一一数え切れぬ人を救おうとして、数え切れないほどの人の命を絶った。

その繰り返しの末、気が付いたら知らぬ人のいない大罪人となっていた。

それでも、私は止まらなかった。

一一一いや、止まれなかった。

――ある時、命がけで争いを止めてみれば、その争いの首謀者とされて絞首刑となった。」

助けた誰かに裏切られた――自身の最期を。

「そうなる前に、私は世界と契約していたからな……その死後、守護者となった。

――人々に、英雄と呼ばれた訳ではない。

歴史的にみれば、人類史上類を見ない虐殺者だった。」

そして、“英霊エミヤ”の始まりを。

それを聞いたセイバーは呆然と呟いた。

「そんな……しかし、それでも……貴方は、英雄となったのでしょう？

その死後も、人々を護っていたのでしょう？」

そんな希望を聞いたアーチャーは、ただ静かに首を横に振った。

「セイバー……守護者というのは、人を護るモノではない。

――セカイにとって、都合の良い掃除屋に過ぎん。

既にどうしようもなくなったセカイから、セカイを滅ぼす原因を、善悪も、己の意思も関係なく切り捨てるのみ、だ。

――オレのなりたかった存在じゃ、なかったんだよ・・・セイバー。」

――信じた理想に、裏切られた。

それは……心底、疲れたような表情で、どことなく寂しそうだった。

シロウは、なおも言葉を続ける。

「そうして、気が付いた・・・

そもそも、衛宮　士郎が信じた理想の正体は、救いようも無い偽善で、衛宮　切嗣からの借り物の理想だった、と。

だから思った。

借り物の理想で、自分勝手な価値観で多くの人を切り捨てた。

――そんな男に、存在する価値など無い。」

それは、コイツが聖杯戦争に参加した理由。

「そんな・・・」

そして――

「未来の自分が、過去の自分を殺す……もしかしたら、その歪みによって自身を抹消できるかもしれない。

――そんな、ありもしない希望に賭け、自意識を持ったまま召喚される聖杯戦争に望みを賭けた。

・・・ただの、八つ当たりだ。」

「アーチャー、アンタ・・・」

「――だが、思い出した。

確かに、オレは多くの命を奪った。

けど、それでも……笑ってくれた人達がいた。確かに救えた、命があった。

――誰かを助けたいという思いは、間違ってなんか、いなかった。」

――今現在の、思い。

「けれど、オレは……どこかで、間違えたんだ。

多くの人々を殺めたのは紛れも無い事実だ。

だからこそ、オレにはわからない・・・

オレは、どうすればよかったんだ?

――答えは、これから探していこうと思う。

だから心配するな、凛。

私はもう、衛宮　士郎を殺そうとは思っていない。」

もう、自分殺しをするつもりは無いと、どことなく、すっきりしたような表情で告げた。

そして、その視線の先は士郎と志保……そしてイリヤを見つめていた。

「アーチャー……」

凛は、若干震える声で名前を呼び……

「アーチャーさん……」

桜は、泣き出しそうな表情でその横顔を見つめ……

「シロウ……」

セイバーは、アーチャーの視線の先……士郎を見つめていた。

ギルガメッシュは無言で、全体を眺める。

なにか、思うことがあるのだろうか？

ココは、ギルガメッシュの腕の中で、アーチャーを見つめていた。

ライダーは……桜の後ろで、静かに佇んでいた。

そしてアーチャーの視線の先……イリヤは士郎に飛びつくように抱きついていて、志保はそれを優しく見つめていた。

――話、ちゃんと出来たんだな・・・良かったな、志保？

士郎、イリヤ、志保……三人で手を繋いでゆっくりとこちらに歩いてくる。

……あ、士郎がつまずいた。

その様子を見つめていたら、ふ、と……

「――アイツは、きっと……オレにはならないだろうな。」

風に吹かれて、そんな声が聞えた。
振り向いたら、アーチャーは……その場にはいなかった。
どうやら、霊体化した上で木の上に跳びあがったようだ。
見渡してみたら、さっきの声が聞えていたのは俺だけらしい。
皆、イリヤ達の方を向いたままだった。
「お待たせ……ってあれ？クロウ、どうしたの？キョロキョロして……」
と、後ろから志保に声をかけられた。
どうやら、結構挙動不審に映ったようだ。
……ま、今聞えたのは胸に仕舞っとくかな。
アイツの結論……なのかなんなのか知らんけど、さ――
「ん、なんでもない。
それより、聞くまでも無いかもしれないけど……どうなった？」
「？……まぁいいや。
――見ての通り、だよ？」
俺の質問に対し、志保はイリヤと繋いでいる手を俺に見せながらウィンク。
ちゃんと和解できたらしい。
「ならいい。

「一一一士郎、その手、離すなよ？」

一一一傍に理解者がいれば、お前みたいにはならないよな、シロウ？

“第二十話／「妄想と現実と理想と……」”（後書き）

うぅ……今回は特に批判が怖い……

神父はオレ主さんにのっとられてしまいましたが、本人もちゃんと（？）登場させるつもりです。

次回は裏話、士郎＆志保とイリヤの会話と、その頃のキャスター達の予定です。

一ヶ月以内には更新できるよう頑張ります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8973k/

俺達の(いろんな意味で)運命の物語

2011年3月2日15時40分発行